
One For Four Traveler

青秋

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

One For Four Traveler

【Nコード】

N4327D

【作者名】

青秋

【あらすじ】

意気揚々と冒険の旅へと出発した5人のひよっこ冒険者たち。口も悪いが態度も悪いシーフのジン。赤髪がトレードマーク、メイジのレベルが使える魔法は未だ無し。フードで顔を隠し口数も少ないレミ。なんとも頼りのないファイター志望の少年クラッセ。決して格好よくもない、つい先日まで”普通の人”だったディールは、個性的でくせのある仲間たちと出会い、共に成長していく先に、やがて大きな岐路に立つ。はじめは簡単な依頼のはずだった

1・新米なる冒険者たち

「どわーっ、やめっやめー！」

「ちよっ、なによこれー?!」

俺は正眼にソードを構えた。

心臓はどくんどくと高らかに鳴り響き、せわしく全身の血液を隅々まで行ったり来たりさせている。

ソードの柄を握る両手だって震えているのがわかる。

目の前の2人は、普段なら笑ってしまうほどに慌てふためき、ともかくその”触手”から逃れようと右往左往している。

”触手”はそれぞれが自由意志を持っているかのように2人を追い回していた。

とは言え、誰がどう見ても、本当に恐ろしいのは”触手”ではなく、その本体。つまり、”触手”の生えている先を目で追ってけば、すぐにたどり着くことができるであろう、その巨体だ。

こんなとんでもないモンスターを俺はまだ見たことがない。

まだ見たことがないと言っても駆け出しもいいところ、つい先日に見晴れて冒険者になったばかりなのだから当然だ。

だが、そんな”ペーペー”だとしてもわかる。これは俺達の手に残る相手なのだと。

そうだな。

例えるのならば、そこに3階立ての塔があるとするだろう？ 細くて長いやつだ。

さすがに雲に届くなんてことはないが、階段を勢いよく上がっていったのなら、しばらくは肩で息をつかざるを得ないくらいの高さだ。

できることなら、そんな疲れる階段はゆっくりと登っていくに限る。

そんな階段を全速力で駆け上がって行って、最上階まで一息で登

りきつたところで、ふと窓から地上を見下ろそうとしたところに、
”やつ”の丸くて大きい目があつたらどうだ？

2つの目玉がぎよろりと見つめているのだ。ぞつとしない話だ。
残念なことに、そのぞつとしないやつが俺たちの目の前で、体から
無数に伸ばした触手を存分に振るっていたりする。まるで食後の
運動でもしているかのように。

震える両腕をなんとか鎮めようと、ソードを構えたままに首を動か
して辺りを見る。

すると、フードをかぶった少女と目が合う。こちらは何を考えて
いるのか、微動だにせず俺を見つめ返す。

無言で佇んでいる。

そのローブは上から下まで真っ黒で、一見すると魔法使いかなにか
だと思ってしまうのだが、実はそうではない。その証拠に、暴れ
回る脅威の前にただじつと傍観を決め込んでいるのみだ。

彼女はこういった類のものには、なんらの対抗手段も持ちえてい
ない。

「つとと！ おい、これなんとかしろよ！」

なおも迫る触手を必死の形相でかわしながら青年が叫ぶ。

彼を追い回す触手には人間と同じサイズの鉤爪がついていて、今
もなお土が剥き出しの大地にせっせと田畑をこさえている。

あんなものを避け損なってしまうては、上半身と下半身を繋ぎ留
めるのも実に困難を極めるだろう。

案の定、追い回される彼のクセツ毛の黒髪も、主人の心情に呼応
して逆立っているかのようだ。”ちゃんと避けてくれよご主人様”
つてところか。

「おめーがなんとかしなきゃ、誰がどーにかすんだよ！ ごるあつ
！」

「そーよ、そーよ！ あんたがリーダーなんでしょ、ディールつた
ら！」

ディール。それは俺の名だ。

少女が真つ赤な髪を揺らして便乗するように叫ぶ。彼女もまた必死の形相だ。

「こんのまんまじゃあ、リベルもろとも全員、リベルの髪の色に染まっちゃうぜ！」

「ばか！ こんなときになに言ってるのよっ！ ばかジン！」

ジンと呼ばれた青年を赤髪のリベルが肘でどつく。

「うおっと」とよろけたジンの真後ろに人間大サイズの鉤爪が、ずどん、と突き刺さる。びくんつ、と飛び上がる2人。

瞬間、2人は同時に顔を見合わせたかと思うと、一目散に俺の後ろに回り込む。

「ほらほら、ファイター様の出番でやんしょ」

「こ、こら……ジン、押すな！」

「あ……あはは、あいつ退治してくれたら尊敬しちゃう！ もうあたし、デイルと結婚する！」

「リベル！ 冗談でもそんな事言うな！ そして一緒に押すな！」
こうなるともうすったもんだの大騒ぎだ。

さすがにファイターである俺としては、ジンとリベルの2人がかりでかかれたとしても、押されて前につんのめることなんて、さすがにない。

とは言え、目の前の自然災害（？）をどうにかしないことには、どうともならない。

「落ち着け！ ちょっと待ってる、今心の準備を……」

パニックに陥っている口の悪い青年とじゃじゃ馬な少女の2人組を努めて冷静になだめると、改めてソードを構える。

（うっ……大きい……）

どんなに前向きな性格のやつだって、これを目の前にしては悲惨な己の死に様しか想像できないに違いない。

でっぷりと丸まった巨軀にはどんな武器だって通用しそうにない。まるで巨大なサボテンかなにかに大きなまんまるおめめが2つ付いて、針の代わりに数え切れない触手が生えているようなものだ。

唯一の救いといえば、鉤爪付きの触手以外には、その本体の動きが鈍いということだけだ。

なんといっても、短い2本の足だけで体を支えているのだ。

これでネズミのように素早く動けるとしたら、一国を挙げての討伐隊を組まねばならないほどの脅威となるのではないだろうか。

「巢に、近づいた、私たちが、悪いよ、デイル」

黒フードの少女が呟く。

とても小さな声だ。聞き取れたのはおそらく俺だけだと思う。

「それはそうだがっ……」

「こんの小娘が不用意にうろつくから！」

「きiiiiiiii！　ばかジンが”あの林檎うまそう”って言ってあいつの朝ご飯を盗むからでしょお？！」

「う……う……うわあああああああ！」

ジンとリベルの罵り合い押し付け合いに混じった、悲鳴にも似たボーイソプラノな叫び声に、俺たちは一斉に振り返った。

まさに千鳥足だった。か細い両腕で、どう見ても不釣合いな戦斧を振り上げた少年が、なんとも重そうによたよたと走り出し……というか、がくがくとした足で歩き出し、

どべすぽいっ！

盛大に足元の小石につまずいて、両手からは斧がすっぽ抜ける。数秒の間。

俺たちは状況も忘れてあっけに取られた。

”巨大サボテン”みたいなモンスターすら、触手をうねらせて、転んだまま動かない金髪の少年を観察しているようにみえる。

地面に突き立った斧と合わせて眺めると、情けなさが相乗効果を上げているようだった。

「ど、どんまい」

「まあ、こんなこともあるわよ」

ジンとリベルが慰めの言葉をかける。

少年は動かない。

俺はため息をついた。

ともあれ、あの”巨大サボテン”をなんとかしないことには、俺たちに未来はない。

「つーか、逃げたほうがよくね？」

口を開いたのはジンだ。

「そういえばさあ、あの子って足遅いわよね」

リベルがそれに続く。

それにしても”巨大サボテン”を「あの子」呼ばわりするとは。

確かに逃げたほうがよさそうだった。

リベルの言う通り、よくよく考えるとやつのは鈍い。

突然襲われたものだからパニックに陥ってしまっていたが、現にこうして相談をする余裕があるくらいだ。触手の届く範囲にいないければ、至ってどうってこともないようだ。

「そうだな……逃げよう」

2人にそう言って、倒れたままの金髪の少年を見る。

すると、黒フードの少女が足首を掴んでひっぱろうとしているところだった。

「レミ。クラッセは俺が担いでいく。おいジン、先導を頼む」

そう言って振り返るとジンは「ほいよ。とつとと逃げるぜ」と辺りを見渡す。

そして、ほんの前に俺たちが通ってきた小道を見つけると「こつちだ！ 遅れんなよ」と叫ぶ。

俺は金髪のクラッセの肩をゆすつてみる。

だめだ、完全に気を失っている。打ち所が悪かったのだろうか。

とりあえずクラッセが持っていた戦斧はさすがに邪魔になるので置いていくことにした。

後でほとぼりが冷めた頃にでも取りにくればいいだろう。持っけてもクラッセには扱うことのできない代物だ。

とてもすぐに目覚めそうにないクラッセの体を起こす。すごく軽い。

意外とずつしりくるのかと思っていたが、見た目通りの軽さだった。15、6歳といえばそろそろ体も出来てきてそれなりに筋肉もついているはずだと思うのだが。

「よし行こう」

俺の言葉に黒フードのレミは小さく頷く。そうしてジンとリベルのいる方へと駆け出す。

「おらっ、こっちだこっちだ！」

ジンが手招きをする。

だがすぐに、その表情がみるみるうちに歪んだ。

「うげ！　なんだありゃあ！」

ジンの後を走っていたリベルも「きゃあ！　やだもう！」と悲鳴を上げた。

「追いかける気、まんまん、だね」

すぐ前を走るレミが振り返って言った。

レミの言葉に俺は嫌な予感を覚えた。

クラッセの頭がもたれている肩とは反対の方に首を曲げて後ろを見る。俺は開いた口が塞がらなくなった。

”巨大サボテン”の無数にあつた触手が、ちょうど縄を作るときのように交差しはじめ、またたく間にそれは2本の”前足”へと変化を遂げていくではないか！

その代わりというか、本体は最初の半分ほどの大きさになっていて、”前足”がその分大きく、もともとあつた足もすっかりと立派な”後足”になっていった。

「でたらめだぜありゃあ！　なーにが『手頃な仕事がある』だよ、酒場のくそ親父がっ！」

ジンは「けー！」と毒づく。

「帰ったらぎったんぎったんにしてやらあ！」

「その前にあんたをぎったんぎったんにしたいわよ！　ばかジンのせいで、あたしの華々しい冒険者デビューが台無しじゃない！」

「どこが華々しいんだよ！　なんにもできねえお荷物のくせしやが

って！」

リベルの文句に、ジンが即座に言い返す。

「うっさいわね！ だいたい誰もお金がないなんて、どういうことなのよ！ ばかジンのせいでなんにもできないのよ！」

逃げながらもよく喧嘩できるものだと思われてしまう。

ジンのせいという訳ではないが、リベルの気持ちも理解できないはない。

俺を始め、ジンもリベルもレミも、そして気を失っているクラッセも、全員が冒険者なりたてはやはやの新米も新米なのだ。当然、冒険にかかる費用、とりわけ武器や防具の値段といったものなんかは一般の人間には関わりあいのないものだから、どれくらい値が張るものだなんて冒険者になってみるまで考えたこともなかった。

俺のソードなどは比較的値段が高いものではなかったのだが、リベルにとつての必要なものは大変高価だと聞く。

もとは普通の村娘だというリベルにはすぐに手を出せるものではなかったのだろう。

残念なことに俺たちにもなんとか寝泊りするくらいしか手持ちがなかったので、全員でお金を出し合って購入するということすら出来なかった。

リベルは状況も手伝って、つい鬱憤をジンにぶつけてしまったのだ。

ジンとリベルの口喧嘩にうんざりしながらもひたすら走る。

とにかく来た道を引き返せば街に辿り着くわけなのだが、

「ジン！ どこに向かうつもりなんだ？！」

粗い呼吸をできるだけ整えながらジンに向かって叫ぶ。

リベルと口喧嘩をしていたジンは唐突に問いかけられて「はあ？」

と間の抜けた声をもらす。

「どこって街に戻るに決まってるだろ。さすがにあのどつつあんも街までは追ってこねーだろ」

なにを当たり前の事を、というようにジンが答える。それにして

も”とつつあん”はないだろう”とつつあん”は。

「それはだめだ！ あいつが街まで追ってこないなんて保障はないだろ。俺たちで別の場所に誘導してからまくんだ！」

「別の場所つつてもよ、どこに行きゃーいいんだよ。俺ら、この森に来たの初めてなんだぜ？」

それもそうだ。

誘導すると言っても、これといっていい場所などは思いつかない。「とにかく、森の中に入ってみよう。このまま走ったら街にやつを連れていってしまう」

俺の提案にリベルが嫌そうな顔になる。

「森のなかあ？！ もうつ、冒険者ってそんなことまでしなきゃならないの？ 街に行つて他の冒険者に退治してもらえばいいじゃない」

全く無責任な言いようだ。

だが、あんなモンスターを退治できるような人間なんているのか？ そんな人間がいるなんて全く想像できない。それに、

「街に連れていったりなんかしたら、下手すると冒険者の資格を剥奪されてしまうぞ」

俺は少々強めにリベルに言い聞かせる。

その言葉にリベルは、うつ、と言葉をつまらせる。そうなのだ。

一口に冒険者といっても、その資格を得るにはそれなりの条件があつたりするのだ。それが”冒険者規定”というやつである。

冒険者規定を守れない者は冒険者ギルドから冒険者として認めてもらえなくなるだけでなく、場合によっては重い罪に問われることもある。

冒険者規定の説明の前に、まずは冒険者ギルドというものについて語らねばなるまい。

そもそも冒険者ギルドが正式に設立されたのはおよそ50年ほど前の事だ。

それまではそれぞれの自治体が腕に自信のある者を独自に雇ってモンスターの退治などに充てさせていたらしい。

古い話では、現在の冒険者の前身たる当時の戦士たちの扱いは、今と比べればあまり良いものではなかったそうだ。

もちろん依頼を一度受けてしまえば、その報酬はやはり高いものだったそうだが、依頼がなければそもそも食べていくことすら叶わない。

もともと戦う術に長けた者たちはそれ以外の仕事ではからっきしだったことが多かったようで、モンスターが現れなければ、その腕力を生かして短期の土木作業などでなんとか食い繋いでいたようだ。そうになると、いざ凶悪なモンスターが襲ってきたときにはあまり具合が良くない。

日ごろから大した訓練をしていない者が多くなっていたものだから、今の冒険者に比べると、当時の戦士たちの質は決して高いものではない。

あえて厳しい言い方をするのなら、そこらの村人に毛の生えた程度だったのだろう。

そうになると彼らを雇う村や町としては、1匹のモンスターに数人がかりで対処させなければならなくなる。

質よりも数で、となると1人の戦士にそれほど多くの報酬を支払うことはできなくなってくる。

凶悪なモンスターが年々増加の一途を辿るのは裏腹に戦士たちの質は下がる一方になるわけだ。

それでは困るとばかりにいくつかの町村が協賛して設立されたのが、現在の冒険者ギルドの前身たる自警戦士団であった。

当時としては異例の登録制度の形を取り、各医療施設や宿泊施設を格安で利用できることを条件に、有能な戦士たちを募ったのだ。

格安で諸々の施設を利用できるとなると、それを目当てに入団しておいて、いざモンスターが現れるとなると逃げ出すような不届き者も当然現れてくる。

その防止の為に立案されたのが今で言う”冒険者規定”である。

冒険者規定には細部にわたって、冒険者として成さなければならぬことが記されているが、今の俺たちにとって重要なのは『冒険者たるもの、冒険者ギルドに加入している町村及びその周辺における立地またはそれ以外の町村であっても重大な被害を与えるような事があつてはならない。そうならぬように尽力すべし』という文言である。

文言には『但し、やむを得ない場合に限り、刑罰の縮小は検討されるものとする』と続いているが、どちらにせよ、なんらかの罪には問われることは免れないのだ。

もちろん冒険者の資格を剥奪されることは十分にありえる事だろう。

今の俺たちの状況を考えれば、街へと逃げてしまつて、運良く他の冒険者たちが”巨大サボテン”を退治してくれたとしても、他に方法がなかったのかと問われる事になりかねない。

そうでなくても、街にはモンスターの脅威に手も足も出せない人間が大勢いるのだ。

なんとしてもここで対処しなくてはならない。

そこまで考えると背後から、どしんどしん、と大きな音が聞こえてきた。

「げげっ、あのとつつあん、もう追いかけてきやがったぜ！ 少し準備体操でもしてればいいのによ！」

ジンが走りながら後ろを仰ぎ見る。

俺もつられて振り返ると、道を挟んで左右に分かれ立っている木々の間からその姿が見える。うまいこと”追走形態”へと移行し終わった”巨大サボテン”が大腿で歩き始めたところだった。

歩いているといつてもその歩幅は俺たちの1歩よりも遥かに距離を稼ぐ。

ゆっくり歩いているようでもどんどん俺たちとの距離が詰まってきた。

「冒険者規定とか関係なく、こんのまんまじゃ追いつかれちゃうぜ！どっちにしても横道に逸れたほうが得策ってもんだ」

ジンは言うなり後方の俺たちから確認の合図を待つ。

「わかったわ。こうなったら贅沢は言ってられないしね！」

リベルが言い、レミが頷く。俺も「そうしよう」と言って大きく頷いた。

ジンの「1、2の3！」の掛け声で左手の木々の中へと飛び込む。丈の低い木々の頭を垂れた枝が頬をひっかけが、かまっている暇はない。

一拍おいて”巨大サボテン”の元は触手だった前足がさっきまで俺たちのいた場所の地面を揺らした。

「おいおい、もう追いついてきたのかよ！」

先頭でジンが叫ぶ。

「しっ！静かに！」

思わず叫んでしまったジンにリベルが釘を刺す。

ジンを先頭に、リベル、レミの順で、しんがりにクラッセを背負った俺が続く。

クラッセの着ている服の袖が枝かなにかに引っかかって、びりびり、と音を立てる。彼には気の毒だが、この状況では仕方がない。

少しの間は全員が無言で、粗い息遣いと雑草や枝から伸びる葉の擦れ合う音だけが続いた。

皮鎧の中がじつとりと汗ばんでいるのがわかる。

足元の石や木の根を避けるためにジャンプする度、クラッセの足のつま先がふくらはぎに何度かぶつかった。

そろそろ目を覚ましてもいいような気もするが、今の状況で起きてられても説明をするのが面倒なので、それはそれで今のまま静かに気を失っていてくれた方がいい。

「ねえ……足音聞こえなくなったんじゃない？」

しばらくしてリベルが立ち止まると、ジンが「そーいやそーうだな」と振り返った。

逃げるのに夢中だったせいで今頃気がついたが、あの巨体だ、森の中に隠れてしまえば俺たちの姿を見失うのも当然かもしれない。

「なんだよ！　びびることなかったんじゃねーか！」

近くの木にもたれかかってジンが軽口を叩く。

「なによ、一番怖がってたの、もしかしてジンだったんじゃないの？」

ここぞとばかりにリベルがジンを攻撃する。

もしかしたら”リベルの髪の色に染まる”をまだ根に持っているのだろうか。

「もう、気配は、ないね」

ひとり慎重に辺りの気配を窺っていたレミが小声で漏らす。

その言葉に俺たちは、はあゝ、と息を吐いた。

リベルはその場に座り込むと「なんなのよ、もう。なんなのよ」とぐちぐち言っていた。

「とにかくいいじゃないか。みんな無事でなによりだ」

そう言って笑いかける。

そーうだ、突然現れた”巨大サボテン”の前に俺はなにひとつできなかったが、誰一人として欠けることなく逃げ切れたことが一番大事なことなのだ。

「リベルじゃねーけどよ、なんなのよアレ、って感じだよな」

木にもたれたままにジンが唇をとがらせる。

「確かにな。街からそう遠くないこんな森の中にあんな恐ろしいモンスターがいるなんて……。世界にはあんなのがごろごろしているんだろーうか」

最後の方は独白気味に言っていると、ジンは人差し指をチツチツと振って、

「そーじゃねーよデイル。おめーも聞いてたら、酒場の親父の話

あのおっさん、この森にはそう恐ろしいモンスターなんていねーから俺らみたいな新米冒険者にはうってつけだって言ってたじゃねーか」

ジンはその時のことを思い出したのか「けっ」と吐き捨てる。言われてみれば、そんなことを言っていた。

レミも横で「そうだね」と頷いた。

俺はクラッセをゆつくりと背中から下ろすと、木の根元にもたれかかせてやった。

「とにかくよ、ほれ。こいつでも食って今後の事でも考えようぜ」ジンは背負っていたリュックサックの口を開けて、おもむろに中の荷物をこちらへと放った。

「えー?! これ、さっきの林檎じゃない! なんで持ってたのよ!」

林檎を受け取ったりリベルが驚いた声を上げる。

俺は放られた林檎を右手でキャッチする。

それはリベルの言う通り、ジンが「巨大サボテン」から横取りした赤々しい大玉の林檎だった。

「俺様の手際の良さをなめちゃいけねーよ? どうせ襲われるんなら貰えるもんも貰つとかねーとな」

ジンは白い歯をみせて林檎にかぶりついた。

レミはどうやって食べようか思案していたようだったが、すぐに諦めたらしく小さな口を開いて林檎をカプリとやっていた。

フードに隠れて口元しか見えなかったが、思っていたより良い味だったらしく、続けて二口三口と口をつけていた。

「シーフって手際だけはいいのね。ばかジンでも意外なところで役に立ってたわ」

むくねながらリベルも林檎を口に運ぶ。

もとはといえばジンが林檎を取ったことで散々な目に遭ったものだから、素直には美味しいと言えないのだろう。

そんなリベルの心情を察したか、ジンが「可愛くねーやつ」と笑

つ
て
い
た。

こんなところでみんなして林檎をほおばっている冒険者たちなんているのだろうか……。

少なくともこの辺りでは俺たちだけだろうと苦笑する。

俺の林檎が芯だけになる頃合を見計らって、ジンがこちらも見ずにまた林檎を放る。

それを受け取ると、ジンはおもむろに話し出した。

「まあ食ってるままでいいから聞けよ。さっきも言っただけよ、この森にはこええモンスターなんていねーって酒場の親父も言ってたよな。んだけど、森に入ってほんの20分足らずしか経ってねえのに、あんなへんてこりんなモンスターがいるときたもんだ。

んでな、俺は思うんだけどよ、実は今この森ではとんでもねーことが起きているとか、そんなことってねえかな？ あのおっさんが嘘について俺たちを危険な場所に案内したってか？ そんなわけねーよな。だってよ、酒場の親父がなんでそんな嘘をつくんだよ。わざわざ嘘をつく理由なんてねーだろ？」

俺たちは話を黙って聞く。

ジンはさらに続けた。

「これって俺の考え過ぎか？ ただな、シーフってのはどんな時でもあらゆる可能性を考えろってよ、短い講習だったけど教わってなああ、講習ってのはあれだ。シーフって職業は冒険者の資格を得る前に、ちよつとした話を聞かなきゃならねーんだと。

そんで3日程度だけ色々な話を聞かされてな。例えば罾とかよ、隠れ潜んでいるようなモンスターから仲間を守るのもシーフの大事な仕事なんだとよ。とにかくあれだ、考え過ぎだとしても用心しくにこしたこたあねーってことだ」

いい終えるとジンは水筒を傾けて一気に水を飲む。

「ま、そんだだけだ。一応、最悪の事態も視野に入れとけ」

そしてそっぽを向いて再び林檎にかじりつく。

俺はリベルを見る。さっきまでの喧嘩相手が真剣な顔をして言うものだから、少し面食らっているようだった。

ジンは初めてパーティを組んだときからいつもふざけた事ばかりを口にしていたが、本当はすごく真面目な男なのかもしれない。俺はそんなジンにどことない心強さを感じた。

俺たち5人は全員が冒険者になりたてだ。

それゆえなのだろう、リベルも実のところ、少しでもジンと軽口を叩き合って緊張をほぐそうとしていたのではないか。

そしてジンも同じ気持ちだっただろうし、俺もそんな彼らに少なからず救われていたと思う。

きつとジンは、そうした心の甘えに気がつき、”冒険”というものに潜む危険を改めて認識させようとしたのかもしれない。

「そう、だね」

レミが呟く。

フードを指でほんのわずかだけ押し上げる。青い瞳がしっかりと他の3人を見つめる。

「あんなのは、少し、異常」

「確かにね」

リベルがレミの言葉を引き継ぐ。

「普通……って言ったら変だけど、あたしたちまだなんにも知らないから、でも、普通に考えてあんなモンスターが現れたってことになったら街でもきつと噂になるわよね。それで討伐隊とか組んだりしてさ。酒場のマスターだってあたしたちみたいな駆け出しに行かせるなんてことないと思うの。ジンはばかジンだけど、きつと言っていることは正しいと思うわ」

真剣な表情で言うリベルに、ジンはもたれていた木から、ずるつ、と滑る。

「おめーなあー。こーゆー話のときに”ばかジン”は余計だろーがよ」

呆れたような声を上げる。

「あははっ、珍しくまともなことを言うからよっ」

口元に手の平をあてがってリベルが笑う。

ジンは座り込んだままで「けっ」と吐き捨てる。

「とにかく！ この話はこれでおしまい！ それよりこれからすべき事を考えましょ。仕事をこなさないとお金はもらえないんだから！ だいたいたさあ、こんな寄り道をする羽目になったのはジンのせいなんだからね！ そこんとこわかってるの?!」

いきなり話題を転換されて「わーった、わーってるって」とジンは投げやりに返事をする。

”話を蒸し返しやがって”と、それ以上に物言わぬジンの表情が代わりに語っていた。

「起きない、ね」

元のようにフードを目深にかぶったレミがクラッセに顔を向ける。

「王子様はクスしてあげないと目覚めないんじゃない?」

クスクスと笑うのはリベルだ。

「なら、してやりゃーいいじゃねーか」

「ばかね！ もう男って本当にスケベ！」

ニヤニヤしながらジンは言ってリベルの背中に手を回そうとする。クラッセの方に押そうとするつもりだったようだ。

その手をリベルにぴしゃりとはたき落とされる。

「なんだよ、自分からふっといてよ」

そう言いつつもリベルの反応を楽しんでいるようだった。

「2人ともそこまでにしておいて。クラッセが気が付いたらまた出発することにしよう。ジン、その前にもう一度地図を確認しておこう。レミ、目当ての薬草はどんな感じのやつだったかな?」

またも言い争いを始めそうな2人に先手を打って切り出す。

そうそう、俺たちはなにも、目的もなしにこんな森に出向いてきているわけじゃない。

冒険者としての経験を積むために酒場のマスターに手頃なモンズ

ターのいる場所を教えてもらったわけでもない。

当然だが、仕事としてこの森に来たのだ。

「ヒガエリグサ」ね」

1人だけすることのないリベルが言う。

正確に言うのであれば、することがないのはクラッセと2人だが。

「そう、”陽還り草”」

それにレミが返事を返す。

「教会からの依頼なんだっけ？」

ジンが地図の用意をしているのでちよつとだけ退屈そうだ。

「ああ、なにかの材料にするって言うていたな。俺たちみたいなまだ冒険に慣れていないような冒険者が経験を積むためには手頃な仕事なんだとさ。教会側もありお金をかけたくないから、『早く冒険に出たい、だけでもまずは手堅くいきたい』ってあたりの新米冒険者によく紹介しているらしい」

マスターの話を聞く限りでは、冒険というよりは”おつかい”だが、俺たちの財布の中身を考えたら、受けられる仕事は受けておこうという事になったのだった。

どのみち俺たちのような新米に難易度の高い仕事など任せるわけにはいかないだろう。

それに、少しでも経験を稼げれば、金銭以外にも手に入るものは大きいはずだ。

「俺たちはとにかく場数を踏んでいかなきゃな」

リベルは「うんうん」と頷き、

「1人100Gってのは少なすぎだけどねえ。でも材料採取じゃ仕方ないかあ」

リベルはやはり残念そうだった。

100G程度の報酬では2、3日は少し贅沢な食事ができるというくらいだ。あとは宿代に消えゆくのみだろう。

一応、冒険者の資格を使うことで宿も割引はしてもらえるのだが、このあたりが困ったところで、成りたての冒険者では割引率も決し

て良いものではないのだ。

それもそうだ、冒険者になってすぐになんでも安くなるのなら、しばらくはモンスター退治や酒場で依頼を請け負ってこなくとも、ちよつとした旅の間に利用することもできてしまふからだ。必要なのは冒険者ギルドでの簡単な手続きと適正検査くらいだけなのだから。

そういったこともあつて、俺たちは今、とてつもなく金欠なのである。

「レベルが上がるまでは辛いわねえ」

しみじみとリベルが呟く。まったくだ。

「それで、その陽還り草っていうのは、どんな特徴をしているんだ？ 葉の形は？ なにか香りでもあるのか？」

俺はレミに尋ねる。

実のところ、レミ以外の4人は依頼の品である薬草について深くは教えてもらつてはいない。

酒場のマスターからその薬草の話を聞いて、レミがそれを知っているというので、あくまで大まかな話しか聞いていないのだ。

「香りは、ないね。無味無臭だよ。丸い葉、で、色は冬から秋、にかけてが黄。春から、夏までが橙になるよ。今は春、だから……」
「橙ね！」

リベルが言うと、レミは数秒だけおいて「そうとは、限らない」と言つて続ける。

「気候や、その地域にも左右、される草だから。特に日が照つて、いない時、見つけるのは、大変だよ」

レミはそう言うのと懷から手帳を出して羽ペンを握りだした。

スラスラと絵を描いているようだ。

その様子を俺とリベルは固唾を吞んで見守る。

すぐに描き終えて俺たちの前に差し出された手帳をリベルと2人で覗き込む。

さつと描いたわりによく描けている。なるほど確かにまんまるの

葉だ。

よく見てみると、輪郭がギザギザになっている。この形に黄か橙の色になっている草を探せばいいということか。

ただレミが言うには、陽還り草は太陽の光を浴びていないときは普通の緑色になるんだそうだ。表面が太陽の光を返して色が変わる特殊な層で覆われているらしい。

「うーん……ちょっと曇っているわね」

リベルが天を仰ぐ。

「でもそのうち晴れるかもしれないし、きっと大丈夫よ。それよりそんな草を教会は何の材料にするのかしら？」

樂觀して俺たちに笑いかけると、思い出したように疑問を投げかける。

俺もレミを見た。

「ああ、変わった薬草だつていうことはわかったが、どんなものなのかは俺も知りたい。何かの薬になるのか？ まあ薬草っていうくらいだからな」

「デイル、そりゃそうだろ。んじやなきや誰も採取の依頼なんてしねーって」

地図とにらめっこしていたジンが離れたところから口を挟む。

「いいから黙って地図の確認でもしてなさいよ。だいたいあんたが最初から地図をちゃんと見ていればこんなことにはならなかったのよ！」

全くの言いがかりだが、ジンはリベルに「へいへい」とだけ答えた。

「おいおい、ちょっと言いすぎだぞリベル。俺たちだってもったいなく確認するべきだったろう？ 今さら言っても仕方のないことはやめておこつ。それよりレミ、どうなんだ？」

俺の弁護に「そりゃそうだけどさあ」とふくれっ面になる。

だが、さすがに今のところなんの役にも立っていないのを申し訳なく思っているようで、リベルは「ごめん」とだけ小さな声で謝る。

リベル本人はジンに聞こえないような声で言っ たつもりだったの
だろうが、ジンの耳に届いていたようで、彼は地図から目を離さず
にひらひらと片手を挙げて振っていた。

「主に聖水、の材料だね」

レミはさらにその詳しい説明を続けた。

「聖水にはモンスター、を退ける効果が、あるよ。よく大きな街の周辺、に撒かれているね」

「そういえば戦士風の人たちと神父さんが街の周りを一緒に歩いているのを見たことがあるわ。あつ！　なんか瓶から水みたいなのを振りまいていたかも」

リベルがその時の光景を思い出して声をあげる。

「でもそんな物の材料に使われるんなら、結構値が張るものなんじゃないか？」

俺はレミに聞く。

それを振りまくだけでモンスターが近寄らなくなるというのなら、いい値段がしそうだ。と同時に、そんな貴重なものを一介の新米冒険者に知られてしまってもいいのだろうかという疑問も湧いてくる。そもそも冒険者の存在意義自体が危うくなるのではないか？　モンスターという脅威から街を守ることが我々の仕事なのだから。

もちろんそれだけではなく、旅の道中の護衛などの依頼もあることにはあるが。

「ううん。そんなにたいした、効果は、ないね。太陽の光、を浴びて、色が変わったり、するから、古来より神聖なもの、として伝えられている、ただだよ。いわゆる縁起物、だね」

レミの説明に俺とリベルは納得した顔になる。

彼女が言うにはこうだった。

聖水というものは陽還り草だけが材料ではなく、それ以外の材料と合わせて精製しているのだそうだ。

陽還り草自体には全くといってモンスターを退ける効果などはなく、聖水を神格化させるための、いわば聖水の精製がうまく成功こ

とを祝う儀式というものがあり、その儀式用として使うだけらしい。そして聖水というものに至っても、多少はモンスターが嫌うような匂いがある材料が含まれているようだが、それほど大きな効果は期待できないらしい。精製の過程において特に退魔の魔法を施すといったこともない。

さらに言えば、そもそも退魔のような高度な魔法を使える者すらもそうそういるものではないのだそうだ。

「けっ。金持ちの道楽みたいなもんかよ」

地図とにらめっこしていたジンが顔をあげて憎まれ口を叩く。

「道楽ってあんた……」

リベルが呆れて言う。

俺はリベルに次いで口を開く。

「そういうものは大事だと思うぞジン。縁起を担ぐというのは意外と大事なことだ。そんな事を言ってバチが当たっても知らないぞ」

「その通り、だよ」

3人から同時に非難の視線を浴びて、ジンは気まずくなったように地図へと顔を戻す。

「はいはい、あつしが悪うござんした。それよりこれを見ろよ。なーんか、お宝の匂いがしねーか？」

口元に笑みを浮かべてジンは俺たちを手招きする。

「え、なにに？ お宝？！」

リベルが真つ先に地図を覗き込む。

俺はレミと顔を見合わせてからリベルに続いた。

ジンの人差し指の部分にはうつすらと”x”と印がつけられていた。

それは後でかき消そうとしたようで、よくよく注視しなければ気付くことがないような印だ。

目的地である大きな印が目を引いて俺なら気付きそうにない。ジンはよく見つけたものだ。

「なにか知られたくないようなもんでも埋まってんじゃないか？」
集まった3人の顔を覗き込んで、ジンは「へっへっへ」とにやつく。

「こんなのよく見つけたな」

俺は感心してジンを見た。ジンは「おうよ！」と意気込んで、地図をなぞるように指を動かす。

「街を出発してあんま進んでねーから、俺たちがいるのは多分このへんだろ。きつとこれがさっきまでいた小道だな、そんで、ほれここに岩山みたいな記号があんだろ。こいつをぐるぐると回り込んでだな」

俺たちの現在地と、街までの距離とその印のつけられた場所を比較すると、道のりにして2時間くらいはかかりそうだ。

「結構遠い場所にあるな」

思わず漏らす。

「でもさ、もしこれが財宝だったりしたら、もうあたしたちウハウハよ?!」

リベルは興奮して、地図を食い入ったように見つめる。

「だろ? 昔の偉人が遺した金貨でも埋まっていたりしてな」

ジンは言いながら想像して、よだれをジュルリと垂らしそうな口元を袖で拭う。

「でもそれはさすがに出来すぎじゃないか? だいたい偉人ってなんだよ」

確かに財宝が埋まっているのだとしたら、それはすごく魅力的だが、現実になんてそうあるもんじゃない。

俺の反論にジンとリベルの2人は一斉に噛み付く。

「おめーってよ、夢がねえな夢が。せつかく冒険者になったんだから、それくらいの夢は見てみようぜデールよぉ!」

「そーよ、そーよ! ああもつつ、財宝を掘り当てたらあれもこれ

も買えるわ！ おととい街で見つけた可愛い服があったのよね〜」
リベルはうつとりとした表情だ。

年頃の女の子なのだからそれは仕方のない欲求なのかもしれない。
だが、これでいいのか？

「危険区域、だったりしてね」

レミの発言に2人はまたも同時にぴたつと止まる。

彼女の言うことが、この場合は一番ありえそうだ。

教会といえば、人々が懺悔をしに来る場所というだけではなく、
冒険者ギルドとも密接な関係にあるのだ。だからこそ今回のこの仕事も酒場を通じて俺たちの元に転がり込んできたのだ。

その教会から支給された地図ともなれば、危険なモンスターが出るがゆえに記されたという理由だってあり得る。

ただ、酒場のマスターが言うには、”手頃で危険の少ない仕事”
だそうだから、ジンの推測だってあながち見当はずれではないのかもしれない。

だがマスターがこの場所が”危険区域”だということを教会関係者から聞いていても、それを俺たちに伝え忘れたということも十分に考えられるのだ。

「さっき自分で言っていたろうジン。少し慎重に物事を考えよう。
それに、まずは依頼にある薬草を入手することが先決だ」

レミに続いて2人に釘をさすと、ジンは「いけねーなあ、ロマン
つてもんがねえよデイルは」とリベルに愚痴っていた。

なんとも言え！

「ところで今さらだけどよお、あんなモンスターがこの先も出んのか？
いきなり巨大化するなんて並じゃねーぜ」

あんな、とは”巨大サボテン”のことだ。

「林檎を食おうとしてる時は、こーんなにちっこかったのによ」

両方の手の平をこじんまり目の前に出して憎憎しげにジンは言う。
最初に見たときはあんなサイズになるとは思ってもみなかった。

「ほんと、可愛らしかったのにね」

「ちよつくらからかつてやろうとしただけなのにな。短気なやつだったぜ」

ジンだって、なにも最初からあんな巨大化するとわかっているモンスターにちよつかいを出したわけではなかった。

本当に小さかったのだ。ある種の愛好家ならペットとして愛玩用に連れて歩きたいと思うかもしれないくらいに。

俺たちが街を出たのはまだ朝の霞も引いていないくらいの時間だ。前日に酒場でマスターから依頼をもらった俺たちは、時間も時間だということで、翌日の早朝に出かけようとなったのだった。

それまでは安宿に拠を構え、短期のアルバイトをしながらちよこちよこ酒場に顔を出していたのだが、5人で食事を取っていると、マスターから鶴の声がかかったというわけだ。

前にも言ったとおり、俺たちのような新米にはなかなか依頼などくるものではない。

めばしい仕事はのほとんどは、熟練の冒険者たちにかっさわられていってしまう。

一も二もなく飛びついた俺たちは、その日は出かける支度に追われ、今朝早くに意気揚々と出発したのだった。

冒険者になつて初めての仕事だということで、始めは辺りを警戒しながら無言で歩みを進めているだけだったのだが、モンスターの類なども現れず次第に緊張感が薄れつつある時に、森の中に少し開けた場所に行き当たった。

そうそう、酒場のマスターからは小道を真っ直ぐに進んで、地図は突き当たったところまで行ってから開けばいいのだと言われているのだ。

だから、あまり深いことは考えていなかった。

まだ冒険者になりたてで未熟なこともあつて、俺たちは地図をしっかりと確認することもなかった。

それが仇になったということもないが、今にして思えば軽率だったと言わざるを得ない。

そこには林檎の木が1本だけ立っていて、冒険者たるもの朝食はしっかりと取らなければならないというのに、朝食もろくに取っていなかったジンは、「美味そうだ」と言うが早いかその林檎の木に登り出してしまったのだ。

「おめーらにも取ってやるから安心しろって」

すると木に登って、太い枝の上に腰をかけたジンが俺たちに叫んだ。

すると巨大化する前の”巨大サボテン”が小さな触手を伸ばして、鉤爪で大玉の林檎をがりがりやっていた。

それを見つけたジンは何を思ったか、林檎を取り上げると”巨大サボテン”の目の前で一気に芯だけを残して食べきってしまったのだ。

ジンにとってはほんのいたずらの気持ちでやったことだったのだろうが、当の被害に遭った本人(?)はジンの所業で頭にきたのか、ぶるっ、と身を震わせると、あとは知っての通り、ぐんぐんと巨大化していき冒頭の場面に繋がったというわけだ。

「ほんと、ばかジンね。少しは反省してよね」

半眼でリベルが言った。

「反省してるっつーの！とにかくあのとっつぁんにだけは遭遇しねーようにいかねーとな」

さして反省していないような仕草で頭をぼりっとなぐったジンが言ったときだ。

「うわあああああ！ た、助けて！」

反射的に辺りを見回す。森は依然、しん、として何かが起こったような様子はない。

それもそのはず、悲鳴の出处は気絶していたはずの金髪少年だった。

”巨大サボテン”の悪夢にでもうなされていたのだろうか、顔面

蒼白だ。

「ようやく王子様のお目覚めだぜ」

ジンがからかうように笑う。

「もうっ。いじわる言わないの。大丈夫？　もうさっきのモンスター

ーはいないから安心していいわよ」

リベルがクラッセのもとに駆け寄る。

クラッセのだらだらと汗をかいていて、定まらない視線を宙に漂わせている。

「こ、ここは……？」

「ここつつつてもな。森ん中だつつの。おめー覚えてねーのかよ」
肩をすくめてジンが答える。

「僕、どうしてここに？」

「ええと、気絶してたのよクラッセ。ディールが背負ってくれたの。もう少し休むから、落ち着いたら行きますよ」

リベルはクラッセの額の汗をぬぐってやると、他の3人を振り返って言う。

「へいへい、わかりましたよ」

ジンが仕方がないというように再び取り出した林檎をかじりだす。彼としてはもちろんクラッセの心配をしていないわけではないだろうが、さっさと仕事を片付けて、財宝が眠っているかもしれない地図に記された場所に行きたいのだろう。

「はぁ。その林檎美味しそうですね」

起きたばかりだというのに目ざとくジンの持つ林檎を見つけて、クラッセは呟く。

「へっ！　とつととそれ食ったら出かけっぞ。随分とタイムロスしちゃったぜ」

クラッセに林檎を放る。

クラッセはそれを受け損なって、落ちた林檎についた土を払ってから口をつけていた。

「てゆーかさ、あんた林檎をどれだけ採ってきたのよ？」

リベルが素朴な疑問を抱いたようで、なんとも重そうなりュックサックの中を覗き込む。

ジンのリュックサックから尽きることなく出てくる林檎に怪訝な表情をしている。

それは俺も気になっていたところだ。

一体いくつの林檎があのにリュックサックの中にとこ狭しと入っているのだろう。

あれだけの数が入っていて、決して速度が落ちることもなく”巨大サボテン”に追いつかれないように走ったジンは、意外とファイター向きなのかもしれない。

「あん？ まだ食い足りねーのかよ。おめー、それ以上太っちまったら見れたもんじゃねーぞ」

「な、な、な……なんですってえええええ！ 誰が太っているのよ！ こんなに可憐な少女を捕まえて、どの口がそんなばかげたことを言ってるのよ！」

林檎を片手に走り回るジンをリベルが追いかけて、辺りをぐるぐると回る。

目覚めるなり賑やかに騒ぎ出した2人を見て、クラッセは不思議そうな表情を浮かべていた。

「さつきから、こう、だよ」

クラッセの横に腰をかけて傍観を決め込むことにしたレミがクラッセに説明する。

「そうなんですか」

林檎をシャリつかじるクラッセが「楽しいですね」とのんびり顔で返した。

その時だ。

くすくす……くすくすくす……

ふと俺は押し殺したような笑い声を聞いた気がして、4人をそれ

ぞれ見た。

ジンは相変わらずリベルをからかいながら走り回っているし、レミヤクラッセを見ても笑っているような様子はない。

きつと木の葉のこすれる音かなにかだったのだろうと、その時は特に気に留めることはなかった。

少しだけ強くなってきた風が、木々の枝を揺らしていた。

2・未知との邂逅

ピチュンピチュン……クルックル……

俺たちは雑木林をかきわけながら歩いていた。

「やあ、木の香りがとてもいいですねえ」

1人寝起きのクラッセが呑気に背伸びをした。

「つたく、ガキはこれだからよ」

先頭をひた進むジンが肩ごしに振り返って毒づく。

「本当、気楽でいいわ」

気付かれした感のある顔でリベルが相槌を打った。

「まあいいじゃないか。みんな怪我ひとつなかったんだしな」

努めて明るい声で俺が言う。ともすれば緊張感に暗くなりがちな仲間を鼓舞するためであり、そして自分のためでもある。

「怪我ひとつなかったって、ねえ」

リベルは振り返ると、俺をじりと眺めて胡散臭そうな顔をする。

「ま、まあ外傷のある者は誰もいなかったから良かったよ」

俺は取り繕いがちに付け足す。気絶をしたクラッセのことは不可抗力だ。

だいたい当の本人はよほど頭を強く打ったのか、モンスターのこ
となど綺麗さっぱり忘れていた始末である。幸せなやつだ。

それにしてもいい天気になった。

強くなってきた風が雲を追いやってくれたおかげで、太陽が少し
ずつ顔を出してきたようだ。

これなら陽還り草も見つけやすくなるだろう。

しかし、初っ端からあんなモンスターに出会ってしまったことで、
みんな気を張りすぎて疲れているようだった。

モンスターに出くわす心配をする必要などなければ、クラッセの
言う通りに森林浴にびったりの日和だっただろう。

「また、さっきの、が出てくるかもしれないけど、ね」

周囲に気を配りながら目の前のレミが言った。

結局のところ俺たちは遠回りしながら目的地へと向かうことに決めたのだった。

ジンとリベルがやっていた追いかけつこにようやく気が済むと、俺たち4人は気を失っていたクラッセを含めてもう一度広げた地図の前に集まった。

ともすればまた”巨大サボテン”に遭遇してしまいかねない小道に戻るのは危険だということで、あーだこーだ言いながら森をこのままつつきつてしまおうという結論に達したのだ。

地図を5人で覗き込んでいる間に、クラッセは林檎を一気に3つもたいらげ、ジンは「生意気なやつだ」と言っていた。

どうやらジンは年下の男があまり好きではないらしいという事が、ここ数日でわかった。

再び出発して、最初のうちは”巨大サボテン”の名前を決めようとリベルが言い出して盛り上がった。

「プータがいいわ！　なんか可愛いじゃない？！」

そんなリベルに失笑を返したジンは、

「あのとつつあんには”とつつあん”で十分だつつの」
にべもなく言い返す。

「俺は最初から思っていたんだが、サボテンに似ているから、巨大サボテンとかサボテンジャイアントでいいんじゃないか？」

「それってダサイわよデイル」

「ひねりがねーな。ひねりが」

……おまえらには言われたくない。

「じゃあ、ひねりを加えて”ウオツカ”なんてどうです？　僕の好きな物語に出てくるんですよ。丈の長いのコートを羽織ってすごく格好いいんですけど、なんだか憎めないドジさがあって。ジンさんの名前にも似ているところがありますし……」

『却下！』

ジンとリベルが同時に吼える。

「なーにが、ばかジンの名前と似ている、よ！ プータちゃんて決まりだわ！」

「てめっ、っーかプータつつうのもいけ好かねえが、なんだそりゃあウオツカつてよ。キザすぎんだよ！」

2人に手痛い攻撃を受けてクラッセはただ「あうあう」とたじろぐばかりだ。

そんなクラッセをレミは無言で見つめていた。よく見ると唇の端が少しばかり上がっていた。

「プータよ断然！ でもそれがだめならミイちゃんでもいいわ！」

「だーかーらー！ とつつあんで十分だったの！」

「グリーンドラゴン、とか」

「ドラゴンて感じじゃないでしょお、レミったら！」

「どう見ても爬虫類ってより植物っぽいじゃねーか！ 確かにグリーンだけだよ！」

レミは「ちえ」と足元の小石を蹴っていた。

その仕草がそれまで彼女に抱いていたイメージと異なり、意外な茶目つけがあった。

そんなレミの小さな変化に俺はなんとなく嬉しい気持ちになった。レミといえば最初に出会ったときから常に言葉少なく、一緒にいたりリベルの影に隠れて人見知りしているような印象だった。

そのレミが小石を蹴るという、感情を表に出すような行動を取ったのには、少なからず驚きを覚える。

「では”リキュール”というのはどうです？ さる冒険記に出てくる勇者で」

「なんでまた酒繋がりなんだよ！ おめーの読んでる本を書いているやつはどんだけ無類の酒好きなんだっつの！」

「そーよそーよ！ プータに決まりよ！」

「どさくさに紛れて決定してんじゃねー！」

ジンはクラッセに手厳しい。それは初めて顔を合わせた時からそ

うだった。

わいのわいの騒ぐ仲間たちを眺めながら、俺は4人と出会った時の事を思い出していた。

ジンとは冒険者ギルドで会った。

思えば最初から馴れ馴れしく話しかけるやつだった。

「よお、おめー1人か？　俺はシーフやってるジンってんだ。暇なら付き合わねえか？」

俺はいきなり数年来の友人であるかのように話しかけてきた青年に戸惑った。

見た目は引き締まった体つきにややつり上がった目じり。

ベルトにはダガーらしき鞘が2本装着されていた。背は俺よりやや低い。

年の頃は20代半ばだろうと検討をつけていたが、後で聞いたところによるとまだ21だということだった。

しばらく付き合ってみて気付いたことだが、その軽い話し口調に反してたまに大人びた表情を見せる時があるのだ。それゆえか。今まで苦労してきたのかもしれない。

その時の俺といえば、無事ファイターとしての適正検査を終えて、冒険者の資格である”リング”を受け取ったばかりだった。

ひよっとして俺がリングを受け取るのを待っていたのかもしれない。そうとしか思えないくらいのタイミングだった。

「まあまあ変な顔すんなよ。実は俺もちよいと前に晴れて冒険者になったばかりだよ。どーせなら、とつとパーティーでも組みたいじゃないか。だからよ、どうだ？　悪いようにはしねーよ」

そう言って青年は胸元に光る、鎖に通されたリングを手にとって俺に見せた。

まるでアクセサリーかなにかのように扱っていて、冒険者たる証

をそんな扱いでいいのか？　と思ったりしたものだ。

俺は気軽すぎるほど気軽にパーティを組もうと誘ってくる青年に
いささか面食らった。

なにせたった今冒険者として認められたばかりなのだ。

それでも俺にとつても、冒険者になったばかりで早速パーティを
組めるというのは願ったり叶ったりだ。

ジンの「悪いようにはしない」という言葉を信じてみてもいいか
もしれない。

そうして戸惑いがちに右手を差し出して、俺はこう言ったのだっ
た。

「俺はファイターのディールだ。よろしく頼む」

その後になつてからは照れて握手などしようとしなかったジンが、
この時ばかりは強く俺の右手を握り締めたのを、今でもはっきりと
覚えている。

「こつちこそよろしく頼むぜ相棒」

そう言つてジンはにやりと笑っていた。

まずは依頼を受けるために酒場へ向かおうというジンと町はずれ
へと足を運んだ。

そして俺は他の3人とも紆余曲折を経て出会うことになったのだ。
そこまで思い出していると、”巨大サボテン”の名前を決める話
し合いはいよいよジンとリベルの一騎打ちと化していた。

「だいたいなんで、とつつあん、なのよ！　もしかしたら女の子か
もしれないじゃない！」

「いや、あれは男だね。俺のシーフとしての勘がそう言つたら」

「なーにが勘よ！　それなら林檎なんて取る前にもうちよつとなん
かしなさいよ！」

「なんか、つておめーなあ」

この2人には譲り合う心はないのか……。

「そもそもなあ、モンスターに名前なんてつけてどうすんだよ。二
度と会いたくねえぜあんなもん。んだから、とつつあんで十分だっ

つの」

「それならメルちゃんでもいいじゃない！　それで決まりよ！」

いつの間にかリベルの提唱していた「プータ」は「メルちゃん」へとすり変わっていた。

「2人ともそのへんでだな」

俺は取り成すように2人の間に割って入る。

ジンは例によって「けつ」と吐き捨てると、

「とにかく俺は今まで通り、とつつあんって呼ばせてもらっぜ！」

「上等よ！　あたしはあたしで自由にやらせてもらっわ！」

名前の呼び方ひとつで自由もなにもないと思うが。

ジンもリベルも気が済むまで放っておけばいいだろう。ことあるごとに口喧嘩をしているが、ああ見えて意外と仲が良かったりするのだ。

喧嘩するほど仲がいい、ということだろうか？　それとも夫婦喧

嘩は犬も喰わない？

「きつと言い争いの、ことなんて、10分もすれば忘れる、よ」

今度は一転して先頭を競うようにずんずん進む2人を見ながらレミが言った。

「仲がよくてうらやましいです」

2人して先を往く姿にクラッセが呟いた。

そうだな。

俺がそう返事をしようとしたときだ。

「どっへえー。川があるぜ！」

ジンの叫びが聞こえた。

「ちよつとお、こんなの地図に載ってた？！」

リベルが誰にともなく抗議の声を上げる。

「ねーよねーよ。使えねー地図渡しやがってよー」

ぶつくさと文句をたれるジンと肩をすくめるリベルが引き返してくる。

「どこかに橋とかないのかしら。いやだわ、回り道なんて」

「そんなのあったか？　　というか川自体が載っていないなら地図を見ても無駄だな」

ジンに地図を開いてもらおうと言おうとしてから思い当たりやめる。

「渡れねー幅でもねえよ。ちゅーても足を滑らせて落っこちまっても困りもんだしな」

そう言っただけとはなしにリベルの方へと視線を漂わせる。口元にはリベルの反応を待つ笑みが浮かんでいた。

「そうよね。クラッセとかレミとかね」

リベルはその手には乗らないとばかりに軽く流す。

「ちえー」

そう言っただけの後ろに両腕を回すジン。とても残念そうだ。

「仕方ないですから元の道に戻りますか？」

クラッセが遠慮がちに切り出す。

”巨大サボテン”のことを覚えていないものだから、どこことなくバツが悪そうだ。

「そりゃまじいだろ」

ジンが言った。

「あのとつつあんが俺らをまだ探しているかしんねえ」

さすがにそこまでしつこくはないだろうと思うのだが、念のため
 ということは考えておいた方がいい。

俺はジンの言葉を肯定するようにクラッセを見て頷いた。

「大丈夫よ。あのくらいなら飛び越えられるわ。変に回り道もした
 くないし、メルちゃんにも今は会いたい気分じゃないし」

リベルはクラッセとレミに「どう？」というような視線を送る。

「え？ はい」

「どうか。ま、飛んで、みようか」

2人は自信なさげに答える。

「つーかな、別に落っこちてもそんな困るこっちゃねえ。あの幅の
 川なんて十分に足が着く深さだろうしな。問題なのは、おめーらが
 落ちちまったら、服を乾かす時間をとらなきゃなんねえってこつた」
 水に濡れてしまうというのは冒険者にとっては結構面倒なことだ。
 衣服が水分を含んでしまうとそれだけで重くなるので、ここぞと
 という場面での瞬発に欠ける。

また徐々に体温を奪われてしまい、下手をすると冒険が続けられ
 なくなるくらいに体調が悪くなったりもする。

これは冒険者とか関係なく、普通に生活していても同じように言
 えることだが、冒険者の場合はすぐに街に帰ることができないよう
 なところへ冒険に出ていることが多い。だからこそ一般の人々より
 も体調にはより気を遣わなくてはならないのだ。

「まずは川のところまで行こう」

俺は4人を促す。

ジンを先頭に少し進むと確かに川があった。ジンの言う通り越え

られない幅ではない。

「いけるか？ 2人とも」

俺は聞くが、クラッセなどは不安気な表情をしている。

「まーまー、俺がまず飛んでみるわ。一応向ここの安全も確認しとかねーとな」

言うが早いかジンは2歩3歩退くと勢いをつけてジャンプした。
ザッ

危なげなく川の反対側へと着地したジンは、そのまま目の前の茂みに顔を突っ込む。

後ろ手で「ちよつと待ってろ」というジェスチャーをする。

その途端、茂みからすぐに顔を抜いたジン。

慌てふためいたようにこちら側へ戻ろうとジャンプしかけて、
ドボーン

足を滑らせて川へとダイブする。

「なにやってるのよ！ もうばかね！」

盛大に水しぶきをあげるジンにリベルが叫ぶ。

すぐに水面から顔を出したジンが俺たちに叫びかえした。

「目の前にいやがった！ ウォーラーだ！ 目が合っちゃったぜ、くそっ！」

ジンの言葉を聞いた俺たち4人の間に緊張が走る。

川から這い上がったジンが「ありえねえ話だぜ」と呻くと、それは茂みの中から姿を現した。

その双眸は値踏みでもするかのように俺たちをひとしきり舐めまわす。

薄茶色の毛並みはふさふさとしていて、とても肌触りが良さそうだが、その毛並みに隠れた鋼の肉体をもっているのを俺たちは知っている。

ウォーラー。

よく知られたモンスターのひとつだ。

こういった森の中に生息しているが、時折人里に出てきては、そ

の牙と鋭い爪を存分に奮って暴れ狂う半人半獣のモンスターだ。

古い時代に魔法によって合成されたとも言われる負の遺産でもある。その数は大陸随一を誇り知らぬ者はいない。

狼の頭を持ち、がっしりとした体格をしている。

そして極めて凶暴だ。

「早くこつちへ来なさいよ！」

リベルがジンに叫ぶ。

俺はゆっくりと鞘からソードを抜いた。

びしょ濡れになったジンが俺たちの後ろへと駆け込む。

「ちきしょう！ 今日は何日だぜ」

言いながらジンも腰のダガーを抜いて構えた。

「ああっ、そういえば僕の斧がないです！」

思い出したようにクラッセが言った。

「ばっか、今頃気付いてんじゃねーよ！ だいたい使えねーもん持ってたって仕方がねーだろ。これ使え！」

視線をウォーラーに固定したままでジンがクラッセにもう一本のダガーを鞘ごと放る。

「油断すんなよ坊主！」

クラッセは「あれは大事な斧で」とごちゃごちゃ言っていたが、ジンから放られたダガーを落としそうになりながら受け取る。

「僕の名前はクラッセです、坊主じゃありません！ ジンさんも気をつけてくださいね！」

半ばムキになって言い返すクラッセに当のジンは「へいへい」と心無しに答えた。

「リベルとレミは俺たちの後ろへ！」

攻撃手段のない2人は素直に俺とジン、クラッセの背後へと下がる。

「くるぞ！」

俺がそう言うが早いか、ひとつ飛びで川を越えてきた獣人は、唸り声をあげて俺たちに襲い掛かってくる。

狙いはジンだ！

「モンスターってのはどいつもこいつもしつこいヤツばつかなのかねえ」

”巨大サボテン”といい、このウォーラーといい、どうも最初に狙った獲物をつけまわすのが得意らしい。

ジンはうんざりとしたような顔でばやく。

ウォーラーは彼のぼやきなど全く意に介した様子もなく、ジンへと飛びかかった。

「くそっ！」

その鋭い爪をかるうじてかわしたジンが舌打ちした。水気を吸った衣服のせいで動きづらいようだった。

「うおおおおお！」

俺はソードを振りかぶってウォーラーへと走る。

”巨大サボテン”のときは臆病風に吹かれてしまったが、背丈も俺とそう変わらないウォーラーが相手となれば話は別だ。

ファイターになってからというもの、日は浅くとも毎日鍛錬を続けてきたのだ。

倒す！

そう心で念じながら振り下ろしたソードは、しかしながら空を切る。俺の接近に気付いたウォーラーが、獣特有の身のこなしで体をひねって避けたのだ。

「くっ！」

だがダメージを与えられなかったことを悔いている暇はない。

俺の攻撃を避けたウォーラーは、今度は俺を標的へと変えた。

大きく開けた口から鋭い牙を剥く。

俺はとっさにソードを目の前に水平にして突き出す。

剣先を左手で支えると、ガキイ、とウォーラーの牙がそれを上下から挟み込む。

すごい力だ。

その勢いに倒れ込みそうになるのを両足でしっかりと踏ん張る。

ハアハア、と生臭い息に俺は思わず顔を背けてしまいそうになった。

「こんのオオカミ野郎が！」

ジンの声が聞こえるなり、ガッ、とウォーラーの後頭部になにかが当たった。

……林檎？

それはジンがリュックサックにたくさん詰め込んでいた林檎だった。

食べ物で粗末にするなどもつての他だが、今回ばかりはジンに感謝をしなければならない。

後頭部に衝撃を受けたウォーラーは、飛んできた先を確認しようという噛んでいたソードを離す。その目はジンの方へと向けられた。今だ！

俺は剣先に添えていた左手を離すと柄を握る手に加える。
ドッ！

全体重をソードに預けてウォーラーの腹部を一突きする。

ウォーラーは、びくんつ、とひとつ体をはねさせる。

一瞬虚ろな目をしていたが、その顔をだらりと俺の方へ向けたウォーラーはソードに貫かれながらも俺を引き裂こうとその鋭い爪をギリリと光らせた。

これはまずい。

俺は急ぎソードをその腹から引き抜こうとするが、ウォーラーの筋肉は絞まり、思うように引き抜くことができない。

その両腕に存分に力を溜めたウォーラーの爪が、今まさに俺に突き立てられようとした時、

「おつめえら、しつけないだよ！」

いち早く駆け寄ってきたジンがトドメとばかり、その首にダガーをねじ込む。

俺はソードを手放してその場に尻餅をついた。つまり腰が抜けてしまったのだ。

首から赤い血を噴出すウォーラーは今度こそひとたまりもなかった。

焦点が合わなくなった目で立ち尽くすと、そのまま俺の前に倒れ込む。

「へっ、敵を目の前にして余所見するバカがいるかよ」

粗い息をついてジンが言い捨てる。

「た、助かったよ、ジン」

「おうよ」

ジンはウォーラーがいよいよ絶命したことを確認すると、その死体をひと蹴りしてどかし、俺に右手を差し出す。

俺はなんとか胸の鼓動を静めるとジンの手を取って立ち上がる。

「ぼ、僕…… なにもできませんでした」

その声に振り返ると、ジンに借りたダガーを構えたままで震えているクラッセがいた。

「ガキはいーんだよ。誰もおめーには期待しちやいねえ。最初のうちはな」

そう言うジンは本当に気にも留めていなかったようだ。

「そういう言い方はないだろ、ジン。クラッセ、大丈夫だ。無理することはないぞ。クラッセだってリベルやレミを守ってくれていただろ？」

ジンはああ言ったが彼も気付いているはずだろう。クラッセもただ震えたまま傍観してただけではない。

なにもできなかったのは事実だが、ウォーラーと俺たちがやりあっている間もリベルやレミの方へ行かせまいと、しっかりと立ちただかっていたのが横目で見えていたのだ。

それをわかっているからこそ、口悪くいいながらもジンはそれ以上を追求しない。ただ、彼の性分からして、誉めることができないだけなのだ。

「あ、危なかったわね」

辛くもウォーラーをなんとか倒した俺たちにリベルが言いかけた。

「まあ待てよりベル。へへ、ピンチはこれからようだぜ」

引きつった笑顔でジンがリベルを制する。

その視線はすでに別の方向へと向けられていた。

「逃げ、ようか」

ジンの視線に気付いたレミが提案する。

「そうしとくか。さすがに俺らのレベルじゃあ、1匹なんとかすんのがせいぜいだぜ」

とっさのことで俺は失念していた。

そうだ、ウォーラーの恐ろしさはなにも牙や鋭い爪を獣の身体能力を生かして奮ってくることだけではなかったのだ。

それだけなら、ついこの間まで”普通の人”だった俺たちにだって力を合わせることで撃退することができる。

やつらは常に数匹の単位で群れて行動する。だからこそモンスターとしては比較的弱い部類に数えられているウォーラーが旅の脅威として恐れられているのだ。

グルルルル……

血の匂いに誘われたか、うなり声をあげた4匹のウォーラーたちの血走った眼が俺たちに向けられていた。

俺たちの前で肩を揺らす4匹のウォーラーからは、うつすらと黒色の湯気が立ち昇っているかのように見えた。

もちろんそれは目の錯覚なのだが、そう見えてしまうほど俺たちにとって目の前の4匹のモンスターは脅威だった。

肩を大きく揺らしているところからすると遠くから走ってきたのだろうか。まったくもってご苦労なことだ。

やつらは俺たちが倒した仲間に近づく。

さきほどのウォーラーが1匹だけいたということは、さながらはぐれウォーラー”とでもいったところか。

やつらにしてみれば、弔い合戦ということになるのかもしれない。「俺とジンとで足止めをする。3人はその間に逃げる」

短く言ってソードを構える。

「げえ、俺も足止め役に入ってるのかよ」

ジンが嫌そうな顔をする。

「やつらとまともにやりあえそうなのは俺とおまえしかないんだ。当たり前だろう」

俺はやつらを見据えたままでジンに言った。

「仕方ねえな。やるだけやってみつか。おい、聞いたろおめーら。

俺らが仕掛けっから、その間にとつとと安全なところまで逃げるんだぜ」

ジンは鼻の下を指で軽く撫でて言った。

もう一方の手はダガーを固く握り締めている。

「シーフって戦闘要員じゃないんだぜ本来」

ひとりごちると目つきを厳しくして口を閉ざす。さすがのジンでもこれ以上は軽口を叩く余裕がないといった様子だった。

「あたしが」

「あん？」

「あたしが魔法を使えたら……こんなとき。役に立てなくてごめん」
きつと唇をかみ締めているのだろう。リベルの悔しい気持ちが背
を向けていても伝わってくる。

「ないものねだり言ってもしゃーねーだろが。ほれ行った行った。

……とと」

しっしっ、と手を振るついでにクラッセに貸していたダガーをぶ
ん取る。

「なにかあったらおめーがリベルとレミを守んだぜ坊主」

相変わらずの”坊主”扱いだが、クラッセは「はい」とだけ言っ
た。

「よし、行くぞジン！」

俺が突撃しかけたとき、

「ちよいと待て！ いい手つつーのおおがましいが、逃げ切れる
かもしれない策ならあったぜ」

そう言ってジンはリュックサックの中身をクラッセに投げつける。

「デイルと2人で誘導すつからよ。うまくやれよ」

ジンが言い終えてクラッセが返事する間もなく1匹のウォーラー
がゆらりと揺れる。

「やられてくれるなよジン」

「誰に言ってるんだ、おめーこそなっ！」

俺たち2人と4匹のウォーラーが動いたのはほぼ同時だった。

背後ではクラッセたちが走り出す音が聞こえた。

ガキイ！

跳躍してきた先頭のウォーラーの鋭い爪をソードで受ける。

すかさず続く2匹目を横つとびでかわす。

どうやら俺たち2人に対して2匹ずつのコンビで攻撃を仕掛けて
くる腹のようだ。

「まともにやりあおうとするな！ 少しの間だけ凌いだら俺たちも
後にくぞぞ！」

声をかけるとジンも別の2匹の攻撃をかわして体勢を整えるところ

るだった。

「わーってら！ くそつ、服が重くてきちーぜ！」

言ってびしょ濡れの上着を脱ぐ。

「こんなもん、くれてやらあ！」

それを目の前のやつ顔めがけて投げつける。

顔にまわりつくジンの上着のせいで方向を失ったウォーラーが暴れるが、おかまいなしに牙を抜くもう1匹にジンは「うおっと！」すんでのところでかわす。

俺は容赦なしに爪を奮う2匹のウォーラーの攻撃を、ギリギリのところまでソードで受け流した。

「よっしゃ、逃げっか！」

しばしウォーラーたちの猛攻が続いた後、ウォーラーにダガーを投げつけたジンが叫んだ。

「そうだな……もう、これ以上は無理だ」

俺たちは頷き合う。

さすがに1人で2匹も相手にするのは無謀だった。

倒そうとするのではなく、攻撃を避けることに専念したからこそなんとか凌げたただけだ。

「しつこい！」

なおも俺へ向かって攻撃の手を加えようとする2匹に思いつきりソードを薙ぎ払う。

全くとっていいほど危なげなく後ろへ跳んで俺の攻撃をかわす2匹のウォーラー。

だが、これでいい。

距離を取ってくればそれだけ逃げ出す隙もできるというものだ。

「おらあ！ 喰らいやがれ！」

リュックサックを手に持ったジンが残りの林檎を投げつける。

「急げジン！」

「おう！」

ウォーラーたちが怯んだ隙を縫って俺たちは走り出した。

向かうはクラッセたちの逃げた方向だ。

不幸中の幸いとは今回の場合では、ウォーラーというモンスターがさほど足の速いモンスターではないことだろう。

本来の四足獣が持ちうる素早さを犠牲にして、やつらは牙と2本の爪を自在に操って攻撃してくるのだ。

戦闘においてはそれが脅威となるのだが、こと獲物を追いかけることに関しては俺たちとさほど足の速さは変わらない。

といっても、やつらは獣が持つ並外れた体力で執拗に追いかけてくる。

すぐに距離は縮まらないにしても、息も絶え絶えな俺たちとウォーラーとでは、いつかは追いつかれてしまうのは目に見えている。

「あいつら、どこに、いやがんだ！」

短く息を吐きながらジンが怒鳴る。

「3人を信じて走ろう！」

俺はジンを励ますように叫び返した。きっとクラッセたちが待っていてくれるはずだ。

だが、いよいよウォーラーたちと俺たちとの距離はいくらもないほどになっていった。

「こつちよ！ デール！ ジン！」

俺はとつさに声のする方を見た。
赤毛が揺れる少女が目に入る。

「リベル！」

リベルが必死に手招きをしていた。

「うし！ スパートかけるぜ！」

走る速度を上げるジンに離されまいと俺は続いた。

リベルは数メートル先の木々の隙間から覗かせていた顔を引つ込める。

俺たちはリベルの隠れた木と向かい合わせの木の間を走り抜けた。
4匹のウォーラーが続いて通り抜けようとしたとき、

ピンッ！

左手の視界に入ったクラッセが手に持つロープを力任せに引つ張った。

反対側の木に固く結わえつけられたロープは、ちょうどウォーラーたちの首の辺りにぴんと張られる。

突然の出来事にウォーラーは走る勢いを緩めることなどできなかった。

「うわぁっ」

ウォーラーたちが衝突した勢いでクラッセは思わずロープを持つ手を離して盛大に倒れ込んだ。だが、ウォーラーたちもただでは済まない。

先頭の1匹はひっくり返り、後続の3匹と折り重なり合うように地面になだれ込む。すると、

バサッ

網の振ってきた辺りを見上げると、そこにはレミがいた。

網にかかったウォーラーたちは血走った眼でじたばたともがく。

「よっしゃあ！」

「やったわ！」

ジンとリベルが歓声を上げた。

木に登っていたレミがスルスルと降りてくる。意外と身軽だ。

「逃げましょう！」

したたかに地面へ打ち付けた肩をさすりながらクラッセが言った。

「ああ」

声を張り上げたクラッセに俺は頷く。

さっきまでの彼の弱い面影はそこになく、仲間を守る、という確固たる意思だけがクラッセからは感じられた。

男子たるもの三日会わずば……と言いが、こういった逆境の中で彼も少し成長したのかもしれない。

「あんま丈夫な綱じゃねーからな、やつらがもがいているうちに、とつととトンズラすっぜ」

「そうね！」

「うん」

リベルとレミが揃って返事をする。

息も落ち着かぬまま再び走り出すジンに4人が続こうとした時だ。厄介事とはどうしてこうも輪をかけて、俺たちの行く手を阻もうとするのだろっ。

「プカリ……」

小さな半透明の球体が浮かんでいた。

まるで石鹸水でできたシャボン玉かなにかのようだった。

気がつくとそのそれは俺たちを囲むように、おびただしい数が浮かんでおり、「今度はなんなんだよ！」と立ち止まったジンが忌々しげに頭を掻いた。

俺は気にせず走り抜けようかと考えたが、レミの一言に思いとどまった。

「ブレス、かな」

「ブレス？」

聞きなれぬ名前に俺は聞き返す。

「そう。見たことが、あるよ。これは最もポピュラーな、ブレス、の仕業だね。他にも、炎を吐くのも、いれば、毒の霧を吐くのも、いるね。そのシャボン玉には触れない、方がいいよ」

”触れるな”というレミの警告に、伸ばしかけた指先を引っ込めるジン。

「それを先に言えつつの。思わずさわつちまうとこだったぜ」
大袈裟によろけたジンが唇をとがらせる。

「破裂すると、酸、の液体が飛び散る」

ぞつとしないことをレミは坦々と語った。

レミが言うにはブレスというモンスターはその名の通り種々様々な”ブレス”を吐く亜種も存在しているらしい。

あとで聞いたところによると、炎を吐くのはレッドブレス、毒の霧を吐くのはポイズンブレスと言うようで、このシャボン玉のような球体はそのブレスの中でも”普通のブレス”と呼ばれるやつの特殊能力なのだそうだ。

「やだ！　すぐに網から脱出してくるわよ！　どうするの？！」
焦りを隠さずにリベルが振り返る。

俺もつられて振り返ると、そう遠くない場所に転がっているウオラーの1匹と目が合った。

やつらはまだ窮屈な網の中でもがいていた。知能が高くないのが幸いしたか、網を咬みやぶるという発想にすぐには至らず、狭い網の中で押し合いを繰り返していた。

「酸をかぶった獲物に、襲いかかってくるけど、なにもしなければ、なにも、ない」

「それならどうすればいいんだ？！」

煮え切らないレミの説明にまた皮鎧の中身がじつとりと汗ばんでくるのを感じた。

「なあ……　ありゃあ、浮かんだままなのか？」

じつと観察していたジンが呟く。

俺はハツとして、ジンに習いよくよく観察してみる。するとシャ

ボン玉は数えきれないほどの数が浮いているが、どれを見ても地面に落ちてくる気配はなかった。

ジンの問いにレミが頭を縦に振る。

「そう、ブレスといっても、あのシャボン玉は、実は蜘蛛の巣の、ようなもの。だから」

レミが言い終える前に唇の端を上げるジン。俺もすぐにレミの言葉の意味に思い至る。

「そうとなりや行くぜ！」

こんな状況にあってもレミが落ち着いている理由がようやくわかった。

ぶかぶかと浮かんでいるように見えるそのシャボン玉のような球体だが、実は張り巡らされた目に見えない糸のせいで宙に浮かんでいるかのように見せているのだ。だからそのシャボン玉が地に落ちることはない。

ジンはじつと観察していて、シャボン玉が落ちてこないことに気がついたのだ。

気がつかないうちに取り囲まれていたものだから、俺はジンが言わなければまさか宙に固定されているなどとは夢には思わなかった。要は固定されているシャボン玉の下を潜り抜ければいいだけのことだ。

”ブレス”と言いながら、吐いた糸を張り巡らせているとは、まさに蜘蛛のようだと俺は思った。

だが、その蜘蛛の巣の秘密を知るものがいなければ、はたまたジンのように気が付く者がいなければ、俺たちはとても無傷ではいられなかったはずだ。

もし気に留めずに触ってしまったとしたら……最悪の結末を想像すると身の毛もよだつ気持ちになる。

「え?! なになに?!」

まだよくわかっていないリベルに俺はかいつまんで説明する。

「あのシャボン玉みたいなのが下に落ちてくることはないんだ。目

に見えない糸が張り巡らされている蜘蛛の巣のようになってい
しい。だから這ってあの下を通り抜けられるぞ」

そうしている間に素早く向こう側へと抜けたジン、そしてレミが
振り返る。

「おらっ、とつとと来いよ！ げげっ、きやがるぜ！」

ジンの声に慌てて球体の下へと滑り込む。

リベルも急ぐ。

「い、急いで！」

その間にシャボン玉の蜘蛛の巣を抜け終えたクラッセも叫ぶ。

背後に獣の粗い息遣いが近づいてくるのがわかった。

「きゃあ、きゃあ！」

悲鳴を上げながらリベルも球体の下を潜り抜けきる。

俺もほぼ同時だ。

ブレスの出現に肝を冷やしたが、どうやら俺たちはツイていたよ
うだ。

全員がシャボン玉の向こう側に逃げきると、すぐに追いついてき
たウォーラーはその球体に気が付くこともなくつつこんだ。

パチンパチン、と音はしなかったが、ウォーラーたちが触れるな
り割れたシャボン玉からは青白い液体が飛び散った。

レミから話を聞いていても、やつらの末路は想像だにしないもの
だった。

まともに酸を浴びたウォーラーたちは声にもならないようなおぞ
ましい悲鳴を上げ、顔から手足からとみるみるうちに焼け爛れてい
った。

薄茶色の毛並みは見るも無残に失われていき、剥きだしになった
皮膚がそれを見る俺たちの目を手の平で覆わせた。

するとどこからともなく現れたのは、泡の塊のような人型のモン
スターだった。

ウォーラーたちを焼いた酸と同じく青白い泡の塊で、それはのそ
りのそりとやつらに歩み寄ると、ゆっくりと広がり4匹のウォーラー

ーを包み込んでいった。

その光景はスライムが小動物を捕食するときのようだった。

「え、えげつねえ」

ジンの顔が歪む。

一歩間違えれば俺たちもあなっていたのだ。ブレスのおかげで助かったとはいえ、生きた心地がしないのもまた事実だった。

「あのブレスというモンスターは、酸を浴びた獲物だけをああやって捕まえるんだよね？」

「そう。でも、また同じことを、やられると、厄介だよ。早く、逃げよう」

「よし、逃げるぞ2人共」

レミの言う通りだ。

俺は目の前で絶句しているリベルとクラッセに声をかける。

「あれって本来あたしたちみたいのが遭遇するようなモンスターなのかしら」

ぼつりとリベルが呟く。

酒場のマスターが言っていたことを俺も思い出す。

新米冒険者には手頃な仕事だと言っていたはずだ。もしかすると、本当にジンが言っていたように、この森では”なにか”が起こっているのか？

だが、

「あーゆーのもいるってこった。普通じゃねー気もするけどよ、現実を見ていこうや。街の外は俺らが思ってるよりもずっと危険なんだよ」

ジンがリベルの肩をぼんと叩く。

「行こう」

リベルの気持ちもわかる。

わかるが、ジンの言う通りに冒険者という稼業は俺たちが思っていたよりも過酷なだけということなのかもしれない。

つい言葉少なになってしまった俺に、4人ともが頷いた。

蝶が舞った。俺の鼻先をくすぐっていく。

地面に突っ伏したジンが死にそうな顔をしている。

川に落ちてズブ濡れになったままで、あれだけ動き回ったのだから当然かもしれない。

「ぶえつくしよい！」

そう思っているとジンがくしゃみをした。

辺りには野の花がちらほらと咲いていた。日差しは一段と増したようだ。

すぐ傍の木の枝に止まっている小鳥が、まるでなにこともなかったかのようにピーチクパーチクやっていた。

「ここまで逃げればもう追ってこないですね」

クラッセが不安気な顔で尋ねる。

「だと、いいけどな」

俺も少々疲れた。どことなく体中が軋んでいる気がする。

「ここがウォーラーやブレスがいた場所から」だいぶ離れた場所」としかわからない。

方角を確認する余裕などあるわけもなく、やっとこさ逃げてくるのが精一杯だったからだ。

なんとも恐ろしい目に遭った。

ウォーラーに関して言えば普通に隣町へ向かうときに襲ってくるときもあった。

もちろんモンスターがほとんど生息していない森だってある。そうでなければ狩猟という生業が成り立つこともない。

この辺りの街や村のことを言えば、ウォーラーが現れるとはいえ人里にはそうそう現れることも少なく、群れをなして現れたとしても大きな街道には冒険者がよく行き交っているために、今まではあまり脅威に感じたことはなかった。通りがかりの冒険者がモンスター

ーを撃退してくれることもざらだ。

だが、一旦街を離れてしまえば助けてくれる人もいない。

自分たちの身は自分たちで守るしかないのだ。

そして、プレスというモンスター。

レミがその存在を知っていたからいいものの、そうでなければあの場で全滅という事態もありえることだった。レミに感謝しなければならぬ。

そのレミだが、彼女は実に知識が豊富だった。

依頼の品である薬草のことを知っていたのも驚きだが、他にも食べられる野草から薬用に用いられる物まで詳しかった。

また、歴史やモンスターの性質にまで、幅広い知識を持っていた。これで俺たちと同じレベル1なのかと思うと頭が下がる思いだが、そんなレミが多くの知識を持ちえているのには彼女のパーティ内で位置する役割、つまり”クラス”というものにその理由がある。

ここで改めて冒険者というものについて詳しく説明しようと思う。冒険者には”クラス”というものがある。

簡単に言えば職業みたいなもので、数人の冒険者で結成される”パーティ”の中における役割分担を決めるひとつの目安みたいなものだ。

パーティとは冒険者の1グループを指して言い、要するにパーティを組んだ冒険者同士は”仲間”だということだ。

冒険者たちはそのクラスを目安にしてパーティを組むか否かを決定することも少なくない。

クラスは個人の素質や技能、そしてどういったクラスになりたいかという希望を踏まえた上で、冒険者ギルドのギルド員と相談して決めることとなる。

自警戦士団の頃にはそういった分類はなかったのだが、時の経過と共に多様化する様々なモンスターへ対応するために制定されたのだ。

そのためギルドではクラス別に、新米冒険者向けの講習会や実践

形式の訓練を催していたりもする。

期間は短期のものから長期間に渡って行われるものまであり、ほぼ無料で受けられるが一部有料のものもある。

その中で俺はファイターというクラスに当たる。

ギルドに登録された冒険者としては最もその数が多く、適正検査もたいして難易度は高くないため、比較的誰にでもなることができる。

突き詰めれば、それなりに体力があつて剣を振れるくらいの腕力があれば、たとえ女であろうとなんだろうとなることができクラスだ。主にモンスターをその腕力でもつてねじ伏せることが役割と言える。

ジンの場合はシーフだが、こちらもその数はファイターに次ぐ比重を占める。

冒険を進めていく上で、危険を感知することのできるシーフは欠かすことのできないクラスでもあるため、1パーティに1人いるのが常道とされているクラスなのだ。

とはいえ、ファイターほど簡単になれるわけではない。

冒険を円滑に進めるためのスキルを身につけられるくらいの資質はもっていないければならぬらしい。

だからシーフになるためには適正検査が一番ものを言う。それなりに資質があれば冒険を重ねることで自然に身につくようだが、素質のない者には全く向かないクラスであるとも言える。

その点ではジンには概ね素質があるようだった。

ジンは今回の依頼を受ける前には、酒場で依頼が舞い込むのを待ちながらカードマジックなどを披露しては俺たちを湧かせた。

手先の器用さという面ではなかなか良いものを持っているようで、ジンは自慢気に振舞っていた。

そしてレミのクラスはというと、これは耳慣れない単語だが、パーソンというクラスで、“博識な人”という意味らしい。

パーソンというクラスは少々特殊で、俺たちファイターやシーフ

のように経験がなくともなれるわけではない。このクラスに就くにはそれなりの知識を最初から持っていなければならぬ。

それはそうだ、博識な人、という意味のクラスなのに無知な者が就けるわけではない。

だからパーソンの冒険者に出会う確率は極めて低い。

俺たちとは違って適正検査だけではなく、とても大変な試験も受けないければパーソンにはなれないそうだ。

パーソンになるためにギルドではパーソン希望者専用の講習も行ってのことだが、実はレミはその講習もまったく受けずに合格したらしい。

一体今までどんな経験を積んできたのだろうと思ってしまう。

「ホオズリソウが、あるよ」

そのレミが雑草を指して言った。

『ホオズリソウ？』

俺たちは声を揃えて聞き返す。

「うん。肉厚で……草なのに、肉厚というのも、おかしい、けど。

昔の自警戦士団、時代には、よく酒のつまみにして、食べられていたね。燻製にして……草だから、燻製じゃない、けど。他にもいるんな、方法で調理、できるよ」

俺はそのホオズリソウとやらを眺めて「へえ」と唸った。陽還り草にも負けず劣らずの大きな葉だが、レミの言う通り分厚い。

色は緑だが、彼女が言うには火を通すと肉と見た目がまったく変わらなくなるのだそうだ。

「ほんとにうめえのかよ?!」

半信半疑でジンがその草を摘む。

「どう見てもただの葉っぱよねえ」

その様子を眺めながらリベルが言う。

俺もリベルに同感だ。これが焼いたら肉と変わらない味になるとは思えなかった。

しかし、食感といい味といい肉そのものになるとのことだ。

「見つけたら、頼ずりしたくなるほど、嬉しく、なるからホオズリソウ」

不思議そうな顔をしている俺たちにレミが付け足して言った。

「とにかく食べてみたいですね、そのホオズリソウ」

「うーん、食べてみないことには、にわかには信じがたいな」

と言うもののレミがそう言うのならそうなのだろう。

「ここならモンスターも襲ってこないんじゃない？　なんかお花とか咲いてるし平和そのものって感じがするもの。うん、きっと大丈夫よ」

花が咲いているからといってモンスターが出てこない根拠にはならない。

だが俺は実を言うと腹の虫が今にも騒ぎ出しそうだった。

だからリベルに習って楽観的に考えることにした。

「そーいや腹減ったぜ。俺ってよく考えたら今日はまだあの林檎しか食ってねーしよ」

ジンはホオズリソウを食べることに大賛成のようだ。

「なんか火を起こすもん持ってねーか？」

「あ、僕持ってますよ。火起こしセット。冒険者価格で、しかも特売だったんですよ」

クラッセが嬉しそうに言ってバッグからそれを取り出す。

「それにジンさんも水に濡れたまま服を乾かしていませんしね。

火を起こしますから枝とか枯葉とか燃えるものを用意してきてもらえますか？」

「よしきた！」

ジンは早速立ち上がると腕を回す。

俺も「よし」と返事をして立ち上がった。

それを合図にして、リベルとレミは辺りにこじんまりと生えている残りのホオズリソウの根元を、ナイフで丁寧に切りはじめる。

太陽はもうそろそろ俺たちの真上に来ようとしていた。

花の香りに誘われたか、また蝶が俺たちの近くでひらひらと飛ん

でいた。

ジンが枯葉を拾い、俺が小枝を両手に抱えてやってくると、ちょうど火が起きたばかりのようで、小さな灯りがクラッセたち3人が囲んでいる中から漏れて見えた。

火起こし用の道具といっても、すぐに火が起こせるわけではない。なにぶん携帯に適したサイズの単純な造りのものだ。それでも原始的に木と木をこすり合わせて火を着けるよりはるかにその作業は早い。

「あつ、いま火が着いたところですよ。早く枝を並べましょう」

「いいタイミングじゃねえか。よっしゃディール、急ぐぜ」

ジンは待ちきれないといった様子で俺を急かす。

リベルとレミはすでに準備を終えたようで、ホオズリソウは細い枝に串刺しになっていた。

焼くと肉のようになるといっても、今の状態ではただの草だ。ホオズリソウを知らない者が見たら変な顔をされてしまうだろう。

その状況を想像すると思わず笑えてしまう。

「なあに？ ディールつたらなにが可笑しいの？」

枝や枯葉を並べながらニヤついてしまったところをリベルに見咎められてしまった。

「い、いや。どこからどう見ても草だからさ。なんだか可笑しくて」

「そうよねえ、ジンが言ったことなら信じていないわあ」

なるほど、という顔をしてからリベルはジンを見る。

「けっ、俺のどこが信じられねえつつんだよ」

ジンは心外そうな顔でリベルを睨む。

「べつつにい」

睨まれてもリベルはどこ吹く風といったような表情だ。

「焼こう、か」

「そうですね」

「火も十分に枝に燃え移ってきたな」

ジンとリベルのやり取りに慣れっこになってしまった俺たち3人は、彼らを見殺しにしてホオズリソウが刺さっている枝の太い方を焚き火の周りに突き立てる。

するとみるみるうちにその色が変わっていく。

「うつひょー！ マジで肉みてえじゃねーか！ こいつあすげえ」

リベルとの言い合いを中断したジンが感嘆の声を上げる。

「ほんと。それになんだかい匂いもしてきたんじゃない？」

「んだな」

「すごいですね。このホオズリソウって初めて聞きましたけど、珍しい草なんですか？」

クラッセがレミに聞く。

「このところ、見かけないね。昔は、どこにでもあった、そうだけど。肉食の、動物たちも好んで食べていた、らしいからね。絶滅危惧種、かな」

レミの説明にクラッセは「けっこうすごい草なんですね」と分かったような分からなかったような顔で何度も頷いていた。

「そうそう、パンも出しましょ。少し早いけどランチね」

リベルが取り出したパンを全員に配る。

「この匂いにつられてモンスターがきたりしてな」

白い歯を見せてなにげなく言ったジンが4人から非難の視線を浴びる。

「もう！ これから食事にするってときに不吉なこと言わないでよ！ ばかジン！」

「空気、読めないん、だね」

「そうになったらそうだったで逃げるだけです。全く、野暮ですよジンさん」

「モンスターも焚き火は苦手だろう。いたずらに不安にさせるようなこと言っなよ」

これが真面目な顔で言ったのならば俺たちも真剣に考えるところだが、ジンが笑いながらあつけらかんと言ったものだから、俺たちがムツとくるのも仕方のないことだ。

「へいへい、失礼しゃーした」

そう言うジンは「もういい具合に仕上がったんじゃない？」と俺たちの集中攻撃も気にせずホオズリソウにかぶりつく。

「うんめえ」

そんなジンの様子に怒っていたことなど忘れて俺たちも串を手に取り。

「これは……肉そのものの味だな。食感も、うん」

「ほんと、うそみたい」

「だろ?! すげーよなこれ」

「うんうん、こんながあるなんてね。レミに感謝だわ」

「香辛料とかもあればなおさらなんですけどね」

「あるよ」

「まじまじ?! それを先に言えよーレミちゃんよあ」

「次、俺にも貸してくれジン」

こうして俺たちは予想外のご馳走に舌鼓を打った。

人間とは不思議なもので、どんなに苦しいことがあったとしても、腹が膨れるとなんとか頑張ろうという気になれる。

幸いなことにモンスターが匂いにつられてやってくることもなく、俺たちはホオズリソウを食べ終えてしばしの満足感を味わっていた。ジンの服もすっかり乾いたようで、彼はすこぶる上機嫌だった。

森の中は相変わらず鳥たちがさえずっている。

また蝶が舞った。黒い蝶だった。

「なんかさつきから黒いのばっかだよな」

同じく蝶を見つめていたジンが俺に声をかける。

「そうだな。なんていう蝶なんだろう。レミ、知っているか?」

「……知らない」

少し考えていたレミが首を捻る。

「レミにも知らないことがあるのねえ」

しみじみと言うリベルに、そりやそうだろうと心の中でつつこむ。いくらパーソンだといっても知らないこともあるだろう。世界は広いのだ。

「それよりこれからどうすんだよ。地図も見れないこたあねーが、俺らが今どこにいいのかがかんきやー意味がねーしな」

乾いてカピカピになった地図を指でつまんで見せる。

「でもまあ、だいたいの方角ならわかるぜ。太陽が出てるからな」
日差しを手で遮りながらジンは太陽を仰いだ。

「ねえ、陽還り草って地図に印がついていた場所にしか生えてないの？ 近くにあつたらパパツと採っておしまいにできるのにさ」

リベルは素朴な疑問を口にする。

美味しいものも食べて、依頼の品を入手、じゃあ帰ります。と、いけたらどんなに良いだろうか。

きっとリベルはそんなことを考えてしまったのではないだろうか。それはリベルだけでなく俺も同じ気分だ。

「ばっか、そんな簡単にゲットできんなら俺らに依頼なんて回ってこねーんだよ」

ジンはそんなリベルの言葉を一蹴した。

「あとはレミ頼りかな。といっても、きっともうそんなに遠い場所じゃないんだろうから、すぐに見つかるさ」

ようやく再び活気付いてきたパーティだ。暗い話題は持ち込まないように言葉を選んで俺は言った。

それにウォーラーたちと遭遇するまでにそこそこ距離は稼いだはずだ。俺が言ったこともあながち間違いないだろう。

「そろそろ出発しましょうか。まさか日が暮れるまで陽還り草を探し回ることもないでしょうけれど、早めに見つけておきたいですね」

クラッセが切り出す。

「なにがあるかわからないしな。よし、火の後始末をしてから出発しよう。山火事にでもなったら大変だ」

俺はそう言っただち上がる。

1人だるそうな表情のジンを残してリベルとレミ、クラッセも片付けを始めた。

「俺、風邪ひいちったみたい」

「なに？ 大丈夫か？」

ジンはひとつ咳払いをした。

冒険者にとって体調不良は大敵だ。

体の具合が悪いからといってモンスターは襲うのを待ってくれるわけがない。いざというときに力が出せずにやられてしまっただけ笑い話にもならない。

「どうせ仮病でしょ。ちゃきちゃき働きなさいよ」

「いででで！ この鬼女！」

心配していた俺は、リベルに耳をひっぱられて立ち上がるジンにため息をつく。

まったくこいつって男は……。

モンスターが現れたときなどでは頼りになるというのに、どうしてこういう場面では手を抜きたがるのか。

それにしてもリベルはジンのことをよくわかっているようだ。伊達にいつも喧嘩をしていないかと俺は感心した。

「よし、準備はできたな。出発しよう」

焚き火の始末を終え身支度を完了した3人に声をかける。

ジンはリュックサックを背負うと「あいよ」と仏頂面で返事をした。

「ふふ」

そのジンの様子にレミは唇の端を上げる。

「笑ってる場合じゃないぞ」

俺が腰に手を当てて眉根を寄せると、

「こういうのも、楽しい、ね。ディールたちと出会えて、よかったよ」

なおもクスクスと笑うレミ。なにごとか返事をしようとする、

「おら！ 行くんذار、とつとと出発しようぜ」

すでに先頭を歩き出していたジンが怒鳴った。

俺はレミと顔を見合わせる。なんだか笑いが込み上げてきた。

そうだ、こういうのも悪くはない。

他人からみれば取るに足らない仕事かもしれないが、俺たちにとつてはせっかくの大冒険だ。楽しまなければ損ではないか？

またウォーラーやブレス、”巨大サボテン”のようなモンスターにも遭遇するだろう。

だが、俺たちが力を合わせればどんな困難でも乗り越えられそうな気がする。

「なに？ またディールったら意味深な笑顔になったりして」

先を行くりベルが振り返って言った。

「なんでもないさ！ 行こう、レミ」

クラッセもジンの後ろから笑みを返す。

どこから取り出したか林檎を片手に、口をもぐもぐと動かしているジンも笑っていた。

「ちよつとお、その林檎どうしたのよ！ ずるいじゃない！」

「あとあと考えて手は打つもんだ」

しれつとジンが答える。

あるときウォーラーに投げつけた林檎だったが、ジンは全ては投げて取っておいたようだ。

「もう残ってないんですか？ 僕も食べたいですよ」

「ねーよ。これ、最後の1個。つか、おめー散々食ったろうが」

ジンは手を振って邪険に返す。

どべっ

その途端、クラッセが前のめりに転んだ。

「おいおい、足元には気をつけるよクラッセ」

3人に追いついたレミと俺が駆け寄る。

「問題、ないね」

泥まみれのクラッセの顔を見てレミが言った。ちょうど泥溜まりになっていたらしい。

クラッセが泣きそうな顔になった。

「ったく、これだから坊主はよ」

「人のこと言えないでしょ！ ばかジンだって川に落ちたくせに」

「ありゃー不可抗力だっつの。くだんねーこと蒸し返すな！」

「はじまった、ね」

「無視しておこう。付き合うだけ体力の無駄だ」

前言撤回。こんな調子で大丈夫なのだろうか？

だが、俺たちの冒険は始まったばかりだ。

苦しいことがこの先もあるだろうが、前だけを向いて進もう。俺たちにはそれしかできることがないのだから。

決意も新たに誓う俺の目の前をさっきの黒い蝶がひらりと舞った。

シーフであるジンの方向感覚を信じて俺たちは森の中を進んだ。

さっきまでのモンスターの猛攻が嘘のように、ぱったりと何も出てこなくなった。

ジンは太陽の位置を確認しながら、記憶にある地図に記された印の場所へと俺たちを導いた。

レミの指示を受けながらリベルとクラッセは依頼の品である陽還

リ草を探す。

俺はモンスターが現れたらすぐに対処できるようにと周囲の警戒に努めた。

地図は地形などは確認できるものの、目的地の印は川の水で滲んで消えてしまっていた。そうすると頼りはジンの記憶と方向感覚によつて検討付けられた道を進むのみだったが、レミによると「近い」のだそうだ。

日陰草という草がある。

それは陽還り草のある付近に群生しており、近くへ向かうにつれてその数が増していくとレミは言った。

だから日陰草の多くなる方へ向かえばおのずと陽還り草を発見できるというわけだ。それはまさに太陽と影の関係に似ている。

リベルは日陰草を見つけて「もうすぐねっ」とはしゃいだ。

日陰草自体はただの雑草で、表面が黄緑色のギザギザにとがった葉を裏返すと濃い緑になっていた。

「ブユツフェに戻ったら美味しいものでも食べに行きたいわねえ」
リベルが言った。

少し気が早いとは思うが気持ちはわかる。

初の依頼で大変な目に遭ったのだから、依頼を終えた暁には羽でも伸ばしたいところだ。

「そーだなー。ホオツエソウも美味かったけどよ、やっぱちゃんと調理されたもんも食いてえわな」

辺りを見渡していた顔をこちらへ向けてジンが言う。

「ホオズリソウ、だよ」

「あ、そうだったけな。へへ、似てるからよ。ホオズリソウな」

レミに指摘され言い直したジンは「ブユツフェったらやっぱस्ताだよな」と言いながら唾を飲み込んだ。

「それも捨てがたいけど、あたしはやっぱり”まほろば亭”のキノコと彩り野菜のリゾットがいいわ。すごく有名なもの」

リベルが言うと、「あれは有名ですよね」とクラッセも話に加わ

った。

俺はリベルたちの話を小耳に入れながらもぬかりなく隅々まで視線を這わせた。

ブユツフェとは俺たちが依頼を受けた酒場のある街だ。

そう大きくはないが、一通りの施設は揃っており、また食の街としても有名だ。

冒険者ギルドの支店があるのもブユツフェであり、俺たちが出会ったのもそこだ。

リベルの言う”まほろば亭”はブユツフェでは1、2を争うほどの名店であり、いわば食の街ブユツフェの顔として有名だ。

ただ、有名であるがゆえにどの料理もいい値段がするので、リベルはつねづね「行きたい行きたい」と言っていたものの行けず、今に至っているわけだ。

「報酬は少ないがこの仕事を終えて戻ったら、祝杯を上げる場所はそこにしようか」

「そうしようぜ。なかなか行ける機会なんてねーもんな」

「賛成、賛成！」

「いいですね、それでいきましょう！」

飛び跳ねて喜びリベル。ジンもクラッセも行く気満々だ。

俺はそこで1人だけ返事がないことに気付きレミを見た。

「あ」

レミが小さく漏らす。

どうやら日陰草が集まっている先を目で追っていたようで、俺たちの視線に気がつくのと離れた場所を指さす。

「お、みつけた？」

ジンがレミの指の先を覗き込む。

「多分、ね」

”多分”と言いながらも自信ありげにレミが言った。

「幸先いいですね」

クラッセが言った。

散々モンスターに追いかけて回されて幸先もなにもないと思うが、
ともかくレミが見つけたものが陽還り草であれば依頼はほぼ成功し
たようなものだ。

真っ先にジンが駆ける。それにリベルが続いた。

俺も逸る気持ちを落ち着かせて走った。

「うおおおおおお！」

「見つけたあー！」

ジンとリベルの声が森に響く。

「あつ、本当に橙なんですね」

クラッセが言うように、そこには鮮やかな橙色で葉の大きな草が
あった。

目をこらしてよく見ると、輪郭がギザギザになっており、レミの
説明と一致していた。

「確かにこれでいいんだな？ レミ」

「ビンゴ、だね」

俺が念を押すとレミは頷く。

「どれくらい必要なんでしたっけ？」

「適当でいいんじゃないか。むしろ摘めるだけ摘んじまえて。記念だ
記念」

初の依頼を成功させることができそうで、興奮気味のジンはクラ
ッセを煽る。

「じゃ、たくさん摘んじやいましょう」

そう言うクラッセ。

レミはすでに黙々と摘んでいた。

「もうそのくらいでいいんじゃないか？」

しばらくして俺は言った。

ジンに煽られたクラッセはどう見ても過剰なくらい摘もうとして
いたからだ。

これを素直というのか愚直というのか、俺には判断しかねる。

「っていうか、ジンったら手伝いなさいよね」

「さぼるの、ずるいよ」

リベルとレミが草を摘む手を止める。

俺は引き続き辺りを警戒しつつもジンを見る。

また面倒なことをクラッセたちに押し付けて、自分は休んでいるだけなのかと思っただが、ジンは真剣な表情だった。

「なんか妙じゃねえか？」

なおも文句を言おうと口を開きかけるリベルを手で制してジンが言う。

「はい？」

「なにがだ？」

クラッセと俺は同時に聞き返す。

ジンは睨みつけるような表情のままで言う。

「妙つつーか……気持ち悪いぜ。なんだか監視されてるみてえでよ。なんなんだ、あいつら。ずっと気になってみてりゃあ、だんだんと数が増えてきてるじゃねーか。早く取るもん取ったら街に戻った方がいいぜ」

俺たちは辺りを見た。

「なに?!」

同じく見渡したりベルが絶句する。

「前に、なにかが起こってるかもしれないねえって話をしたよな？ 自分で言ったことだけに目を疑っちゃうような光景だが、マジでなにかが起こってるかもしれないねえ。いや、なにかが起こりつつある気がしてなんねえ」

そして口をつぐむジン。

俺も自分の目を疑った。

さきほどから俺たちの周りをひらひらと舞っていた黒い蝶。俺たちが陽還り草を見つける前まではちらほらと見かける程度の数だったものが、気がつくと俺たちの周りを取り囲むくらいにその数を増していた。

一体どこからこんなに集まってきたのか。

いや、それ以上になぜこんなところにも得体の知れない黒く不気味な蝶が潜んでいたのか。

黒い蝶は俺たちが呆然として立ち尽くしている間にもどこからともなく次々とやってきては、不気味に羽ばたいていた。

なんて不吉な光景なんだろう。

「俺たちに……集まってきたのか……？」

ク
ア
ア
ア
ア
ア
ア
ア
ア
ア
ア
ア
ツ

つい口をついて出た俺の言葉に怪鳥の悲鳴ともつかない奇声が重なる。

リベルの体がビクンと跳ねる。

途端にそれまで穏やかな音色を奏でいたはずの鳥たちが一斉に騒ぎ出す。

鳥たちはまるで発狂でもしたかのようにバサバサと翼を振り乱していた。

一羽の鳥が枝を思い切り蹴るように飛び立った。

それにくよくよと次々と鳥たちが飛び立つ。

鳥たちは先頭の鳥の後を末広がりに形作つて飛んでいき、それを
見上げた俺たちの顔に影が落ちた。

一面を覆いつくす黒い蝶、蝶、蝶！

それはまるで悪い夢でも見ているような光景だった。

なおも遠くからは鳥たちがギャアギャアと耳障りな鳴き声で騒いでいた。

さんさんと照りつけていた日差しが空を覆いつくさんとする黒い蝶の漆黒の羽に遮られて、隙間から漏れる細い光の筋は鳥たちが飛び去り際に散らしていった真つ白な羽をキラキラと輝かせている。

黒い蝶の群れは森を昼から夜へと変貌させてしまい、その中で漏れた光によって煌く鳥の羽が風を受けて舞い踊っていた。

(テハジメニ)

無機質な声が響いた。

その声はまったくいいほど抑揚もなく俺の脳に直接語りかけるように入り込んできた。

無機質。

全く感情のないように思える声だが、それはなぜだか説明できないが、とても強い悪意をはらんでいるのがわかった。

そして俺は自分の心の中を狂気じみた闇が蝕んでいくような感覚にとらわれた。

憎い、憎い、憎い。

世の中の全てが憎い。

幸せそうに笑っている連中が憎い。自分を見下した人間が憎い。

なぜ自分がこんな扱いを受けるのだ。

そうだ殺してしまえ。全てを無に還してしまえ。

殺せ、殺せ、コロセ。

俺は自分がどうにかなりそうだった。心の奥の奥になにかが渦を巻いているようだ。

脳が揺さぶられるようで、ひどい吐き気と眩暈がする。

他のみんなはどうなのか、俺と同じようになっているのだろうか、そうは思ってもまともなものを見ることができない。

ああ、胸が苦しい、心臓をわしづかみにされたようにずきずきと痛む。

なんで俺はこんなに苦しい思いをしているのか、なんで俺はこんなところにいるのだろうか。

意識が朦朧とする。

血の臭い、辺りにすすり泣く声、咬み殺された両親、俺の両親を殺した奴らが憎い、憎い、殺してしまいたい、なぜ俺はこんなところで苦しんでいるのか。

こんなところに来たのはジンに誘われたからだ、そうだジンに誘われなければ俺はこんな苦しみを味あわずに済んだ、全てはジンのせいだ、いっそのこと殺してしまえばいいのだ、殺してしまえばい

い、全てを殺してしまえばラクニナル……。

「だめよ！ いけない！」

俺は弾かれたように顔を上げた。

急激に空気が肺へ送られて俺は大きく咳き込んだ。

目を開けて辺りを見る。

すぐ傍のクラッセが頭を抱え込んで下を向いていた顔を上げる。

大粒の涙が頬を伝っていた。

レミはその場で横たわっていた体を起こし頭をさする。

ジンはダガーを抜き払ったままの格好で硬直していた。

「だめ……逃げなくてはだめよ……。このままじゃ……」

顔面蒼白のリベルがうわ言のように繰り返す。

その姿は今にも倒れこんでしまいそうだったが、気力だけで持ちこたえているようだった。

俺は慌ててリベルのもとへ駆け寄った。

するとリベルは崩れるように俺に体を預ける。

「リベル」

静かに声をかけるが返事がない。気を失ってしまったようだ。

リベルを抱きしめた俺の体は小刻みに震えだす。

さっきまでの闇に蝕まれていくような感覚が忘れられない。

俺の心を支配した狂気がまだ残っているようで、俺は自分の手の平を見つめて握ったり開いたりしてそれが自分の意思によるものであることを確認した。

俺たちは極めて危険な状態だったに違いない。リベルの声がなければ、あのまま心の闇が命令する通りに狂気に身を任せていただろう。

リベルは俺たちの中で唯一魔力を持っている。

それが関係しているのかどうかはわからないが、そのおかげで彼女だけは心の闇に打ち克つことができたのかもしれない。

（心の闇？ さっきのは俺の本心だったのか……？）

「大丈夫……かよ、ディール」

ふいに湧き上がる疑問をジンの声が払った。

俺はすぐに「しっかりしろクラッセ！ レミ、立てるか？！ ジンも！ 物騒なものは早くしまつて逃げるぞ！」

3人に叫ぶとリベルを背負う。

「やばかつた……な」

ジンもまた俺と同じように抗いがたい殺意の衝動に囚われていたのだろうか。その表情は苦しそうに短く息を吐いていた。

そして固く握り締めた右手にダガーがあるのに気付くと、自分が闇に囚われかけていたであろうことを察して鞘にしまった。

「うわああああああ！ なんてっ、なんでなんだよお！ ちくちよう！」

俺とジンは同時に振り向く。

するとクラッセが泣き叫びながら拳を地面に叩きつける。その拳が鮮やかな血の色に滲んだ。

「どわっ！ おい、クラッセは俺が運んでいくわ！ どうやらまだ悪夢から覚めてねーらしい」

そう言つてジンは今もなお泣き叫んでいるクラッセの首に強烈な手刀をくらわせた。

「あッ……！」

途切れた叫び声と共に、大きく見開いていた目を閉じるクラッセを担ぐと、ジンはレミを見る。

レミはゆらりと立ち上がり「大丈夫」とだけ答えた。

気丈なレミに俺が胸を撫で下ろして安心していると、

（ニガシテタマルモノカ）

再び悪夢の声が脳に流れてくる。

「黙れ！ 二度も操られてたまるか！」

なおも入り込もうとする無機質な声を振り払うように俺は叫んだ。そうだ、もう二度と闇に飲み込まれてたまるか。あんな途方もない苦痛を味わうのもまっぴらごめんだが、仲間であるジンのことを殺したいなどと絶対に考えたくはない！

「逃げるぞ！」

俺たちは同時に駆け出した。

逃げるアテナなんかない。だけど逃げなければ、俺たちはどうにか
なってしまう。

ジンがクラッセを担いだまま、行く手を阻む黒い蝶を手で払いな
がら走る。

「あれは、なに……？」

ジンの横を走るレミが振り返って言った。

思わず俺も振り返る。

空を覆っていた黒い蝶の群れは、宙のある一点に集まっていた。
それはすぐに俺の倍ほどの大きさになると、魔力のない俺たちに
でも感じ取れるほどの禍々しいオーラを放ち始めた。

「気に留めるな！ 走れ、走れ！」

俺はレミに叫んで走った。

背後に迫り来る気配につい腕の力が緩みそうになりながらもリベ
ルを背負ったまま走った。

するとどうか。

あまりに唐突で思考が一旦停止した。

すぐ目の前を走っていたクラッセを担いだジン、それとレミがい
きなり姿を消したのだ。

「ジン……クラッセ！ レミ！」

頭の中はパニックだった。

一体どうすれば、たった目の前にいた人間が消えるというのだ
ろうか。俺の頭の中を恐ろしい想像がよぎる。

（いそいで。はやく）

声が聞こえた。

「だ、誰だ！」

俺は声を張り上げて叫ぶ。

（はやくしないと、おいつかれちゃう）

俺の中でなにかが弾けた。

考えていても仕方のないことはこれ以上考えない。

俺に”いそげ”と言う声が一体何者かはわからないが、少なくともここで立ち止まっているよりは従うほうがマシに思えた。

「えーい！ ままよ！」

ぐつと唇をかみ締めて走り出す。

体が浮かんた…… ような気がした。

目の前の景色が反転する。

そうして意識が薄れゆくのを感じながら俺は仲間たちの無事を祈った。

3・深淵の魔女

冒険者ギルドはいくつかの街に支部をもっている。

この街にもギルドの支部があった。

俺は担いだ荷物を床に下ろすと部屋を見渡した。

内部は簡素な造りで無駄なものはなく、受付のギルド員が坦々と業務をこなしていた。

「はい、ファイター志望ですねー」

俺がファイターになりたいと告げると、彼はいたって平坦な表情のまま書類を手渡す。

「では、ここに名前と年齢と本籍、それと今までの経歴や志望の動機を記入してお待ちくださいね」

言われた通りに書類の空白を埋めて提出し、待つことしばし。

「デイルさん、デイルさん。奥の部屋へどうぞ」

椅子から立ち上がる。

俺は若干拍子抜けしていた。

こんなにも事務的な手続きで冒険者になるものなのか。冒険者たちの集う場所というからには剣や甲冑を纏った像などが飾られているかと勝手に想像していたのだが。

「これではまるでただの事務所だな」

苦笑まじりに漏らす。

通された部屋にはギルド員が3人ほどいて、俺はいくつかの質問に答えた。

すぐに適正検査だということとさらに部屋を出ると、そこには俺の生まれ故郷の村があった。

俺はソードを構えると指示されるままに素振りをする。

「よし止め」

ぴたりとソードを振る腕を止めるとギルド員の顔を見上げる。

「肩に力が入りすぎている。闇に心を惑わされたか？ そんなこと

ではこの先、生き抜いていくことは難しいぞ」

「しかし父さん、俺は仲間たちを守れなかったのかもしれないです。とても憎くて仕方ありませんでした。きっと俺は自分が許せなかったんです。あの時、どうして俺は村にいなかったのか……」

俺はソードを持つ手をじっと見つめる。

もし俺がもっと強い力を持っていればジンやリベル、クラッセにレミ、4人の仲間を危険にさらすことにはならなかったのかもしれない。

そう考えると自分が情けなくなってしまう。

「強さとは敵を倒す力のことではない。本物の強さならおまえはすでに持っているはずだ」

肩を落とす俺に父は力強く言った。

その声はどこか懐かしく、滲んだ涙を俺は袖で拭った。

不思議だ。

なぜいつもの日常がこんなにも懐かしく、また感傷的になってしまふのだろうか。

俺は畑仕事の合間によく父に稽古をつけてもらっている。

大きな街から離れたこの村ではモンスターが出没することも少ないのだ。

そういったモンスターの襲撃に備えて村の若い者は折りを見て鍛錬を行っている。

この日もいつも通りに稽古をつけてもらっているだけなのに、なぜか今日はおかしい。

「忘れるな。大切なものを守ろうとする心こそが本当の強さだ」

そうして俺はその場を後にした。

長い通路を抜けると待合室に戻る。

「デイルさん、ファイター、レベル1です。おめでとーございませう」

俺は頭を下げてリングを受け取った。

次は早速依頼を受けるために酒場へと向かわなくてはならない。

冒険者ギルドでも依頼を受けることができるのだが、酒場には多くの冒険者が集うのでギルド経由ではない依頼も酒場のの方に頻繁に入ってくるらしい。

それになによりパーティを組むためには手始めに寄っておかなければならないのだ。

リングを受け取るやいなや、待合室を後にしようとする。

すると不意に背後からかった聞き覚えのある声に俺は振り向いた。

「やあ、デイルじゃないか。きみも冒険者に？」

「ペスタ」

そこには幼馴染の顔があった。

彼はにこやかな顔を向けて立っていた。

およそこれから冒険者になろうとするには似つかわしくない普段着で笑顔を浮かべて俺を見るペスタは、村で最も親しかった友人であり、彼の2つ年下だった俺の兄のような存在でもあった。

「ああ、ペスタこそどうしてここにいるんだ？」

普通に考えれば彼も冒険者としての登録をしに来たのだろうということがわかるものだが、俺はなぜかそんな質問をした。

「デイルを送りにきたんだよ。これからきみにはとても険しい道が待っているだろうからね。でも安心したよ。きみにはいい仲間がいるからね。デイル、きみはその仲間たちをしっかりと守っていかねければならないよ。それがファイターとしての勤めなんだろう？」

ペスタは俺の反応を待ちながら笑った。

よく笑う人だった。

俺とは違って畑仕事には向かず、読書を楽しむ人だった。

小さい頃は、いずれ大きな街に出て学者になるという彼に、俺は大きな城で騎士団に入ると冗談まじりで夢を語りあったものだ。

「わかつてるさ。今度こそはきつと守ってみせるから」

俺はそう言って一体なにが”今度こそ”なのだろうと心の奥で思

った。

そういえばなんだか奇妙な違和感がある。

「なあペスタ……」

「ずいぶん背が伸びたね。もう抜かされてしまったな。本当に早いものだよ」

俺の言葉を遮り、ペスタは俺の背中を押した。

「ジンは口調は悪いけど根はいいやつだよ、機転も利くし、きつときみの旅路を助けてくれる良き友になってくれると思うよ」

俺は「ああ、わかつているさ」と答えた。

「クラッセは少しおつちよこちよいで弱虫なところもあるけど、いつか強くなるよ。その転機は意外とすぐに訪れるかもしれないな。レミは美人だよ。顔をよく見たかい？ それにあの子は大きな秘密を持っているね。その時になったらディールが助けてあげるんだよ。リベルは……」

そう言ってペスタは言葉を区切った。

俺は何も言わずにペスタの言葉を待った。

彼の優しい表情が揺れた。

「きつとすぐにわかるね。さあその扉をくぐったらもう時間は待つてはくれないよ。もうお行き」

ペスタが言うと扉の向こう側から光が漏れる。

俺はあまりの眩しさに手で目を覆った。

背中が、ぐい、と押される。

「ペ、ペスタ?!」

振り向こうとする俺に彼は微笑む。

「ディール、きみはどうして冒険者になったんだい？」

「待ってくれ！ もっと話したいことがたくさんあるんだ！」

声を張り上げるが抗えない力に押されてしまう。

扉の先へと押し出された俺は空中にいた。

空に浮かんでいる俺の眼下には村が一望できた。

そこには豆粒のような村人がたくさんいて、何人か見知った顔が

いた。

パン屋のメグおばさんに、長老のトム爺、走り回っている子供たちも見えた。

俺がそれらを眺めていると、突如として現れた炎が膨れ上がり村を飲み込んでいった。

「
！」

声にならない声を上げる。逃げ惑っている人々が見えた。

炎は容赦なく人を焼き、木々や田畑までも喰らい尽くす。

モンスターの軍勢がそこへ押し寄せて死を撒き散らしていった。

ウォーラー、ブレス、さらには”巨大サボテン”までもがその中にいて、おおいに暴れまわっていた。

俺の反対側が赤い。

すでに俺はこれが夢なのだと気付いている。

けれども辛い。

手も足も出ない俺は早く覚めて欲しいと願った。

「デイル、あたしたちがいるわ！」

「デイルさん、早く逃げましょう！」

「デイル、大丈夫、だよ」

遙か上空から声がした。

白い手が俺の前に4つ差し伸べられていた。

俺は無我夢中でその手を掴む。

4つの手がしっかりと握り返す。

「おい！ 起きろよ！ おい、デイル！」

深い霧が晴れたような気がした。

「ったくよー。坊主もとっと起きやがれ！ ほんと呑気な連中だぜ」

俺は瞼を開ける。

そこには仏頂面のジンがいた。

「おいおいおい、ようやくお目覚めかよ」

俺が目覚めるなり口をとがらせたジンが言った。

痛む頭をさすりながらジンを見る。

「なあジン、ここはどこなんだ？」

「知るかよ！ 俺の方が聞きてえくらいだぜ。気がついたらここにいたんだかなっ」

辺りの景色は一変していた。

鳥たちが騒々しく鳴いていた森はそこになく、静けさが漂う池のほとりに俺たちはいた。

実は気がつかない間にあの雑木林を抜けていたのだろうか。

一瞬だけそう考えるも全くその記憶はない。

どうやら無我夢中だったから覚えていないわけではないようだ。

もし俺が覚えていないだけならばジンは覚えているかもしれないが、彼は「知らない」と言う。

それに辺りをいくら見渡そうが俺たちが森を抜けてすぐにこんなところに行き着けるとは思えない。

木々と俺たちとの間には灰色の重厚感ある岩がひしめき、隣にある森とこの池とは隔絶されていた。

高く積み上げられたその岩の数々を無意識に越えてこられるとは考えられない。

俺は視線を池の方へ戻す。

池は、しん、として波紋ひとつ広がっていない。

それを見ていると、ひしめきあう岩たちが単に森と池とを隔てているだけではなく、まるでその岩をして人界との境界を線引きしているかのように思える。

そのたたずまいは人が決して訪れることのないある種の秘境めいた幻想的な雰囲気をかもしだしていた。

ふと気がつくと、ちょこんと座ったレミが池を眺めていた。

「あとはリベルとこの坊主だけだ。リベルはともかくとして、おらっ、坊主はとつとと起きやがれ！」

クラッセに手厳しいジンは彼の頬をピシピシと叩く。

俺はジンの言いようにひっかかりを覚えてリベルを探す。

すると少し離れたところに仰向けで寝ているリベルがいた。額に

は濡れタオルが乗っている。

「そつとしてやれよ。なんだか熱があるみてーなんだ。多分さつきのが原因なんだろうな。今、レミが熱に効く薬草を探してるぜ」
「さつきの」とは、あの得体の知れない黒い蝶の群れ、そして俺たちの心の中へ無断で入り込んできた狂気じみた”闇”のことを指しているのだろう。

リベルのおかげで俺たちは正気を取り戻すことができたが、その代わりにリベルはひどく困憊してしまったようだ。

ジンに言われてレミをよく見ると、ただ座っているように見えていたのだが、手元を探っているようだった。

「リベルに効く薬草なんて見つけたのか？」

俺はまだ意識が朦朧としたままで尋ねると、ジンは「さてな」と気のない返事をした。

薬草があるかどうかはレミ次第か。

ジンもなんとやっていいかわからないのだろう。俺も同じように聞かれたなら返答につまってしまうに違いない。

ただ風邪を引いて熱を出してしまったのならただけマシか知れない。

だが、リベルの熱の原因は他にあるのだと思う。

その原因は容易に想像がつく。このタイミングでただの風邪であるわけがないからだ。

もしかしたら俺たちと同じように、いや俺たち以上にあの”闇”に心を蝕まれてしまったのかもしれない。

これは想像するしかないが、リベルは俺たちに正気を取り戻すため、自分の魔力を犠牲にして精魂尽き果ててしまったのではないだろうか。

もちろんあれが魔力で防ぎ得るものなのかどうかは俺にはわからないことなのだが、現実には魔力を持っているのが俺たちの中ではリベルだけで、唯一”闇”に抵抗することができたのがリベルだけであることからしてそう考えるのが妥当だと思う。

「うつ……ジン、さん？」

クラッセが呻き声と友に瞼を開く。

「しょーもねー坊主だ。顔でも洗って目え覚ましてこい」

「うわっ、うわわわ」

起きるなりジンに首根っこを掴まれポイツと投げられたクラッセは、ふらつく足取りでレミのいる池のほとりまで歩いていった。

「ジン、おまえ本当にクラッセには手厳しいな」

一連のやりとりに俺は呆れ口調で言った。

「はんっ、ガキにやああれくらいが調度いーんだよ。甘やかすと口くなことになりやしねえ」

ジンはクラッセの背中を眺めながら言った。

「弟でもいるのか？」

彼の様子が出来の悪い弟でも見ている時のように思えて俺は尋ねた。

「なんだよ急に」

「いないのか？」

「いねーよ」

うるさい蠅でも追い払うかのように手を振ったジンは、ふいにその手を止めて「似たようなもんはいた」とだけ言った。

「へえ、その人は元気でやっているのか？」

俺はつい咄嗟に聞いてしまった。

すぐにこれが失言だと俺は気付いたが、

「死んだ」

ジンは短く答えた。

浅はかだった。

ジンの表情や彼の言った言葉の意味をよく考えていれば気が付くことだった。

誰にも話したくないことはあるだろうに、俺は不用意にジンの心に土足で踏み込んでしまったのだ。

「すまん、聞いてはいけないことだった。許してくれ」

俺はとても申し訳ない気持ちになつて深く頭を下げた。

これくらいで許してくれるとは思つてはいない。

俺だつて思い出したいくないほど辛いことがあるのだ。

すでに記憶が薄れつつあるが、さっきまで観ていた夢の中での出来事……とても懐かしく、そして悲しい物語だつたような気がする。

「別に気にすることだねーよ。昔のことだしな。それより王子様が起きたと思つたらお姫様が一向に起きる気配がねーぜ。おい、レミちゃんよお！ まだ薬草は見つかんねーのかぁー！ ……まったくどうなつてんだかな？」

ジンは遠くのレミに手を振つて叫ぶと小さな笑顔を作つた。

そんなジンに俺は頭が下がる思いだつた。

きつと辛いことを思い出してしまつただろうに、俺の失言を咎めることもなく、逆に俺を元氣付けるように笑いかけるなんて。

年上の俺よりもずっと大変な思いをしてきたのかもしれないだろうに。

俺がジンの横顔を見つめているとクラッセが走つてきた。

「どうした？ クラッセ」

息をつくクラッセに聞く。

「なにか、水を入れる容れ物なんてないですか？」

「あん？ なにに使うんだ、んなもん。あつ、薬を作るのに使うのか？」

「そうです、そうです。レミさんに言われて。ありますか？」

なるほど、という表情のジンにクラッセが頷く。

「よし、それなら俺の水筒を使え。取っ手の部分にコップがついているからな」

そう言つて俺は水筒を取り出してクラッセに渡す。

「ありがとうございます！」

言うなりレミの元へ駆けていく。俺は一安心した。

「薬草が見つかったみたいだな」

だがジンは反対に神妙な顔つきになる。

「どうだかな。まあ普通の風邪みたいなもんだといいけどよ」
そう言われると俺も黙るしかない。

結局のところレミ次第なのだ。

しばらくすると今度はレミがクラッセと一緒に足早にやってくる。
「一応、熱に効く薬草は、あったよ。ただ、これが効くかという
ね……」

レミは水筒のコップに入った液体を見せる。

彼女は自信なさげだが、ドロドロしている緑色に濁った液体がな
んとも苦そうで、良薬口に苦し、というくらいだから期待は持てそ
うだ。

「とにかく飲ませてみよう」

そう言って俺はリベルにレミの作った薬を飲ませた。

だが俺の期待とは裏腹にリベルの熱は依然として引くこともなく、
なおも苦しそうに顔を紅潮させていた。

「どうやらただの風邪じゃなさそうだぜ」

ジンが苦虫を噛み潰したような顔で言う。

「まいったな、レミの薬が効かないんじゃないぞ」

俺はほとほと困り果てて呟く。

「リベルさん、どうなってしまうんですか?!」

「知るかよ！ てめえで考えやがれ！」

ジンは不機嫌そうに吐き捨てた。

いまにもクラッセを殴りつけそうな勢いだ。

「ごめん、よ」

すまなそうにレミが言う。

「レミが謝ることじゃないさ。気にするな」

「うん」

「バアバに見せてみようか？」

「ああ、見せられるもんなら誰にでも診てもらいたいもんだぜ！」

ジンはなかばヤケになって叫んだ。

「えっ？ お医者さんでもいるんですか？」

「こんなところに医者がいるのか？」

クラッセの言葉を受けて俺も聞く。

もしいるなら是非ともリベルを診てもらいたい。

「ちよつと待て！」

「ん？」

「はい？」

ジンは髪を振り乱して辺りを見回す。

「どうかしたのか？」

この取り乱し様、一体どうしたのか。

「僕、なんかおかしい事でも言いました？」

クラッセが不思議な顔をする。

「それより医者ってどこにいるんだクラッセ」

「え？　僕はいるなんて言ってますよ。レミさんじゃないんですか？」

するとレミは「ううん」とかぶりを振った。

「お、おい！　じゃあ今の誰が言ったんだ？！」

ジンが慌てて叫ぶ。

「ねえ、バアバって、誰？」

レミがポツリと呟く。

「……えっ？！」

俺たちは顔を見合わせた。

ここには俺たち5人しかないはずだ。

もよやリベルがそんなことを言える状態でないであろうことは確認せずとも明らかだったし、レミもポカンとしている。

俺たちが聞いた……ような気がする声は女の声だった。

リベルかレミでないのだとすると一体誰なのか。

「おい、誰かいんのかよ！　隠れてねーで出てきやがれ！」

ジンがわめき散らす。

クラッセは落ち着かない様子で視線を転々とさせている。

「もっつ、こんな近くで大声出さないでよ！　別に隠れているわけ

じゃないんだからっ」

その声は意外と近い。

レミが俺の袖をギュツと握った。

「どこにいる？ なぜ姿が見えないんだ？」

俺は努めて冷静に問いかける。

「そーだそーだ！ とつとと出てこねーとえらい目に合わすつぞ！」
あくまでジンは喧嘩腰だ。

「やだっ、ジンジンったら野蛮だし。でもそういえばこのまんまじや魔力を持たない人間には見えないんだった。あははっ」

「じ、ジンジン？！」

ジンが目を丸くする。

なんだそれは？！

いや、呼び方なんてどうでもいい。それよりもなぜジンの名前を知っているんだ？！

くすくす……くすくすくす……

忍び笑いが聞こえた。

俺は、はっ、とした。

この声はいつぞや俺が風の音だと思っていた声ではなかったか。
あの時は気に留めることもなかったが、もしかこの声の主があの時の声なのか。

「てめえっ、いい加減に」

そうジンが言いかけたときだ。

パツと姿を現した”それ”はそのジンの頭の上にいた。

「女の子……？ 小さな……」

俺は思わず漏らす。

急に現れたその女の子はまるで人形のようにだった。

俺の手の平くらいの大きさしかない。

くりっとしたつぶらな瞳で俺たちを見ているその女の子は、きらきらと光る水色の長い後ろ髪をポニーテールにしてジンの頭の上で笑っていた。

髪の色と同じに水色の布地に銀ピカの刺繍が施されている半そでシャツから生えている両腕はさらに細い。軽くつまんだだけで折れてしまいそうなほどだ。

その小さな女の子がぶかぶかの橙色のズボンであぐらをかいて、ジンの頭の上から俺たちを見下ろしていた。

気がつくと俺はあんぐりと口を開けていた。

それを見てまた小さな女の子が笑う。

レミが息を飲んだ。

これは、まるで、おとぎ話の世界だ。俺は目の前にいる存在がにわかには信じられない。

人形に見えるその女の子は、しかし人形とは異なり生きて動いていた。

誰かがそれを操っているようには見えない。

これは夢の続きなのかと一瞬考えたりもしたが、クラッセが自分の頬をつねって「いてっ」と言っているので現実だと考えてまず間違いなさそうだ。

ジンは俺たちの表情を見比べて「おいっ、どうしたんだよ！ なあ！」と叫んでおり、自分の頭の上にいる不可思議な生き物には全く気付いていない。

「つかぬ事をお聞きますが……」

クラッセがおずおずと口を開いた。

「なにに？ なんでも聞いて聞いて！」

女の子はジンの頭の上でえらく上機嫌だった。

「あの、ひょっとして、ですね。もしかすると……妖精さん、ですか？」

俺とレミはジンの頭の上を凝視する。

ジンはいまだに「なんだなんだ？」と言っている。

すると女の子は小さな胸を大きく反らして、

「うんうん、ご名答！ あたしリンリンって言うの！ 可愛い名前でしょ？ よろしくね！」

ガツンと頭を殴られたような衝撃だった。

妖精。

そんなものが本当にいるとは。

ましてや俺たちのようななりたてもなりたて、新米冒険者が遭遇してしまうとは。

クラッセじゃないが俺も自分の頬をつねりたい衝動にかられる。

すると、俺たちの集中する視線の先が自分の頭の上だとジンもようやく気付いたらしい。

目線を上にしてそろりと両手を広げたかと思うと、一気に自分の頭の上を手の平でパチンとやった。

「あ……」

「あ！」

「あぁっ！」

レミ、俺、クラッセの3人は揃って声を上げる。

こ、こんなことがあっていいのか？！

ジンの行動はあまりに突然で予想もしていなくて、俺は絶句してしまった。

呆然とする俺たちの前でジンは、してやったりな顔をしている。ばかな！

妖精だぞ妖精、ジンはそれがなんなのかわかっていないのか？！妖精といえば世界各地の民話や伝承に頻繁に登場し、今も歴史に残る勇者たちの伝記を綴った大冒険の代名詞といえばドラゴンが魔法使いか妖精と相場は決まっている。

自警戦士団以前でいうと、かの有名なデュランドー・シギルもまたお供に妖精を連れていたという話だ。

彼が豪華な全身鎧や大剣も持たず、突如として街に現れた強大で邪悪なドラゴンと互角に渡り合ったというのは、冒険者であらずとも皆が知っている話であるが、それを陰で支えていたと言われているのが供に旅をしていた妖精だというくらいだ。

妖精たちの持つ不思議な力がデュランドー・シギルや他の話にも登場する勇者たちを支えていたという。

それが本当のことなのかどうかは誰にも確かめることはできないし、俺だって話半分に聞いていたが、俺たちの目の前に現れたリンと名乗った妖精を見ればその存在を信じざるを得ない。

それが、その妖精をこともあるうにバカシーフのジンが叩き潰してしまったのだ！

それも頭の上のうるさい蠅でも片付けるかのように！

「な、な、な……なんてことしているんですかジンさん！」

クラッセがジンに詰め寄る。

「よよよ妖精ですよ？！ 僕たちが一生かけても出会えないような伝説の生き物ですよ？！ どうしてそんなすごい生き物をあなた

つて人は x 「！」

ものすごい形相でジンに詰め寄ったクラッセの言葉はもはや言葉になっていない。その上、半泣きである。

「この……人で、なし！」

いつもは物静かなレミでさえジンの胸をポカポカ叩いている。

「だつてよお」

なおもヘラヘラと笑っているジンに俺もさすがに力チンときた。

この男は、この期に及んでまだ笑って済まそうと考えているのか！

「おつまっえー！ 自分がなにをしたのかわかっているのか？！

滅多に出会えない妖精だからってことだけじゃない、おまえはひとつの命を殺したんだぞ！」

俺はジンの胸倉を掴む。

いきなり掴まれたジンは「うげっ」と声を詰まらせるが、そんなこと構ってられるか！

「うぐぐっ、ちよっ待っ……まずは話をしようげっ、ディ……ディール！ あ、あれっ！」

ジタバタともがいて腕を動かすジンには取り合わずに右拳を後ろに引く。

「黙れ！ 見苦しいぞ！」

俺は拳に力を込めた。思いっきりぶん殴ってやるつもりだ。

だが、

「うおい！ リンリンつつたかおめー！ んなとこに浮いてねーで早くこいつをなだめすかしてくれよ！ わわっ、ディール！ 悪かったって、後ろを見ろって！」

反射的にジンが話しかけた方を見る。

そこにはジンに潰されたかと思われた妖精の女の子が羽もないのにふわりと浮かんでいた。

「よ、よかったあ」

クラッセがへなへなと座り込む。

「いきなり手で潰そうとするなんて、もっとしぼられていればよか

ったのに」

さつきとは打って変わってご機嫌ナメな妖精の女の子リンリンは言った。

「悪かったつの。でもほら、無事そうでなによりじゃねーか」

まったく悪びれた様子もなく言うジンに、

「こ、の！」

「いでえ！」

レミがジンの脛を蹴飛ばす。

ジンが悲鳴を上げた。

「きやはっ、いい気味！」

リンリンが手を叩いて喜ぶ。

「潰した手ごたえがなかったから大丈夫だって知ってたんだよっ」

ぴょんぴょんと脛を抱えて跳ね回るジンに俺は怒る気も失せる。

「はあ。身から出た錆だぞジン。それにしてもリンリンと言ったねきみは本当に”あの”妖精なのか？ 信じるもなにも目の前にきみがいるからそうなんだろうが。めまぐるしく色んなことがありすぎて……なにがなんだか」

森に入るなりジンのいらぬイタズラのせいで”巨大サボテン”に追いかけられ、次はウォーラー、ブレスときて、極めつけは何者かわからない無機質な声に心を侵される恐怖。

気を失って目が覚めたら知らない場所にいて妖精に出会うという。

ハラハラドキドキの連続で俺は相当まいっているようだ。

「ほんとにほんと。ほらっ」

そう言ってリンリンは俺たちの周りをクルッと一周する。

きらきらとした粉の光がリンリンを追いかける。

「納得した？」

ひとしきり回ってからレミの頭の上に腰を落ち着けたリンリンが聞く。

「あ、ああ」

やはり妖精なのか！

なんて奇跡なんだ、こんなところで本物の妖精に出会えるとは！
「こんなところに俺らが移動させられたのもおめーの仕業かよチビスケ」

俺が妖精との出会いに感動していると、脛の痛みから立ち直ったジンが懲りもせずに憎まれ口を叩く。

少しは懲りてくれ。

「チビスケじゃなくてリンリン！ そうそう、あたしたらよく迷子になるからバアバが戻ってこれるように空間移動のアイテムをくれたの。でもあたしがいてよかったよねえ、あのまんまじゃディールたち危なかったし」

リンリンがしみじみと言う。確かに危なかった。

もしかしなくともリンリンが助けてくれなければ俺たちはあの場でどうにかなっていただろう。

「その、”バアバ” って誰なんですか？」

ようやく落ち着いたクラッセが尋ねる。

そうだ、それは俺も聞きたかった。

リンリンはその人がリベルを診てくれると言ったが、一体どんな人なのだろう。

空間移動ができるアイテム？ そんなとんでもない物を持っているなんて。

「つーかチビスケ、おめー一体いつから俺らのそばにいたんだよ」

「そんなことより”バアバ” って人のことを先に聞くべきだろ」

話に割り込むジンに言う。

今はその人がリベルを救ってくれるのかどうかをはっきり確認するほうが先決だろう。

俺はそう思ったのだがジンはそんな俺を制する。

「いんや、その空間移動とやらが早くできてりや俺らは被害に遭わなくてすんだろ。それにおめー、さっきの黒い蝶の群れのことかもなんか知ってんじゃねーのかチビスケ」

疑いの眼差しでリンリンを見るジン。

さきほどまでのふざけた様子はすでない。

「なにさ、そんなのあたしだって知らないし。ジンジンったらあたしがやったって思ってるわけ？ 空間移動だって何回も使えるわけじゃないし、あんなチヨウチヨだって見たのは初めてなんだからあたしだってびっくりしたもん！」

あらぬ疑いをかけられて心外そうな顔でリンリンが反論する。

「それとチビスケじゃないってば、ばかジンジン！」

「けっ、そうかよ。チビスケ」

腑に落ちないようだが一応は納得したように吐き捨てる。

「デイルたちが森に入ってきたときから木陰に隠れてみていたんだあ。なんか面白そうな人たちがいるなあゝって。でも初対面でもジンジンって口悪いんだね、リベルがかわいそう。ジンジンにいいめられてばっかだし」

リンリンは同情するようにリベルを見下ろす。

するとそのリンリンが腰をかけている頭の持ち主、それまで黙って話を聞いていたレミが口を開く。

「ねえ、リンリン。リベルが、苦しそう」

うなされているリベルを揃って見つめる。額の上の濡れていたはずのタオルは乾いている。

「そうだ、そのバアバって人がどんな人なのか知らないが早くリベルを診せてやってくれないか？ どこに行けばその人に会えるんだ？」

「タオル濡らしてきます」

クラッセが池に向かう。

「医者かなにかなのか？」

俺が続けて聞くと、

「バアバ？ ううん、お医者さんじゃなくてすごく偉い魔法使いなの。いろんなことを知ってるし、怒ると怖いけどとても優しいんだ！。だけどね、ちょっとこの頃は気になることがあるんだって言うてあたしに森の様子を見てくるように言ったの。ほんととは自分で見たいんだけど、ヨウツウがひどいんだって。」

そしたらデイルたちを見つけてさ、なんか怖いのに追いかけてるじゃない？ あたしもずっとこの森にいるけど、あんなの見たことないしさ、ほんとびっくりしちゃった」

リンリンはなおも「それでさ、それでさ」と関をきったように話し始めた。

妖精だといってもやはり女の子だということなのか、よくしゃべる。

俺は適度に相槌を打ちながらリンリンの話に合わせる。これでリベルの目が覚めたならいいコンビになるかもしれない。

「あー、うつせー！ 結局そのバアバはどこにいったよ！」

堪えきれずにジンがリンリンの話に割って入る。

いつの間にかクラッセが戻ってきていてリベルの額に濡れたタオル

をセットしなおしていた。

「そうですね、いつまでもこんな状態のリベルさんを放っておけません。そろそろ案内してくれませんか？」

「いけない、あたしっいたらすぐ長話をはじめちゃって。てへっ」
「うっかり、といった感じでリンリンは舌をペロツと出す。

「ほら、あそこに小屋があるでしょ？ あそこからバアバのところに行けるの」

池を挟んで反対側には木でできた小屋があつた。見るからに相当年季が入っており、今にも崩れ落ちそうなくらいだ。

池もそんなに大きくないので、ぐるっと回りこんでいけそうだが、人が住んでいるような気配は遠目で見ている限りでは感じられない。

「なかなか、その……趣のある家ですね」

「うすうす予想はしてたけどよ、あのぼれえ小屋かよ」

不安そうなクラッセとうんざり顔のジンが言う。

すでに小屋があることに気付いていたらしいジンは「やれやれ」と肩をすくめていた。

「とにかく、行こう」

レミが促す。

「そうだな、ここで話し込んでいてもリベルの具合が良くなるわけじゃない。まずは行動を起こしてみよう。考えるのはそれから」

そう言う俺はリベルをそっと背負う。体はかなり熱を持っているようで背負った背中が熱い。

「ところで、ひとつ気になることがあるんですが」

歩きながらクラッセがおずおずと言う。

「ん、なに？」

リンリンは軽い返事でクラッセを見る。

「あそこから行ける、って言いましたよね？ それはどういう」

ジンと俺も「ん？」と言いながらクラッセの話を聞いていた。

だがクラッセが言い終える前に、突然俺たちの前へ現れたものによって彼の言葉は遮られた。

高く積み上げられた岩のひとつが振動したかと思うと、生命を吹き込まれたかのように瞬く間にそれは四肢を伸ばし、きちんと頭までも形成し人の形になったのだ。

その傍らには黒い蝶がひらりと舞う。

「うわぁ！　なんで岩が動きだすんですか！」

「あの手この手を使ってきやがって。つか、なんでそんなに俺らをつけ狙うんだよ！」

「やー！　早くバアバのところへいこうよー」

岩人形は俺たちの行く手を阻むように立ちはだかる。

「さっきのやつか？！　くそっ、今はこんなのと戦ってる場合じゃないというのに」

反射的にソードを鞘から引き抜こうとするがリベルを背負っていたことに気付く。

「ジン、リベルを頼む」

「お、おう」

リベルをジンに預けると鞘からソードを抜き放つ。

「俺がやつを引き付ける。その間にリベルを連れていくんだ」

言うなり俺は岩人形に突撃する。

「うおおおおお！」

岩人形に向かっていくが、狙いは黒い蝶だ。

見た目がごつく、強そうに見える岩人形だが、黒い蝶こそがそれを操っているのではないか。ただの憶測に過ぎないがそう思えた。

岩人形の手前で方向を急転換させて黒い蝶にソードを振る。

ぱすっ、と案外簡単に黒い蝶は2つに裂けると、揺らめいてからその場で消滅する。

（よしっ）

黒い蝶を片付けると、次は岩人形にソードを向ける。

ジンたちが横を通りすぎるのがちらりと見えた。

ひとつ残念だったのは黒い蝶を倒しても岩人形の動きが止まらなかったことだ。黒い蝶が操っているわけではないのか。

さてどうしたものか。岩人形を睨みつつ思案する。

岩でできているということはソードでの攻撃は当然効かないだろう。

だから今一番有効なのは、こいつを引きつけられるだけ引きつけてから逃げるのが良さそうだ。見た目から判断すると動きは鈍そうだ。

そう思ったのだが甘かった。

岩人形は思いがけない速さで殴りかかってくる。

それを避ける余裕はなく、俺は咄嗟にソードで岩の拳を受けた。ソードが悲鳴を上げる。

俺は岩人形の殴る力の強さに吹っ飛ばされた。

「ぐっ！」

俺が後ろに倒れこむと、

「デール！」

振り返ったリンリンが叫んだ。

岩人形が俺に迫る。

（やばい！）

俺を吹っ飛ばすほどの力だ。まともに喰らってしまったてはただでは済まない。

岩人形が腕を振り上げる。俺は固く目をつむった。

パアアアアアアアア

瞼ごしの光に俺は目を見開いた。

背後からの眩い光を感じ振り返ると池が光り輝いていた。

岩人形の動きが止まる。

「いそいでっ、デール！」

遠くからリンリンが急かす。

俺は立ち上がって手招きするリンリンの方へ走った。

動きを止めた岩人形を尻目に小屋へと辿りつくと、池の周りで1

本の光の筋が立ち昇る。その光は弧を描いて走り、大きな円になると一層輝きを強めた。

「きつとバアバよ」

リンリンが言った。

「偉い魔法使いねえ……。まんざら嘘でもなさそうだがよ、おっと！ さっきのやつが崩れていくぜ！」

ジンの声に俺も岩人形を見る。

ボロボロと崩れていった岩人形はついに人の形を留めることができずにただの岩の塊へと変わっていった。

「着いたのはいいけどよ、こんの中のどこにその魔法使いのババアがなんだよ」

小屋の中に入るなりジンがリンリンを睨んだ。

外から見ても人の気配がないとわかるように、小屋の中には誰もいなかった。

人が生活していればそれなりに生活するのに必要なものがあるはずだが、どう見てもただの廃墟だ。

「冗談はよしてくださいよ、こんなの困ります！」

クラッセも抗議の声を上げる。

「ジンジンも坊主くんも想像力が貧困だなあ。ちょっと見ててって再びレミの頭の上を陣取ったリンリンが言う。」

どうやら彼女の上が気に入ったようだ。レミは何も言わない。

リン

どこから取り出したのかリンリンは鈴をひとつ鳴らした。

「鈴を持ってつからリンリンってかチビスケ。どっちが貧困なん……」

「うおお！」

軽口を開きかけたジンがよろめく。

床を見ると部屋いっぱい円陣が輝いていた。ちょうど池の周りに描かれていたのと同じようなやつだ。

「魔法陣？」

レミが呟く。その途端、景色が変わった。

俺はリベルを背負い直す。

身軽になったジンは辺りを調べていた。

足元の魔法陣は同じだが廃墟じみた小屋ではなく、儀式かなにかを行うために用意されたかのように円状の小広い空間が目の前に広がった。

その空間の中で俺たちは中心の一段盛り上がった場所におり、そこからまっすぐ前にひとつだけ扉が見下ろせた。

「なんだここ？ さっきの小屋の地下にでも移動したって感じがよ」
ジンが言った。

その声が反響して俺たちの耳に届く。

「まあね、そんな感じみたい。あたしもよく知らないんだけどねえ、あはは」

リンリンが無邪気に笑う。

クラッセも「すごいですね」と呆気に取られていた。

「ここは、何かの、儀式でもするところ、なのかな？」

興味津々にレミが尋ねる。

パーソンのレミとしては知識欲を刺激されるところなのだろうか。俺としては一刻も早くリベルを診てもらいたいところだ。

「うーん。よくわかんない。あたしもそんなに長くここにいてわけじゃないしね。でもこの全ての魔力を司るチュウスウブだってバアバが言ってたかな？」

首を捻りながらリンリンが答える。

「中枢部ねえ。ま、んなことどーだっていいっつ。それよりとっ

とと案内しろよチビスケ」

リンリンが二の口を開く前にジンが割り込む。これ以上長話をされてたまるかといった表情だ。

「まーいつか。じゃあ案内するからついてきて。ゆつとくけど、はぐれたら絶対迷うから離れないでよ？ すつごく広いんだからココ」人差し指を立てて真剣な顔のリンリンにジンが「わーたつつの」と急かすと、彼女は小さな頬を膨らみしながらも扉の前へと進んだ。すると扉は、ぎい、とひとりでにゅつくりと開く。

「わっ」

驚いたクラッセは尻餅をついた。

それを見たジンは不敵な笑みを浮かべる。

「こんくれーでびびってんじゃねーよ。これから会うのはかくも恐ろしい大魔法使いのババアだぜ？ 年がら年中、不気味な薬を作ってるようなババアだかな。

おい、どんな恐ろしい目に遭わされるかわかったもんじゃねえ。もしかすつと、おめーなんかはヒキガエルに姿を変えられちまうかもな？ へへ」

ジンは指で自分の目尻を吊り上げてクラッセを脅かしてみせる。さも恐ろしげに声をかすれさせて唇の端を上げるジンにクラッセの顔は引きつる。

ぱかんっ

「んでっ！ あにすんだよデール」

ソードの収められている鞘をベルトに装着し直す。

「意味もなくクラッセを脅かしてくれるなよジン。あることないこと語ったりして」

「俺はだなあ、緊張した空気を和ませようとだなあ」

頭を押さえたままジンが言い訳するが、

「全然、和まない」

「てゆーか笑えないし。ババアのことを悪く言わないでくれる？ほんとにヒキガエルにしてもらうからっ、ジンジンのこと！」

女の子2人からの顰蹙ひそみを買い「冗談の通じねえやつら」とぼやいていた。

扉をくぐると真っ暗な通路がどこまでも伸びていた。と思っただが、暗闇の中から2つ、3つと灯りが現れるとゆらゆら揺れながらこちらへ近づいてくる。

それは近づくにつれ揺れているというよりも小さく飛び跳ねているように見える。

やがて真っ暗だった通路の床が照らされて見えると、灯りが闇のカーテンをめくるようにその正体を俺たちの前に現した。

小さなロウソクだった。

ただ、それが普通でないのは手足が生えていることだ。

ぴょんぴょんと小さくジャンプする彼ら（？）は俺たちの目の前までくると、ぴたっと止まって整列し、ひとつお辞儀をした。

「出迎え、ご苦労さま！」

レミの頭から立ち上がったリンリンが言うと、ロウソクが1つだけ遅れて走ってくる。

手にはとても小さなクシを持っており、頭の炎を髪でもとかすような仕草をしながら俺たちの前に着いたそのロウソクは、よほど慌てていたのか何もない足元に躓く。

転びそうになり手をバタバタさせてバランスを取ると、なんとか立ち直ることができるが、頭の炎が今にも消えそうだ。

これは危ないばかり、先にきていた他の3つのロウソクから炎を灯してもらうと、ようやくそのロウソクは胸を撫で下ろすような仕草をした。

「なんだこいつら、生意気じゃねーか？」

ジンが同意を求めるように俺を見る。

おまえがそれを言うか？

「おら、いつまでもかしこまってねーで、さっさと行きやがれ」

踏み漬さんとはかりに足を上げるジンに、ロウソクたちは蜘蛛の子を散らすかのように闇雲に逃げ回る。

「ちよつとおー、いじめないでよねっ、ばかジンジン！」

逃げるロウソクを追いかけるジンに、リンリンは両手を振り上げて追いつがる。

そうなると灯りが遠ざかっていつてしまうので、俺たちも仕方なく小走りで追いかけた。

ジンに追いかけられているロウソクたちはジグザグの道をちょこまかと走り抜ける。灯りに照らされていくつもの枝道が生えているのがわかったが、必死で追いつがる俺たちはそれを気に留める余裕はない。

しばらく走っていると道の先で灯りがぴたっと止まった。

「ぐわ！」

なにかにぶつかったジンが声を上げる。

ロウソクたちは間一髪ジンに捕まらずに左右に身をかわしていた。その灯りが微かにジンがぶつかった”なにか”を照らした。

そこにはまた扉があった。

真正面から思い切り扉にぶつかったジンが前のめりに倒れる。

勢いよく扉が開かれると、眩い光が俺たちの視力を数秒ばかり奪った。

すぐに目が慣れると、光の向こうには煌々と炎が燈る暖炉が見えた。

「なんだい、騒がしいねえ……。あんたたち、よく来たね。まあ入っておいで」

しわがれた声が聞こえた。

ロウソクたちはジンが立ち上がる前に逃げようばかりに、ぴゅー、と走ってその声の元へと急ぐ。

暖炉からは柔らかい炎が部屋いっぱいに広がっている。

その前には背を向けたまま赤茶色の椅子に深々と座る人物がいた。

振り返ったその人物は老婆だった。

人の良さそうなしわくちやの顔で黒くつぶらな瞳が俺たちを見つめている。

紺色のローブの袖からは顔と同じようにしわがいくつも刻まれた細い腕が見えた。

橙色の灯りに照らされた部屋は俺が想像していた魔法使いがいるような場所とは違っていた。

魔法使いといえばグツグツと煮立った釜をかき混ぜている傍らには、魔法の本やらがたくさん積み上げられていて、棚には怪しげな薬が並べられているものだと思っていたのだが、俺たちの目の前にはやけに整頓されてチリひとつ落ちておらず、老婆の座っている椅子の隣にあるテーブルには紅茶が入っているのだろうか、カップが6つ置かれていて、いい香りが部屋中に広がっている。

「ただいまバアバ！」

レミの頭の上からふわりと飛んだリンリンが老婆に元気よく手を上げる。

「ってーなあ！　おい、ばあさん！　なんなんだよそのロウソクはよ！」

顔を押さえながらジンが立ち上がる。

「落ち着けジン。それより、はじめまして。俺はディールといいます。リンリンに案内してもらいお邪魔させていただきました。こいつはジン、あとクラッセとレミです。あと俺が背負っているこの子はリベルというんですが」

一歩前に出て会釈する。

ジンは何か言いたそうだが口をつぐむ。

「そうそう、リベルが大変なの！　バアバ、診てあげて？」

レミの頭の上からふわりと浮かんだリンリンが俺の前にきて言った。

「おい、とりあえず中に入ろうぜ。ばあさん、座らせてもらうぜ」
言うのが早いのか、老婆の返事を待たずにジンは近くにあった椅子に

座る。

「ジンさん……少しは遠慮したほうが」

クラッセが困ったように言うが、ジンは物ともせず足を組むなり俺たちを促した。

「その坊やの言う通りにねえ、まずは全員中に入ったら話を聞こうかね」

ジンは一瞬頷きかけるが、自分のことを言ったのだとわかると「坊やって俺のことかよ!」と不満そうに口をとがらせる。

まあ、目の前の老婆からすれば俺たちなど子供同然だろう。

俺は促されるままに部屋の中へ入る。すると老婆は指をパチンと鳴らした。

するとどうだ、部屋の中には老婆とジンが座っている他に椅子はなかったのだが、いきなり何も無いところから椅子が3つ現れたではないか。

さらに長椅子までも現れると、老婆は「そのお嬢ちゃんを寝かしておやり」と言った。

「あ、ありがとうございます」

俺は恐縮しながらリベルをそこに寝かせる。

「便利、なものだね。魔法、って」

レミがポツリと漏らす。それは俺も大いに頷くところだ。

こんなに便利なことができるなんて、リベルもいずれこんな魔法が使えるようになるのだろうか。

「魔法なんてものじゃないよ。これはあたしが魔法を使ったわけじゃないからねえ。なんとも大それた遺産さ」

気のない様子で老婆が言った。

「遺産、ですか」

クラッセが、よくわからない、といった表情になる。

俺にしても魔法というもの自体すらどういうものなのかわからないのだから、なんとも言いようがない。

呪文を唱えると炎や竜巻を生み出すことができるのだと聞いたことがあるが、なにぶん俺は誰かが魔法を使っているところを見たことがない。

そんな俺とクラッセにとっては、今の魔法ではなく遺産と言われても、目の前に椅子が突然現れるなんてことは魔法としか思えないのだ。

「遺産でもなんでもいいーからよ、ばあさん、とつととりベルを診てやってくんねーか？ 今にもおっちゃんじまいそーでまいってんだ俺ら。ばあさんならなんとかできんだろ？ このチビスケがそう言うてっからきたんだよ」

リンリンを見てジンが言った。

すると老婆はジンを見て口の端を上げる。

「口の聞き方を知らない坊やだねえ。ヒキガエルになりたいっていうのはあんただね？」

「えっ？」

思いもよらないことを言われてジンは組んでいた足を下ろす。

それもそうだ、ヒキガエルにされる、だなんてジンが言ったのをリンリンが教えたのかと思ったが、リンリンにはそんな素振りなんてなかったからだ。

「冗談だよ。ヒキガエルにはしないけどね、あんたには少しばかり付き合ってもらおうかねえ。ま、お嬢ちゃんのためさ、あんたみたいな坊やが適任でねえ」

俺はこの老婆が何を言っているのかわからなかった。わからなかったが、ジンになんらかの災難が降りかかるだろうことは、老婆の不気味な笑みを見ていれば誰の目にも明らかだ。

「ど、どーゆーことだよ！」

身の危険を感じてジンが立ち上がる。

老婆はぶつぶつと呪文を唱えたかと思うとリベルの体がうつすらと光った。

「リンリン、先導しておやり。魔法陣の部屋までだよ」

「えっ、なにになに？！」

楽しそうにリンリンが部屋中を飛び回る。

「ちよっ、なんだそりゃ！ おい、待ってっ！」

驚いて後ずさるジンの前に現れたものに、俺たちも目を見開いた。これこそが本物の魔法というもののなか。

老婆がさらに呪文を唱えると、リベルの全身が赤みを帯び始めた。

赤みを帯びた光がだんだん炎のように揺らめき始めるたかと思うと、それは思いもよらない姿へと変貌を遂げていった。

真っ赤なドラゴン！

それはまさにドラゴンの形をしていた。

リベルの全身を纏っていた炎のような光が収束すると、一気に紅蓮の炎となりみるみるうちに真紅に染まるドラゴンの姿を模り始めた。

「これってドラゴン……ですよね?!」

腰が抜けたようにへなへなと座り込んでクラッセが言った。

「あ、ああ。これが魔法の力なのか……?」

狭い部屋いっぱい長い尾を揺らすドラゴンに圧倒されて、俺も言葉を失った。

どう見ても生きた本物のドラゴンではないようだが、実在するとしたらこんな感じなのだろうか。

しかし、こんな魔法を使えるこの老婆は一体何者なのか。

真っ赤なドラゴンが老婆の前で宙からジンを見下ろす。

「さあ、逃げるんだよ坊や」

老婆はいつの間にか杖を持っており、その杖がジンの方へ向けられると、ドラゴンはジンへと大きく口を広げた。

「ジン！」

俺は思わずジンの身を案じて叫んだ。

「なんで俺なんだよぉ！」

椅子を倒したジンが背を向けて走り出す。

「早く逃げてください、ジンさん！」

「言われなくてもわかってるっつーの！」

「こっちこっち」

リンリンが手招きをする。

ドラゴンに追いかけれられ、足を滑らしそうになりながらもジンが扉から飛び出す。

リンリンの足元でさっきの口ウソクたちが道を照らし、走るジン、

次いでドラゴンが飛んでいく後を俺たちも追いかける。

魔法陣のある広間に辿りつくくと、ジンが悲鳴を上げながら走り、ドラゴンがその後を追ってぐるぐると広間を追いかけっこしていた。「一体どうなっているんだ？」

誰にともなく俺は呟く。

「それに……」

「なにか変なこともあったんですか？」

俺の呟きにクラッセが気付いて言った。

「いや、リベルの体が光っていたこととなにか関係があるのか、ってさ」

そういえばあの老婆はリベルのためだと言った。

リベルの具合が悪くなったことと、目の前で繰り広げられているジンの災難とはどんな関係があるのか。

ただの風邪ではないとは思っていたが、俺の理解の範疇はんちゆうを越えることばかりが起きる。

冒険者とは皆こんな不思議な体験ばかりしているのだろうか。

「そういえばリベルさんはメイジでしたっけ。魔力があることとなにか関係があるのかもしれないね」

神妙な顔つきでクラッセが言った。

「あれ？ そういえばレミは？」

黒いローブ姿が見当たらないことに気付いてクラッセに聞く。

「え？ 一緒にこなかったんでしょうか？」

クラッセと顔を見合わせていると、頭の中に声が響いた。

『その坊やは平気さ。別に取って食われるわけじゃないよ。説明するから戻っておいで』

老婆の声だった。

『この声はあんたたちにしか聞こえないよ。あのドラゴンは一見、炎でできているように見えるけどね、触れても燃やされるなんてことはないんだよ。さっきも近くにいても熱くなかったらう？』

老婆の声に俺は思い出す。

確かに驚きの方が先行していて気が付かなかったが、あれだけの炎なのに熱気が一切感じられなかった。

そうになると、今はパニックに陥っているジンも追いかけているうちにいずれ気が付くかもしれない。

「よくわからないが戻ろう。どうやら悪い人ではなさそうだ」

俺が言うと、

「そうですね。ジンさんには気の毒ですけど、たまにはいいんじゃないですかね、少しくらいお灸を据えられても」

クラッセは淡々ときついことを言う。

初めて出会った時と比べると随分あかぬけてきたようだ。

俺は苦笑しながら頷く。

「早くバアバのところにでもどろっ」

ジンが逃げ回る様子を楽しげに眺めていたリンリンが広間から扉をくぐって廊下へと入る。

俺とクラッセも後に続くと、扉がバタンツと閉まった。

「てっ、てめーら、覚えてろよー!」

ジンの情けない叫び声が扉の向こうから聞こえた。

部屋に戻るとティーカップ片手にちよこんと椅子に座るレミがいた。

「遅い、よ」

レミは小さく手を上げる。

「紅茶をごちそうになってたのか」

俺とクラッセも椅子に腰をかける。

あんな状況でこれほど冷静でいられるレミは案外シーフに向いているのかもしれない。

シーフはどんな時でも落ち着いて周囲を見渡せるようではなければならぬそうだ。

とはいえジンが不向きというわけではないと思う。

いきなり炎のドラゴンに追いかけられたとあっては、彼が取り乱してしまっても無理からぬことだろう。

「紅茶でも飲んで落ち着いたら話をしようかねえ」

老婆に言われてティーカップを見る。

湯気が立っている。

「あ、いただきます」

クラッセがカップを手に取る。俺もカップを口の前に運ぶ。

(いい香りだ)

気が休まるような優しい香りが俺の鼻をくすぐる。

口をつけてひと飲みする。俺たちが最初にこの部屋へ訪れてから、炎のドラゴンと共にジンを追いかけてたりしてだいぶ時間をくったはずだったが、まるで煎れたてのように紅茶は熱かった。

「これも魔法、ですか？」

思い切って聞いてみると、

「そうだねえ、魔法でできたカップでね、煎れた飲み物の熱が逃げないようにする永続魔法がかかっているのさ。まず市場ではお目にかかれない品物だろうね。あたしだってこんな魔法をどうやればできるのかさっぱりだしねえ。魔力をひとつの場所に留めるというのは本来あってはならないことなのだからね」

老婆はまるで人事のように語った。

俺はそれがどういう意味なのか聞こうかと少しだけ考えたが、魔法に疎い俺が聞いてもさっぱりだし、まずはリベルのことを聞いておく方がいいだろう。

そう思い紅茶を飲み干すと、俺が聞くより前に老婆が口を開いた。「あたしの自己紹介がまだだったね。あたしはゼンさ。ゼンばあさんとも呼んどくれ。見ての通り、森の奥で細々と暮らしているだけの年寄りさ。ただ、魔法は少しだけかじっていたことがあってね、俗世との関わりを断ってからあんたたちのような若者に会うのも久しいことだし、力になってやらんこともないね」

俺たちは簡単なおつかいの依頼を受けただけのはずだった。

だが意に反して俺たちに降りかかる非日常的な数々の出来事。

妖精に出会い、ゼンと名乗る魔法使いの老婆に出会い、いつしか

俺たちは大きなうねりの中に巻き込まれていようとは、この時は思
いもよらなかつた。

4・幻影と目覚める太陽

パチパチと薪のはぜる音が聞こえる。すでに春先とはいえ疲れた体に暖炉の暖かさは嬉しい。なんとも気の休まる思いだ。

「なるほどね、だいたいの話はわかったよ」

目を閉じて聞いていたゼンさんが静かに頷く。

まずは俺たちの話を聞きたいというゼンさんに俺たちが今日体験したことを話していたのだ。

巨大なサボテンみたいなモンスターに遭遇したことに始まり、ウォーラーと戦ったこと、そのウォーラーとの戦いをブレスが現れたことでなんとか乗り切ることができたということ。

そして黒い蝶がいつの間にか集まってきたかと思うと無機質な声と共に強烈な悪意に心を蝕まれていったこと。池に突如として現れた岩人形の傍らにはその黒い蝶がいたこと。

よくしゃべるジンとリベルがいないので、ほとんどは俺が話し、たまにクラッセが相槌を打った。レミはゼンさんと同じように黙って話を聞いていた。

「ところでリベルは本当に大丈夫なんでしょうか。一体さっきの魔法はなんなんですか？ ジンが魔法でできたドラゴンに追いかけられることとどんな関係があるんですか？」

話し終えるとゼンさんに聞いてみる。

この森でなにが起こっているのかはさっぱりわからないが、俺たちにとってはリベルの事の方が気がかりだ。レミも「どう、なの？」と催促するように聞いた。

「あのお嬢ちゃんの問題ないさ。じきに良くなるよ。あんなたちの話を聞いて合点がいったね。精神に直接攻撃をされて、それに抵抗するために眠っていた魔力が目覚めたんだね。だけど、あの子はまだ魔力をうまく制御できないんだろう？ 眠っていたところを無理矢理起こされた魔力が張り裂けんばかりに内に竦んでいるんだから

ね、体調を崩すのも無理ないね」

ゼンさんは淡々と言った。

「もう少し細かいことを言えばちよつと違つけどねえ。知っていてもそうでなくても問題ないけど、魔力というものについて聞きたいかい？」

俺たちは揃つて頷く。とくにレミは興味深げに視線を向けていた。「そもそも魔力というのはね」

俺たちを見渡しながらゼンさんは説明を続けた。

彼女が言うには魔力というものは持つているかどうか、ということではないのだそうだ。よく「魔法使いの素養がある」と言われるのは魔力を受け入れる器の大小のことを指して言っているらしい。

少し難しい話になるのだが、この世界には魔力が絶えず流れ漂つていて、浮いたり沈んだり循環していて、”沈んでいる状態”では俺たちの目には見えず辺りを漂っている場合で、”浮いている状態”というのがリベルやゼンさんたちの体に入っている状態らしい。その魔力を受け入れる器が大きい者ほど魔力が強いということになる。

器に注ぎ込まれた魔力を水だと例えると、その器から魔力をくみ上げて魔法を使うのだが、魔法を使わずに留めておくといずれ溢れてしまう。それが今のリベルの状態だ。

ただ、今までリベルがそうならなかったのは、魔力を受け入れる器の蓋が閉じていたのだという。蓋を開いたままでは魔力が溢れてしまうので、今のリベルのようになりたくなければ、時折魔力を発散させてやらなければならない。それが魔力をコントロールするということだ。

ゼンさんが言うには、大きな器を持ちながらもそれを知らずに生涯を終える者も少なくないということだった。

俺たちのように冒険者の登録をした人たちは適正検査の中で魔法の素養があるということが判明したりする。だからこそリベルはメイジになれたのだ。

ここでレベルのクラスであるメイジというものを説明することにするが、メイジというのは至って簡単、魔法を扱える者になれるクラスだ。もちろんレベルのように魔法の素養を持ちながらも冒険者登録の時点では扱えない者もメイジになることができる。

メイジについて俺はあまり詳しくないのだが、魔法を使うにはちよつとした道具が必要で、だからレベルはメイジでありながらも魔法が使えない。それに魔法を使うにはある程度の修練が必要とのことだった。

まずは道具がなければ魔法を使えないので、レベルは魔力をコントロールする練習などもしていない。ギルドの講習を受けるにしてもお金がかかるので、そのうち、ということになったのだ。

魔法を使えないことに彼女は負い目を感じていたけれど、俺はそんなの気にする必要はないと思う。

経験を積んでいけばいずれは魔法を使えるようになるだろうし、それまでは俺たち4人でフォローしていけばいいだけの話だ。たとえばパーティを組んだばかりだろうと俺たち5人は仲間なのだから。

話を戻すが、魔法の素養があるかどうかは、魔力を受け入れる器が大きければ素養があるということになる。

ゼンさんの話を聞いていて俺が思ったのは、その器が大きいのがレベルだとして、それなら俺たちにも僅かながらでも素養があるのだろうか、ということだ。

その質問に彼女は、

「あるよ」

と、あっさり答えた。

「でも魔法を使えるほどの魔力を受け入れるにはそれなりのものがないとね。だから断言しておく、あんたたちが魔法を使うというのはほとんど有り得ないことさ」

少し期待していただけに俺は肩を落とした。

「とにかくレベルさんの具合は良くなるんですね？」

念を押すようにクラッセが尋ねる。頭を抱えているところを見る

と、ゼンさんの説明をよく理解できなかったようだ。

どちらにしろ彼にとって重要なのはリベルの無事だけだろう。それは俺も同じだ。

「かいつまんで言うそうだね。内に箆っていた魔力をお嬢ちゃんに代わってあたしが解放したからね、しばらく魔力を消費していればすぐに良くなるさ。あとはさっきの生意気な坊やに頑張ってもらうだけだよ」

そう言うゼンさんはやりと笑った。

「ドラゴンが消える頃にはジンジンもきつと疲れて倒れちゃうね。あははっ、リベルも少し休んでいたほうがいいし、今日は泊まっていたら？」

リンリンが俺の頭の上に腰を下ろして言った。

「うーん、そうさせてもらおうか？」

レミとクラッセに問いかける。

「そうしましょうか？ でも泊まっていってもいいんですか？」

クラッセが遠慮がちに聞く。

「ああ、いいよ。部屋なんていくらでもあるからね。あとでリンリンに案内してもらおうといいさ」

ゼンさんが言った。

それならそうさせてもらおう。実際かなりの疲労が溜まっているのだ。

依頼の品を早く届けたいところだが、酒場のマスターはあまり急がなくてもいいだろうと言っていたのを思い出す。

「では、お言葉に甘えさせていただきます。じゃ、あとで案内頼むよリンリン」

「おっけ」

リンリンは親指と人差し指で輪を作った。

「リベルの魔力、すごい、たくさんある、の？」

顔を上げたレミが聞く。リベルの魔力を蓄える器がかなり大きいものならば、やはり魔力を消費するまでには時間がかかるのだろう。

レミの言葉に俺とクラッセも興味を持ってゼンさんを見た。

「……それなりにね。でもそんなにわからないだろうさ。そろそろ頃合じゃないかねえ？」

ボタンッ

ゼンさんが言い終えるやいなや扉が開く。

「きやはっ、ジンジンが戻ってきたよ」

汗だくになったジンが部屋へと入る。

「てつめえ……ババア、熱くもなんともねーじゃねーか！ よくも騙しやがったな！」

息を切らしながらも部屋へ入ったジンがうめく。

しばらく逃げ回っていたが、疲れで足がもつれて転んだときにドラゴンに触れたらしい。すると霧散するようにドラゴンが消えたのだ。

「いい運動になっただろう？」

なおも口を開いて文句を言おうとするジンにゼンさんは飄々^{ひょうた}として返す。

「てめーら！ デイル、坊主、知ってやがったな？！ 後で覚えてやがれっ！ あーっ、疲れた！ 今日^{けふ}は逃げ回ってばっかだぜ」

「悪い悪い。でも俺たちだって知らなかったんだ。いやあ、ジンが無事でなによりだよ」

とぼけたふりして答える。

「うそこけ！」

ジンは心底だるそうに床に座り込む。

「怪我もなくてよかったじゃないですか。リベルさんもジンさんのおかげでほら、顔色も良くなってきましたよ」

ジンは「けっ」と毒づくが、確かに言われる通りリベルの表情がだいぶ楽になってきたようだった。これもゼンさんが言う通り、魔力を解放したおかげなのだろうか。

「あんたみたいに逃げ足が速いのを追いかけると、魔力を消費させやすいからねえ。ともあれご苦労さんだったよ」

「最初から説明しろってんだ」

ジンは不満顔だ。

「そつ目くじら立てるなよジン。それより今日はここで泊まらせてもらうことになったんだ。リベルの体調が回復するまでな。それと……お世話になっていて、さらにお願いをするのはおこがましいんですが、リベルに魔力の扱い方を教えてやってもらえませんか？今回はゼンさんに会えて助かりましたけど、魔力をコントロールできないとこれからも同じようなことが起きるんじゃないかと思うんです」

「ここに泊まるだあ?!」

信じられないというような声上がる。とんだ目にあつたジンとしてはすぐにでもここを離れたいらしい。

「リベルの、ため、だよ」

レミが言った。俺とクラッセは深く頷く。

本来ならギルドでお金を払ったりして魔力のコントロールを学ぶのだろうが、コントロールできないと体調を崩してしまうのだと知つた今となつては、すぐに魔力をコントロールできるようになつてもらわなくてはリベルの体が持たないのではないだろうか。

「おいおいおい、つーかよ、もう依頼の陽還り草とかいうのは採つたんだしよ、こんなとこに用はねーんじゃねーのか？ 魔力のコントロールってなんのことだよ、リベルのためって?!」

「あ、実はですね」

怪訝な表情を浮かべるジンにクラッセが説明を始める。

「ふーん、ってこたあ、リベルが魔力をコントロールできるようにならなけりゃ、またぶっ倒れるかもしんねーってことか」

一通り話を聞いたジンが腕を組んで唸る。

「だめでしょうか？ 代わりにお礼できるようなものはないんですけど……」

「そつだねえ……」

ゼンさんは何事か思案するように虚空を見つめる。すると、

「あ」

言葉を待っていたレミが小さく声を上げる。俺はその視線の先を追った。

「リベル、大丈夫か?!」

長椅子に寝たまま焦点が定まらないまま瞳を向けているリベルがいた。

「おっ、もう起きても大丈夫なのかよ。しかし気絶するやつが多いパーティだぜ。世話が焼けらぁ」

リベルが起きるなりの軽口だ。だが口調はいつもより柔らかい。

「よかった、でも、もう少し寝ていたほうが、いいよ」

「熱はだいぶ引いたんじゃないですか? 一時はどうなることかと思いましたよ」

気遣うレミとクラッセにリベルは弱弱しい笑顔を向ける。

「ありがと……なんか夢を見てみたい」

言いながらもリベルはまだ夢の中にいるような様子だ。

ただ、クラッセが言う通り、もう熱はほとんど引いたようだった。紅潮していた顔がほんのりと赤みがかっている程度までに落ち着いている。

「ここは……?」

自分が見知らぬ場所にいることに気付いてリベルが呟く。

俺は「ゼンさんという方の家だ。危ないところをこのリンリンに助けてもらってな、リベルを診てくれたのもゼンさんなんだ」と説明する。

「え、なに……?」

寝ているリベルの上でキラキラと光が舞う。

力なくそれを見ているリベルに光が舞い落ちたかと思うと空中で浮かんだまま止まったリンリンにリベルはぽかんと小さく口を開けて言葉を詰まらせる。

「はじめましてリベル! あたしリンリン。あーん、よかったぁ。やっぱりバアバに見てもらってよかったぁ」

胸の前で両手を握り合わせてうるうるとした瞳を向けているリンに、リベルは小さく「妖精……？」と驚きを隠せないようだ。「そりゃびっくりしますよねえ、僕だっていまだに信じられませんよ」

リベルが驚くのも無理ないというようにクラッセが言う。「その妖精、をいきなり、潰そうとする、のも、信じられない、よね」

こちらもいまだに根に持っているようにレミがジンをフードの奥から睨む。

「わーった、わーったって！ 俺が全面的に悪かったっつーの！今は、んなこと言ってる場合じゃねーだろっ」

バツが悪そうにジンが頭を掻く。

リベルとの口喧嘩のようにポンポンと文句を言い合う時は全く動じないジンだが、レミのように口少なに咎められるのはどうも苦手のようだ。彼の新たな一面に俺は思わず笑いそうになった。

「気持ちわりーな。なに笑ってんだよデイル」
半眼でジンが俺を見る。

「ははっ、ジンさんの仕草が面白くつてですよ。なかなか見られるものじゃないですからね、ジンさんの困った表情なんて」

笑うクラッセがジンにばかりと殴られて涙目になる。

「そのへんでいいかい。話を続けたいんだけどねえ。あんたらの仲がいいのは、よくわかったよ。その真面目そうな坊やが言ってたね、”お礼できるものはない”ってさ。でもね、あんたらに頼みたいことがひとつだけあったよ」

真っ直ぐに顔を見つめられて俺はどきつとした。ゼンさんの顔は笑っていたが、目の奥は至って真剣なのがわかったからだ。

「ここ2、3日のことだよ。あたしが妙な気配を感じるようになったのはね」

「気配？」

「魔力と言ったほうが正しいだろうね。それでリンリンに見て回ってもらったのさ」

レミを見てゼンさんが言った。

「あんたらが見た黒い蝶ってのは間違いなく魔法によって作られたものだよ。それが幻覚なのか実体を持つものなのかはわからないけどね。強い魔力を持つ魔法使っていうのはある種の媒体を介して遠く離れた場所にまで魔法をかけることもできるから、黒い蝶がたくさんいるように見えて実は1羽しかいなかったっていうこともあるわけさ。まあ、あたしが感じてた魔力の原因はおそらくその蝶を操っていた人物だろうねえ」

「強い魔力……ゼンさん、より？」

聞かれてゼンさんは左右に首を振る。

「さてね、そこまではわからないね。なんせあたしが実際に聞きしたわけじゃなし、あんたらの話を聞いている限りでそう考えられるというだけのことさ」

「なぜ俺たちが狙われたんでしょう？ どう見たって冒険者になりたての俺たちなんかを襲ったところで、その黒い蝶を操っている人物に得することなどないと思うんですが」

素朴な疑問を口にする。

この森に魔法使いらしき何者かがいることはわかった。そしてその何者かが現れてここ2、3日くらいゼンさんが妙な魔力を感じているということも。だが、その目的がさっぱりわからない。

今言った通り、俺たちなんかを襲ったところでその人物に得るものなどないように思える。

あの”闇”に心を侵されそうになったとき、俺は強烈な悪意や憎悪に蝕まれていくのを感じた。あの時、こともあるうに仲間である

ジンを殺したいとさえ思っていたのだ。

あれは一体なんなのか、誰に向けられた感情なのだろう。

あの感情はほんの一時であっても深く俺の心に刻み込まれてしまった。

自分の境遇を憎んで、誰かを殺したいくらいの憎悪。あれほどの強い感情を持った何者かが、どうして俺たちを狙っていたというのだろうか。

「それも含めてさ、調べてきてほしいんだよ。放っておいたらどうもうまくないような魔力だからね、なかなか強い力を持つ魔法使いかなにかだろう、それに禍々しい魔力だよ。あたしは見ての通りの年寄りでね。あんたら若者みたいに体が言う事を聞いちゃくれないのさ。それにしてもギルドは何をしているんだか」

話しながらふと思いついたようにゼンさんは不機嫌さを露わにした。

彼女の口からギルドの名前が出て、不似合いな単語だと思ったのは俺だけだろうか。

こういった森の中に人知れず住んでいるような魔法使いの老婆が世事に通じて思えなかったのだ。

そんな俺の心を知ってか知らずかゼンさんの話はだんだんとギルドへの不満へと変わる。

「だいたい、最近の冒険者ギルドの連中はどうなんだい、率先して事態を把握するべきはずなのに異変にも気付かないなんてねえ。廃れちゃったもんだね、あたしの師匠が知ったらただじゃおかないだろうよ」

「あん？ どーゆー意味だよ。最近じゃギルドの施設とか講習だかも増えてるし、廃れてるなんてなんか間違いだろ？」

「いいや、廃れてきてるね。いいのは見せかけだけさ。この頃じゃ魔力の強い人間もないし、昔と比べたら質が落ちたもんだよ。師匠がいなくなっただけというものの、ろくに連絡もよこさなくなったしねえ。ま、連絡よこされても相手なんかしやしないけどね」

ゼンさんは皮肉げに言った。「ひねくれてやがらあ」、ジンがそう言ったのを「人のことを言えるのか」と思わずつつこんでしまう。「連絡つて、冒険者ギルドに知り合いでもいたんですか？」

彼女の口ぶりからするとそう取れる。

クラッセが聞くと、ゼンさんは顔を歪める。

「あその上層部連中の半分くらいはあたしの兄弟弟子さ。この場所ですら魔法を習っていたやつらが今やギルドでふんぞり返っているんだからねえ、世も末だよ」

「マジかよ！　バーサンの師匠つてなにもんなんだよ！」

ジンに限らず驚いたのは俺もレミもクラッセも同じだ。長椅子から身を起こしたりベルも目を丸くしていた。

「ただの元冒険者さ。でも魔力は強かったけどね」
面白くなさそうに言い捨てる。

魔法を知らない俺からすればゼンさんだつて大した魔法使いだと思ふのだが、そのゼンさんが「魔力が強い」というその師匠とは一体どれだけ凄い人物なのだろう。

しかしゼンさんは思い出すのもつまらないといった表情だ。

「話を戻すけどね、あんたらも冒険者の端くれならちよつと手伝ってくれないかねえ」

とんだ話の腰を折つたとしても言うようにゼンさんが俺たちの顔を順に覗き込む。

「お言葉を返すようですが、それなら俺たちのような新米に頼むより冒険者ギルドからもつと腕の立つ者を呼び寄せた方がいいのではないですか？　ゼンさんの話を聞いた限りではとても俺たちの敵う相手ではないように思えるんですが……」

少しだけ迷つた末に率直な考えを投げかけてみる。

そこにまた心を侵されることへの畏れの気持ちがないとは決して言えない。現にまたあの感覚を味わうことになるかもしれないと考えるだけで胸も竦む思いだ。

それにジン、リベル、レミ、クラッセ、4人の仲間たちにもあんな

な苦しい思いなどしてほしくはない。

大粒の涙を流しながら狂ったように叫んでいたクラッセの姿はとも見ていられたものではなかったし、レミも何も言わなかったがきつと辛かっただろう。

ダガーを抜いたまま硬直していたジンは、もしかするとすでに亡くなっているという弟のように思っていた人のことで苦しんでいたのかもしれない。リベルに至っては熱を出して倒れてしまったほどだ。

その原因についてはわかったから良かったものの、ゼンさんに会わなければ最悪の事態になっていたかもしれないのだ。

「バーサンにはわりーけど、俺は反対だぜ！ デイルも言ったけどよ、俺らに何ができるってんだよ。またのこのこと出かけていったらあつという間に返り討ちに遭うのが関の山つてもんだろ。そのチビスケをギルドにでも遣いに出してなんとかしてもらえつつの」

言い方は悪いがジンも俺と同じ気持ちだろう。

「とても強い魔法使いなんですよね？ 僕たちに魔法に対抗できる手段なんてありませんし、だいたい何をどうやって調べればいいんです？」

クラッセも困惑しているようだった。

リベルに魔力があるとはいえ、さすがにまだその魔力をコントロールすることしかできない、彼女に期待するというのも酷だろう。

魔法を使う者相手にソードやダガーだけではどうにもならないと思う。

ゼンさんが少しでも考えてから口を開こうとしたときだ。

「待って」

俺たちは一斉にリベルを見た。

「なにを待ってんだよ。言っとくけどおめー、自分がメイジだからってなんとかできると思ってんじゃねーぞ？！ メイジはメイジでも、おめーはひよっこメイジだかな！ ろくに魔法も使えねーんだぜ！」

険しい表情のリベルに詰め寄ったジンが言い放つ。彼なりに心配しているのだ。

また精神を攻撃されるような魔法を使われても、やはりリベルは俺たちを助けるために無理に魔力を呼び覚ましてしまうだろう。

「わかつてるわよ……。あたしだってどうにかできるなんて思っていないわ。でも……このまま放っておいたら、その魔法使いは次になにをするの？　もしかしたら一番近いブッツフェの街が狙われてしまうかもしれないじゃない……。そんなの嫌よ。ねえ、あたしたちってなに？　なんの為に冒険者になったの？　ただお金を稼ぐためでも、恐ろしい魔法使いが怖いからって逃げる為でもないわ」

額に汗を浮かべながら言うリベルの言葉に俺は既視感を覚えた。

つい最近誰かに同じようなことを言われた気がするのだ。それが誰なのかは思い出せないし、なにが同じようなことだったのかもわからない。だけど、とても懐かしい気持ちだけが蘇ってくる。

『デイル、きみはどうして冒険者になったんだい？』

心の奥で声が聞こえた、ような気がした。

脳裏にあの時の無力感が浮かぶ。

俺の故郷での出来事だ。なんのことはない、辺境の冒険者も立ち寄らないような村には起こってもおかしくないことだった。

ある日、1ヶ月に1度の大きな街への買出しから戻った俺に見た光景は、モンスターの群れに襲われてほんの数時間で壊滅してしまった村の姿だった。

村から離れていたのは俺1人だけで、両親も親しい友人も俺は一瞬にして失ってしまったのだ。

父も村の若者たちも剣をたしなんているにはいたが、モンスターの大量の前には無力に等しかった。所詮は素人の剣では、弱いモンスター程度にしか通じない。

たまたま通りがかった旅人から聞いた話では、村を襲ったモンスターはデビルフライという凶悪なモンスターだったらしい。

人里に出てくることなど前例にないとその男性は青ざめた顔で言

っていた。あまりに恐ろしくて助けられなかったと嘆く彼を俺は責めることなどできない。きっと俺がその場にいたとしてもなにもできず殺されていたに違いないからだ。

身内を1日のうちに全員亡くした俺は途方に暮れながらも簡単に村のみんなを埋葬した。

旅人の彼も手伝ってくれた。これからどうするのか、と問う彼に、俺はある決意をしたのだ。

「俺の故郷はモンスターに襲われて俺以外が全員死んだよ」

静かに言った。リベルと視線が合う。

他の3人に目を向けて俺は続ける。

「俺はその時、誓ったんだ。俺の村と同じような悲劇だけはもう繰り替えさせたくないって。だから俺は冒険者になった。剣の腕をもっと磨いて、モンスターからみんなを守るようになりたいんだ。」

村がモンスターに襲われた時、俺はその場にいなかったけれど、いてもきつと同じだったよ。でも今は違う、ファイターとしてみんなをきつと守ってみせる。そりゃ、レベルも1だけど、魔法をかけられたらどうにもできないかもしれないけど、このまま黙っていたら誰も守れないよな。リベルに言われて思い出したよ」

「デイル、おめーの気持ちはわかったよ。つつてもさすがに無理あるだろって言うてんだよ。どうやって魔法使いなんかの相手をすんだよ」

ジンの言うことはもつともなだけに俺は言葉をつまらせる。

「それなら心配いらないよ。あたしは体が悪いからここから動けないけどね、あんたらに魔法をかけてやるさね。直接的な、それこそ炎だの吹雪だのには効果はないけど、黒い蝶に囲まれたときみたいな精神攻撃は完全に防ぐことができる魔法さ。それにね」

ゼンさんは言葉を区切って俺たちを見る。少しだけ表情が和らいだ気がした。

「本当の強さっていうのは、守りたいっていう気持ちなのさ。決して魔力や腕っぷしで測れるものじゃないんだよ。その点、あんたらならきつと大丈夫だとあたしは踏んでいるんだけどねえ」

「守りたい気持ち、ですか……」
クラッセが呟く。

「僕だつて守りたい気持ちならあります。兄さんみたいにはすぐになれないけど、僕にもできることがあると思うんです」

「兄さん？」

「はい、勇敢な戦士でした。体の弱い僕をいつも守ってくれたんで

す。だから次は僕が誰かを守る番です」

か細い少年の声だが、そこには固い決意が秘められていた。

「私、も」

「だーっ！ おめーもかよ！」

レミが口を開きかけたのを見てジンがわめく。

「冒険者、を続けるなら、避けて、通れない、ことだと思っ、よ。モンスターだって、魔法を使う、のもあるしね。リベルの言うことに同感。私もブユツフェ、が襲われる、と思う」

ただたどしいながらもレミは言葉を選ぶように言った。あの強い悪意を持つ者ならば、きつと俺たちだけでは飽き足らずブユツフェの街へといずれその魔手を延ばすだろう、と。

ブユツフェには冒険者ギルドの支部があるが、俺たちが滞在している間に腕の立ちそうな冒険者、とりわけメイジやプリーストなど魔法を使えるような冒険者はいなかっただろうとレミは言った。

冒険者ギルドの支部があると言ってもブユツフェは大陸全土に存在するギルドのある街と比べれば田舎の方だ。だからゼンさんがその魔力を測りかねるほどの強い魔法使いに襲われてしまっ、ては、撃退できるような人材がいらないのではないかと。

「それなら俺らだってそうだろうーが！」

ジンはなおも食い下がった。

一時のヒロイズムに酔いしれて自分たちの力量を考えずに自滅していった連中をたくさん知っている俺たちに言い聞かせた。

「一時の感情なんかじゃないさ。俺はそう心に決めたんだ。しばらくそれを忘れていたけど、もう忘れたりなんかしない。それにジン、俺はお前のことも信じているからな。そうやって口うるさく言うのも俺たちを心配しているからなんだろう？」

「ばっかじゃねーの！ あゝあ、おめーみたいな正義感に溢れたやつなんかパーティに誘うんじゃないなかつたぜ。おもしれーやつだと思っ、たからつい声かけちまつたんだよな」

そう言っ、てジンは俺が冒険者ギルドに向かっ、てい、るときに見かけ

たことを話した。

ブツフエに着いて食事をしているときに店の主人がゴロツキにからまれているのを俺が間に入って止めたのだと彼は言った。

そういえばそんなこともあったかもしれない。ジンが俺を誘ったことの理由など考えたこともない俺には寝耳に水の話だった。

「どいつもこいつも黙って見てんのに、おめーだけが席を立ったんだよな。ま、結果はボロクソにやられたわけだけどよ、見ていて少しばかりうらやましかったぜ」

思い出した。

ようやくブツフエに着いて一息つこうと食事を取ることにしたのだが、箸を口に運んでいると怒鳴るような声が聞こえたのだ。

その声の元を追うと3人のいかにもゴロツキ風の男が店主を取り囲んでいた。

どうしたものかと見ていると、彼らは食事に虫が入っていたのだと文句を言っていた。

俺はこっそりと彼らのテーブルを見ると、食事は綺麗にたいらげられていて、何枚も重ねられた皿がそこにあった。どう考えても食事代をちよるまかそうとしているのが目に見て取れた。

席を立ったのはいいが、さすがに3対1では勝ち目はなかった。相手は筋骨隆々の大男たちなのだ。案の定、俺は無様にやられて代金も踏み倒されてしまったのだが、店主は何度も「ありがとう」と頭を垂れてくるので困ってしまったほどだ。

「そんなことがあったのね。デイルらしいって言えばらしいけど」
へえ、というようにリベルが俺とジンを見る。

「リーダーはデイルさんですから、デイルさんに決めてもらいましょうよ。ジンさんもそれでいいですよね？」

ふてくされ顔のジンにクラッセが念を押す。ジンは諦めたように「もうどーにもしゃがれ」と投げやりに答える。

それを見てリベルとクラッセ、それに宙に浮かんでいたリンリンが俺の頭の上に降りて笑った。

「無理しなくていいんだぞジン。俺は俺の信念に従って行動する。だからジンもわざわざ危険だとわかっていることに従わなくてもいいと俺は思ってる」

「おいおい、ここまできて俺だけ除け者にするっつーのかよ。へんっ、おいバーサン、それで俺らはどーすりゃいいんだよ」

とんでもない、というようにジンは大げさに拳を握り締めて宙を叩く仕草をみせる。

「話はまとまったようだねえ。実はね、この2〜3日魔力の出どころを探っていて、魔力が特に強く感じられる場所がわかったんだよ。とはいっても、大まかなあたりしかわからないんだけどね。そこに行ってもらおうと思ってるのさ。だけど、守りたい気持ちがあるの強さだと言ったけど、このまま行かせたんじゃあ、さすがに目覚めの悪いことになりそうだからね」

そう言うとき、ゼンさんは「リンリン」と俺の頭の上に視線を向ける。

「なあに？ バアバ」

首をかしげてリンリンが返事をする。

「宝物庫に案内しておやり。あそこには魔法のかかった装備もいくつかはあるだろうよ。あたしはそんなものは嫌いだけどね、魔力を道具の中に留めておくなんて不自然過ぎるっただけだし、あつた代物だしね。でもそんなこと言ってもいられないだろうよ」

「魔法の武器だと？！ そりゃすげえ！」

宝の山を目の前にしたかのようにジンが飛び上がる。

「そんなにすごいものはないよ。せいぜいが切れ味の良くなった剣だとか、防御の魔法が付与された防具程度だね。ないよりはマシって程度さ」

浮かれたジンは釘を刺されて「つまんねえ」、その言葉通りの顔になった。

「でも防御の魔法がかかった防具だったらもらっていった方がいいわ、きつと。そうでしょう？ おばあちゃん」

「そうだね。それに、それらをあんなに持たせるのは、あたしの

魔法の効果を上上げるのが目的のようなもんさ。魔法の効果をさらに持続させる指輪が宝物庫にあったはずだからね、それを取りにいっておいで。それ以外にも欲しいものがあつたら自由に持つてお行き。あたしには必要のないものばかりだから」

「ちょうどダガーが1本なくなっちまったんだよ。そりゃ助かるぜ！」

自由に持つていっていいと言われ、ジンは、しめしめ、といった表情になる。

「ちよつと！ もらうのは必要最低限のものだけよ！ あなた、持つてだけ持つていこうとか思っているでしょ？！ もうっ、ばかジンね」

ジンの考えを見透かすようにリベルがたしなめる。

そういえば、随分と顔色も良くなったようだ。欲望丸出しのジンと口喧嘩を始めた。

「これでようやくいつもの調子になりましたね、ははは……」

苦笑するクラッセに俺も苦笑を返す。

「そうと決まったらさっさと行こうぜ。リベルはまだ本調子じゃねーんだからここで待つて休んでいてもいいんだぜ。ぶっちゃけ、半病人がついてきても邪魔だしな。おら、チビスケ、とつとと案内しやがれ」

リベルを気遣っているのだろうが、その横柄な言い方に言われた本人はカチンときたようだ。

「半病人つてなによ！ あたしも行くわ、あなたを放つておいたらおばあちゃんの物が全部持つていかれちゃうもの！」

「ばかジンジン！ バアバの物はあたしが守るの！ それにチビスケじゃないって何度も言つてるでしょ！」

まるでリベルが2人になったようだ。2人同時に怒鳴られてさすがのジンも耳を塞ぐ。

ジンに文句を言つたりリベルとリンリンは顔を見合わせると、一瞬キョトンとした表情になるが、すぐに意気投合してジンを攻撃する

ことに決めたようだ。立ち上がり腰に手を当てて仁王立ちするリベルの上でリンリンも同じように立ち、顔をしかめるジンへと交互に文句を言っていた。

「女の人って怖いですね……」

脅えた様子でクラッセが呟く。

「そ、そうだな……そんなつもりはないが、彼女たちをからかうのはよしておこうなクラッセ」

俺の背後で震えるクラッセではなく自分に言い聞かせるように返事をした。

「みんな、ばか、だね」

1人離れたところにいるレミの独り言が聞こえて、俺はただ苦笑するしかなかった。

「あっ！」

頭に火のついたロウソクとその上を飛ぶリンリンに先導されながら俺たちは廊下を歩いていった。

「どうしたの？」

隣を歩くリベルが俺の手元を覗き込む。

「ソードがおしゃかになつていたよ」

俺は刀身の半ばほどから折れているソードをリベルに見せた。

魔法陣のある広間に移動する前に俺たちの前に立ちはだかった岩人形の攻撃をソードで受けたので大丈夫だろうかと見たところ、やはり折れていたのだ。

ちなみにその岩人形は”ゴーレム”という魔法で作られた生命体なのだそうだ。作り手の命令を忠実に聞き、岩でできた体には生半可な攻撃など効かないらしい。

ゼンさんが説明してくれ、レミも「話に聞いたことは、ある、けど」と感心していた。

「あの時、けつこう鈍い音がしたからな。くそー、買ってからあまり経っていないのに」

意識せずに肩を落としてしまう。

なんの変哲もないソードだが、田舎の村育ちの俺に取っては大枚をはたいて買ったソードなのだ。それがたいして使ってもいないうちに折れてしまうとは。

「代わりの武器が宝物庫にあるといいですね。僕も斧をなくしてしまいましたし……大事なものだっんですが」

俺が持つ折れたソードに気付いたクラッセが自分も戦斧をなくしたことを思い出して悲しそうな顔をした。

「そーいえば前にも言ってたよな。なんだ、使えない斧なんか持っても仕方ねーだろうに、不思議に思ってたんだよ。大事なもんって、ありゃーなんかいわくつきの斧なのかよ坊主」

「兄さんの形見でして。でもっ、確かにジンさんの言う通りですよ。僕には重すぎて扱うことなんてできませんし。だから諦めることにしますよ」

沈んだ表情を無理矢理払うように顔を上げたクラッセがぎこちない表情で笑う。

「そいつぁーわりいことしちゃったな」

ジンも、俺だって、そうと知ってれば引き返していたのに、なぜ言ってくれなかったのだろう。

形見なら今からでも取りにいった方がいいのではないか。俺がそう言つと、

「いいんですよ、皆さんのお荷物になることを兄さんだって望んでいないはずです。それよりもリベルさん、よかったですよ。すごいです、それ。大きな宝石がついていて」

「さすが魔法使いのバーサンだよな。それがありゃー魔法が使えんだろ？ いいもん貰ったじゃねーか。それってなんてえ代物なんだ？」

言われてリベルは両手でしっかりと握り締めていた杖を俺たちに

見せる。先端には握りこぶし大の丸い碧の宝玉がついていた。

「これが事象石^{じしょうせき}って言うの。魔法の媒体として使われるんだけど、でもこれだけじゃ使えないわ。だって呪文^{じゆん}だって知らなきゃいけないし、契約^{けいやく}だってしていないもの」

残念そうにリベルは言う。

そうなのだ。

俺たちが宝物庫へと行きかけたとき、ゼンさんは「ちょっと待ちな」、そう言っただけでゆっくりと立ち上がると部屋の奥から戻ってきたときに、今リベルが手にしている杖を持ってくると彼女に手渡したのだった。

「あんたにはこれが必要だろう？ 見たところ持っていないようだからね」

それはメイジであるリベルにとっては必須アイテムである事象石のついた杖だった。

とても高価な為に購入するのを先延ばしにしていたのだが、思わぬところで手に入り俺たちは喜んでいた。しかし、リベルが言うにはそれだけではどうにもならないらしい。

「魔法を使うには3つ必要なものがあるわ。ひとつはこの事象石。魔力を注ぎ込んだこれを媒体にして魔法を使うんだけど、魔法を使うには呪文を覚えなきゃいけないのよ。でも、まだまだ買えるわけではないって思ってたから魔術書^{まじゆしよ}だって買っていないし、契約^{けいやく}だって全くなしてないわ」

魔法に関して無知な俺たちにリベルはそう切り出して説明した。魔法を使うためには万物の事象を司る精霊たちと契約をしなければならぬのだそうだ。その契約はどこでもできるわけではなく、通常は冒険者ギルド内にある魔法使い専門の別塔の契約の間というところで契約をするのだという。

そうして契約した精霊と呪文の取り決めをする。それは契約者本人が提示するのだが、あまりに荒唐無稽^{いたうむけい}な呪文にしようとする契約自体も拒否されてしまうらしい。

それに魔法を使うたびに呪文を唱えるわけなので、適切な呪文を選ばなければならないのだ。だからリベルはまだ魔法を使えないと言った。

「便利そうで色々大変なんだな、メイジってやつも。んだけどよお、あのバーサン、呪文も言わないで椅子を出したりしてたじゃねーか。ありやーどーいうことなんだ？」

ジンの疑問ももっともだ。

首をひねる彼にリンリンが俺の頭から言った。

「あのね、ここってバアバのシショウって人が造ったところなんだって。なんかあたしにはむつかしくてよくわからないけど、この中にいるとバアバは呪文を唱えなくても簡単な魔法なら使えるって言うたよ。マドウキコウが働いているんだって」

リンリンは「すごいでしょ？」と胸を張ったが、当のジンは「よくわかんねえ」と興味をなくしたように呟く。

「ゼンさん」

再び歩きだそうとしたとき、レミが呟いた。

「ん？ なにか気になることでもあるのか？」

俺が聞くと、しばらく考えていたレミが「もしかして……」、そう言いかけた時だ。

「ちよつと！ なに？！」

慌てたりベルの声に俺は彼女の方を見た。

「今度はなんだ？！ おいチビスケ、一体俺らはどこに向かってんだよ！」

たまらずジンが叫ぶ。俺はめまいのような感覚を覚えた。

「なんですかこれっ、通路が増えましたよ！ みつつ、よつつ……」

視界が歪み、よろけそうになる。ジンが何度も首を振って辺りを見ている。

俺が後ろを振り返ると通ってきた通路を確認すると、そこにも3つに分かれた通路があった。

さらに霧のようなものが次第にたちこめてきて、俺たちはリンリンを見る。

「あたしも知らないし！　こんなこと今までなかったもん！」

リンリンが慌てて手を振る。

みるみるうちに白い霧でお互いの顔がやっと見える程度になった通路は、9方向に分かれて分裂が収まる。

俺たちは途方に暮れた。道案内のリンリンがわからないと言うのなら俺たちにどうにかできるわけもない。

足元で慌てふためいているロウソクたちは頭の火が消えないように時折互いに火をつけ直し合っていた。

深い霧ごしにみんなを見る。

クラッセは「どうしましょう」とうろたえながら足元の口ウソクたちと右往左往している。

「これだけの霧だ、はぐれてしまうと大変なことになるぞ」

俺が言うとかラッセはぴたりと止まって「は、はい」と姿勢を正した。

「それにしても、どうしたものだろうな。リンリンもこんなことは初めてだと言うし。なあ、どの通路に進んだほうがいいと思う？」

誰にともなく尋ねる。

「やいチビスケ、おめー妖精だろうが。なんかすげー能力とかってねーのかよ」

口論をやめたジンが言った。デュランドー・シギルの伝記などでは妖精は不思議な力を持っているとされているのだ。俺もそこに淡い期待を抱いたのだが、

「そんなのないって。人間で勝手にそんなでたらめをお話にしちゃうんだもん、困っちゃう」

リンリンの憤慨した声が聞こえた。

「でもそーゆーもんだって色んな話に出てくんぜ？　なんだよ、全部嘘なのかよ」

「僕たち嘘を聞かされて育ってきたんですね」

騙されたような口調のジンとうなだれるクラッセが口を揃える。

「あたしにできるのは姿を消すのと、空を飛ぶくらいかなあ。だから期待しないでよね」

困ったように言うリンリン。少し期待していただけに残念ではある。だが、そんなことを言っても何も事態は好転するわけもない。さて、どうするべきかと俺たちは霧でよく見えない互いの顔を見合わせた。

「これってやつぱ、やつの仕業なのか？」

ジンの言う、やつ、とは黒い蝶を操っていたであろう魔法使いのことだ。

「多分そうだろう。しかしおかしいな。ゼンさんが結界かなにか知らないけど、魔法を使って守ってくれているんじゃないかなかったのだろうか」

後半は独白に近い形で呟く。

「あの時の、あれだね」

レミが相槌を打つ。

リンリンにここへ案内してもらったとき、俺たちの前に現れて行く手を遮ったゴーレム。そのゴーレムを打ち滅ぼした巨大な魔法陣を思い出す。あれには破魔の力でもあるかと思っていたのだ。

「きつとおばあちゃんが言っていたよりも強い魔法使いかもしれないわ。だから魔法陣も効かないんじゃないかしら」

リベルは不安げに言った。そんなに強い魔法使い相手に俺たちはどうにかできるのだろうか、リベルでなくても不安を感じずにはいられない。するとリンリンが首を左右に振ってからリベルの言葉を否定した。

「ううん、バアバが前に言ってた。ここもそう長くないだろう、つて。本来の持ち主がいなくなってから少しずつホウカイが始まっているって。長くないっていつてもまだバアバがいるうちは大丈夫だつて言ってたけど、ケツカイの力が弱くなってきたらダメだつて」

「本来の持ち主？ ゼンさんじゃないのか？」

疑問を顔に浮かべてリンリンを見る。

「そついや遺産だとかなんとか言ってたよな。ふーん、廃れていくようなもんもらっても嬉しくもなんともないやな、あのバーサンがつまらなさそうにしてんのもそのせいかな」

なるほど、と俺は納得したが、だとすると安全に思えたこの場所も安全ではないということだ。ソードが折れて心もとないが、思わす柄に手を伸ばしてしまう。

「この意図がみえねえ。とにかくどれでもいいから進もうぜ。悩んでたっていいことなんかありやしねーんだからよ」

口の前に手をやってじっと考えこんでいたジンが言った。

「意図？」

思わずオウム返しに聞き返す。

「ああ、なんのための霧と九差路なんだ？ 霧なんてあつても邪魔なだけじゃねーか」

「邪魔って……そりやそうですよ。きっとその魔法使いは僕たちの邪魔をしたいんじゃないですか？ ジンさんでもたまに変なこと言うんですね」

クラッセの呆れた口調が聞こえる。

「ばっか！ だからなんのために邪魔すんだよ。あのな、ただでさえいきなり通路が9つに分かれた上に霧なんて立ち込めたら、誰だつてどうするか悩むもんだろーが。先の見えない道ほど不安なものなんてねーからな。だけどよ、邪魔なんてしてどーすんだよ。あの野郎はとにかく、殺したい殺したい、なんて考えてるあぶねーやつなんだよ。そんなやつがこんな回りくどいことなんてすっかつつの！」

ジンの言いたいことはこうだ。あんな強烈な殺意を持つ者ならば、わざわざ通路を増やしてみたり、霧で目をくらましたりしないでもつと直接的に攻撃してくるほうが納得がいくということだ。それがなぜわざわざ俺たちを足止めするような方法を取ったのか。

「それって、まるで魔法を使うまでの時間稼ぎしているみたいじゃない？ あたしもよく知らないんだけど、強い魔法を使うには長い呪文を唱える時間と精神の集中が必要だって聞いたことがあるわ。もしかするとこの霧とかつてそのため？」

「それだとこのままここにいたら危ないってことじゃないですか？ ！ 早くここから離れましょうよ！」

霧で遮られた周囲を見渡してリベルとクラッセの2人が叫ぶ。

その時だ、弾かれたようにジンが顔を上げる。

「なんの音だ、これ」

じつと耳を澄ますジンを俺たちが凝視する。

「音、ですか？」

「ああ、これは……金属の音か？ ガシヤンガシヤンてよ、おい、なにかが歩いてるような音がすんぜ！」

ジンの確信をもった言葉に俺はいやな予感がした。

「音なんて……するわね。それにこっちに向かってきてる？」

「ねえ、こっち、からも、音がするよ」

レミが逆の方を指して言った。

ガシヤン……ガシヤン……

確かに彼らの言う通り、金属の擦れ合うような音がする。

「これって鎧の音じゃないか？ 城の兵士たちが着てるような全身甲冑の。それもどの方向ってわけじゃない、全ての通路の先から聞こえてきてる！」

俺の言葉を合図に全員がそれぞれ通路を見渡す。

「どう考えたってこの状況じゃ友好的な相手ってわけにもいかなーだろうな。このまま来られても分が悪いぜ。ファイターはディールしかいねーってのに、ソードが折れちまってるんだからよ」

「この通路を行こう。囲まれる前に突破するんだ」

そう言っただけで目の前の通路を指す。どこに進んでも一緒なら決断は早い方がいい。敵が1人だけならば今の俺たちでもなんとかできる可能性はある。

「一本道とは限らねーかな、はぐれんじゃねーぞ、おまえら」

「わかってますよ」

「ジンこそね」

互いに確認し合う様子を宙に浮かんで見ていたリンリンが、レミ

の頭に腰を下ろす。

「近づいて、くる。急ごう」

話をまとめるようにレミが言った。

頷き合い、俺たちは9つに分かれた通路のうちのひとつを進む。走ることなどできない、互いを見失わないようにゆっくりと確実に歩みを進める。いつどこで通路が増えるかわからない、はぐれてしまえば、やつ、の思うつぼだ。なにせ、数歩も先を見れば深い霧で視界が遮られているのだ、焦って走ろうものなら俺たちはたちまち離ればなれになりかねない。

ガシャンッ……ガシャッ……

金属音が近づく。俺は役に立ちそうもない折れたソードの柄を強く握り締める。誰もが無言で霧の向こうの気配を窺っていた。と、

……！

妙な感じがしたかと思うと体の方が先に反応していた。とつさに近くにいたレミを抱き寄せて通路の端へと身をかわす。ジンが自分とは反対側へクラッセを蹴り飛ばすのが見えた。

ガッ！

霧を裂くようにして現れた巨大な斧が左右に分かれた俺たちの間の地面をえぐった。ジンは俺と同じようにリベルの手を引いて逃れていたようで、2人して壁に背をつけていた。

「な、なんだ？！ いつの間にこんな近くに来ていやがったんだ！」わけもわからずにジンが叫ぶ。霧のせいで感覚がおかしくなってもいたのだろうか。きつと誰もがこんなに接近されていたとは思っていなかっただろう。金属音はまだ離れていたはずだ。

信じられない気分で地面をえぐった斧に目をやる。長い柄が白い霧の先へと伸びていた。

「ハルバード……」

斧を見たレミがつぶやく。

斧だと思ったのだが、これはハルバードという武器だった。突き刺すのに十分な槍の穂先と、断ち切るための斧の刃、そして相手を殴

るための鉄状の柄と、用途に合わせて戦法を変えられる武器だ。だが、その長さと重量のために素早い攻撃は難しい代物だ。

「うわっ、見てください！」

クラッセが甲高い声を柄の伸びる霧の向こうへ向ける。そこには2メートル半はありそうな大男のようなシルエットが浮かんでいた。ガシャン

そのシルエットが揺れたかと思うと、振り上げられたハルバードが再び目の前に叩きつけられる。

「くっ！」

レミを背後に逃がして俺は折れたソードを構える。攻撃するにはなんの役にも立たなさそうだが、いざというときにはこれで攻撃を受けるしかない。とはいえ、重量のあるハルバードの一撃を受けようものならゾツとしないことになりそうだ。

「うおっと！ な、なんだこいつの動き！」

後ろに跳んだジンが悲鳴を上げた。彼の目の前をかすめたハルバードが横の壁に突き刺さる。

「動作は鈍いんだよっ、それなのに気が付いたときにはすぐ目の前に武器が迫ってきていやがる！」

すぐにジンの叫んだことの意味がわかった。壁に突き刺さっていたはずのハルバードなのだが、そこから抜けたかと思うと次の瞬間、気配を感じてかわした俺のいた場所の地面にハルバードの刃がめりこんでいた。

ジンは隙をついて後ろに回りこもうと考えていたようだが、全く出どころの见えない攻撃に動きあぐねているようだ。

「このまま戻ったら追い詰められちゃうわ！ どうするの？！」
リベルが悲痛の声を上げる。

「くっ」

出どころの見えない攻撃をなんとかかわす。少しずつだがジリジリと追い詰められていくのがわかった。

「リンリン、ゼンさんと話はできないか？」

後ろに下がると、レミの頭の上で黙っているリンリンに尋ねる。

魔法陣のある広間では離れた場所にいるゼンさんの声が聞こえたのだ。そういう魔法なのだろうが、今の状況でゼンさんと話ができれば突破の手立てになるかもしれない。

「今やってる。だけどね、ダメみたい。この中でバアバと話ができないなんて、今までなかったのに……」

目を閉じたままリンリンが何度も首を横に振る。

「やべーぜ、もうさつきんとこまで戻ってきちゃった」

刃の短いダガーでは攻撃をかわしつつ反撃するのは難しい。どこから来るかわからないハルバードを間一髪かわしたジンが叫んだ。

「うわぁ！」

振り向くとクラッセが悲鳴を上げて尻餅をついた。後ろに下がっていたクラッセは九差路のところまで戻っていたようだ。霧の先には目の前にいるのと同じような大男のシルエットが見えた。

「もう逃げ場がねーぜ！　ちつくしょお！」

ハルバードの一撃を後ろに跳んでかわす。横に並んだジンの顔が歪む。

「もう無理よ！」

リベルがその場にうずくまる。固く握り締めている杖は、うんともすんとも言わない。主人の命令がなければ強力な魔法を生み出す杖もただの棒きれだ。魔法も使えずにただ涙を拭う少女は今ほど自分の無力さを痛感することはないだろう。

ぐるっと周りを見渡すとすでにどの通路にも大男のシルエットが

仁王立ちしているのが見えた。クラッセが尻餅をついた体勢のまま後ろに退いていた。じとりと頬を汗が流れ落ちる。

「こうなりやけだ」

俺はソードの納まっていた鞘を左手に握り締める。

「お、おいっ！ そいつでどーしよーってんだよデイル」

俺の様子に気付いたジンが叫ぶ。

「俺が囷になる！ その隙にみんなを連れて逃げる！」

覚悟を決めるしかない。俺やジンはともかく、リベルとクラッセ、レミは武器すらもっていないのだ、ファイターの自分が行かずしてどうするのか。

「いくら攻撃の出どころが見えないといっても、何人も同時には攻撃できないはずだ！ ジン！ みんなを頼むぞ！」

「そりゃ無茶だぜ！ おめーはどうすんだよっ、おい！」

背中からジンの叫び声が届いたが、もう止まるわけにはいかない。制止する声を振り切るように走りながら鞘を大きく振りかぶる。ハルバードの間合いの外にいたときには見えなかった大男の姿が見えた。思った通りの全身甲冑で立っている大男、その兜の隙間からはまるで生気が感じられず、真っ暗闇だった。

（人間ですらない？！ やはり魔法で造られた兵士か！）

だからこそその不可解な動きなのか。人間ではあり得ない動きだとは思ったが、そのせいなのか？ そうだとしてもそれが攻撃の出どころが見えない理由になるのだろうか。もっと別の理由が……。

だが、そんな事を考えている場合ではない。目前に迫った鎧の兵士がハルバードを振り上げる。俺は鞘を振り下ろそうと腕に力を込めた。

ザシュッ

霧が朱に染まった。遠くからなにごとか叫ぶ声が聞こえた。俺は振りかぶった格好のままだった。なにが起きたのか一瞬わからなかったが、後ろに倒れ込んでしまった自分になにが起きたかすぐに理解できた。来ていた皮鎧は真ん中を鋭くえぐられている。鎧の兵士

が持つハルバードは俺の血を吸い、刃先からは赤い血がしたたり落ちていた。

「いやあああああああ！」

悲鳴がやけに頭に響いた。それにしてもどういことなのか。すでに鞘を振り上げていて振り下ろすだけの俺より、鎧の兵士の方が遅れてハルバードを振りかぶっていたはずだ。鞘で一太刀浴びせてから後ろに跳ぶ余裕くらいはあったはずなのだ。それがなぜ、俺はここで倒れているんだ？ 湧き上がる疑問にかぶせるように肩をぐつと掴まれた。

「言わんこつちゃねえ！ デイル、しっかりしろ！ 死ぬんじゃねえぞ！」

「うわああああ！ ぼ、僕が相手だ！」

俺の肩をゆさぶるジン、その俺の手からこぼれ落ちた鞘を握り締めたクラッセが俺たちをかばうように立ちはだかる。

「すぐに、薬草の、用意する、から」

傍にしゃがみこんだレミが言った。

（俺のことはいいから逃げてくれ！）

そう言おうとしたが声が出ない。鎧の兵士が無言でハルバードを振り上げる。このままではクラッセも同じようにやられてしまう！ 固く脛をつむったその時だ。

「えっ、なに？！ 誰よ！」

リベルの戸惑ったような声にうつすらと脛を開ける。

「わかったわ！ 続けて呪文を唱えればいいのね？！ やってみる！」

誰と話しているのか、リベルはひとつ頷くとなにか呟きはじめた。「ばかつ、どけ！」

ジンがクラッセの襟首を掴んで引つ張る。その目の前を強烈なハルバードの一撃がかすめる。

「なにごちゃごちゃ言ってたんだよりベル！ おいレミ、薬草はまだかよ！ うろちよろすんな坊主、おめーが敵う相手じゃねえ！」

3人に叫ぶジンの表情には焦りが見てとれた。キラキラと光を舞い散らせながらリンリンは鎧の兵士の周りを飛び回っている。陽動のつもりなのだろうが、鎧の兵士は全く意に介した様子がない。

「ちよつとやめてよ！ デイルの近くに行かないでったら！」

懸命に気を引こうとしてリンリンがわめく。

ガシャン、ガシャン、ガシャン

「囲まれた！ くそっ」

「リベルさん、そこで突っ立っていたら危険です！ 逃げてください！」

クラッセが目を閉じてぶつぶつ言っているリベルに叫ぶ。

「……暁より黄昏へ向かいしもの、万物を照らせしものよ」

リベルの声が徐々に大きくなる。うつすらと彼女の全身を赤いオーラのようなものが包み込みはじめた。

「えっ？ リベル……」

宙に浮かんだままリンリンが呟く。俺たちを囲んだ鎧の兵士たちが一斉にハルバードを振り上げた。

「おいっ！ 逃げろリベル！」

ジンが叫ぶ。その時、一陣の風が吹いた。熱風が俺たちの顔を撫でていく。

「邪悪なる意思を焼き払え！」

力強くリベルが杖を掲げる。その先端が彼女の言葉に応えるように真っ赤な光輪を描いて光輝いた。

突き出した杖から炎が噴き出す。熱気に押されて霧がさつと引いていった。リベルが生み出した炎は、まるで意思でも持っているかのように霧から姿を現した鎧の兵士へと向かうとその身を焼いた。ぐにやりと飴細工のように鎧が溶ける。次々と鎧の兵士を炎が飲み込み、そのたびに鎧の兵士たちは悲鳴すら上げずに溶けていった。

「魔法はまだ使えねーんじゃなかったのかよ？！ いや、にしてもすげえ！」

ジンが感嘆の声を上げる。

「炎が敵をやつつけていきますよ！ あれが最後の一体です！」

クラッセが叫ぶのと、炎が鎧の兵士を飲み込むのは同時だった。

「よっしゃあ！」

「リベル、えらい！」

ガッツポーズをとるジン。リンリンはリベルの周りをぐるぐると飛び回る。

「魔法使えたのかよ！ それならそうと、さっさとやってくれよな。デイルなんて死にかけて……って、おいデイル！」

「あっ……」

4 - 7 (後書き)

現在多忙のため、更新が遅れがちになっております。連載当初のペー
ースでいけば6ヶ月で終わらせられると思っていたのですが……。
暇が出来次第、遅れを取り戻すつもりで書いていきます。(青秋)

傍らのレミが小さく驚きの声を上げる。

「あ、れ？ 傷が、ない」

見るとレミの言う通りに傷がなかった。治ったというよりも、むしろ最初から存在していなかったように皮鎧にはえぐられた跡すらなかった。

「わけがわかんねえ」

「痛みも全くない。いや、そもそも痛みの感覚すら麻痺していたのか、よくわからなかったんだが……。しかし、これは一体」

怪訝な顔をするジンと顔を見合わせる。

「でも無事でよかったですよ。リ、リベルさん！ 大丈夫ですか？！」

その声でリベルの方へ振り返ると、頭を抱えてふらつと揺れたりベルがその場に膝をつく。

「大丈夫よ。ちよつとめまいがしただけ」

そうは言うが本当に大丈夫なのだろうか。なにしろリベルは病み上がりだ。どうやって魔法を使えるようになったのかはわからないが、めまいの原因はそのせいかもしれないのだ。

「これ以上無理すんじゃないぞ、あとは俺らに任せろ。それにしたってすげえもんだぜ魔法ってやつあ」

「いつの間に使えるようになったんですか？」

白い歯を見せるのはジン。不思議そうな顔をしたのはクラッセだ。今のままでは魔法が使えないと言ったのは他でもない、リベル自身なのだ。それが急にどうしたのか、クラッセでなくとも疑問に思うところだろう。

問われたリベルは軽く頭を振った。

「声が聞こえたの」

心ここにあらずな様子でリベルが答える。

「声？」

レミの黒いフードがピクリと動いた。そんなレミになにか心当たりでもあるのかと僅かに期待したが、彼女はそのまま黙り込む。

「ええ、女の人の声。とても優しい声だったわ。言われたとおりに呪文を唱えたらだんだん体が熱くなってきた……」

その時の感覚を思い出したのかリベルは目を閉じて静かに言った。
「よくわからないが、自由に魔法が使えるようになったってことなのか？」

俺は尋ねてみる。もしそうなら、これからの戦闘が随分と楽になる。別にさつきみたいなさぐい魔法じゃなくてもいい、魔法で援護してもらえただけでも結構な戦力になるというものだ。

「うっん、きつと無理よ。あの声が誰なのかわからないけど、あたしで意思で魔法を使ったわけじゃないもの。きつと、おばあちゃんがかくれたこの杖のせいじゃないかしら」

そういつてリベルはもらったばかりの杖に目をやる。彼女はなにか問いかけるような視線を注いだが、杖の先端に鎮座している碧の宝石はなにも語らない。はあ、とリベルはため息をつく。

「ちえー。まあいいや、先を急ごうぜ。ディールの怪我が無しになつてんのも、リベルが聞いた声ってーのも、わけわかんねーことばっかだけどよ、考えても仕方ねーことは考えねーに限るってもんだぜ」

楽天的に言うのはジンだが、確かにそのとおりだ。冒険者になつたばかりの俺たちが推測できるようなことなんて、たかがしれていゐる。幸いにも俺たちにはゼンさんという味方がいる。わからないことは彼女に聞いたほうが確実というものだ。それに、

「そうだな、またいつ邪魔が入るかかわかったものじゃない。リンリンがゼンさんと話がでなかったってことも気になるしな。早く宝物庫に行つて目当てのものを見つけたら戻ろう」

そう言う俺に4人が頷く。

「バアバ、どうしたんだろ……」

リンリンだけが浮かない顔でクラッセの肩に腰を下ろした。

「宝物庫つてのはどこにあんだよ」

再び通路を歩きはじめて10分ほど経ったとき、ジンがぼやいた。
「もうすぐだつて。ジンジンったら堪え症がないなあ」

ふわりと飛んだリンリンがジンの頭に乗るとポカリと叩く。

「つて！ なにすんだこのチビスケが！」

怒ったジンがリンリンを掴もうと手を伸ばすが、それをひらりとかわして彼女は笑う。

「あつはは、そんなに元気があるなら文句言わないの。そんなことよりちゃんと周りを見張つててよね」

「けー！ わかつてらい！ …… ハアハア、余計な体力使っちゃったぜ」

空を飛べるリンリンとの追いかけっこはさすがに分が悪いと悟ったのか、すぐに諦めたジンが肩で息をつく。頬から一粒の汗が流れ落ちる。

「なんか暑くねーか？ いや、俺の気のせいだよ？」

ジンが額を袖でぬぐいながら言った。

「いや、俺もそう思ってたところだ。これもやつのせいかな？」

強い悪意を持った未だ姿を見せない敵のことを想像しながらジンに顔を向ける。なぜかはわからないが通路はだんだんと暖かくなってきた。それが何者かの魔法によるものなのか、どんな理由があるのか、とにかく皮鎧の内側がじつとりと汗ばんで気持ちが悪いくことこの上ない。今度は一体どんな攻撃を俺たちに仕掛けようというのか、一瞬たりとも気が抜けない。

「本当に暑いわね。もうっ、お風呂に入りたいわ！ ちょっと、こっち来ないでよね」

そう言っただけでリンリンは1人端に寄る。

「どうしたんですか？　なにが起こるのかわからないですし、できるだけ固まって歩いたほうがいいですよリベルさん」

クラッセが不思議そうな顔で端を歩くリベルに声をかける。

「へっへっへ、そうだぜ。坊主も心配すっだろ？　こっちに来て」

なぜかにやけた顔でジンがリベルの方へ歩み寄る。一体なにが面白んだ？

「来ないでよ、ばかジン！　ちょっと、リンちゃん、こいつなんとかしてよー！」

ジンから身をひるがえして避けるリベル。彼女がどうして俺たちから離れたがっているのかは俺にはわからないが、なぜかいやがっているようだ。

「ばかジンジン！　ほんとデリカシーないんだからっ！　リベルがいやがっているでしょ、離れなさい！」

リベルのピンチに気づいたリンリンがジンの髪をこれでもか、というくらいに引っ張った。

「いでっ！　いいじゃねーかよ、減るもんじゃねーし。これから一緒に冒険してくんだ、汗の臭いなんざ気にしてたらやってけねーって。それをわからせるための儀式みたいなもんなんだよ」

「ああ、そういうことだったんですか」

クラッセは手のひらをポンと打って感心している。俺もリベルの行動に合点がいった。つまり、俺たちに汗をかいた自分の近くにきてほしくなかったというわけなのだ。クラッセもそうだが、つくづく自分が女心をわかっていないのだと思う。もしかして俺は鈍感な方なのだろうか？　その点、すぐにそれを察したジンはすごい、と思ってしまう。これで、あんなちゃちゃを入れなければ、話術も巧みだし女の子にモテそうなところだが、そこに気づいていないところがある意味損をしている所だと思うのは俺だけだろうか。

「あの扉、かな？」

なおも下らない言い合いを始めるジンたちを尻目に、我関せずを

決め込んでいたレミが指をさして言った。これだけの暑さであの黒いローブを深々とかぶっているわりにレミは全くそれを感じさせない口調だ。そんな彼女を不思議に思いながらも通路の先に目をやる。「どうやらそのようですね。急ぎましょう、ほらジンさんもリベルさんも」

クラッセが言い争っている2人に声をかける。

「おっしや、とつともらうもん頂こうぜ！」

扉を見るならジンが走り出す。

「ちょ、ちよっと！ 待ちなさいよ！ ほら、デイルたちも急ぐのよ！」

リベルがジンの後を追いつ、リンリンも続いて飛んでいく。そこには先ほどの疲れは感じられなかった。そんなリベルにひと安心しながらクラッセとレミに顔を向ける。

「やれやれだな。じゃ俺たちも行こうか」

「そうですね。デイルさん、疲れた顔をしてますけど、大丈夫ですか？」

本気で心配そうな顔でクラッセが俺を見返す。

「はは、あの2人を見てたらな。だがまあ、連戦続きとはいえ、まだまだ元気さ。ほら、レミも行こう。きっとゼンさんが待ってる」

クラッセに苦笑を返してからレミを見る。

「もしかすると……でも」

「どうしたんだ、レミ？」

俯いたままぶつぶつというレミに首をかしげる。俺の声に気づいたレミは顔を上げると、

「うつん、なんでも、ない。行こうか」

フードの奥から蒼い瞳が俺を見た。なにか気になることでもあるのだろうか。先ほどのレミの態度には気にかかることもあるが、今は先を急ぐことにする。だが、後でゆっくり話しをできる時間があれば聞いてみよう。出会ってそれほど時間は経っていないが俺たちはパーティーなのだ。仲間の力になれることがあれば惜しま

ず力になろう。先に扉をくぐる少女を見ながら俺は思った。

扉をくぐると剣や槍が所狭しと並んでおり、別の一角には魔法のアイテムと思しき品物が山積みになっていた。

「すごいな、この光景」

感嘆の声が同時にいくつか上がった。

「ゼンさんってやつぱりとんでもない人物なんじゃないでしょうか。いやすごいですよ、これならデイルさんにぴったりの剣がありそうですね」

クラッセがそわそわとしながら言い、ジンは「ひゃっほー!」、飛び上がりながら宝の山へと駆けていく。

「ぐげっ」

その襟首を掴んだのはリベルだ。

「もうっ、必要なものだけよ、持っていくのは。なんでもかんでも持っていこうとしたら、あんた、本当にカエルにされちゃうわよ」

「け、ケチくせえな。わかってるっつの。んでもよ、シーフとしては一通り確認しておかなきゃ気がすまねーんだって」

出鼻をくじかれたジンがしぶしぶと言いつつ訳をする。

「そう言いながらリュックサックのチャックを開いてましたよね」

「まったく手が早いやつだ」

クラッセと2人で半眼になってジンを見る。

「おっ、このダガーなんていいじゃねーか」

ジンにとつては俺たちが呆れて見ていることなど気にもならないことのような。さっそく並んでいる武器の中を物色しはじめる。

「僕たちも武器を探しましょうよデイルさん。デイルさんはやつぱり剣を探すんですか？」

呆れていても仕方がないとわかったのか、クラッセもジンに続く。「そうだな。槍の扱いはわからないし、慣れている剣の方がいい。クラッセはどうするんだ？ やつぱり斧にするのか？」

クラッセといえば森に出てすぐにお兄さんの形見であるという戦斧をなくしたまま、今の今まで丸腰だったわけだが、せつかくこれだけ武器を選ぶのだから使いやすいものを選んだほうがいいのではないかと、ついお節介ながら思ってしまう。あとで斧を取りにくにしても彼にはあの重量のある戦斧は扱えないだろう。今まではなんとか無事でこられたが、これから先もそうであるとはいえない。ずっと守っていてあげればいいが、彼1人でなんとかしなければならぬ局面もいつか必ずくる。その時に使えない武器を持っていたのでは……。

「安心してください。このショートソードなんか良さそうですね、うん。いつまでも皆さんのお荷物になっていたら天国にいる兄さんに叱られちゃいますから」

照れくさそうに頭をかきながらクラッセが言った。

「あら、装飾が凝っているわね。ちょっと素振りしてみたら？」

ショートソードを手にしたクラッセに気づいたりリベルが声をかける。彼女自身はゼンさんから杖をもらったので、特にすることがないらしい。ジンのリュックサックを取り上げたようで、大量に盗まれる心配がなくなったので、のほほんとクラッセを見ている。

「いいじゃない。クラッセはそれにしたら？」

「ええ、僕もこれが気に入りましたよ。これで皆さんにはもう迷惑をかけませんよ」

クラッセがリベルと笑顔で笑い合う。そんな彼を見て、俺は自分の心配が杞憂に終わったと知り安心した。見た目はただの弱弱しい少年だが、芯はしっかりとして強く持っているのだ。中には亡き肉親を想うがゆえに形見に似た品物を持つことにこだわる者もいるだろう。だが、クラッセは思い出の中に逃げこまずに、ちゃんと現在^{いま}を見て、大事な道を選ぶ。外見だけでは計れない強さを持っているのだと笑顔の2人を見てみると、自分もしっかりしなくてはと決意を新たにす。あの笑顔を生かすも殺すも、その一端を自分が担っているのだ。ずらりと並べられている剣に視線を移すと、1本の剣に目が留まる。

何の変哲もないただの剣だった。年季の入ったような薄汚れた黒色の鞘に収まった剣の握りの端には、小さな赤い宝石の玉がついていた。なんととはなしに拾い上げようと、剣に手を伸ばす。

「つつ!」

柄に指先が触れた瞬間、激しい痛み^{いたみ}に手を引っ込める。まるで火で焼いた鉄の棒に触れたときのようなのだ。そこでやめにして別の剣を選べばいいようなものだったが、その剣がなぜか妙に気になり今度はおそろおそろ鞘に触れてみる。

「なんともないな」

鞘を持つて拾い上げると、意を決して柄に指先を当てる。……特に熱くはない。鞘から刀身を一気に引き抜くと、銀色の刃が灯りを受けてキラリと光った。その広い刃は分類するならブロードソードに当たるだろうか。

そういえば不思議なことだが、鎧の兵士たちが襲ってきた9つに分かれた通路がなくなっただけというものの、ほのかな灯りが通路を照らしはじめたのだった。宝物庫に入ると、外の昼間と大差ない灯りが俺たちを出迎えた。お役御免となったロウソクたちはどこことなく元気がなくなり、今は宝物庫の隅でしょんぼりとしていた。

「よう、どうかしたのかよ？」

掲げたブロードソードをまじまじと見ている俺にジンが意気揚々と声をかける。お気に入りのダガーが見つかったようで、彼はホク顔だ。見れば手に持っているのは別に、ベルトにも2本のダガーが差されている。

「いやなに、なんでもないさ。ジンもいいダガーが見つかったのか？」

問われてジンは唇の端を上げる。

「まーな。つっても使えるのはこの3本とこだな。こいつはリベルには秘密だぜ？ ほら、これなんてでつけー宝石がついてんだろ？ きつと高く売れるぜえ」

そういつてジンは懷に忍ばせたダガーをこっそりと見せた。金銀をちりばめたような豪華な鞘に収まっているそのダガーにはジンの言うように大きな宝石がついており、戦いに使う武器というよりは儀礼用の品物といった風だ。

「おまえなあ」

リベルにリュックサックを取り上げられてもめげない男だ。転んでもただでは起きないとはこの男のためにある言葉だろう。

「その台詞は本人に直接言ったらどうだ？」

「へっ？」

俺の言葉にジンはおそろおそろ後ろを振り返る。そこには仁王立ちのリベルがいた。

「この……ばかジン！」

「待てっ！ こんなにいいいだろ？！ あのバーサンだって勝手にもってけって言ってたじゃねーかよ」

慌てて逃げようとするジンの顔にリュックサックが飛んできた。続いてリンリンがどこから見つけてきたのか小さなハンマーでジンを殴りはじめる。

「よく飽きませんね」

もはや達観したようにクラッセが言う。

「まったくだ」

誰かお茶でも煎れてきてくれるのならば、2人してすすってられるような気分である。

「リンリンが一緒になってからというもの、ジンはリベルに頭が上がりなくなってきたいるなあ」

「やつぱり1対2じゃ分が悪いんじゃないですかね」

2人してしみじみしていると、ふいに皮鎧の背中をトンと叩かれ俺は振り向く。

「これ、かな」

レミが5つ指輪を乗せた手の平を俺に見せる。

「ああ、ゼンさんの言ってた魔法の効果を強くする指輪ってやつかな？」

俺が聞くとレミは頷く。

「あー、それぞれ。確かそれだったよ！」

俺たちに気付いたリンリンがふわりと飛んできてくる。

「こいつがありゃあ、俺らでもなんとかなんのか？」

リベルとリンリンの攻めからようやく解放されたジンが言った。

すでに疲れ果てたような顔だ。

「どうだろうな。とにかくすぐにでもゼンさんの所へ戻った方がいいんじゃないか？」

俺もジンもクラッセも戦うための武器は見つけることができた。

レミはレミで護身用なのか、小振りの杖のようなものを手にしていた。言いながら指輪を中指にはめてみる。その瞬間、体に精気がみなぎってくるような感じがした。

『どうやら指輪を見つけたようだね』

するとすぐに頭の中で声が響いた。

「ゼンさん?!」

「バアバ?! どうしてたの、心配したんだから!」

リンリンが声を大にして叫ぶ。

『相手は思っていたよりも強い魔力のようですねえ、さっきまでこっ

ちの魔力を遮断されていたのさ。だけどねえ、まさかこんなお嬢ちやんがねえ……」

ゼンさんの声は言いよどむように小さくなった。

「お嬢ちゃんって、リベルのことか？」

キョトンとした顔でジンがリベルを見る。

「えっ。な、なによ?！」

全員の視線が集まったりリベルは両手で体を庇うように一歩後ろに下がる。

「リベルがどうかしたんですか？」

俺は姿の見えない老婆に向かって問いかける。もしかしたらリベルが聞いたという声となにか関係があるのかもしれない。数拍おいてゼンさんの声が響いた。

『もう何十年も前に眠りについてしまった魔道機構をそこのお嬢ちやんが起こしたのさ』

5・都、騒乱

俺たちはゼンさんのいる部屋まで急ぎ足で戻った。ついさっきまでは黙っていても知らずと汗が出てくるほどの暑さだったが、今はその暑さも引いている。

結局、俺はブロードソードを1本だけもらっていくことにした。皮鎧は冒険者になるために買ったばかりだったし、折れたソードの代わりが見つかっただけでも十分だ。迷いながら選んだ鎧だけあって愛着もあるのだ。クラッセはショートソードの他に俺と同じような鎧を装着していた。お兄さんの形見であるという戦斧以外には何もっていなかった彼にとっては大きな収穫だろう。「冒険者になんのに使えねー斧1本だけでよく来たもんだぜ」、ジンは呆れながらクラッセに言っていた。

レミは護身用に持っている杖が1本だけで、リベルはゼンさんから事象石のついた杖をもらっていたので、他には白いマントだけを羽織っていた。反対にジンはといえば、戦闘用のダガーが3本に、結局リベルとリンリンの攻撃を振り切ってもってきた豪華な装飾が施された儀礼用のダガー、魔法の効果を上げる指輪の他にも10本の指の全てに異なる指輪がはめられていた。

「あんた……よくあたしたちの目を盗んでそんなに持ってきたわね」
がつくりと肩を落としそうにリベルが言ったのはゼンさんの部屋にたった頃だ。

「おめーみてーな小娘に気付かれるようでシーフなんざやってられつかよ」

ニヤリとするジンの頭をリンリンの小さなハンマーがポカリと叩く。

「それもひとつの才能かねえ。まあそんなに目くじら立てなくてもいいさ。誰にも使われずにひっそりと眠っているよりは、あんたみたいな坊やだとしても使ってもらえる方が幸せなのかもしれないか

らね」

その様子を見ていたゼンさんがしわがれた声で言った。

「だろー？ 話がわかるぜバーサン」

「調子にのらないの」

ニヤニヤと笑うジンをキツと睨んでリベルが言った。

「お嬢ちゃん、名前はなんと言ったかねえ」

唐突に聞かれてリベルはジンから視線をゼンさんへと移す。

「リベルよ、おばあちゃん」

「彼女がどうかしたんですか？ 魔道機構とかおっしやいましたね、リベルが起こしたとかなんとか」

俺はリベルに代わってゼンさんに尋ねる。その魔道機構とかいうものを起こすとどうなるのかはさっぱりだが、ゼンさんの口ぶりからするとただごとではなさそうだ。

「あたし、なにもしてないわ。なにかの間違いじゃないかしら」

首を捻りながらリベルが言う。メイジでありながらついさっきまで魔法を使えるようになるのはまだまだ先だと思っていた彼女にとつては、まさに寝耳に水の話だろう。

「いいや、お嬢ちゃん……リベルだね、あんたがやったのさ。この感覚、懐かしいね。あたしの師匠がいなくなつて以来だからね」

ゼンさんは昔を懐かしむかのように目を細めて言った。

「おいおいバーサン、一人で懐かしんでいねーで俺らにもわかるように説明してくれよ」

じれったそうにジンが言った。

「気の短い坊やだねえ。まああまりのんびりとしてもいられないね。手短に話すと、ここはあたしの師匠が作った”テイタリア小さき太陽”と呼ばれていた場所なのさ」

「”小さき太陽”？ なんだそりゃ」

いまひとつピンとこないジンが言った。それは俺も同じで、隣を見るとクラッセも首を捻っている。

「待って……どこかで聞いたことがあるわ。どこだったかしら、最近聞いた名前だと思うんだけど」

リベルが必死に思い出そうとする。そんな彼女を俺たち3人がじっと見つめると、

「ちよつと！ そんなに揃って顔を見られたら思い出せるものも思っ出せないわよ！」

仕方なくゼンさんの言葉を待つことにする。すると、

「メイローズ・ウルヴァン」

ポツリとレミが漏らす。

「え？ なんですかレミさん」

聞き取れなかったらしいクラッセがレミに尋ねる。

「ここの、本来の所有者。深紅の、魔道師。その弟子は、レンゼン・ファスタ」

「レミよお、俺らにもわかるように説明しろよ」

またも話が見えずにジンがぼやく。

「やっと、繋がった、よ」

レミの視線はまっすぐゼンさんを見ている。

「その名前ならあたしも知ってるわ。あのデュランドー・シギルと一緒に旅をしてたっていうメイジでしょ？ デュランドーが有名になりすぎて知ってる人は少ないけど、メイジなら誰でも知ってるもの。えっ？ もしかしてレンゼンって……ゼンおばあちゃんのことだったの？！」

信じられないといったような顔でリベルが言った。

「ん〜？ そんな名前だったかな、バアバ。なにになに？ バアバってもしかして有名人？！ すごい人なの？」

リンリンがパツと顔を輝かせる。レミやリベルの口ぶりからするとそうなのだろう。だが、俺たちにはいまいちピンと来ない。確かにデュランドー・シギルは有名だが、妖精を連れているということ

の他には彼は常に1人で旅を続けていると伝記には書かれているのだ。

「すごい魔法使いに出会っていたのね、あたしたち……。深紅の魔道師っていったら今でも最高峰に数えられている魔道師の1人だもの！ おばあちゃんだってすごいだよ、デュランドーやメイローズと一緒にたくさんモンスターを倒して、デュランドーたちがいた時代はモンスターに脅える必要なんてなかったそうだから！」

興奮するリベルにジンが「そいつあすげえ」と感嘆の声を上げる。モンスターのいない平和な時代があったなんて、それもゼンさんがその平和に一役買っていたというのだ。そんな人物に俺たちが出会ったというのはすごいことではないか？

「小さき太陽」は、深紅の魔道師、が造った、魔力増大システムにして」

「魔族を打ち滅ぼすための要塞さ。若いのにそんなことまで知っているなんて大したもんだねえ。だけど、主を失ってから眠りに入ってたまま、今の今までこんなことなんてなかったのにね。まさか今になって眠りから覚めるなんてね」

レミに続けてゼンさんが言った。その言い様は今でもこの要塞が目覚めたことが信じられないといった様子だった。

「それが目覚めるとどうなるんですか？」

クラッセが尋ねる。

「さてね」

短くゼンさんが返す。

「さてね、ってバーサンもメイローズってのと一緒にモンスター退治してたんじゃないのかよ！ 知らねーってこたねーだろが」

とぼけた表情のゼンさんにジンが言い返す。彼の言うことももつともだ。彼女が知らなくて誰が知っているというのだろう。だがゼンさんは大きくかぶりを振る。

「本当に知らないのさ。師匠やデュランたちがモンスター退治の旅に出ていて、それにあたしもついていったというのは本当さ。だ

けど、あたしはその頃まだ子供でね。弟子といっても実際には何の役にも立たない小娘だったのさ。事實は大きく捻じ曲げられて伝わっているだけだね。モンスターの少ない時代になったというのは本当だけれど、全てが退治されたわけじゃないよ、影を潜めて隠れていただけなのさ、デュランたちの脅威からね」

ゼンさんはそう説明すると、「ほら、その証拠に今でも街を出ればモンスターがいるじゃないか」と言った。

「大勢いる弟子の中からあたしが選ばれてこの要塞を継いだのはいけれど、師匠がいなくなった途端に眠りについちまったのさ。デュランもいなくなつて、多くの戦士たちも散り散りとなつてね。今さら目覚められても、あたしに”小さき太陽”^{こいつ}を扱う術なんてないんだよ」

そう言うゼンさんの表情はなぜだか寂しげなように見えた。

「ちよつと待てつて。なんか話が飛びすぎじゃねーか？ この要塞がどうとか俺にはなんのことやらわかんねーけどよ、今一番大事なのは、”あいつ”だろ、森で俺らを襲ったやつ。人に歴史あり、つてのもいいけど、このまんまじゃーブユツフェが襲われるかもしんねーんだろ？」

思い出したようにジンが言った。めまぐるしく事態が転々としてつい忘れてしまいうことになるが、こんなところでゆつくり昔話をしている場合ではなかった。

「この要塞の扱いはわからないけどね、”小さき太陽”が目覚めたつてことには特別な意味があるつてことだけは知っているよ」

「特別な意味？」

神妙な顔つきになったゼンさん。俺は思わず聞き返す。

「あんたらを襲ったのは”闇に憑かれた者”^{パラサイトイビル}だろうね」

そう言つたゼンさんの顔が曇る。

「どうかしたんですか？」

ゼンさんの様子にクラッセが尋ねる。

「思ったよりも早いね。禍々しい魔力がこのあたりから離れていつ

ているよ。向かう先は」

「まさか、ブユツフェ?!」

危惧していたことがその通りになってしまった。脳裏には黒い蝶が街中を覆い尽くしている光景が広がる。ぞっとしない光景だ。

「バーサン、ここがどのへんなのか教えてくれよ」

素早く地図を開いたジンが言った。リンリンが俺たちを移動させた時のような魔法をゼンさんが使えれば話は早かったのだが、彼女はそんな魔法は使えないと言った。リンリンが持っている魔法のアイテムはゼンさんの師匠であるメイローズにしか作れない特別な代物らしく、他の誰にも作れないのだとゼンさんは言った。

「ここ、ここっ! あっ、印までついてる!」

リンリンが地図の一点を指して言った。

「げえ、なんだよー! お宝の在り処じゃなかったのかよ!」

大仰な仕草で悔しがるジンの様子に横から地図を覗き込むと、リンリンが指しているのは、最初にジンが見つけて「宝が埋まってる」と大騒ぎしていた場所だった。

「すぐには着かない距離ですよ」

困ったようにクラッセが言った。

「2時間はかかるな。しかし、行かないわけにはいかない」

とはいうものの、ここに来るまでに遭遇したウォーラーやブレスなどのモンスターのことを考えるとげんなりする。あれだけ苦労してきたのにまた遭遇するかもしれないのだ。街にたどり着いたときにはヘトヘトになって動けないのでは笑い話にもならない。

「それなら心配いらないよ。あたしには移動の魔法は使えないと言ったけど、街の近くに移動する方法ならあるからね」

「それを早く言ってくれよ!」

鶴の一声がかかり俺たちはゼンさんを見る。ジンだけはムツツリとした表情だ。よほど財宝の在り処でなかったことが残念でならならしい。

「この要塞には街へ行き来できる転送装置があるのさ。それも」小

さき太陽”が目覚めたからこそ使えるようになったわけだけどね。あたしも移動できる場所の全てを把握しているわけじゃないけど、5番の部屋から移動できたはずだったかねえ」

ゼンさんはそう言うのと1枚の古い地図のようなものを取り出す。見てみるとこの要塞の見取り図のようだった。

「すごいわね……この広さ。森の中にこんなに広い要塞があったなんて」

リベルは驚きのあまり、二の句を継げずに地図を眺める。

「ちよつとした街くらいのでかさはあるよな。つと、その5番の部屋つてのはこれか？」

「それだな。よし行こう」

そう言つて立ち上がる。

「あつ、待つて」

リベルの制止に足を止める。

「魔法のこと、だね」

レミの言葉にリベルが頷く。

「いっけね、忘れてたぜ。なあバーサン、リベルのやつ、急に魔法を使えるようになったんだけどよ、どうしてなんだ？ 魔法つてやつあ、呪文とか覚えてないと使えないもんなんだろ？」

「それに契約だつて済ましていないわ。それなのに魔法が使えたのはどうして？ この杖のおかげなの？」

リベルが杖を見せて言つた。そうだ、まだリベルが魔法を使ったことに関しては何も解決していない。ここではつきりさせておきたいところだ。

「それはあたしが昔使っていたものでね、師匠からもらったものさ。必要なときに必要な魔法の呪文が脳裏に浮かんでくる。リベルもそうだったろう？ そうやつて自分に扱える魔法のコントロールを覚えていける杖なのさ」

「必要な魔法、か。じゃあ、それだとリベルの意思で自由に魔法が使えるつてわけではないんですね」

少し残念に思いながら尋ねる。そうになると、さつきみたいにピンチにならなければ魔法が使えないということになるのだろうか。だが、魔法を使えなかった時よりはずっといい。

「さて、話は終わりだよ。最後にあんたらに魔法をかけてやるよ。祝福の魔法さ」

そう言ってゼンさんは呪文を唱えた。一瞬だが俺たちの体が光った気がした。

「これで精神攻撃は効かなくなるはずさ。くれぐれも気をつけるんだよ」

俺たちはゼンさんに礼を言う部屋を後にした。最後にゼンさんは急ぐ俺たちに”闇に憑かれた者”について語った。

闇に憑かれた者、それは時代の節目に現れてはこうやって人々を襲う魔物だという。そんな魔物を冒険者になりたての俺たちにどうにかできるのだろうか、不安に駆られそうになる俺たちにゼンさんは「大丈夫」と言った。本当の強さとは腕力の強さや魔力の大きさではないのだと。守りたいと願う心こそが本当の強さなのだ。今思えば、ゼンさん以外にも遠い昔に誰かに言われたような言葉だ。それが誰に言われた言葉なのかは思い出せないが、今はそれを信じるしかない。俺たちはブツフエにいる人々を守りたい。村がモンスターに襲われて、俺は何もできなかった自分が悔しかった。悔しくて悔しくて、今度こそは守れるようになると誓った。だからこそ俺は冒険者になったのだ。

「でもリベルさんが聞いた声って、一体なんだったんでしょうね」

”5番”の部屋に向かうための通路を歩いていると、ふいにクラッセが言った。

「そういう杖、だってことなんですかね？」

そういうクラッセに、俺はジンと顔を見合わせた。

「ゼンさんが師匠のメイローズって人からもらった杖らしいから、きつとそうなんじゃないか？ これだけの要塞を作る人だ、言葉を話す杖くらい作れてもおかしくないと思うけど」

「まー、そーゆーこつたる。呪文が浮かんでくるとかなんとか言ってたけどよ、年寄りの記憶なんざあてになんねーしな」

2人に言われてクラッセは「そうですね」と軽く返事をする。当の杖をもっているリベル本人は少しだけ考えるような表情だったが、

「もうすぐ5番の部屋につくよ」

リンリンが言い、俺たちが足早になったのを見て、気をとりなおすように「急ぎましょ」とだけ答えた。

部屋に入ると小さな魔法陣が床に描かれていた。リンリンが取り出した鈴をひとつ鳴らすと、ふっ、と体が浮き上がるような感覚になった。そして、次の瞬間には辺りが一変していた。

目の前には石碑がぼつんと立っていた。文字が何行か刻まれているが読むことはできない。魔法の呪文かなにかなのだろう。俺たちは森の少し開けた小高い丘のような場所に立っていて、木々の隙間からは遠目に街が見えた。急げばそんなに時間はかからないだろう。「ここからじゃ状況がわからねーな。さっさと行こうぜ」

きびすを返しながらジンが言った。彼の方を見ると山道がなだら

かな傾斜を描いて街へと続いているようだった。

「なんだか今日は走ってばかりね、あたしたち」

街を目指して走っていると、隣を走るリベルが言った。肩をすくめて苦笑を浮かべている。

「ほんとにな。冒険者つてのは実には大変な稼業だよ」

同じく笑い返しながらリベルを見るとジンが叫んだ。

「おいっ、見ろよ！ 黒い蝶だぜ！」

瞬間に緊張が走る。リベルと頷き合うと俺はブロードソードの柄にそつと右手をかけた。

木々が開けると、そこには外壁に囲まれたブツフェの街と、その上空を覆い尽かささんばかりの黒い蝶の大群が群がっていた。

外壁をたどつて門へと急ぐと、普段は両脇に立っているはずの兵士たちはそこにいなかった。その代わりとでもいうように、門から覗く街の中からはいつもと違った異様な雰囲気漂っていた。

人々がざわめきながら天を仰いでいる。異常なほどの数の飛来してきた黒い蝶に不穏なものを感じずにはいられないのだろう。

「ど、どうすればいいんですかね僕たち」

街へ着いたものの事態を解決する方法がわからずクラッセが言った。

「どうつて……」パラサイトイベル 闇に憑かれた者” ってやつを見つけ出してやつつけりゃーいいんだろーがよ」

小さく舌打ちしながらジンが言う。そういう彼もどうやって”闇に憑かれた者”を探し出せばいいのか見当もつかないのだろう。森にいたときには向こうから襲ってきたが、これだけ大勢の人がいる中でわざわざ俺たちを狙って襲ってくるとはわからない。なにしろ、俺たちを襲ったことに理由が見つけれないのだ、たまたま近くにいた俺たちを狙っただけかもしれない。

「あ、あんたたちっ、冒険者ギルドの人たちかい？　なんだいありや、ちよつと前から見かけられるようになったと思つたら、いつの間にか空を埋め尽くしてねえ……。気味が悪いったらないよ！」

「おばちゃん、ちよつと前つてこたあ、まだ誰も怪我とか襲われたりしてねーのかよ？」

俺たちの姿を見かけたのか、不安げな様子で話しかけられて、ジンは聞き返す。

「怪我なんて誰もしてないよ。あれはモンスターなのかいやっぱり」
「大丈夫、たとえモンスターでも冒険者の俺たちがなんとかしますから」

胸を張って言えるほどの自信もないが、余計に心配させないように言う。

「そうかい。門番の人たちは見回りするって他の人たちとどこかへ行つたよ」

俺は空を見上げる。黒い蝶が埋め尽くしているが、一向にそれが降りてくることはない。まるで様子でも窺っているかのようだ。嵐の前の静けさとはこのことを言うのだろうか。

大通りを進むと、やはりどこもかしこも人々は空を眺めていた。

「その”闇に憑かれた者”ってやつを魔力を探り当てることつてできねーのか？」

「ちよつと！　魔法が使えるようになったばかりなのに、そんなことできるわけないじゃないのよ！　……熟練のメイジならできるかもしれないけど、あたしには無理よ」

悔しそうにリベルが言った。彼女もできることならそうしたいだろう。それができず一番はがゆい思いをしているのはリベル本人だ。

「これ、どう、思う……？」
背後の小さな声に思わず振り向く。

「どう思つて……杖が光ってますね。なんですかそれは？」
クラッセがまじまじとレミの持つ杖を見つめる。杖の先端が淡く光っていて、それをレミは俺たちに見せる。

「魔法の武器だから、強い魔力に反応しているのかしら？」

レミから杖を受け取りながらリベルが言った。その途端、杖は大きく輝きだした。

「きゃっ、なに?!」

いきなり輝きだした杖の先端を眩しそうに遠ざけるリベル。

「なんだ、光が収まったな」

「一瞬よお、魔力を持っているリベルが持ったから光ったと思ったけど、なんか意味……アッ」

「どうしたんだジン」

何を思いついたのかリベルから杖をひったくるようにして奪ったジンが、杖を掲げながら一回りする。俺とクラッセ、リベルは何事だろうとその様子を見ていたが、レミは「そういう、こと」と納得したように言った。

「つまり、ほれ」

ジンが大通りのななめ向こうへと向けた。

「あ、光ってます。それってどういうことですか？」

「にぶいやつだな。これってきつとよお、敵さんのいる場所を指してんじゃねーかってこと」

「ジン、その敵ってというのは……」

「闇に憑かれた者”……かも、ね」

そう言ってレミが続ける。

「ゼンさんは、時代の節目、に”闇に憑かれた者”が現れると、言ったよね。そして、それは”小さな太陽”^{ティダリア}が、目覚める、とき。つまり、その時のために、用意、していたのが、宝物庫に、あった……」

「魔法の武器ってことか」

ジンにレミは頷く。

「じゃあ、僕たちの武器にもなにかの能力があるんですか？」

俺はブロードソードを見てみる。だが、うんともすんとも言わない。初めて手を触れたときの熱した鉄の棒に触れたときのような激

痛は一体なんだったというのだろう。

「そう、かもしれない、し、そうじゃない、かもしれない」

クラッセは俺を見る。もちろん俺にもわからないので首を振ると、
「それより敵さんはあっちにいるってこった。話なら後でしようぜ、
平和を取り戻した後でよ！」

大声で言っただけでジンがニヤリと笑う。平和を取り戻す、とは少し大げさだと今までなら思うだろう。だが、リベルのふと呟いた声に俺たちは何かを感じずにはいられなかった。

「時代の節目って……なにかしら」

レミの持つ杖が光る方へと走る。先頭をジンが走り、続いて俺とクラッセ、リベルとレミが最後尾を走った。

道を曲がると、ふいにジンが俺の前から横っ飛びでよけた。どうしたのかとジンを見ると、

「前！ まっえっ！」

ジンの声で振り返ると目の前になにかが吹っ飛んできた。

「うおっ」

とっさに受け止める。ずっしりとした重量がある。受け止めた手の平に冷たい感触があった。よろけながらもしっかりと後ろ足でふんばると、それは人間だった。

「わっ、兵士の方じゃないですか?！」

冷たい感触は兵士の着る鎧のものだった。

「こらっ、ジン。避けるなよ！ 大丈夫ですか?」

ジンに毒づいてから兵士に声をかける。その時、悲鳴が辺りに響いた。

受け止めた兵士がうめき声をもらす。見ると、鎧のない腕の部分がなにか刃物で切られたように血で染まっている。

「レミっ、薬草はあるか」

「ある、よ。ちょっと、待って」

薬草を取り出したレミが兵士の手当てをする。

「ウォーラーがいるぜ！」

ジンが叫ぶ。兵士をレミに任せると俺はブロードソードを鞘から引き抜く。それを見たクラッセも慌ててショートソードを構える。

悲鳴が上がった方を見ると、1匹のウォーラーが爪についた血を赤黒い舌でべロリとやっていた。その目が俺たちを捕らえると獰猛そうな光を帯びる。

俺はブロードソードを構えて走り出す。それに呼応するようにウォーラーも腕を振り上げて応戦しようとする。

「はあっ！」

腕に力を込めてブロードソードを振り下ろす。獣の反射神経を持つウォーラーは身をひねってそれをかわす。しかし、それも予想済みだ。

「クラッセ！」

「はい！」

体勢を崩した俺に鋭い爪を向けて襲いかかろうとしたウォーラーは、俺の後ろから現れたクラッセにギョツとした、ように見えた。クラッセの振るうショートソードがウォーラーの剛毛に覆われた腕を斬りつける。彼の技量では一刀両断というわけにはいかないが、それでも予想外の攻撃にウォーラーは一瞬だけたじろいだ。

その隙を逃すはずもない。俺は思い切り力を込めてブロードソードを振り上げる。

それで決着はついた。仰向けに倒れたウォーラーは息絶えたよう

だった。

「腕上げたじゃねーかよデイル」

今回はなにもする必要のなかったジンが駆け寄る。俺はクラッセを見て、

「いや、クラッセもよくやってくれたよ。それに……すごい切れ味だ」

手に持つブロードソードを見る。いかにウォーラー1匹だけで、そのうえ森の中ではなく有利な足場のある街中での戦闘だったとはいえ、ウォーラーの肉体は強靱である。首などの急所を狙ったわけではないただの一斬りで倒せる相手ではない。やはり魔法のかかった武器だからということなのだろう。

「これなら、いけるかもしれない」

そう呟くと、レミたちの元へと駆け足で戻る。

「ねえ、他にもモンスターがいるかもしれないわ」

「いきなりだ。いきなり現れたんだ」

辺りを見渡してリベルが言うと、レミに手当をしてもらっていた兵士が青ざめた顔を上げて言った。

「いきなりってどうゆー意味だよ。まさか何も無いところから出てくるなんてこともねーだろ」

兵士の言葉に半信半疑な様子でジンが言うと、

「いや、そのまさかだ。空に集まっている黒い蝶がいるだろう？

それがそこに集まっていたから何かと思って見ていたら、急にその中からウォーラーが現れたんだ。ああ！ 向こうからも悲鳴が聞こえるぞ。なんで俺たちの街に急にこんな……」

見るとその兵士は俺たちとそう歳も変わらなさそうだった。突然の事態にわけもわからないように身を震わせている。街からはずれた村ならまだしも、ブツフェのような冒険者ギルドのある街の中にまでモンスターが入り込んでくることはそうそうあることではない。平和だと信じていた日常が突然崩れ去ったショックでうずくまって震える彼の肩に俺は手を置いた。

「俺たちに任せてくれ。こう見えても冒険者なんだ」

笑顔を向ける。少し気が落ち着いたのか兵士の青年はよろよろと立ち上がる。怯えてしまうのは、きつと戦うことには向かないような優しい青年だからなのだろう。兵士になったのは俺たちと同じように何か”守りたい”ものがあつてのことなのかもしれない。

「他にも襲われている人がいると思う。俺たちは助けに行く」

「もうでーじょーぶだろ？　なんたって、クラッセの坊主ですら戦えたんだからな。こーんなヒヨっ子がよ」

ジンが憎まれ口を叩くと、

「どうせヒヨっ子ですよ！　でも坊主はよしてくださ……あれ？」
ポカンとしたクラッセに、ジンは背を向けてピーピーと口笛を鳴らす。

「今、僕の名前を言いましたよね？」

クラッセは隣のレミに聞いていた。パーティーを組んでからというもの、ジンから「坊主」としか呼ばれなかったクラッセだ。初めて名前と呼ばれたことが嬉しかったのか、口の端が少しだけ上がっているのが見えた。

「みなさん、いい仲間ですね。さあ、他の人を助けに向かってください。私も他の兵士たちと合流してモンスターの討伐に加わります」
笑顔を取り戻した青年が言った。口調も正して、この様子ならもう大丈夫そうだ。

「よし、行こう。みんなで協力して街をモンスターから守るんだ」

4人と視線を交し合うと俺は走り出す。

「そういえばリンちゃんがいらないわ」

リベルがキョロキョロしながら言った。

「なんだあのチビスケ、迷子かよ」

「もしかしてついてこなかったんですかね？」

ジンとクラッセも息を粗くしながら言った。

「うーん、どうしたんだろ。しかし、探している余裕はないぞ。またウォーラーだ！」

俺が指した先には黒と灰色のウォーラーがいた。

「ハッ！ 今度はブラックウォーラーにジャックウォーラーかよ。まああのチビスケなら姿も消せるようだし問題ねーだろ。しかし、ウォーラーのオンパレードかよこりゃ」

唾を飛ばしてジンが言った。

灰色のウォーラーはジャックウォーラーといい、大柄で腕力も強い。黒いのはブラックウォーラーといって、普通のウォーラーよりも小さく俊敏な動きをする、ウォーラーの亜種として知られているモンスターだ。

そこで俺は首をひねった。ブラックウォーラーは夜行性のはずで、普通なら昼間に現れることなどないはずなのだ。

「ブラックウォーラーがそろそろ日も暮れてくる頃とはいえ、こんな日の出ている時間に現れることなんてあるのか？」

うつすらと赤い色を帯びてきた西の空を見てレミに問いかけると、「昼間だと、目が見えない、はずだよ。夜行性、というより、夜にしか、活動できない。それが、ブラックウォーラー、だけど」

レミは戸惑いがちに答える。

「それって自然なことじゃないってことよね。誰かに操られているってことかしら？」

「多分、そう」

そうだとすると、その操っている何者かというのは”闇に憑かれ^{イビル}た者”に他ないだろう。あちらこちらから悲鳴が聞こえていることから考えると、かなりのモンスターを操ることができる相当の魔力をもっているのだろうということは、魔法を使えない俺にだってわかる。そんな者が一体どんな恨みをもってブユツフェにいる人々を傷つけようとしているのだろう。

「くるぜ！」

ジンが叫ぶ。俺たちに気付いた2匹のウォーラーが咆哮を上げながら腕を振り上げる。

「こいつでも喰らいな！」

先手必勝、ジンがダガーを投げつける。それがジャックウォーラーの目に突き刺さる。そこへ続いて俺はブロードソードを振るった。クラッセも必死にショートソードで援護する。

宝物庫で見つけたブロードソードの切れ味は絶大だった。俺がブロードソードで斬りかければ、ジンがウォーラーの気を逸らすべく動き、クラッセが手傷を負わせる。体勢が崩れたところに俺が最後のとどめを刺す。

多少はヒヤツとした反撃も受けたが、さほど時間もかけずに2匹のウォーラーを倒せたことに俺は驚きを覚えていた。

「またモンスターが現れたわ！ あっちよ！」
リベルが叫ぶ。

「あれは、ハグシエル。甲羅には、剣は効かない、けど、その隙間を狙えば、いいよ。ただ、近づきすぎると、甲羅にはさまれるから、気を、つけて」

茶色のふさふさとしている毛並みで一見すると熊のようだが、腕の部分に2枚の貝のような甲羅がついているモンスターだ。甲羅の内側には遅効性の毒がある針が仕込まれてあるのだとレミは言った。
「ふん、とろいぜ！」

その動きはウォーラーと比べると鈍く、俺たちはレミのアドバイスもあって倒すのはさほど苦にならなかった。

「次はどこだ！」

「あっちよ！」

「どんどん行きましょう！」

「あれは、シャドーバット」

「よしきた！ レミ、弱点はどこだ？！」

パーソンであるレミの知識を頼りに、俺とクラッセは刃を振るい、ジンがダガーを投げつけてはモンスターたちの気を引いてそれを倒していった。リベルだけはまだ魔法をうまく使えないのか戦闘には加わらなかったが、新たに現れたモンスターの場所を俺たちに伝えて、そこへと誘導した。

途中、さきほど助けた兵士の青年と遠目で目が合い、拳を上げてエールを送った。彼も兵士の仲間たちとウォーラーと戦っていた。ようやく一息つけるようになったのは、西の空がすでに真っ赤に染まっていた頃だ。見上げれば、空を覆いつくさんばかりにいた黒い蝶の群れは、跡形もなく消え去っていた。

「これで……全部ですかね」

全身泥まみれになったクラッセが地面に座り込んで言った。

「そうだといいいけどな。いや、しかし疲れた」

額の汗をぬぐって答える。

「もう悲鳴も聞こえてこないわ。それに黒い蝶もいなくなっているみたい。これで打ち止めだといいわね」

戦闘に参加していないとはいえ、リベルも散々走り回ってようやく息をなでおろしたように地面に腰を下ろす。

「もう今日は動きたくないわね」

本当にそうだ。まさか冒険者になって初めての依頼を受けたばかりだというのに、こんなにもモンスターの相手をしなければならなくなるとは思ってもみなかった。

「ゆっくりと休みたいですね」

「美味しいご飯も食べたいわ」

クラッセとリベルが笑い合っていると、ジンが「あつ、おめえ、デイル！」、俺の手元を指して声を上げた。

リベルが「あら？」と口元に手をあてがい、クラッセも「ああ、デイルさん、やりましたね！」と手を叩いた。

「やったって？ なにか？」

なにがそんなに喜ばしいことなのかわからずに首を傾げると、レミが「レベルアップ、してるよ」と教えてくれた。

言われて急ぎ指にはめてあるリングを見る。冒険者ギルドから冒険者になったときに貰ったリングだ。それが微かに光っており、そこに刻まれていた文字が最初にあったものとは変わっていた。そこには”2”を記す古代文字があり、それを見てようやく自分のレベル

ルが上がったのだと実感する。

「ちえー、デイルが一番乗りかよ」

残念そうな口ぶりだが、ジンは白い歯を見せて笑った。

「おめでとう！ これで本当の冒険者の資格を得たことになるわね」
「！」

リベルが自分のことのように手を叩いて喜んだ。

「宿も、半額。それに武器だって、安く、買えるように、なるね」

レミが言い、クラッセはうんうんと頷いた。

「まー、あんだけモンスター倒してりゃーな。とどめはほとんどデイルだったしょ」

「だけどジンたちにも経験値は入ってるんだろ？俺たちはパーティー登録したんだから」

そう言っただけで光が消えつつあるリングを見る。冒険者になった時にもらったリングだ。これが与えられるのはいくつか理由があってパーティーを組む際にも重要な役割を果たすのだ。

冒険者ギルドでは冒険者の登録をする他にも、俺たちが円滑に冒険をできるようにするための機能がある。

そのひとつが冒険者に与えられるこのリングを使って冒険者同士でパーティーとしての登録をすることだ。パーティーの登録を済ませた冒険者たちは、モンスターを倒して得られる経験値を全員で分配することができる。ただ、モンスターにとどめを刺した者が一番多く経験値をもらえるので、俺が最初にレベルアップできたというわけだ。

そして、そのレベルアップするための経験値を、モンスターを倒すたびに記録してくれるのがこのリングだ。モンスターを倒すと、カルマという目に見えないものが出てくるらしい。それを放っておいても特に害はないが、カルマを吸収して経験値という数値に置き換える方法を冒険者ギルドの前身たる自警戦士団が発見し、その発見が直接的ではないにしろ冒険者ギルド発足の理由のひとつになったというわけだ。

「僕、あまり役に立ってないのに経験値をもらえるなんて、なんだから悪い気がしますけどね」

申し訳なさそうにクラッセが言った。

「それを言うならあたしが一番役に立ってないわよ……」

そんなクラッセに、ため息を吐きつつリベル。

「魔法の呪文なんて、さっぱり浮かんでこないし」

そう言う彼女は持っている杖をうらめしそうに見る。

「今は、まだ、必要な時じゃないから、じゃないかな?」

するとレミがぼつりとつぶやき、俺たちは彼女を見た。

「モンスターがうじゃうじゃしてんのに必要なじゃねーなら、いつ必要だってんだよ?」

不服そうに言うのはジンだ。

「でも、倒せた」

多少なり苦戦したモンスターがいたもののゼンさんからもらったブロードソードに助けられ、また協力して当たったことで、この街に突如として現れたモンスターはおそらく全て片付けることができただろう。
” 闇に憑かれた者^{パラサイトイビル} ” 本体が現れていないことは気がかりだが。

「まゝ、そうだけだよ。 んでも、そりゃ結果論だろ。魔法がありやーもつと楽に戦えたつてもんだぜ」

ジンの言う通りだが、レミの言う「必要な時」というのは少し違うようだ。

「これを、見て」

そうやってレミは手に持つ短い杖を見せる。モンスターに反応しているのだろうとジンが言ったその杖は、夕日を受けて真っ赤に染まる街の中において、微かな光を照らしていた。

「あんだ? まだモンスターがいるつてのかよ?」

ジンの言葉にレミは「ううん」とかぶりを振る。

「モンスターには、反応、してなかった、よ」

読みがはずれたジンは「じゃー、なんだってんだよ」とバツが悪そうな顔をする。

「リベルの杖が、この杖と同じ、意味をもって、存在している、なら……魔法を使わないと倒せない、ような、なにか、と戦うために、魔力を温存、しているとしたら?」

俺たちの顔を見ながら、レミは言葉を選ぶように一言ずつゆつくりと言った。

「なるほど。今、俺たちはゼンさんの言っていた” 闇に憑かれた者

”の近くにいます。普段ならレベルもモンスター相手に魔法を使えるかもしれないが、こと”闇に憑かれた者”をその杖が感知している場合に限っては、魔力を消費しないように温存している、と。そういう事だな？”

俺が聞くとレミは「そう」と頷く。

「それってまだどこかに敵が潜んでいるってことですか？　僕もうヘトヘトですよ」

クラッセを見ると相当にまいっているようだ。

「できるならどこかで少しくらい休みたいな」

さすがにクラッセのことを考えると、これ以上は無理をさせたくはない。

「んなこったからレベル0なんだよ」

「うう……」

ジンの毒舌を受けてクラッセが言葉を詰まらす。

「仕方がないじゃないの。適正検査に受からないとなりたいクラスになれないんだから。でもクラッセも自分に合うクラスになればよかったのにねえ」

フォローをする気があるのかないのか、レベルにも言われてクラッセはさらに大きく肩を落とす。

「でも僕はファイターになりたかったんですよ。兄さんみたいなファイターになりたいんです。それ以外のクラスなんて考えられません」

彼は亡き兄を思い出しているのか、うつむいていた顔を上げて言った。俺はそんなクラッセを見ながら、彼とはじめて会った時のことを思い出していた。

「まずは腹ごしらえでもしながらパーティー組めそうなやつでも探そうぜ。おっ、あのねえちゃんなんかいいんじゃない？　たまんねー」

な」

席に着くなりジンが言った。両手を胸のあたりを掴むような仕草で揺らしている。

「おいおい、そんな理由で選んでいいのか？ それにあの人は連れがいるみたいだぞ」

見ると仲間らしいファイター風の男が2人、ジンが目をつけた女性冒険者に近づいて話かけていた。

「ちえー、あんな野郎のどこがいいんだか」

テーブルに肘をついてジンが舌打ちをする。

「それに俺たちみたいな成りたての冒険者とパーティーを組めそうなレベルじゃないんじゃないか？」

俺が言うところには「まーな」と気のない返事をする。

「とりあえず俺はファイターでジンはシーフだ。できることならメイジとかクレリックが仲間になってくれると心強いな」

「そんなん、こんな街にいるかあ？ でもまー、いたら即ゲットだよな」

頼んだ料理が運ばれてくると、骨付きの肉をがぶりとやりながらジンが言った。

「クレリックつつつたら怪我を治す魔法が使えるらしいかな」

ジンがそう言ってまた肉にかぶりつこうとした時だ。

「てめえ！ 俺の女を口説こうなんざ、なめた真似しやがって！」
怒声が酒場を揺らした。

俺とジンが声のほうを見ると、ついさっきジンが仲間にしたいと言っていた女性冒険者に話しかけていたファイター風の男2人がギョツとした顔になっていた。

「あらら。あいつら連れじゃなかったわけね。んで、あの大男が本物の連れってことかい」

面白そうだと言わんばかりの表情でジンが言った。大男は筋骨隆々の体を揺らし大股で詰め寄っていく。ファイター風の男たち2人がかりでも敵いそうには見えない。

「人が厠^{かわや}から帰ってきたと思ったら、調子くれてんじゃねーぞカスがつ！」

「その割にや、あのねえちゃんも楽しそうに話してたけどな」

大男に聞こえないような小声でジンが言う。当の女性冒険者は楽しげな表情だ。なんともタチの悪い……。

「ちよつ、ちよつと待ってくれ！ 知らなかったんだ！」

ファイター風の男の1人が弁解しようと手の平を前に出す。だが、大男は聞く耳を持たない。

「ギツタンギツタンにしてやらあ！」

叫ぶなり大男がファイター風の男冒険者たちに殴りかかった。慌てて身をかわす2人。酒場はざわめき席を立つものも出てきたが、多くは野次馬根性で見物している。娯楽とは無縁の生活をしている冒険者たちが多いのだ、こういったイベントは見逃せないらしい。

「ちよこまかと！」

大男がテーブルを盛大に蹴り上げる。上にあった料理皿がずり落ち、飲み物の入ったコップが宙を舞った。

「あうっ」

「きやあ」

コップが運悪く居合わせた少年の頭を直撃する。スデンと後ろに倒れた少年を見て近くにいた女性の冒険者が声を上げる。俺はすぐさま立ち上がり少年に駆け寄った。

「おい、大丈夫か？」

「は、はあ……。クラクラします」

大男は少年が倒れたことにも気がついていないようで、逃げ回る2人の冒険者を追い回している。

「あーらら。まったく迷惑なやつだな。ま、返事ができるようなら問題ねーだろ」

やれやれといった様子でジンも駆け寄る。

「いい加減にするんだ！ 他の人たちが迷惑しているのがわからないのか！」

あまりの大暴れぶりにたまらず叫ぶ。ちらりとこちらを見る大男。その一瞬の隙について2人の冒険者たちは一目散に外へと逃げ出す。「あっ、てめーら！ こ、このっ、てめーらのせいで逃がしちゃったじゃねーか！」

怒りのぶつけ場所を失った大男が叫ぶ。

「おっさんよー、みつともねーと思わねーのかよ？ たかが女がナンパされたくらいでよ。おら、男ならこまけーことグチグチ言ってんじゃねーよ」

そう言っただけで仁王立ちするジン。大男も言い返すが、そこは口から生まれたようなジンだ。口喧嘩で男相手には負けない。連れの女性冒険者もいい加減飽きてしまったのか、鶴の一声がかかり大男はしぶしぶといった様子で騒ぎは収まることとなった。

「本当に大丈夫なのか？ 頭をぶつけたんだからな、無理はするなよ」

座り込んだままの少年に声をかける。幸い、割れたガラスの破片で目を切ったりということもなかったようだが、念のために医者の方へ行くのかという俺に、

「いえ、本当に大丈夫ですから」

と、まだ痛そうな表情で少年が言った。

「おもしれー坊主だぜ」

近くの席に座りなおしたジンが言った。口元にはニヤニヤと笑いを貼り付けている。

「なにが面白いんだジン？」

彼の言っている意味がわからずにジンを見る。

「おめー、わざと避けなかっただろ？ そこに女が座ってたからか？」

ジンと同じく椅子に座った少年は驚いた顔をした。ジンの指した席にはもう誰も座ってはいなかった。どうやら逃げ出してしまったらしい。なんとも薄情な。

「女性を守るのが男の務めだと……兄さんから教わりましたから。」

でも避けなかったんじゃないかって避けなかったんです。僕じゃ、さっきのは避けれませんよ」

そう言っただけ少年ははにかんだ。ジンは「ふーん、まーいーや」とあくびをひとつだけした。

「ところで、あなたたちも冒険者なんですよ？　僕はクラスセつて言います。実はどこかパーティーに入れてもらえないかと思ってここに来てみたんです。おふたりはもうパーティーを組まれているんですよ。僕を仲間にしていただけませんか？」

クラスセと名乗る少年の突然の申し出に、俺はジンと顔を見合わせる。

「おめー、クラスは？」

単刀直入に切り出したジンに、クラスセは言いくそつにもぐもぐと口を動かした後に、

「実は……トラベラーなんです」

俺とジンはもう一度顔を見合わせるようになったのだった。

「そのためにはまずトラベラーを卒業しなきゃね。シャンとしなさい」

クラスセの背中を叩いてリベルが笑った。

「ファイターになれずにトラベラーのまんまっつーやつがいるとはよ」

呆れ顔のジンが言った。

「すぐにファイターになってみせますよ」

決意を表すように拳を握ってクラスセが言う。そんなクラスセをジンは冷やかしていたが、俺はクラスセならすぐになれるだろうと思う。弱弱しく見える少年だが、芯は強く持っているのだ。彼を見ていれば、彼のお兄さんもきつと立派な人物だったのだろうと思える。

クラッセのクラスであるトラベラーだが、実は俺もジンもリベルやレミだって、元はトラベラーなのだ。というのも、冒険者ギルドで受付をして適正検査を終えた時点でトラベラーというクラスがもれなく与えられるのだ。そこから検査の結果を受けて、なりたいクラスの要望と共に実技試験をパスすることができれば晴れて正規のクラスに就くことができる。いわば、冒険者の仮資格のようなものがトラベラーというクラスだ。

残念ながらクラッセでは適正検査のところで適正がないと判断され、実技試験を受けることすらできなかった。どうしてもファイターになりたいというクラッセはトラベラーからクラスを変えることができない。本来であればトラベラーのままでは冒険者としては名乗れないのだが、そこはクラッセの熱意に打たれて特例として認められたのだそうだ。その代わり、レベルが0からスタートというかなり変わった状況で冒険者となったのがクラッセというわけだった。

”トラベラー（ファイター見習い）”ということで、レベルが1に上がった場合によりやくファイターとして認められるという運びになったのだ。

「きみたちは冒険者か？」

クラッセと会った時のことを思い出していた俺は、はっと顔を上げた。

いきなり声かけられ、クラッセをからかっていたジンが振り返る。

「あ？ そうだけどなに？」

話しかけてきた男はこの街の兵士のようにだった。だが、モンスター掃討に加わっていた様子ではない。つけている鎧も真新しいものだ。

薄暗くなつた街に明かりの灯つたランタンを持つ兵士が3人、槍を持つ兵士が3人、その全員の腰にはロングソードくらいの剣が差されている。

「なるほど……。確かに5人の冒険者だな」

顎に手を当てて先頭に立つ兵士がつぶやく。

「あたしたちに何の用かしら？」

首を傾げるリベルに俺は「さあ？」とだけ答える。ただ、彼の発言からは俺たちのことを知っていたように取れる。

「なあ、俺ら疲れてんだよ。手短かにしてくんねーか」

仏頂面でジンが言った。

「それに僕たちにはやらないといけないこともありますしね」

クラッセも続けて言うと、先頭の兵士は「ふむ」と一言だけ言うてから、「では単刀直入に言おう」と俺たちを見渡す。

「きみたちがジグザール殿の言う5人の冒険者たちだと確認した。

きみたちを拘束するようにという命令が出ている。済まないが同行願おう」

はつきりと言った彼の口調に俺は自分の耳を疑った。わけのわからないことは今日だけで数えてもたくさんあったが、いきなり俺たちを拘束するとは何の冗談だろうか。俺たちがこのブユツフェにきて冒険者になつてから、まだほんの少しだ。もちろん犯罪に手を染めるようなことなんてあるはずもない。

「ふざけてんじゃねーよ！ 拘束だあ？！ 俺らがなにしたってんだよ！」

「そうよ！ どうしてあたしたちが捕まらないといけないの？！ あたし、何も悪いことなんてしてないわ！」

俺が抗議の声を上げるよりジンとリベルが叫んだ。2人とも全く腑に落ちないといった剣幕で叫ぶ。当然のことだろう。

「俺も納得がいけないのですが、理由を聞かせてもらえませんか？俺たちはついさっきこの街にきて、モンスターに襲われているのを見て撃退に加勢してただけです。俺たちのことを知っているかのような口ぶりですけど、それは一体なぜ？」

努めて冷静に訊ねる。兵士は俺の目をまっすぐ見つめる。

「我が国おかかえ魔道師殿の命令なのだよ。男3人、女2人でパーティーを組んでいる冒険者を連れてこい、とね。そちらの黒フードは女の子なのだろう？ あいにくと条件に合った冒険者たちはきみたちしかないのだ」

さらにその兵士は俺たちの容姿や特徴までを言った。それはピタリとはいえないが、大体俺たちに合っているものだった。

「ご同行願えないというのならば、力づくで、と言われている。どうか、手荒な真似はさせないでくれないか？」

兵士は困ったような表情を浮かべて言った。

「そうまでして俺たちを拘束しようとする理由はなんなんですか？」

俺はそう訊ねる。すると兵士は、

「実はな、魔道師殿が神のお告げを聞いたんだそうだな」

「神のお告げ？」

「そうだな。だが、きみたちにとって良いお告げではないようだ。なにしろ連れてくるのに生死は問わず、ときている。穏やかじゃないことは確かだ」

その言葉にクラッセがふらりと後ろに倒れそふになり、それを支える。

「そんな横暴な！」

俺は思わず叫んだ。抵抗するなら殺してもいいだって？ そんなことがまかり通っているのか。あまりの理不尽さに言葉を失ってしまふ。

「て、てめっ」

カッとなったジンが兵士に殴りかかろうと身構える。だが、抵抗した場合は力づくでと言われている兵士たちだ。今、殴りかかるの

はいたずらに寿命を縮めるだけだ。我に返ってジンを止めようとした瞬間、

「落ち着きなさいよ、ばかジン！　ここでこの人を殴ったって意味のないことだわ」

リベルがジンを右手で制して前へ出る。よく見るとレミもジンの服のすそをギュツと握っていた。

「そ、そうだジン。むやみに仕掛けたら俺たちの立場が悪くなるだけだ」

ヒヤリとした額を拭ってジンに言う。

「ぐっ……。わーったよ。けどよ、じゃーせめてそのお告げつてのがどんなことなのかだけでも教えてくれよ。でなきゃ、はいそうですか、なんてついていけるわけねーぜ」

自分を落ち着かせるためか、頬を軽く叩くと、ジンは腰に両手をあてて言い放つ。すると兵士は大きく首を振って、

「残念ながら、我々にはその内容は知らされていない」

大きく息を吐き出しながら言った。

「きみたちがモンスター退治に一役買ってくれていたのは我々だって知っている、さつき見かけたからな。できることなら見逃してやりたい。しかし我々にも生活があるのだよ。ここで上に逆らっては路頭に迷いかねん。ジグザール殿は逆らう者には容赦のないお人なのだ。なに、後ろめたいことがないのならすぐに釈放されるだろうさ、ジグザール殿とは違い、陛下は話の分かる方だ。どうか穏便に我々についてきてもらえないか？」

そうまで言われてしまっではさすがのジンも無碍^{むげ}に断るわけにもいかないようだった。俺も、おそらくジンも故郷を失ったがゆえに冒険者としての道を選ばざるを得ない部分もあったのだ。帰ることができる場所を失うということの辛さは十分すぎるほど身に染みている。何も言わないリベルやクラッセ、レミを見ると、彼らも同じような境遇にあるのかもしれない。

「わかりました。ではあなたたちについて行きます。しかし、仲間

たちに危害が加えられることでもあれば、俺は黙ってはいませんよ」

俺がそう念を押すと、

「かまわん。私とて、そこまで人道に背くようなことをするつもりはない。きみたちを連れていくまでが我々の仕事だからな」

兵士たちが俺たちをはさむように3人ずつ前と後ろにつき、俺たちは城へと向かうこととなった。

「僕たち、どうなるんでしょうか……」

不安げなクラッセが全員の気持ちを代弁するようにつぶやいた。

冒険者ギルドのある街は国として認知される。これはブッフエのような規模のさして大きくない街にも当てはまることだ。モンスターという脅威を考えれば、街ではなく国とした方が色々と都合が良いのだ。

モンスターの討伐を目的とする冒険者ギルドの元には多くの戦士や魔法使いが集まり、その結果としてギルドは次第に大きな力を持つようになる。そうなるとその土地を治めている領主からするとなにかと都合が悪くなってくる。そのゆえ冒険者ギルドに権力の座を脅かされないよう、国としたわけだ。

国王となった元の領主たちが考えだした、冒険者ギルドに抗する手段のひとつとして挙げられるのが、冒険者ギルドやそれに属する魔術師ギルドから優秀な人材を引き抜くということだった。そうすることによって、常に冒険者ギルドには強大な力を持たせまいとしているのだ。さらに言えば富国強兵にも繋がることとなり、国としては一石二鳥というわけである。

それから考えると、実のところジグザールという魔道師が言う”神のお告げ”というものも、そう簡単に無視できるものではないのだろう。なにせ、おそらく彼は魔術師ギルドから輩出された”優秀な”元メイジなのだろうから。その”神のお告げ”というものが、例えば俺たちのような冒険者になりたての新米冒険者を捕らえるような内容であったとしても。

「まゝなんだ、こうして城ん中に入れるってもの、滅多にあることじゃねーぜ」

さきほどの怒りもどこへやら、気楽そうにジンが言った。もちろん何もしていないのに連行されるのは彼も不条理に感じるところだろうが、そこは表に出さない。

「言われてみればそうですね。僕たちみたいな一般人が城に招かれ

ることなんて、一生に一度あるかないかですから」

沈んでいた顔をパツと上げてクラッセが言った。

「そうだな。あんな理由で連れて行かれるのでもなければ貴重な体験なんだけどな」

あくまで俺の気は重い。”バサイトイビル 闇に憑かれた者”だって、まだどこかに潜んでいるのかもしれないのだ。

「前の街でなにかやらかしたんじゃないの？」

「あん？」

半眼でジンをじとりと見るリベル。

「どーゆー意味だよ」

「そのまんまの意味よ。ジンって手癖悪いし、ブユツフェの前の街でスリとかしていたんじゃないでしょうね？ もしそうだったら、これからの付き合いを考えさせてもらうわよ」

リベルはからかい半分の口調でジンに言った。

（また口喧嘩が始まるのか……）

こんな時まで飽きないやつらだ。そう思い心の中でため息をつきかけたが、当のジンの反応はいつもとは少し違っていた。

「ばか言え、スリなんて、んなコスイ真似すつかよ」

少しだけ目を動かして後ろのリベルを見たジンは、それ以上は何も言わずにスタスタと歩くのだった。

「ちよっ、ちよっとなによ、あの態度。もしかして図星だったわけ？！」

意外な反応に肩すかしをくらったような形になり、リベルは数秒だけポカンとしていたが、ハツと我に返ってジンの後を追いかける。「なんだか様子が変わってたね」

呆氣にとられたようにクラッセがつぶやく。俺はクラッセに頷く。いつもなら言い合いに発展するはずのジンとリベルに呆れている俺たちだが、ジンがこうも簡単に引き下がるとさすがに調子が狂う。俺とクラッセは得体の知れない料理を食べたときのような気分で顔を見合す。

「私の、知っているジン、なら」

2人してレミを見た。黒フードから青い瞳が俺たちを見上げる。

「そんな人間じゃ、ない」

その言葉に俺は、ジンの何を疑うことがあるのだ、と胸のつかえが取れた気がした。確かに口も素行も悪いジンだが、少なくとも他人から小銭を掠め取って喜ぶような男ではない。リベルも軽い冗談のつもりで言ったのだ。それがあんな態度で返されるとは思っていなかったのだろう、面喰らったはずだ。それでもレミの言うようにジンを信じていればいいのだ。きつとあの態度には、人に言いづらいうようななにかしら理由があるはずなのだ。

「そろそろ城に着きますので、申し訳ありませんが手持ちの武器はお預かりします」

後ろについていた3人の兵士の中の1人が言った。最初に話した兵士よりも若い感じた。

「もちろん、お帰りの際にはお返ししますので、ご安心を」

果たして無事に帰ることができるのだろうか。そんな事を考えながらブロードソードの収まった鞘を渡す。

門をくぐると城が見えた。灰色の石壁はあまり見栄えの良いものではなく、さすがに元は田舎領主だと言われそうな造りだったが、それでも一般の家屋とは比べるべくもない。

俺たちは寄り道せずまっすぐに広間まで通された。そこには1人の男が佇んでいた。

袖に濃緑の模様が入った紺色の長着でじつと立っていたその男は、俺たちに気がつくのと険しい顔を向ける。整えられている黒髪はもう少しで腰まで届きそうなほど長い。

「貴様たちだな、なるほど神のおっしゃられる通りの連中だ」

コツコツと足音を立てて俺たちの前にくる。

「すぐに地下牢へ閉じ込めておけ」

視界に入れるのも汚らわしいとでも言うように言い捨てると、その男は背を向ける。

「ま、魔道師殿！」

「聞こえなかったか？ 地下牢へと連れていけと言ったのだ」

「理由をお聞かせ願いたい！ この方たちは先のモンスター討伐に参加してくださった冒険者の方々です。それを牢に入れるとは、どういったご見か！」

「神の命だ。それを邪魔するというのはなら容赦はせんぞ」

「し、しかし」

ジグザールという魔道師は兵士の言うことなどはなから聞く気はないようだった。その様子に堪らずリベルが一步前になる。

「ちよつと！ 黙って聞いていれば、神、神って、あたしたちがなにか悪いことでもしたっていうの？！ いい加減にしてよ！」

「そうだぜ！ おい、王さんは一体なにしてたんだよ！ こんな馬鹿げたこと言うやつを止めることもできねーのかよ！」

ジンも揃って叫ぶ。しかし、一国の王を「王さん」とは……。

「戯言を。モンスターを召喚したのも貴様らだと神も言っておられる。国王も貴様らが魔法でもかけたに違いない、つい先ほど床に伏してしまわれた。日を追って貴様らを処刑する。これは決定事項だ」

「そ、そんな！」

一気に目の前が真っ暗になっていくように感じた。きつとなにかの間違いだろうと思っただけに、突然の処刑宣告をされクラッセがその場に崩れ落ちる。俺も全身の力が抜けていくようだ。

「じ、ジグザール殿！」

「くどい！」

俺たちが半ば呆然としていると、ジグザールは口の中で何事かつぶやいた。次に手を掲げると、うつすら緑色の霧のようなものが兵士たちを包んでいく。

「いけない……！」

レミが声を上げたのと同様だった。いきなり肩をつかまれて振り返ると、さっきまで身を乗り出してジグザールに抗議していたはずの兵士の1人が虚ろな目を向けていた。

「ど、どうなつてんだよ！　おい、放せつて！」

ジンの声にみんなを見ると、他の兵士たちも同様に無言でジン、リベル、クラッセ、レミ、それぞれが兵士たちに後ろ手をつかまれているではないか。物言わぬその表情はまるで人形のように感情と
いうものが欠落しているようだった。

「連れていけ」

1人静かに言い放つジグザールの言葉に兵士たちは動きだした。
全く抗うことができない。とても人間の力とは思えなかった。

「いたっ、痛いつてば！」

「俺たちは何もしていない、こんなことやめるんだ！」

「この野郎、覚えてやがれ！」

必死に抵抗したが、無駄なあがきだった。こうして俺たちは身に
覚えのない罪をきせられ、地下牢に入れられてしまったのだ。

物音ひとつしない地下牢はひどく不気味だった。子供の頃に村の
近くにあつた洞窟に探検しに行ったことがあつた。モンスターこそ
出なかったのだけれど、苔がびっしりと張り付いた岩肌に反響する
声、ロウソクの光が届かない場所にはなにか恐ろしいモンスターが
いるような気になって、子供心にとても怖かったものだ。だけど、
この地下牢はその比ではない。なにしろ死刑宣告をされて閉じ込め
られているのだから。

それでもモンスターとの連戦をこなした俺たちは、その疲れもあ
つてかいつの間にか眠りについてしまっていた。どうにかしなくて
はいけないと思つていても、武器は全て取り上げられているし、大
きな錠のかけられたこの牢屋から抜け出すなんてとても無理だ。

「あいつが闇に憑かれた者なんじゃねーのかよ」

牢に入れられた直後にジンが言っていた。なるほど、そうかし
れないと俺は思つたのだが、あの”闇”に心を支配されかけたとき

に聞いた、世の中の全てを憎んでいるかのような声とは違うようにも思える。ジグザールという魔道師のやり方は乱暴だったけれど、とても狂気に憑かれた者とは思えない声の張りがあった。そうすると、彼の聞いた”神のお告げ”というものがどうにも怪しい。

不安と先が見えない恐ろしさと共に、俺はなにかが動く気配を感じて目を開けた。

「ジン……？」

「しっ、もう少しじっとしてろディール」

ジンは床に耳を当てて何かを探っているようだった。

「人の気配がしねえ、見張りがいなくなったみてえだ」

「ずっと起きてたのか？」

「まーな」

彼も疲れているだろうに、ジンは表情も変えずに言った。

「ディール、3人を起こしてくれ。俺は誰もこねーか見てっからよ」

「もう、起きてる、よ」

その声にさすがのジンも大きく目を見開く。壁にもたれて寝ていると思っていたレミが静かに立ち上がる。ジンは起きているのが自分だけだと思っていたようだった。

「誰もいなくなったからってどうするの？」

振り向くとリベルも身を起こした。

「眠りが浅かったみたい。だって、こんな場所だものね」

少しだけ笑みを浮かべたりベルがすぐに表情を引き締める。

「だったら話ははええ。あとはそのヒヨっ子を起こしてくれや」

ジンの指した先を見ると、瞼をうつすら濡らしたクラッセが横たわっていた。俺はそつと彼を揺り起こすと、クラッセは「待ってよ兄さん!」、飛び跳ねるように身を起こしたので、俺たちは同時に口元に人差し指を立てる。

「呑気なもんだぜ」

ジンが苦笑すると、

「兄さんの夢を見てました」

しょんぼりとしたクラッセが言った。

「それでどうするんだ？ 誰もいないからってここから抜け出すなんて無理じゃないのか？」

俺が聞くと、ジンは髪の内から1本の細い何かを取り出す。

「言つたろ？ あとあと考えて手は打つもんだつてよ」

ジンはニヤリと唇の端を上げる。

「こんなこともあるかもしれないーと思つて事前に忍ばせておいたんだよ」

そう言つてジンが取り出したのは針金にしては少し太めの針状の金属だった。彼が言うにはシーフにとっては基本中の基本的な道具らしく、ちよつとやさつとじゃ折れ曲がったりしない代物なのだそうだ。

「誰もこないか見張つてくれ」

小声で言つてジンは錠をはずしにかかった。

「開いたぜ」

そう言つてはずれた錠を見せる。安堵の空気がどつと出る。

「誰も来なくてよかったですね」

クラッセが胸を撫で下ろしながら言った。

「それにしても、本当に泥棒でもやつてたんじゃないの？」

揃つて牢から出るとリベルが言った。

そのリベルにいつものように喰つてかかると思いきや、ジンはその場に立ち止まつて、

「泥棒か……。似たようなもんでな、義賊つてやつをやつてた」

そうしてジンはいつになく言葉少なに話し出したのだった。

俺たちは誰も生まれる場所を選ぶことなどできない。ジンの生まれた街は稀に見る悪政を行う街で、街中に物乞いや浮浪者を見かけることなど、さして珍しくなかったという。

そんな街で孤児としてかろうじて毎日を生きていくだけだったジンだったが、ある日を境に世界が変わったそうだ。義賊を名乗る者たちがジンの街に現れたのだ。

それまでどうにもならないと思っていた日常が彼らの存在によって、ジンの中で大きく変わった。自分もなにかを始めることで、世界を変えられるかもしれない。いや、変えたい。

その気持ちが生徒を義賊たちの仲間入りする動機となった。そこでジンはシーフとしての技能を育んだ。

もちろん義賊というからには、悪政を敷くことで私腹を肥やしている者たちからしか奪うようなことはなかった。そんな中で、ジンにも弟分のような存在ができた。

「けどよ、物を奪うってこたあ、俺らもなにかを奪われる覚悟をしなくちゃならねーんだ」

度重なる彼らの所業に、富豪たちはジンたちを一網打尽にする作戦を水面下で練っていたのだ。義賊たちは一様に捕らえられ処刑された。かくも難を逃れることのできたジンとその弟分、そして他の数人かは散り散りとなった。

「思えばそこでやめときゃよかったんだ」

義賊が解散して数日後、義賊の1人がスリを働いて捕まったと噂で聞いた。彼はそれが自分の弟分ではないことを願った。

だが、ジンの願いも虚しく、それは彼の弟分だった少年だった。

少年はまもなく処刑されることとなったのだった。

「クラッセの坊主みたいなのがきだったよ。まったく間抜けだよな。

だから俺はまっとうに生きていくことにしたんだよ。ほら、まだまだ未開の地には大昔のえれえやつらが残した財宝が隠されてる遺跡なんかもあんだろ？ それなら頂いちゃっても誰にも文句なんて言われねーもんな」

俺たちの位置からはジンの表情は見えなかった。きっと彼も今の自分の顔を見られたくないだろう。

「それでスリって言葉であんな態度になったのね」

リベルがジンに聞こえないような小声でそつと耳打ちしてきた。
俺は小さく頷く。

「それより、とつとこんな陰気臭いところからはおさらばしようぜ。今んとこ見張りはいねーみたいだからよ」

振り返ったジンが白い歯を見せる。他人の物を盗むというのはあってはならないことだが、彼の生い立ちを考えればどうしようもないことだったのだろう。それに今では冒険者として人の役に立つことのできるジンを責める気もない。

「しかし、こうまで人の気配がないと逆に薄気味悪いな」

地下牢から出て、まず湧いてきた感想だ。

俺たちを逃がさないように厳重な警備が敷かれているかと思いきや、さきほどの広間を覗いてみると兵士どころかジグザール本人すらいないではないか。

「あたしたちが閉じ込められている間に何があつたのかしら」

「とにかく武器がねーことにはどうにもなんねー。さつさと探そうぜ」

この状況を作り出したのが”闇に憑かれた者”なのか、それともジグザールという魔道師なのかはわからないが、さすがに武器がなくて戦うこともできない。

ジンに促されて俺たちは武器が保管されていそうな場所を探す。すると、

「やべ！ 誰か来るぜ！」

廊下の曲がり角から聞こえる足音に緊張が走る。隠れられそうな場所はない。

俺たちの脱走に気付いた者が探しにきたのかもしれない。俺は拳を握って身構えた。

だが予想に反して現れたのは見たことのある顔だった。

「冒険者さんたち！　どうやって地下牢から？！」

驚きを隠せない様子で現れたのは、俺たちがブユツフェに辿り着いてすぐの時、ウォーラーに襲われていた兵士の青年だった。

「俺らを捕まえにきたのかあんた？」

気の抜けない表情でジンが青年を睨む。

「いえ。牢にいなかったのどうしたのかと思ったのですが……。違います、私はあなたたちを逃がしにきたんですよ。魔道師様に捕らえられたと聞いたので」

思いがけない言葉に今度は俺たちが疑問符を浮かべる。

「どうということなんだ？　なにが起こっている？」

「起きるものにも、街は大変な騒ぎです。説明はあとにしましょう、あなたたちの装備はこちらです」

案内されるままに俺たちは青年の後に続いた。武器は守衛室らしき場所に保管されており、それらを手にした俺たちは、そのまま促されるままに青年に続いて城を出た。

眠りに落ちていたため、相当時間が経っていただろうと思っていたが、まだ夜は明けていなかった。

城を出て少し行ったところで兵士たちが倒れているのが見えた。

「兵士長もやられてしまいました」

青年は悔しそうに唇を噛む。

「またモンスターが現れたんですか？」

クラッセが尋ねると青年は首を横に振る。

「あれはモンスターなんて生易しいものじゃありません。ああつ、思い出すだけでも恐ろしい化け物です！　今は魔道師様が応戦して

いますが、とても敵いそうにもない。せめてあなたたちだけでも逃がそうと、やられてしまう前に兵士長が

青年は思い出すのもおぞましいとでもいうように身を震わせる。

「ついにおいでなすったか、イビル野郎がよ」

ダガーを鞘から抜いてジンが言った。

「大丈夫よ。あたしたちにはジグザールなんて目じゃないほど凄い魔法使いがついているんだもの」

ゼンさんからもらった杖を握り締めてリベルが言った。

「ええ、リベルさんの言う通りですよ。僕のこの剣だって、きっと凄い力を秘めていると思いますし」

クラッセもショートソードを手に持って見つめる。

「すぐに、片付ける、よ」

レミは自分の杖が光り輝く方向を向いて言った。

「私たちではとても役に立ちそうにありません。避難する人たちを誘導します。どうかご無事で戻ってきてください」

「ああ！ 必ず戻ってくるさ！」

俺たちは青年に別れを告げ、レミの杖の光が指し示す方へと走った。

街にはいたる所に黒い蝶が飛び交い、さながら蝶の群れに占拠されてしまっているようだった。走っていくうちにレミの杖はますますその輝きを増し、あの悪意に満ちた存在の近くにきているのだと知らせた。

「見て！」

リベルが空を指さして叫んだ。

「あれが”パラサイトイビル闇に憑かれた者”なの?！」

中空に浮かぶちよつとした屋敷ほどもある大きさの”それ”は兵士の青年が言っていた通りにもおぞましい姿だった。

一見するとただの黒い巨大な球体に見えるが、目をこらすとそれが腐敗した死者たちの体で形作られているのがわかった。中には人骨も埋まっているのが見え、隣を走るジンはたまらず「げげっ」と

息の呑んだ。

その球体からいくつもの大蛇が首を伸ばし、眼下の何者かと戦っている様子だ。しかし、電撃のようなものを下から浴びるも全くひるむ気配はない。

「ああっ、ジグザールさんです！」

クラッセが叫ぶと、長い黒髪を振り乱しながら魔道師が振り向く。その顔には濃い疲労がにじみ出ている。

「貴様たち、どうしてここに！……そうか、兵どもの仕業だな。まったく使えんやつらだ」

俺たちが走り寄るとジグザールは吐き捨てるように言った。

「なんてえ有り様なんだあんた。神のお告げとやらはどーなったんだよ」

ジンの憎まれ口にジグザールは「ふん」と顔を背ける。

「……だ」

「ああ？」

「あれが神の名を語る者の正体だと言ったのだ！ 思い出しても忌々しい！ 命じられるまま貴様たちを地下牢を閉じ込めた私はこれでこの街が救われるのだと信じていた！ しかし、やつはこの私を嘲笑うかのようにこう言った！ 『アリガトウ、ワタシノチュウジツナル、オロカモノ』とな！」

怒り覚めやらぬ様子でジグザールが叫んだ。

「貴様たちは何者だ！ なぜあの化け物が貴様たちを閉じ込めたがるのだ！」

その言葉に俺は自分の持つブロードソードを見た。そして”闇に憑かれた者”は俺たちの持つ武器を恐れているのかもしれないと思った。わざわざジグザールを騙してまで閉じ込めておこうとするくらいだ、俺はジグザールの話を聞いて心に希望の光が広がっていくのを感じた。それはジンも同じだったらしい。ニヤニヤと笑みを貼り付けてジグザールの肩に腕を回す。

「へっへ、そりゃー秘密だぜ。まあ俺らがなんとかしてやつからよ、

上手くいった暁にはなんでも言うこと聞いてくれんだろ？ 地下牢に閉じ込めたことは水に流してやつからよ、ジグザールのとつあん」

「ぶ、無礼な！ …… 貴様たちにどうにかできるとは思えんが、あの化け物を片付けることができるのならどうとでもしてやるう。今はギルドに私より力のあるメイジはおらん。それに他の魔法使いどもも、ほとんどやられてしまったのだ」

ジンの腕を振りほどき、そう言いかけたジグザールは「はっ、来るぞ！」、叫ぶと口早に呪文を唱え始める。見上げると大蛇が口を広げて紫色の炎を吐き出したところだった。

「かあ！」

ジグザールの叫び声と共に紫色の炎は見えない壁に阻まれて霧散する。

「毒の炎だ！ あれにやられると、ああなる」

大蛇から視線をはずさずにジグザールが叫ぶ。そこには全身が炎と同じような色になった兵士が倒れていた。すぐに治療しようと走りしかけたレミにジグザールは「かまうな！　すでに死んでいる」、言われてレミはその場に留まる。

「なんてことなの……」

悔しそうにリベルがうつむく。

「感傷に浸っている時間はないぞ！　私の魔法も全く効かん、一体どうなっているのだ！」

わけがわからないというようにジグザールが長髪を振り乱して呪文を唱える。土煙を吸い上げるようにして風の刃が大蛇を斬りつけるが、それもダメージを与えるにはほど遠い。

「許せ……ない」

「レミ？」

倒れている兵士を見つめていたレミが、ぐっと杖を握り締める。

「許せないつつてもよ、宙に浮かばれたまんまじゃ攻撃だってリベルの魔法くらいしか」

ジンが言いかけたとき、レミの杖が一層輝きを増した。それを見たレミは、最初から杖の使い方を知っていたかのように、杖を大蛇へと向ける。

するとどうか、光が杖の先端に収束したかと思うと、瞬きをする間ほどの早さで大蛇の生えている屍でできた球体ごと貫いた。まるで光の槍だ。

「すごい」

見上げながらリベルがつぶやく。光の槍が球体を貫くと、それをバチバチと音を立てながらいくつもの光の輪が覆った。

「半端ねーぜ」

同じく見上げているジンが言った。横を見るとジグザールでさえも我を忘れて見入っているようだった。

「倒せたのかしら？」

「あれが効かないなんてことはありませんよ。ゼンさんのところにあった武器なんですから」

リベルにクラッセが言い、俺も続けて口を開こうとしたときだ。

ア・ア・ア・ア・ア・ア・ア・ア・ア・ア・ア

金属と金属を擦り合わせたような耳障りな音に、俺は耳を両手で塞いだ。黒い球体から聞こえてくることからして、断末魔の叫びとでもいうことなのだろうか。頭の中に直接響いてくるようで不快なことこの上ない。

顔を歪めながら中空に浮かぶ球体を見つめていると、それは突然弾けた。

「終わった……のか？」

誰にともなくつぶやく。

「あっけなかったわね」

拍子抜けしたようにリベルが言った。

どさつ。

音のした方を向くと、ジグザールが地面に腰をおろしていた。

「あんたみたいな人間も地べたに座るなんてことあんだな。座る場所には玉座じゃなくていいのかよ」

「うるさい！　ずっとあの化け物の相手をしていたのだ、仕方がないだろう！　それに玉座に腰をかけたことなど一度もないわ！」

からかい口調のジンにジグザールが即座に言い返す。だが、さすがにその顔には疲れが濃く出ていて、それ以上は口を開こうとせずに粗い息をつく。

「ゼンさんにもあとで報告しておこう」

独白してからレミに気がつく、彼女もこちらを見る。

「レミ、大丈夫か？」

「うん。でも、怪我人が、たくさんいる、だろうから、ゆっくりして、いられない、ね」

言われて辺りを見渡すと、大蛇の化け物に気を取られていて気づかなかったが、そこかしこに人が倒れているのが見えた。鎧を着た兵士が多かったが、そうでない者もいる。逃げ遅れた街の人々だろう。まだ息のある者もいるらしく、うめき声がどこからともなく聞こえる。

「こうしてはいられないな。早く手当てをすれば助かるかもしれない」

俺が言うと、クラッセが「はい！」と言い、ジンも「あいよ」と首と右腕をひと回しした。

「あなたも手伝ってくれるんでしょう、ジグザールさん？」

リベルが座ったままのジグザールに声をかけると、ジグザールは

「当然だ」と言って立ち上がる。

「すまなかったな」

すぐに街の人たちを救出しようと身を乗り出しかけた俺たちは、その言葉に振り向く。ジグザールは怒ったような照れくさいようななんとも言えない表情で顔を背ける。

「なにがです？」

ポカンとしてクラッセが尋ね、ジンが「ばっかだなおめー」とクラッセを肘でつついた。

「あのような者に騙されてしまったとはいえ、無実の者を牢に入れてしまうとは……。この侘びはいつか必ずするつもりだ」

「いつかと言わず、今してくれてもいいんだぜ？ 土下座つー素晴らしい方法があんじゃねーか」

「だ、誰が貴様に土下座なぞするか！」

ニヤニヤと笑みを顔に貼り付けて言うジンにジグザールが叫ぶ。ジンも素直でない男なのだ、頭を下げられると、つい悪態が先をついて出てしまう。ジンらしい言いように俺はクラッセやりベルと顔を見合わせて苦笑した。

ジグザールも街のことを思えばこそその行動だったのだ。あやうく間違いで処刑されてしまうかもしれない、結果として丸く収まったのだから。この男を憎む気にはなれない、結果として丸く収まったのだから。

「逆らうやつには容赦しねえって兵士連中が言ってたけど、案外いやつじゃねーか」

ジンが言つと、

「悪人には容赦しないのは当然であろう。情けをかけるばかりが良いということではない。ただ私のやりかたに批判的な者もいるということだ。……だが、今回のことは私も本意ではある。あのやつの声を聞いていると、どこか正常な判断力が失われていった節があった。今になって思い出してみれば、だがな」

ジグザールは腕を組んで顔をしかめる。

「しかし、その武器はどこで手に入れたのだ？ それに貴様たちは

何者だ？ 私でさえ手こずる化け物をああも簡単に倒してしまうとは」

ジグザールはレミの杖を見て言った。

「歯が立たない、の間違いじゃねーの？」

相変わらずからおうとするジンを無視して、ジグザールがレミの杖に手を伸ばす。

何気ない自身の行動にジグザールが一瞬、戸惑いの表情を浮かべる。レミはそのジグザールの様子に不穏なものを感じたのか、杖を遠ざけようと身を引いた。が、ジグザールが杖を掴む方が早かった。

杖を握る右手がふるふると震える。ジグザールは自分でもなにが起こっているのかわからないように目を見開き、
ばきっ！

なんとということか、杖を真つ二つに折ってしまったではないか！

「ジグザールさん、なにをしているんだ！」

「ど、ということだ、体の自由がきかん」

額には玉の汗が浮かんでいる。

「様子が変だわ！もしかしてまだ？！」

リベルが顔を上げて辺りを見る。

「やつつけたはずじゃ？！どこかに」バラサイトイビル闇に憑かれた者がいるってことですか！」

「わかんねーけど気を緩めるんじゃねーぞ！」

揃って身構えたときだ。強烈な突風が吹いた。

「きゃあ！」

「うおっ」

「な、なんだ？！」

「い、いたい！」

「……！」

抗うことのできない強風に吹き飛ばされ、俺たちはしたたかに体を打ち付けて倒れる。

頭をさすりながらなんとか立ち上がろうとした時、俺は見た。闇が蠢くのを。

真っ暗な路地に、その上からさらに塗りつぶしたような深い闇。俺は身を震わせた。ギョロリと血走ったような白目が瞼を開けたのだ。その刹那、数本の影が伸びた。

俺が声を張り上げるよりも早く、影は横を通り過ぎ

「ぐあああああああああ」

ひきちぎれんばかりの絶叫が辺りにこだまする。

「ジグザールさんっ！」

影が身動きのできないジグザールに突き刺さる。

あつという間の出来事に俺たちは息をすることさえ忘れ、そして悟った。

街を襲い、多くの人々の命を奪い、ジグザールを操った者こそ、たった今俺たちに狂気をはらんだ視線を向けている者に他ないということを。

6・終焉たる象徴の翼

俺たちが初めての依頼を受けてこのブッツフェの街を出発してから、まだ1日も経っていない。それなのに、ゼンという老婆を通じて勇者デュランドー・シギルの伝説の片鱗に触れ、あまつさえ時代の節目に現れるという”闇に憑かれた者”^{バラサイトイビル}と呼ばれる邪悪とこうして対峙しているのだ。我ながらこれが夢であればいいとさえ思ってしまう。

それでも、時々かすかに聞こえるうめき声や地面に染み付いた血の跡、そして俺たちを睨みつけるような尋常でない狂気をはらんだ視線に、それが現実なのだと思います。

（無能ハ、死ネ）

あの無機質な声だった。

（コノヨウナ連中ヲアシドメスルコトスラデキナイトハ）

淡々と語るような口調だが、あきらかな侮蔑が含まれているのが感じ取れた。

「あつ！ あれはジグザール様！ どうしたんだ、怪我をされているようだ！」

はっとして声のした方に振り向くと、遠くにいた2人の兵士が駆け寄ってくる。その時、ギョロリとした白目が兵士たちを捉えた。

「あぶねえ！ 来るんじゃねーおまえら！」

我に返ったジンが叫ぶ。兵士たちはその場で足を止めかけるが、ジグザールの怪我を捨ておけないとも思ったのだろうか、顔を見合わせてから再びこちらへ向かってくる。それが彼らの命取りになった。

続けて俺が制止の声を上げるよりも早く、闇が膨れ上がったかと思つと影がすばやく兵士たちへ伸びる。それは2人の兵士を貫くと彼らは声を上げる暇もなく倒れた。

「ばっかやるーが……」

「気落ちしている暇はないようだぞジン」

ジンに言ったとおり、すでに白目の視線は俺たちの方へと戻されていた。ドクンと脈打つように闇が揺れると、またも影が伸びる！ 標的は今度こそ俺たちだ！

5本の影が迫る。その速さは大したものだが、すでに2回も見ているのだ、反応できない速さではない。問題はどうやって防ぐかだ。が……。

ブロードソードを握る手の平が熱くなっていくのを感じた。

いけるかもしれない。魔法がかかっているであろう、この剣を信じるしかない。とつさにそう考えた俺は、迫る影へブロードソードを抜き放った。

ザシュツ。

まるで草でも切るかのように、ブロードソードは伸びてきた影をいとも簡単に斬って落とす。ゆっくりと形を失う影。ジンがピューと口笛を鳴らした。

「レベル2のファイターにできる芸当とは思えねーな」

まったくその通りだ。ゼンさんに会う前にこの街に戻ってきていたらと思うとゾツとする。この剣がなければ手も足も出せずにやられていたに違いない。

「ジグザールさんは無事なんですかレミさん?!」

そこで金縛りから解けたようにクラッセが、ハッとした顔でレミに声をかけた。

「大丈夫みたい、だよ。急所ははずれて、る」

すると倒れていたジグザールが額に汗を浮かべながら上体を起こす。

「あの程度の攻撃で……この私がやられるわけ……」

強気な口調とは裏腹に痛みが顔が歪むジグザール。急所がはずれているといっても浅い傷ではないようだ。腹部に滲む血の色が傍目で見えていても痛々しい。

「ふんっ、大口を叩く元気がありゃー問題ねーってもんだぜ。それ

よりどうしたもんかね。ディールの剣で影を斬ることはできるみてーだけど、近づかなきゃイビル野郎を叩っ斬れもしねーかな。どうだよディール」

ジグザールを一瞥して唇の端を上げてみせるジン。額には一粒の汗が流れた。

強気を装ってはいるが、さすがに向こうの攻撃手段が影を伸ばしてくるだけではないはずで、どんな攻撃を仕掛けてくるか図りかねる相手にジンも不用意に動くことができないのだ。

「ああ、やつの攻撃があれだけならなんとかならないこともないが……さすがにそういう訳にはいかないだろうな。できれば援護がほしい。リベル、そろそろ魔法は使えそうか？」

俺は振り返ってリベルを見る。彼女は目を閉じていて、「待って」と言った。

「体の中でなにかが渦巻いているのを感じるの。これがきつと魔力というものなんだわ。もう少しだけ集中する時間を頂戴。そうしたらきつと……」

目を閉じたまま必死に杖を握り締めているリベルに、俺はジンとクラッセを見た。

「時間をかせぎましょう！」

「俺らにどこまでできるかわかんねーけど、やれるだけやってみようぜ」

俺は「ああ!」、ブロードソードを握り直すと頷く。

「しかし、”闇に憑かれた者”って一体なんなんだ」

路地に佇む闇に向き直り呟く。闇の中の白目は俺たちの出方をうかがっているかのようにこちらを凝視したままだ。

初めは黒い蝶の群れに森で襲われたのを思い出す。心の中を侵されていった俺たちは、リベルの声でなんとか我に返ることができた。世の中の全てが憎くて、全ての人間を殺してしまいたい、あらゆるものを壊してしまいたい気持ちがあふつと湧いてきて、その手前で踏みとどまることができたのだった。

難を逃れた俺たちは次に、池のほとりで突如として現れたゴーレムに襲われた。その時はゼンさんが張ってくれた結界と共にゴーレムは消滅していったのだが、岩でできた体のゴーレムには俺のソードは全く効かなかった。ゼンさんの助けがなければ、武器を失った俺はどうなっていたか知れない。

ゼンさんと出会い、彼女は強い力を持つ何者かの存在を俺たちに伝えた。その存在の調査を頼まれた俺たちは戦うための武器を求めて宝物庫へと向かったのだが、その途中で霧と鎧の兵士に囲まれてしまったのだ。ただでさえ霧で視界を奪われている上に、鎧の兵士は俺やジンの攻撃をことごとくかわしてしまうのだ。

いよいよ追い詰められた俺は鎧の兵士が持つハルバードに斬りつけられて倒れてしまった。万事休すかと思ったとき、リベルが魔法を使い、それを撃退することができたのだった。

なんとか武器を手に入れた俺たちは、強い力を持ち俺たちを襲ってくる者が、パラサイトイビル 闇に憑かれた者” という名だということをゼンさんから告げられる。

その時にブユツフェの街が危険にさらされていることを知り、俺たちは大急ぎで街へ戻ったのだが、街では突然出現したモンスターの群れで、すでに恐慌状態に陥っていた。それでも宝物庫で得た武器の威力は絶大で、レミのモンスターに関する知識も手伝って、誰も大きな怪我を負うこともなく一掃することに成功したのだった。

無実の罪に牢へと繋がれた俺たちが、牢を出たときにはジグザールが宙に浮かぶ大蛇と戦闘を繰り広げている最中だった。 ” 闇に憑かれた者” に操られたジグザールによって折られてしまったが、レミの持っていた杖によって大蛇は跡形もなく消え去り、全ては終わったかに見えた。しかし、突風の後に襲い掛かってきた影によってジグザールは重傷を負ってしまったのだ。

ひた、と一歩踏み出したまま両手でブロードソードを構える。

そこまで考えて改めて湧き上がる疑問がひとつ。

「 ” 闇に憑かれた者” ってなんなんだ? 」

俺たちの心を侵さんとする精神攻撃、召喚されたゴーレムに街を襲うモンスターたち。鎧の兵士たちが消えたあとに俺の怪我がなくなっていたことを考えると、宝物庫へ向かう通路での鎧の兵士たちは魔法かなにかが見せた幻覚なのだろう。そして死体が集まってできた球体から鎌首をもたげた大蛇は毒の炎を吐き、今日の前にいる闇から俺たちの様子を窺っている白目は幾本もの影を伸ばして攻撃してくる。

時代の節目に現れるという”闇に憑かれた者”だが、まるでその攻撃の仕方に一貫性がない。モンスターの類にしてはどこか違和感がある。モンスターとは一線を画す存在なのだと言われればそれまでだが、少なくとも最初に俺の心の中に入り込んできた悪意と狂気じみた感覚はどことなく覚えがあるような感情にも思える。

「”闇に憑かれた者”……だと？」

はっ、として振り向くとジグザールがなんとかして立ち上がろうとしていた。

「まだ動いたら、出血が、ひどかった、から」

ジグザールの身を案じるレミの手を振り払った彼は、驚愕の表情を浮かべている。

「俺たちは、ある人から聞いたんだ。その人はとても優れた魔法使いで、あれを”闇に憑かれた者”なのだと言っていた。ジグザールさん、なにか知っているのか？」

「ふんっ、存在だけは聞いたことがある。道理で私の魔法が効かん訳だ、あれには普通の魔法は赤子がその手で撫でるほどにも効果がないと、古い文献で読んだことがある。その小娘がどんな魔法を使おうとしているのか知らんが、このままでは大したダメージも与えられんだろうよ」

「あんだとお？！ じゃー、どうするってんだよ。このまま指を咥えたままやられろってーのかよ！」

「お、落ち着いてくださいっ、ジンさん」

なだめるクラッセに「これが落ち着いてられるかってんだ！」、

ジンが唾を飛ばす。

「なにか手はないのかジグザールさん。あなたもあれが知っているのなら、倒す方法も知っていたりするんじゃないのか？」

手足をばたつかせているジンと、それを後ろから押さえているクラッセを横目に尋ねる。ジグザールは「ふむ」と言ってから、

「あることにはある。が、私の魔力も底を尽きかけていてな、これが最後の魔法となるだろう。それに……」

そこで苦痛に顔を歪めるジグザール。

「普通のモンスターには効果のない魔法ゆえ、私も初步の初步しか扱えん、今まで使う機会などなかったからな。致命傷を与えられる保障などない、だからとどめは貴様たちが刺せ」

「どんな魔法なんだよ！」

ジンが叫ぶ。ジグザールは呼吸を整えながら手の平を掲げる。

俺はその様子を黙って見守る。一息ついてジグザールは言った。

「破邪の魔法だ」

その言葉を合図にしたようにクラッセがショートソードを構えるのが見えた。

「き、きますよ！」

クラッセに習い身構えると、闇が膨らむのが遠目でわかった。

「悠長に話しをするあいだ待っていてくれただけでも良しとしようぜ

！もうちつとのんびり屋さんだともっと助かったんだけどな！」

「影は全て叩つ斬るぞクラッセ！」

「は、はい！」

ジグザールが呪文を唱え始める。

闇がさらに膨れた。

白目が膨れ上がる闇に飲まれて消える。狭い路地に収まりきらないほど膨れ上がった闇は、やがて異形へと姿を変えていった。

闇の塊から左右に1本ずつ、新たに闇が伸びた。それは大きく広がり翼のような形状へと変えると、ひとつ羽ばたきをする。顔にあたる部分から胴体と思える部分までがでっぷりと太ったような形になると、顔の部分が上下に裂けて牙を剥き出して咆哮をあげた。

俺たちを見下ろすように翼を羽ばたかせているそのシルエツトは一見するとドラゴンにも見える。しかし腕がない代わりに翼の生えたその姿は、ドラゴンの中でも知能は低いが郡を抜いた狂暴さで知られ、ワイバーンと呼ばれる翼竜のようだった。熟練の冒険者でも倒すのは至難とされるワイバーン。本物のワイバーンと違うのは、それが”パラサイトイビル闇に憑かれた者”が生み出した闇の塊でできているということだ。ワイバーンの狂暴さに加え、散々俺たちを苦しめた魔法までも使ってこられたとしたら、本物以上にやっかいな相手に違いない。

「おめえの剣でもあれを叩つ斬るのは難しいんじゃないか？」

ジンが引きつった笑みを浮かべる。

「やってみなきゃわからないさ」

そう言いながらもさすがに自信はない。

「じ、ジグザールさんが呪文を唱え終わるまでの辛抱ですよ！」

自分を奮い立たせるように声を張り上げるクラッセ。その手に持つショートソードの剣先が小刻みに揺れている。

「へいへい、なんとかやってみゃしょーかね。つっても俺にできるこたあ、さすがにねーな」

一応はダガーを両手に構えながらもジンが後ろに下がる。

「リベルたちに近づけさせるな！ 俺がどうにかして引きつけるから2人は援護を頼むぞ！」

「わかりました！」

「あいよ」

掛け声に2人が返事をする。俺は走り出した。

と、漆黒のワイバーンが、ぶわっ、と羽ばたいた。

その動きは予想以上に早かった。俺がワイバーンへと走り出すのと同時に、口を大きく開いて突進してきたのだ。俺は反応しきれずにブロードソードで受けるのが精一杯だった。

「うおおおおっ、ジン！ クラッセ！ 俺から離れるんだ！」

かろうじてブロードソードをつつかえ棒のようにしてしのぐが、俺はワイバーンの口に挟まれたまま体ごと持ち上げられた。一瞬のうちにリベルやジグザールの位置から遠ざかっていく。ジンとクラッセが走ってくるのが見えた。

「デイルさんっ、今助けます！」

「む、無理だ！ 逃げるクラッセ！」

しかしクラッセは俺の制止を振り切ってショートソードを振り上げる。

「坊主！ あぶねえ！」

ジンの声に、クラッセのワイバーンを見上げる顔が信じられないものを見るような顔になった。ワイバーンの胴体からいきなり腕が生えてきたのだ。その腕は正確にクラッセを捉え、彼を地面へと叩きつける。

「世話のかかる坊主だ……ぜっ！」

ジンがダガーを投げつけるのが見えた。宝物庫から持ってきたダガーのうちの1本だ。ジンはレミの杖と同じような、なんらかの効果を期待していたのだろうが、

「なんだよ！ 俺のダガーには魔法とかかけられてねーのかよ！」

ワイバーンの腕へと真っ直ぐ放られたダガーは、俺たちの期待とは裏腹に闇に吸い込まれるようにして消えていく。

ジンは「ちくしょう!」、もう1本のダガーも投げつけるが同じように闇に消えていくのを見て、成す術なくワイバーンを見上げる。
「デイル……!」

遠くからレミが叫びが聞こえた。俺は視線を目の前へ戻す。

(うつ……ま、まずい!)

ワイバーンの口の奥で闇が渦巻いていた。

全身の汗が引く。どんな攻撃なのかはわからない。だが、これにくらったらとてもまともではいられない、体が直感的にそう感じ取って硬直するのがわかった。

なんとか逃れようともがく。しかし、俺を咬みちぎろうとせんばかりのワイバーンの口をつつかえ棒代わりにして押さえているブロードソードをたとえ手放したとしても逃れられそうにない。ワイバーンの周囲の闇が、まるで獲物を捕らえる蜘蛛の巣の系のように俺にまとわりついているようなのだ。

「デイ、デイルさん……!」

「デイル! くそつ、デイルを離しやがれこのイビル野郎!」

闇が渦の中心に収束する。もはや逃れることはできないように思えた。ブロードソードの柄を握る手の平から力が抜ける。

「もう諦めるのか?」

誰かが耳元で囁いた気がした。

「おまえはモンスターに襲われ、それがおまえの手に余るモンスターだったとき、勝ち目がないからといって諦めるのか? 村にはまだおまえが守りたいと思う人たちがいるのではないのか?」

亡き父の声だった。走馬灯のように昔の光景が浮かぶ。あれは剣の稽古をつけてもらっているときのことだった。コテンパンに叩きのめされ剣を放り出そうとする俺に言った父の言葉が蘇る。

「いつかきつと私も他の大人たちもいなくなる。そのとき、守りたい人たちを守ることができるのは、いつだって最後まで諦めない者だけなのだぞ。剣を手に取り、最後まで踏ん張ってみせろ! おまえが諦めてしまって、誰が大切な人を守るといふんだ!」

知らずに俺は瞼を閉じていた。時間が止まったかのように眼前の闇も動きを止めていた。

『デイル！ 腹に力を込めて剣を手にとれ！ おまえの仲間たちを守ることができるのは常に自分だけなのだと思え！』

指先で柄の感触を確かめると、ブロードソードはほんのりと熱を帯びていた。柄を握り締めると、まだ腕にも力が入った。

そうだ、ここが俺の人生の終着点ではないはずだ。俺にはまだ守りたい仲間たちがいる。ジンモリベルもクラッセもレミも、あの兵士の青年もジグザールもブユッフエの街の人たちだって、まだ死にたくないはずだ。

時代の節目に現れるという”闇に憑かれた者”をここで倒すことができないれば、もっと多くの人たちが命を落とすかもしれない。

父の言葉を思い出す。

『おまえの仲間たちを守ることができるのは常に自分だけだと思え！』

この言葉の意味を小さかったあの頃の自分ではわからなかった。けど今ならわかる。いつだって父や村の大人たちは、村を襲うモンスターから命がけで自分の大切なものを守ってきたんだ。それは決して誰かが守ってくれるのではない、大切なものを守りたいのなら自分自身が立ち上がらなければならぬのだと、人に頼るばかりでは守ることができないのだと、そう教えてくれていたのだ。

俺は知らず知らずのうちに、この魔法がかかった剣の威力、リベルやジグザールの魔法に頼っていたのではないか？ それ自体は悪いことではないのだと思う。手と手を取り合わなければ乗り越えられないことだってたくさんあるはずだ。そうしたときに仲間がいてくれるのはとても心強い。だけど、助け合うのと、助けをあてにして頼り切るのでは全く違う。いつだって自分自身が最後まで諦めずに全力を尽くすからこそ、仲間たちだってそれに応えてくれるんだ。俺は仲間たちを守りたい。だからこそ今だけは最後の瞬間まで諦めてはいけないんだ！

ギョツと柄を握り締める。カッと閉じていた目を見開く。止まっていた時間が動き出した。

「こんなところで……諦めてたまるかあああ！」

手の平が熱い。ブロードソードの刀身がうつすらと赤みを帯びているのが見えた。その時、

「大いなる大地神よ、その深緑と生命の輝きを以って不浄なる闇を打ち滅ぼせえい！」

ジグザールの叫びがこだまする。

その叫びに呼応するように左右から緑色の光が幾本も地を裂いて立ち昇る。立ち昇った緑色の光はまるで鳶のようにたちまち漆黒のワイバーンに巻き付くと、それを縛り上げた。

「私にできるのはここまでだ！あとは頼む……ぞ」

息粗くジグザールが地面に膝をつくのが見えた。

ワイバーンの巨体が緑色の光に締め付けられて歪む。クラッセを押さえつける腕がちぎれて消えていった。それでも口の中で渦巻く闇はさらに収束し消えることはない。

「今だっ、デイル！」

わずかにワイバーンの口元が緩むのを見逃さなかったジンが叫ぶ。俺は思いつき右腕に力を込めた。

ブロードソードがワイバーンの口をまわりつく闇ごと斬り裂く。体が解放されて宙に投げ出される。その瞬間、渦巻いていた闇が一気に放出された。

「ぐうあああああああああ！」

左半身にひりつくような痛みが走る。直撃は免れたものの、漆黒のワイバーンが吐き出した漆黒のプレスは宙に投げ出された格好で避けることはできなかった。

すぐに重力の手に引かれ、俺はそのまま地面へと全身を強く打ち付けた。鈍痛に顔が歪む。

「ま、まるで効いてませんよ！」

ワイバーンの腕から逃れることのできたクラッセが痛みを堪えた

表情で叫ぶ。クラッセの言うように、ワイバーンは緑色の光を打ち破り、一層大きく翼を羽ばたかせていた。

「いや……ダメージは確かにある！ 見るんだ、向こうの景色が透けて見えてる！」

俺はなんとか上体だけ起き上がって指をさす。翼を羽ばたかせる勢いを増すワイバーンだが、先ほどまでの奈落の底を思わせるような漆黒の巨体は、それを維持できないのかうつすらと透けて向こう側が見えるほどになっていた。

「お、おいデイル！ 大丈夫なのかよ……げっ！ 腕が焦げているみてえに真っ黒だぜ！」

駆け寄ってきたジンに言われて左腕を見たとなんに眩暈がした。続けて激痛がやってくる。あまりの痛みに気を失ってしまいそうになるが、ここで気を失うわけにはいかない。ワイバーンをまだ倒せなければいけないのだ。

「逃げてくださいデイルさん、ジンさん！」

ワイバーンがさらに大きく口を広げる。「や、やべえ！」、ジンは慌てて俺を背に担ごうとするが、ワイバーンの動きが早い！

「間に合わない……ジンだけでも逃げろ」

痛みを堪えながらなんとか声を絞り出す。

「ばかやろう、そんなわけにいくかよ！」

ジンが怒鳴る。

「や、やめろおおおおおおお！」

クラッセの悲鳴が遠くに聞こえる。目の前が真っ暗になった。漆黒のワイバーンの影が俺とジンに覆いかぶさるほど近づいた。

（誰でもいい……俺に仲間を守る力を貸してくれ！）

俺は心の中で叫んだ。

その時、力強い声が聞こえた。それは俺の心の叫びと重なるようにして、まだ明けぬ夜を高らかに照らす光となった。

星も見えないほどの闇夜の空に青白い光を放つ満月があった。いや、満月に見えるそれは似て非なる光の球体だった。

漆黒のワイバーンが俺とジンに覆いかぶさったまま固まる。ワイバーンの巨体に光が降り注ぎ、砂山の砂が風にさらわれていくように少しずつ闇の塊が崩れていく。

「み、見ろよ。腕が……」

迫るワイバーンに、2人して倒れ込んでいた俺とジンだったが、ジンに言われて腕を見ると、焦げたように真っ黒になっていた左腕からは少しずつ黒色が引いていくのがわかった。しびれはまだ残っているが、黒色が引くのも同じで痛みも和らいでいく。

「リベルの魔法、か？」

呟いてふと手元を見ると、ブロードソードの刀身がまたもほんのり赤い光を帯びていた。

「おめ……その剣、どうしたってんだ？」

赤い光を帯びるブロードソードに気付いたジンが息を飲む。

「わからない。さっきからやけに熱いんだ」

ジンに答えて再び刀身の光に目をやるのと同時にリベルの声が聞こえた。

「聖なる月よ！ 蒼き清浄なる杯を受けて滅びなさい、闇！」

リベルの言葉に応えるように青白い満月からは青白い光の雫が溢れ、滴り落ちる雫が闇を溶かしていく。

漆黒のワイバーンが軋んだ悲鳴を上げる。俺たちはその光景をただただ見ていた。

「今度こそ終わりだったらいけどよ」

溶けゆくワイバーンを眺めながらジンが言った。

「僕もそれには同感ですけど……」

足をひきづりながらやってきてクラッセが言う。ズボンが膝の部分が破けていて血が赤く滲んでいる。

「このまま終わるとは思えない」

俺は唇をきつく噛む。リベルの魔法によってワイバーンはその形をすでに留めていなかったが、それまで以上に突き刺すような視線がどこからか感じるのだ。ジンとクラッセも感じているらしく固い表情で頷く。そうしていると青白い満月から滴り落ちる雫が漆黒のワイバーンをみると溶かしていき、ワイバーンはやがてほんの小さな闇の球体にまで縮小していく。

ワイバーンの体から溶けていった闇は霧散し、いよいよ闇の球体も消え入りそうになった時、離れた場所にいるリベルの表情に陰りがよぎる。そして、はっ、としたように俺たちの方を向いたリベルが口を開きかけた瞬間、

（殺ス……殺ス殺ス殺ス殺ス殺ス殺ス殺ス殺ス殺ス殺ス殺ス殺ス！）

憎悪と怒りの入り混じった声が頭の中に響き、消えかけていた闇の球体が突然膨れあがった！

俺は急ぎブロードソードを杖代わりにして起き上がる。地面にたたかに打ちつけた全身からはもう立ち上がりたくない抗議の声上がるが、そんな非難になどかまってはられない。

ふらつく体をなだめながらようやく立ち上がると、再び迫らんとする脅威に備えて中腰でブロードソードを構える。……と、背中 of 辺りから聞こえる妙な音に、俺は時間にしてほんの1秒ほどだろうが、眼前の脅威から視線をはずすべきか迷った後に振り向いてしまった。

カサカサカサ。

俺の背中をよじ登って肩から顔を覗かせたそれに、俺はあろうことかブロードソードを取り落としてしまった。

「……っは、うわああああ！ な、なんだこいつは?!」

それは見るもおぞましい姿形をしていた。大きさは手の平の上に乗る程度で、俺の背中を競い合うように登ってくる。おびただしい数のトカゲの首には胴体に釣り合うサイズの醜い人間の顔がついていた。ギョロリと虚ろな眼、うつすら禿げ上がった丸い頭、ニタニタと口元には薄気味悪い笑みを浮かべて俺に群がるそれらに、気が動転しそうになりながら振り払おうと手を伸ばす。しかし、どんなに手を伸ばしても執拗にまとわりついて剥がすことができない。

「うおっ、うおっ！ 気持ちわりい！ 離れる、どっか行きやがれ！」

「ごめんなさいごめんなさい！ 許してください！」

近くから口々に叫ぶ声が聞こえるが、それを確認する余裕はなかった。膨れ上がった闇が迫ってくるのが視界の隅に入ったのだ。

先端が鋭く尖った闇が俺たち3人を串刺しにせんとばかりに迫る。なんとか応戦しようと取り落としたブロードソードに手を伸ばすが、指先にかすめるだけで掴むことができない。群がる人面のトカゲが今度は口の中に入ってこようと顔にへばりついてきたからだ。

地べたに倒れ込んで足をばたつかせながら顔から引き剥がそうとするがどうしようもできない。呼吸も苦しい。「助けてくれ!」、そう叫びたいのにもはや声を出すこともできない。

(ヨワッタ心二八)

目の前が白濁した景色に変わってゆく。人面のトカゲが我先にと、もぞもぞ身をくねらせながら俺の口の中へと入ってくる。そのトカゲたちの隙間から迫ってくる闇の先端が見えた。

ついさっき、最後まで諦めないと心に誓ったはずなのに、こんなところで俺は死んでしまうのか。武器を取り落としてしまってもう戦うことができないのか。できないのだから仕方がない、耳元で誰

かが囁く。

「しょうがねえことだぜデイル。おめーも俺もよ、最後までよく頑張ったじゃねえか。ここらへんが潮時かもしんねーなあ？」

どうやって逃れたのか、目の前には肩をすくめて笑うジンがいた。「冒険者なんてやってたらいつかは死んじまうんだしょ。あんまり苦しまねーで死にたいとは思わねーか？ 俺はそっち派だぜ。今ならこれ以上苦しむ必要なんてないんだからよ」

「なにを言ってるんだジン、バカなこと言っな！」

「いいんじゃない」

「レミ?!」

いつの間に隣にきていたのか、レミが呟く。

「もう疲れた、よ。終わりに、しようよ」

「忘れたのか?!」 闇に憑かれた者^{パラサイトイビル}のせいでブッフェに住むたくさんの人たちが死んでしまったんだぞ！ やつを許せないって、レミも言っていたじゃないか！」

俺はレミの肩を掴もうとしたが、レミはさっと身をかわして、

「もう、いいよ。所詮倒せるわけ、ないから。あれはいくら倒しても、きりが、ない存在。私たちには、どうすることもできない」

「倒してもきりがないだって?! どういうことなんだレミ」

レミは答えずに背を向ける。

(ヨワツタ心二八闇ガヨクニアウ)

すると足音が近づいてくる。

「クラッセ……。もしかしておまえもおかしくなっちゃったのか?!」

俺の目の前にきた金髪の少年はうつむいたままだ。

「クラッセ？」

「……いいんですよ」

「なんだって？」

「みんな殺されてしまえばいいんですよ。結局僕には無理だったんです、兄さんのようなファイターになることなんて。だいたい、僕

がこんなに体が弱いのはきつと兄さんのせいなんだ。いつまでも僕の世話を焼いたりするから……余計なお世話なのに！」

顔を上げたクラッセに俺はギョツとした。怒りの形相に顔を歪めたクラッセが怒鳴る。

「こんな世界なんて滅んでしまえばいいんだ！ 僕がなににもかぶち壊してやる！ デイルさんも手伝ってくれますよね？！ ああ、邪魔をするって言うならデイルさんから殺してあげますから」

そう言ったクラッセは怒りの形相のまま、俺の喉にショートソードの切っ先を向ける。俺はクラッセの変わり様に愕然とした。一見すると弱い少年で、戦いには向いていないような優しい心を持っているクラッセがあんな恐ろしい顔で人に剣を向けている。

ジンだってそうだ。いつも軽口を叩くような男だけでも、彼は誰よりも命の尊さを知っているはずだ。自分の弟分が死んでしまったことを今でも忘れられず心の奥底にそつとしまっているような男なのだ。俺の中のジンならば、どんな逆境に立たされたってきつと生きるということを放棄したりしないはずなのだ。

「ばかじゃないのデイルったら。ねえ、あたしたちがどうしてこんなに苦しみながら戦わないといけないの？ それは街の人たちを守るうとしているからだわ。ふふ……ブユツフェの街の人たちなんてみんな他人じゃない。どうして赤の他人のあたしたちが守らないといけないわけ？！ もう全部忘れてしましましょうよ、ねっ？」

「違う……」

「なにが違っているのよ。全て他人事だわ、守る義理なんてないのあたしたちには。もうちょっとデイルも賢くなりなさいよ。あの方に付いた方が幸せになれるわ。そう、あの方こそあたしたちの本当の主だもの。あたしたちを真の闇へと導いてくださるのよ？」

リベルが下品な笑みを浮かべたままそつと俺の肩に手を置こうとする。俺は、さつとその手を振り払う。

「デイル？ どうしたっていうの？ さあ、一緒に堕ちましょう？」

「違う！　こんなのは俺の仲間たちじゃない！　誰だおまえは、なぜ俺の仲間たちのふりをするんだ！」

後ろ手に指先を地面に這わす。俺は目の前にいる4人を睨みつけた。

こんなのが俺の仲間たちであるはずがない。レミはとても物静かで言葉少ななところがあるけれど、傷ついた見ず知らずの兵士を想って怒ることのできる心をもっている。……倒せるわけがないから諦めるだつて？　あのレミがそんな簡単に諦めるわけがない。

「ど、どうしたのよデイルったら。急に大声出したりして」

白々しい台詞を吐くリベルに似た者から目を離さず、俺は地面を探り続けた。

「あの方っていうのは何者だ。おまえたちが本物じゃないことはもうわかってることなんだ！　リベルもジンもレミもクラッセも、そんな馬鹿げたことなんて言わない。おまえたちなんて全部、幻だ！」手に固い何かが触れた。それをギュツと握りしめる。

「……本当に馬鹿ねデイル。堕ちてしまった方が本当の苦しみを味わわずに済むのに」

リベルに似た何者かの顔がぐにやりと歪む。それは飴細工を加工するときのようで、見る間にリベルの原型が失われていく。

「なにが本当の苦しみだ！　おまえたちのような闇の者には絶対に負けない！」

ブロードソードを握る手の平がまた熱くなる。目の前の視界が急に拓け、眼前に迫る闇が見えた。

俺は張り裂けんばかりの声を出してブロードソードを振るう。その時、今度は目の前が真っ赤に染まった。

ジン、リベル、クラッセ、レミの4人の偽者の姿がかき消える。

そして迫っていた闇すらもブロードソードは切り裂いた。

「ジン！　クラッセ！」

傍で倒れている2人に駆け寄る。幻はなくなり、闇もブロードソードに引き裂かれて消え去った後には、ジンとクラッセが倒れてい

た。

「しつかりしろ！ リベルとレミ、ジグザールさんは無事なのか？！」

ジンとクラッセの息があることを確認して胸を撫で下ろすと、俺はリベルたちがいた方へと視線を向けた。

「デイル！ どうしたの急に苦しみだしたりして」

「気を、抜かないで。まだ何かの、心配が、する」

リベルとレミ、そしてジグザールがこちらへ向かってくるところだった。

「ジグザールさん、あんた大丈夫なのか動いたりして？」

「魔力が尽きたとはいえ、足手まといにはならん」

顔をしかめたジグザールが答える。

「幻を見せられていたんだ。リベル、魔法はすぐに使えそうか？

やつはまだ倒せていない。それに……」

「それに？」

聞き返すリベルに俺は偽者のレミやリベルが言ったことを思い出す。そしてひとつの仮説を打ち立てた。

「”闇に憑かれた者”っていうのはきつと……」

俺が言いかけたとき、どこかで囁くような声がした。

（ドコマデモワレワレノ邪魔ヲスルレンチュウダ）

（ワタシノ魔法ヲモツテシテモ意識ヲタモツテイラレルトハオモイモヨラヌコト……）

（オソラクシユクフクノ魔法ガカケラレテイルノダロウヨ）

（イマイマシイ！）

（スデニワレラノナカデモ強イチカラヲモツモノガフタリモヤラレテシマッタ）

（モハヤナリフリカマツテハイラレヌワ！）

（カクナルウエハイタシカタアリマスマイ……）

（コノヨヲ混沌ヘトカエスタメ）

（スベテノセイアルモノニ、死ヲ　　）

いくつかの囁き声が重なったとき、闇が夜空に散らばった。

「また黒い蝶だわ!」

リベルが夜空を見上げて叫んだ。空を舞う黒い蝶は不気味に羽ばたいている。

「いまさらモンスターを召喚しようとしてもいうのか?!」

俺たちの持つ魔法がかかった武器にかかれば、並のモンスターなら相手にならないだろうということは向こうももうわかっているはずではないのか？　とはいえ、すでに多くの兵士たちも傷つき倒れ、俺たちだって無傷とはいえない。今の状態でモンスターをたくさん召喚されてしまえば苦しい戦いになることは確かだ。それでも、「貴様たちには、さきほどの囁き声が聞こえたか？」闇に憑かれ^らた者”も相当の痛手を受けているのはまず間違いないと思っていいるだろう。おそらくこれが最後の攻撃になるはずだ。それをただ普通のモンスターを召喚してくるだけということはありえない、なにか考えがあるはずなのだ。最後まで気を許すな」

苦しそうな表情のジグザールに言われ、俺とリベルとレミは頷く。

「あんたに言われなくてもわかってるっつーの」

「ジン!」

倒れていたジンは立ち上がり、相変わらずの軽口を叩いて唇の端を上げて見せる。「頭いてー」、頭をさすりながらジンが言う。

「デイルさんに感謝しなくちゃですね、ジンさん」

「クラッセ!　大丈夫なの?!」

「やっぱりあれは幻だったんですね。あやうく自分が自分じゃなくなるところでした。でも、デイルさんが幻が見せる悪夢の中に現れて……全部消し去ってくれたんです。ちょうどその剣を持って

僕、ずっと思ってたんですけど、その剣は僕たちの持っている武器とはちよつと違って、なにか特別なもののような気がするんですよ。うまく言えないんですけど」

そう言うクラッセに見つめられ、俺は自分の持つブロードソードに視線を向ける。確かに、持っていると急に手の平が熱くなったり、バラサイトイビル闇に憑かれた者”の影の魔法を切り裂いたりはしたが、クラッセたちの持つ武器とは違うだなんて考えたこともない。

「そついやその剣、さつき赤く光つてたよな？ でもそりゃあ魔法がかけられているからつてことなんじゃねーのか？」

ジンに言われて思い出す。あの時はただみんなを守りたい、だからここで諦めるわけにはいかないと強く想ったんだ。

「シギルの剣、かもね」

俺たちは一斉にレミを見た。レミは黒いフードを目深にかぶり直して続ける。

「シギル、とは古代語で”太陽”の意。デュランドー・シギルは”太陽の勇者”の、名を持っているん、だよ。」テイダリア「小さき太陽」とい

う場所、デュランドー・シギルを知っている、ゼンさん。あの宝物庫に、シギルの剣があつても、おかしくは、ないと、思うけど」

レミの説明にジンとジグザールが同時に眉を動かす。

「おいおいレミちゃんよお、いくらなんでもそりゃ話ができすぎてるつてもんだぜ。だいたい、それがあのシギルの剣だってゆーんなら、あのバーサンが知らないわきゃねーだろ。なんたってあのシギルの剣だぜ？ 伝説中の伝説の剣だろーが！ それをこの、レベルがたったの2しかないデイルが持つてるなんて、ありえねーことだぜ」

ジンが一気にまくしたてる。レベルが2しかないというのは……しかし全くその通りなので反論はしない。

「自分だってレベル1じゃないですか……。僕はレベル0ですけど」クラッセがフォローにならないフォローを入れる。そこになおも口を開こうとするジンを目だけで制してジグザールが前に出る。

「小さき太陽」だと?! 貴様たち、なぜそれを。……あの要塞へ行ったのか?! あれを知っている者は今では数えるほどしかないはずだぞ!」

血相を変えて詰め寄るジグザールの真意は、今の俺たちに計れるはずもなかった。

「見て! 蝶たちの様子が変わったわ!」

リベルの叫びに俺たちは一斉に空を仰ぐ。モンスターを召喚するかと思った黒い蝶たちだが、リベルの言うように様子がおかしい。

「どこかへ向かっているみたいですね」

「なんか……なにかの形を作っているみたいじゃねーか?」

クラッセの言葉通り、空を舞う黒い蝶たちはそれぞれが目的を持っているかのように、迷いもなく移動をしていた。そしてそれはジンの言うように夜空に形を描いているようにも見える。

(ジグザール……ル)

今にも消え入りそうな声。一番早くその声の主を見つけたのはリベルだった。

「だ、誰?! なによあなたは!」

俺たちは見た、闇を纏いながらひたひたと足音を立てて姿を現す色黒の男を。その男は憤怒の表情を湛え、そして右腕を高らかに掲げて、なにかを持っていた。

「あの男は!」

叫び声を上げたのはジグザールだ。その視線は色黒の男が掲げる右腕に向けられている。

「あんたの知り合いかよ?!」

「名前はダーレス。顔は一度見たことがあるくらいだ。禁断の魔法の研究をしていてギルドから追放されたはずだ。それもつい数日前にな。それが一体なぜ……」

色黒の男が首を掴んで持ち上げている男、ダーレスを見ながら、

ジグザールはうめくように言った。ダーレスは息も絶え絶えの様子で虚ろな視線を宙に這わせている。

（ワレラハアノカタニエラバレシモノ！　ヨワキンゲンハフヨウダ！）

色黒の男が叫んで右腕を前に突き出した。

（ギヤアアアアアアアアア！　タスケッ……タスケテクレエ！）

ダーレスという男が悲痛の叫び声を上げる。だが、色黒の男は無言でダーレスの首を掴む右手を離れた。次の光景に俺たちは絶句した。

闇から外へと放り出されたダーレス。その体がミシミシと音を立てる。

（死ニタクナイ、マダ死ニタクナイ！）

ダーレスは自分の顔を両手で覆う。その顔に亀裂が入った。

（ナゼダ！　ナゼオレガコンナメニアワナキヤナラナインダ！　オレヲオボエティルカ、ジグザール！　オマエガアノコトニキヅカナケレバ、コンナコトニハナラナカッタ！）

顔の上半分が砂のように崩れていく。

（禁断ノ魔法ヲツカツテナニガワルイ！　死者ヲヨミガエラセルコトノナニガワルインダ！　オマエニオレノナニガワカル！　アイスルヒトヲウシナイタクナイトオモウコトハワルイコトナノカ！）

すでにダーレスの姿はほとんど崩れさっていった。俺が崩れさるダーレスから目を離せないでいると、

「死んだ人間を蘇らせていいわけがあるか……。人は必ず死ぬ。だからこそ精一杯生きるものなのだ」

ジグザールの呟きはおそらく俺以外には届いていないだろうと思えるほど小さなものだった。

（コノマチノニンゲンスベテヲ滅ボシテヤル！　アイスルヒトヲイキカエラセルコトヲ邪魔シタジグザール、オマエモミチヅレニ……ソレナノニマダ死ニタクナイ！）

正直言うと俺にはダーレスという男の気持ちがわかる。俺だって故郷の村をモンスターに襲われて両親や親しい人たちを失ったからだ。大切な人を失うのはとてもつらい。それが愛した人であればなおさらだろう。それでも、失った命が戻るなんてことはない。つらくて、悲しくて、枯れるまで涙を流して、自分を失いかけたとしてもいつかは立ち直らなくてはならない。そして今度こそは守りたい人を守るようになるうと思って、必死に今を生きていかななくてはいけないんだ。

ダーレスの気持ちは痛いほどわかるけれど、彼は歩く道を踏み外してしまったのだ。死んでしまった人間を蘇らそうとして、それをジグザールに邪魔されたからといって、逆恨みしてブユツフェに住むなんの関係もない人たちを巻き込んでいいはずがない。

「もう随分と前の話だがな、街のはずれにある墓地から死者が動き出すという報告が入ったのだ。そうして私たちが調査した結果、あのダーレスという男の仕業だということがわかった。一度しか会ったことはなくてな、その時はなにかに取り憑かれたようにげっそりとした顔をしていたのを覚えている。事故で伴侶を失うまでは聡明で優秀な魔道師だったらしいがな」

鎮痛な面持ちでジグザールが言った。

「これが闇に堕ちた人間の末路なの……」

顔を背けてリベルが呟く。

ただ愛する人を失いたくないと禁断の魔法に手を染めてしまったダーレスという男の姿は、ついに跡形もなく砂のように崩れさり、それは夜風に流されていった。

ほんの少し前までダーレスという名前で呼ばれていた砂。それらが風にさらわれていく。

それはとても悲しいことのようにも思えたけれど、彼のやってきたことを考えれば仕方のないことかもしれない。愛する者を蘇らせるのを邪魔したからといって逆恨みして、何の罪もない人々を恐怖と混乱に陥れたのだ。そんな男に俺はとても同情することはできないはずだ。それなのに、

「どうして闇に堕ちたからといって、あんな死に方をしなくちゃならないんだ」

どんな罪を背負ったとしても最後くらいは人として死んでいつてほしかった。犯した罪は決して消えることはないだろう。それでも、砂のように崩れ果てて骨すらも残らないなんて悲しすぎる。

「人として、しては、いけないことをして、しまったから」

「レミ……」

俺は静かに目の前を見つめる小柄な少女を見る。その表情は見えない。だけど、もしかしたら彼女も同じようなことを考えているのかもしれない。ダーレスがいた場所をずっと見つめている小さな背中がそう語っているようだった。

（クズガキエタクライデ心ミダサレルカ）

低く喉の奥から搾り出しているようなしわがれた声に、俺たちは顔を上げた。すると色黒の男はみるみるうちに姿が滲んでいき、その場には建物の影だけが残った。

「どこに消えやがった！ 姿を見せやがれ！」

ジンが大慌てで辺りを見回す。

（スグニコノマチゴト消エテシマイマスノニ）

甲高い女性の声。まだ若い女性のものだろう、張りのある声がクスクスとどこからともなく聞こえる。

（ダガ、邪魔モノハケシテオクニカギル！）

色黒の男の声がした。その時、レミとジグザールが空を同時に見て「あっ」と叫んだ。

「どうした2人共」

「ばかな！ まさかあの蝶であんなものを描こうというのか？！」

「不可能……ではないけど、街ひとつを、囲めるほど、のものを、描くなんて」

言葉を失ったまま立ち尽くす2人に、

「なんだってんだよ！ 俺らにもわかるように説明しやがれ！」

なんのことかわからないジンがジグザールの胸倉を掴む。その間にも黒い蝶は螺旋を空に描き、さらに統制のとれた動きで紋様のよくなものを描いていった。

その様子を見ていたリベルは、まるで信じられないというような口ぶりでつぶやいた。

「あれって……ひょっとして魔法陣？」

俺には魔法のことはよくわからないが、言われてみれば池のほとりでゼンさんが張ってくれた魔法の結界を思い出すと、その魔法陣によく似ていた。

「魔法陣って、あんな蝶で描いたりできるのもなんですか？！」

クラッセが問いかけると、ジグザールは苦々しい表情で首を振る。

「普通の魔法陣というものは、そう簡単なものではない。それも街を覆うほどの規模のものとなると、いち魔法使いが描けるものではないが」

「ゼンさんが張った、結界の魔法陣は、きっと、」ティダリア「小さき太陽」にもともと備わっている、機能、だったんじゃないかな。だけど」

続けてレミが言うと、ジグザールは神妙な顔つきで頷き、

「やつらの特異性を考えればありえん話ではない。おそらく」ガラ「闇に憑かれた者」とは、何人も闇に魅入られた魔法使いたちの集合体なのだ。1人の魔法使いでは持ちきれないほどの魔力を秘めていると言っても過言ではないだろう」

だからこそブツフエの街を覆うほどの魔法陣をあんな黒い蝶を使って空に描くことも可能なのだ。そうジグザールは俺たちに説明した。

「じゃ、じゃあこのまんま黙ってみてたらやべーじゃねーか！ 早いとこなんとかしねーとよ」

慌てるジンに、「言われなくてもわかってる」、ジグザールは苦い表情のまま答える。

きつとこのままだと、ジンの言うように「やばい」のだろう。そのためには”闇に憑かれた者”を倒してしまうほかにはないのではないか。ただ、俺は何か釈然としない気分になった。あの魔法陣を使った魔法が街全体を滅ぼしてしまえるほどのものなのかどうか、俺にはわからない。だが、なぜやつらは最初からこうしてしまわなかったのだろうか。それほどの魔力があるのならば、俺たちの相手などせずにそうしてしまえば彼らにとつて都合が良かったのではないか。そうしない理由がなにかあったのだろうか……。

「デイル、なにばさつとしてるのよ！ あそこを見て！」

俺は思考を中断して前を見た。ほの暗い何かがある一点に集まっていたのが見えた。そしてそれはすぐに緑色と紫色、茶色の3つの色に変わり、交じり合うようにして膨れ上がっていく。

それらは形を変えていくと、両手足を作り、それだけでも5メートルはありそうな巨大な足は、石でできたゴーレムのような硬度を持つているようだ。木造りの家などものともしない、運悪くもすぐそばにあった民家がメキメキと悲鳴を上げながらひしゃげていった。池のほとりで俺たちの行く手を阻んだゴーレムが巨大化したようなものだろうか。大の大人が両手でやっと抱えられるくらいのサイズの茶色の石がびっしりと隙間なく繋がって全身が構成されているらしく、その継ぎ目からは次々と紫色の毛が生えていった。

あつという間に紫色の巨大な毛むくじやらモンスターのような風体になったゴーレムの頭の部分からは緑色の蛇が一斉に生えた。そして、顔の部分が裂けると、あの悪意に満ちた視線を俺たちに向け

ていた白い目玉が2つ、ギョロリと覗いた。

白い目玉に魂が宿ったように怪しく瞬くと、ちょうど口にあたる部分が上下に大きく裂けて、ナイフの先端のように鋭い牙がずらりと並んでむき出しになる。

「イキテイルコトノ絶望ヲオシエテヤロウカ」

その口がニタリと歪んだ。

黄昏の空を思わせるような紫色の毛並み、ちょっとした民家であればまるで泥の塊でも握り潰すように破壊してしまえるほどの巨人ギョロリとした大きな目玉がおぞましくも悪意に満ちた双眸。それが、針山のような牙が並んだ口元に笑みを貼り付けて俺たちを見下ろす。

「やれやれ、効くわきゃねーけど、こんなもんでも武器を持つてねーと落ち着かねーぜ」

ため息と共にジンが胸元からダガーを取り出す。高く売れると言っていた豪華な装飾が施されたダガーだ。もちろん彼としては後で売ってしまおうと思っていたのだろうが、さすがにこの状況にあつて、武器として使うのがもったいないなど言つてはいられないだろう。

「あのでかいのは、さっきまで声が聞こえていた魔法使いたちなのか……？」

見上げて呟く。

しわがれた老人のような声、甲高い女性の声、そして少しの間だけ俺たちの前に姿を現していた色黒の男。紫色の巨人から聞こえた声は、そのどれにも似ていて混じりあっているようだった。

「きつとそうなんでしょうね。人を幸せにしたり助けたりするために魔法使いになったはずなのに、どうして他人を苦しめたりするのよ。あんなの間違ってるわ」

リベルの握り締めた杖が悔しさで、ふるふると震えている。彼女にしてみれば、自分よりもはるかに優れた技量を持つ魔法使いたちが揃って街を襲うということが信じられないのだろう。そして、そんな者たちが闇に身を捧げてしまったということも。

「闇は私たちが思っているよりもすぐ近くに潜んでいるのだ。より強い力を持つ者ならば、なおさら己を律することができねばならぬ

のだから……」

そう言って押し黙ったジグザールは、紫色の巨人を睨みつける。その間にも紫色の巨人は崩れかけの民家の屋根をまるでそこにあるのが邪魔だと言わんばかりに握り潰して捨てる。

「んで？ どうするよ。ジグザールのとつつあんはもうヘットヘトに疲れちまって魔法が使えねーんだろ？ そんなじゃーリベルに頼らざるをえねえってことになるけど、もういっちょ魔法をぶっぱなす余裕はあんのかよ？」

「その呼び方はよさんか！」

この状況でも人をおちよくることを忘れないジンに肩をすくめつつ、俺はリベルを見た。リベルは少し考えた様子だったが、すぐに決意を瞳に宿した顔を上げて、

「やってみるわ。あまり自信はないけど、なにもしないでやられちゃうよりはずっとマシだものね」

杖を胸の前で握り直して頷く。

そうだ、なにもしないで脅えているだけで道が拓けるはずがない。言葉を変えれば、何かを成すためには失敗を恐れずにあえて立ち向かう勇気が必要なんだ。決意を秘めたリベルのまなざしに、俺は自分の中で芽生えたなにかにそっと手を添えた。

「よっしゃ、レミは武器もねーし、なんだったらあのおつかねーやつが魔法でも使いそうになったら大声で叫んでくれや。それで俺らは」

「僕とジンさんとデイルさんで、リベルさんが魔法を使うまでの時間稼ぎですね」

「そゆこと」

「モンスターじゃ、なくても、きっと魔法以外にも、弱点は、あるはず。探してみる、よ」

「そうしてくれりゃ助かるぜ。おっと、そろそろやつこさんも調子が出てきたみたいだぜ。腕をぶんぶん回してらあ。あの調子で1本くらい腕がもげる勢いでぶん回せばいいのによ」

「私も魔力が回復し次第、援護しよう」

「助かります！ ジグザールさん」

「期待しねーで待ってら」

「ちよつと！ 集中するんだから黙ってなさいっ、ばかジン！ いい加減に少しは成長してよね！」

リベルが眉を吊り上げて怒鳴ると、ジンは「へいへい、んじゃちよつくら逃げまわってくつか」、わざとおどけたふりをしながら肩を回して、ダガーをひとつ素振りする。

軽口がつい口について出てしまうのは、恐怖を紛らわすためでもあるのだろう。彼もわかつているのだ、いくらリベルの魔法があるとは言っても、さきほどの漆黒のワイバーンのように簡単に倒せる相手ではないだろうということが。

なにせ、リベルの魔法と俺たちが力を合わせてようやく倒すことのできた漆黒のワイバーンや、ジグザールを魔力の尽きるまでに疲弊させ、レミの杖の秘められた力でなんとか倒すことができた毒の炎を吐く大蛇ですら、やつらの様子からすると下っ端の扱いらしいのだ。だが、リベルもまだ、そう何度も魔法を使えるほど魔法の扱いには慣れてはいないし、レミの杖だって失われてしまった。ジグザールだって魔力がそんな簡単に回復するかどうかは俺たちにはわからない。

そして今度こそはやつらも本腰を入れて俺たちを打ちのめしにやってくる。それもすでにわかっているだけでも3人以上の強い力を持つ魔法使いたちの成れの果てというか、きつとあれが闇の力を存分に奮うことのできる姿なのではないだろうか。そう思わせるような恐るべき変身を遂げたのが、今まさに俺たちの目の前にいる紫色の巨人だということだ。

そして俺も知っている。今から俺が試みようとしていることは、きつと無謀なことなのだろうと。だけど、きつと無駄ではないと思う。

人は時にそれを愚かな行為だと笑うかもしれない。失敗に終わっ

てしまえば、責められるかもしれない。無理に決まっているのだから、やるだけ無駄だと。それでも俺は試してみたい。

人はきつと、どんなに姿が変わり果ててしまっても、たとえ闇に堕ちてしまったとしても、ほんの1パーセントでも心のどこかに大切なものが残っているのだと。

誰か1人くらいは最後まで信じてみてもいいではないか。

「どんな姿になったって、あれが人間であることには変わりはないんだ」

ブロードソードを鞘に納めて前に出る。

今までは、ただ自分たちの身を守ること、ブユツフェの街や街の人たちを救おうとするだけで精一杯だった。今この瞬間だってそのことには変わりはない。だけど、ただただ恐れるばかりで姿の見えなかった”闇に憑かれた者”^{パラサイトイビル}だって、俺たちの前に現した姿は人間のものではなかったか。あんな姿になったって、元は俺たちと同じ人間だったのだ。

”闇に憑かれた者”の一部だったダーレスという男は、俺たちの目の前で砂のように崩れて消えていった。たとえそれが闇に手を染めた代償だとして、あんな紫色の巨人になった姿が自ら人間であることを捨てた代償だとしても、ダーレスのように人間であったことの証さえ残らずに消えていくなんて、そんな悲しいことがあるだろうか。

「デイルさんっ、ど、どうしたんですか?!」

背中に焦るクラッセの声を受けても、俺は踏み出す歩みを止めはしない。

「おまえっ、剣もしまっちゃって、なにするつもりなんだよ!」

「こんなこと、もうやめるように説得する」

振り返らずに俺は答えた。

「はあっ?! ば、ばか、おまえの言うことを聞くようなやつなら最初からこんなことしねーって! だいたいあのバケモンは街の人間をたくさん殺したんだぞ!」

「そうですよ！ そんな無防備に近づいたら殺されちゃいます、デイルさん！」

「そうだったらそうだったで、かまわないさ。それに闇の力に操られているのかもしれない。だから呼びかけてみることで正気を取り戻させることができれば……。俺は彼らに人間の心が残っていると信じてみたい」

俺はジンたちに言った。

少しでも人間の心が残っているならば、少しでも奴に俺たちの心が届けば……。

するとジンはなにか言いかけて、ぐっ、と言葉の飲み込んだ。

「そうになったらそうでもいいだなんて、そんなこと言わないでください！ これ以上、目の前で人が死ぬのなんて……。兄さんが死んで、その上、大切な仲間まで失うなんて僕はイヤだよ！」

「クラッセ……すまん。そうだったな、俺は死ぬ気なんてないさ」
見るとクラッセは乱れた髪のままですっぴんだった。自分の命を軽々しく考えるなんて、我ながらバカなことを口走ってしまったものだ。バツの悪い気持ちでクラッセに歩み寄り肩に手を置く。

そこで黙ったままだったジンが口を開く。

「おい、奴に背中向けてんじゃねー！ ……俺あ、ディールみてーに紫の巨人が改心するよーなタマだなんて思っちゃいねーけどよ。正直、まともに戦って倒せるとは思えねー。だからよ、ディールが奴を説得するってんなら、それに賭けてやってもいいぜ。それでダメなら戦うしかねえんだからな」

ジンは「試すだけならタダだからな」と付け足して唇の端を上げる。

乾いた笑い声が聞こえてきたのはその時だった。

「ギヤツギヤツギヤツ、オモシロソウナハナシヲシテイルジャナイカ。ダレガダレヲセツトクスルンダツテ？！ モウココハ、モヌケノカラダトイウノニナァ！」

紫の巨人は俺たちの話を聞いていたのか、さも可笑しそうに腹を

抱えてひとしきり笑った後に、自分の胸に親指を突き立てた。

「もぬけの殻だと？　どういう意味だ？」

言っていることがわからずに顔を見合わせる俺たちを見て、満足そうに紫の巨人は口の端を吊り上げる。

「ソノマンノ意味ダヨ。バカナマドウシドモハ、チカラヲモトメルアマリ、コノオレサマニ心ヲムシバマレイクノニキヅカナカツタツテワケサ。ダカラセツトクナンテ無駄、無駄。オトナシクシタホウガリコウツテモンサア」

暗黒の空が怪しく光った。巨人と同じ色の紫色に光る魔法陣だ。今にもこの街を飲み込んでしまいそうなほどの禍々しさを感じて、俺は思わず身震いをした。

「てめえ、なにもんだよ！　魔道師連中の心を蝕んでいったって？　あれが闇に憑かれた者の正体ってことなのかよ。おい、あてがはずれたなデイル。ありゃあ説得なんてできるようなやつじゃないぜ」

ジンの言葉に俺は苦々しく頷く。悔しいが確かにそのようだ。あれの言ったことが本当なら、すでに人間ではない相手に説得など通じるものだろうか。

「悪意と、憎悪を糧にして、誰にも気付かれない、うちに、心に侵入、していったって、こと？」

レミのつぶやきを聞き取ったのか、紫の巨人はいかにも上機嫌そうな笑みを貼り付けて口を開く。

「ギャハ！　オレサマハアノカタノチュウジツナルシモベ、黄昏ノ王ケイオス。ナカナカ時間ガ力カタガ、ヨウヤクコノ世界ニデテクルコトガデキタツテワケサア。負ノ感情ヲモツニンゲンハカンタンデイイネエ、闇ノチカラヲワケテヤレバ、墮チルトコマデ墮チテクレルンダカラサア」

6 - 8 (前書き)

ここから少し書き方を変えました。中途半端な一人称を辞め、三人称形式で続けます。

黄昏の王ケイオスはそう笑いながら言つて、静かに右の手の平を前に広げた。その手の平に暗い渦が巻き始める。ディールたちの間に緊張が走つた。

「チィッ！」

ディールは鞘に収めたブロードソードを再び抜き放つ。あれがすでに人の心を持ち合わせていないのならば戦う他にない。もしこの剣が本当にシギルの剣だとすれば、闇の者であるうケイオスにとつてはとてつもなく脅威であるはずだ。幼い頃に読んだデュランドー・シギルの英雄譚によると、シギルの剣こそが唯一、闇の者を真の意味で打ち滅ぼすことができたという。

「リベルッ、おいリベル！ 魔法に集中すんのは中止だ！ とんでもなく危険な感じがするぜありゃあ。ひとまずあれを避けなきゃいけない！」

ディールの持つ剣ならばあれを防ぐことができるだろう。しかしさすがに全員を守りきれるかどうかというところ、ジンにはわからない。それほどまでにケイオスの右手にある闇の渦は大きく禍々しい感じがするのだ。そう感じとつたジンが慌ててリベルの肩を揺する。

だが精神を集中しているリベルは目を閉じたままだ。まるで己の心の中にいる何者かと向き合っているかのようだ。そう、小さき太陽を目覚めさせた魔法を使ったあの時のように。

だがジンはそんなリベルの変化には気付かない。ジンと同様にクラッセやディールの額にもじわりと汗が滲む。

「オソイ……オソイネエ！」

ディールたちの様子を嘲笑うようにケイオスが手の平を大きく振り上げる。その瞬間、ディールは覚悟を決めた。例えばどんな攻撃が来ようと、自分がこの剣で防いでみせる。これがシギルの剣であったとしても、そうでないのだとしても、今はそれしか抵抗する手段

がないのだと。

ケイオスが右手を振り降ろす。手の平に集まっていた闇の渦が五本の指と同じ数の刃となって襲い掛かる。その五つの闇の刃は、ひとつひとつがそれを放ったケイオス自身の腕よりも太く、ディールがいくら覚悟を決めて防ぐと決めたとしても結果は明らかだ。

闇の刃がケイオスの指を離れたとき、クラッセは自分の持つショートソードを固く握り締めていた。

兄のような立派なファイターになりたい。そして大切な人を守れるようになりたいと願って目指した冒険者。それなのに自分は皆の足を引っ張るばかりではないか。こんなところで何もできずに死んでしまつては、それこそ尊敬する兄に顔向けできないではないか。

クラッセの持つ剣は、彼がそれを手にしたときから今まで持ち主を助けることはなかった。それはクラッセの心の隅にどこか甘えがあったからではないか。自分が失敗したとしても最後にはディールやジンらがなんとかしてくれる。自覚してはいないが……いや自覚していないからこそ、クラッセの剣は彼に力を貸すことがなかったのではないだろうか。

闇がクラッセらに迫り、ディールの持つ剣だけでは闇の刃を全て防ぎようもないことがクラッセの目にもはっきりとわかった。ジンだつて成す術もなく、迫りくる闇をただ凝視するしか他にない。杖を失ったレミはもとより、魔力の尽きたジグザールや頼みの綱のリベルでさえもよほど魔法に集中しているのか、目を閉じたまま己に身の危険が迫っていることに気付いてすらない。

この時ほどクラッセは自分が情けなく思つたことはない。守りたい人たちを守ることできないのか、それほど自分は無力なのか。クラッセが己の無力に打ちひしがれたとき、同時に彼は仲間たちを守る力がほしいと、心の底から願つた。

「ギャーッギャッギャッ！ 死ネ！ 死ネ！ シネエエエエッ！」

狂つたような黄昏の王の声が次の瞬間に凍りつく。

それはまるでクラッセの仲間を守りたいという心からの強い想いに彼の持つ剣が応えたかのようにだった。彼らを切り刻まんと迫っていた闇の刃は消えてなくなっていた。

だが、その表現は正確ではない。実際は消えたのは闇の刃ではなくディールたちの方なのだから。

その証拠に闇の刃はしつかりとディールたちの元いた場所の地面に深い傷跡を残していたのだが、ディールたちには闇の刃が消えたかのように見えただろう。それは辺りが依然として深い夜から醒めず暗闇に包まれており、周りの景色が変わったことがすぐにはわからなかったことと、ディールたちもケイオスも予想のできない速さでディールたちがその場からいなくなっただからだ。

ディールたちはちょっとした山ほどもある巨体のケイオスを見下ろす位置で浮かんでいた。

この現象を引き起こした張本人であるクラッセは、自分の持つ剣の刀身が澄んだ湖の水のように透き通っていることに気付いた。

「その剣の力なのか……？」

いち早くクラッセの剣の変化を察したジグザールが喉の奥から声を搾り出す。

「僕にも……僕にもみんなを守ることができたんだ」

ディールたちが闇の刃から難を逃れることができたのは、クラッセの仲間を守りたいという気持ちに彼の剣が応えた結果だった。クラッセの剣には飛翔の効果を持つ魔法がかけられていたのだ。

「こりゃーたまげたぜ。まさかあのバケモンも俺らが自分の頭の上で浮かんでるなんて思いもよらねえだろうよ」

地に足が着かないことに若干の居心地の悪さを感じつつも、ジンは感心した面持ちでクラッセを見る。

「奴さん、俺らを見失ってキョロキョロしてやがる。攻撃すんなら今がチャンスだぜ」

そう言ってジンが全員を見渡すと、ディールはクラッセに顔を向けて、

「クラッセ、俺をやつの所に飛ばすことなんてできるか？　もしこの剣がシギルの剣だというなら、直接攻撃することで致命傷を与えられるかもしれない」

ディールが提案すると、ジンは「確かにそうかもしれないな」と言い、クラッセは「できるかどうか分からないけど、やってみます」と自分の剣を見つめる。

「さつき、ケイオスが、私たちを攻撃、しようとしたとき、眉間の辺りに、魔力が集まっていくような、気がしたよ」

ふと、それまで黙っていたレミが言い、ケイオスへ指を差した。そんなレミにジンが不思議そうな顔を向ける。

「おめえ、魔力なんて感じたりすんのかよ？」

ジンの言い分はもつともで、レミはリベルやジグザールのように魔法が使えるわけではないのだ。

「私には魔力が集まっていることなどわからなかったが……」

目を閉じたまま集中しているリベルの代わりではないが、魔法を使えるジグザールがおずおずと言った。

2人に言われ、レミは「なんとなく、だから」と小さい声をさらに小さくして言ったが、

「いやジン。どっちみち、どこを攻撃すればいいかなんてわからないんだ。レミがそう言うんなら俺はそれを信じて剣を振り下ろすだけだ。クラッセ、やつの眉間の辺りに俺を飛ばしてくれ。やつが俺たちに気付く前に仕掛ける」

クラッセは「では、いきます！」、持っている飛翔の剣に意識を集中した。確信などなくても、もとより多くの選択肢など持ち合わせてはいないのだ。仲間を信じることだけが彼らの持つ最後の武器ではないか。それ以上言葉を交わさなくてもそれがわかつているからこそ、ジンもこれ以上は反論しない。クラッセもレミやディールを信じて自分にできることをするだけなのだ。

クラッセは飛翔の剣に念じる。風のように速く、ケイオスの目にも留まらぬスピードでディールがケイオスの頭上へ飛べるようにと。

するとクラッセの念に応えるように飛翔の剣が微かに光を帯び、同様にディールの全身を光が覆う。フツ、とディールがクラッセたちから離れ、ケイオスの方へゆっくり動いたかと思うと、一気に加速を始めた。

6 - 8 (後書き)

連載開始からここまでで約10ヶ月もかかってしまい、当初の予定とは随分と違ってしまいました。

初めの頃は一人称で書いていこうとしていたのですが、一人称にしてはあまりにも書きづらく、このままでは続けていくことができないと思うようになりました。

それは私の筆力の足りなさゆえなのですが、なんとしても完結するまでは続けていきたいとの思いから、悩んだ末に書き方を変えることにしました。

私の稚拙な文章を読んでくださる方、最後まで目を通してくださる方がおられるのであれば、途中で書き方を変えてしまい、申し訳ない気持ちで一杯です。

しかし、デイルたちの姿を見失ったと思われていたケイオスだが、そうではなかった。

デイルたちの誰もが、クラッセの持つ飛翔の剣で空に浮かんだ自分たちのそのまた上空にケイオスの目があることを忘れていたのだ。この時、デイルたちの誰か一人だけでももう少し早くそのことに気付いていれば状況は変わっていたのだろうか。否、もし誰かがそれに気付いたとしてもすでにデイルたちの居場所を捉えているケイオスが先に仕掛けたに違いない。ケイオスがそうとしなかったのは、自分がデイルたちの姿を見失っているように見せかけて彼らを一網打尽にしようと謀ったからである。

と、轟く雷鳴がその場にいた者たちの鼓膜を揺らし、稲光がケイオスの口元を白光の元にさらした。その口元がニタリと歪む。

「……ッ！ だめ、デイル！」

叫んだのはレミ。ジンが眉根を寄せた。

漆黒の空に浮かぶ魔法陣を見上げたレミは、ふと思い出したのだ。黒い蝶を通してケイオスに自分たちの姿が見られているという可能性を。

初めて黒蝶を通して得体の知れない存在を感じたあの森での出来事から、ケイオスが闇の魔道師たちにとって変わる今に至るまで、彼らは黒蝶を通して見られていたというのに。

さらに恐ろしきことは、レミたちがデイルに注視しているその瞬間だった。彼女らを一網打尽にすべくケイオスがとった手段は、その死角からの攻撃である。

最もレミらの視線が集中する瞬間といえば、もちろんデイルがケイオスへの決死の突撃を試み、そしてケイオスの反撃を受けて無残な死を遂げた瞬間であろう。その時はきっと背後への警戒が薄れるに違いない。

すでにケイオスはデイルたちをたかが冒険者風情などとは考え
てはいなかった。ただの冒険者が闇の魔力を得た者相手にここまで
渡り合えるとはずがない。特にファイターの男が持つ剣など見てい
るだけでも気分が悪くなってくるではないか。

それならば全霊を持って仕留めるべきではあったが、目の前にあ
るご馳走も捨てがたかった。邪悪の化身たるケイオスにとつては人
間の恐怖や死に際の後悔といった感情は、悪意や憎悪と並んで極上
の馳走である。そのためわざとデイルたちの姿を見失ったふり
をしていたのだ。

異変に気付いたレミが二の句を次ぐよりも早く、飛翔の剣の力を
借りたデイルが猛スピードでケイオスに迫り、思い切り両腕を振
りかぶる。

ピシリ。

デイルがケイオスの頭上に到達した時、彼は薪が爆ぜるときの
ような音を聞いた。

不自然な音にデイルがいぶかしむ暇もなく、突然ケイオスの紫
色の体毛は背中から滅茶苦茶に破けた。剥き出しになった茶色の岩
肌に亀裂が入る。

デイルが目を見張った時には大粒の岩石がもう、彼目がけて放
たれていた。

飛翔の剣を持つクラッセが岩石からデイルを回避させようとす
る余裕などない。

岩石をまともに受けたデイルは激痛の中で、なんとか手放すま
いと痺れる両手に力を振り絞って剣を握り締める。彼が岩石をした
たかに受けて耐えることが叶ったのは、ひとえに彼の持つ剣の力が
防御膜を張り、衝撃を僅かでも和らげてくれたおかげだろう。

気を失いそうになりながらも意識を保てたデイルの視界に入っ
たもの。それは二つの刃が螺旋に絡まり合った槍の切っ先だった。

大量の岩石を放出し、大きな空洞のできたケイオスの背中から現
れた螺旋の槍。それが、まるで死神が持つ断頭の鎌を喉首に突きつ

けられたかのようにディールを錯覚させた。

「コ、ココ、コレデ終ワリダ！ ギャーッギャッギャッ！」

自らの勝利を確信する黄昏の王の雄叫び。螺旋の槍がディールの胸元を抉らんとしたその時、

（仲間を信じる。剣を振り下ろすんだ！）

どこから聞こえたのかはわからない。自分の心の叫びにも思えるし、別の誰かのようにも思える。ただ、ディールにとってはそのどちらでも違いはなかった。「仲間を信じる」、この一点において彼は疑うべきではないように思えたのだ。

「終わるのは貴様だ！ 闇へ還れっ！」

ディールが叫んだとき、彼らを包み込む景色の明暗が反転した。

頬がひりつくような熱気。夜そのものを燃やし尽くしてしまいうなほどの灼熱。

ディールの振り下ろした剣の刀身すら見えなくなるほどの炎が周囲の闇ごと螺旋の槍を飲み込んだ。

「リベル、おまえ……」

全員がその光景に目が釘付けになっている中、ジンは赤髪の少女を見た。

それまで目を閉じたままだったリベルがしつかりと杖を握り締め、眼光は眼下の敵へと据えられていた。

その表情は彼が今まで見たこともないほど別人のように大人びていて、赤橙の灯りを受けて美しささえ感じさせた。

リベルは唇を一言二言、まるで何者かと対話しているように動かすと、次には再び静寂を取り戻さんとする夜闇を裂いて力強く叫んだ。

「真紅の名において命ずる！ 今ここにその真の姿を現し、太陽シギルの名を以って闇を滅せよ！」

彼女の力ある言葉を受けて、ディールの持つ剣は実に幾年もの眠りから覚めた喜びを表しているかのように輝きを深めた。代わりに炎は次第に剣からケイオスの全身へと燃え移っていき、炎の中から

現れた刀身は太陽を象った紋様が描かれていた。

「本当にシギルの剣だったとは……信じられん」

目を細めてジグザールが呟く。

だが、彼が感慨にふけるよりも早く、野獣のような咆哮がジグザールの思考を中断させた。

灼熱の業火に焼かれて苦悶の声を上げるケイオス。全身を包み込む炎はケイオスの身体を作る岩石を徐々に溶す。それでもまだケイオスに致命傷を負わせたわけではない。もしディールがシギルの剣を真に使いこなしていたなら、また、シギルの剣の目覚めがもう少し早かったなら、あるいは今の一撃で終わっていたかもしれない。

全身を焼かれながらケイオスは、大きな目玉をギョロギョロと回した後、ジンらの方向を見定める。

当初の狙い　ファイターの男を返り討ちにし、それに気を取られた仲間の隙をつく　は計算通りにいかなかったものの、憎き冒険者どもの注意は都合良くこちらに集まっている。ケイオスは瞬時にそう判断した。

「グギギ……マヌケナヤツラメ」

「まぬけ？　一体なんのこと……ハッ、デイルさん！」

ケイオスの声は小さなものだったがその言葉に反応したクラッセは、その狙いが自分たちにあるとは知らず、すぐにデイルを避難させようと飛翔の剣に念じた。クラッセの位置からはデイルが気を失っているように見えたのだ。

事実、デイルは僅かな間だったが気を失っていた。度重なる連戦による疲れと、シギルの剣の威力によって意識が飛んでいたのだ。反対にケイオスは黒蝶を通してジンらを見ていたため、クラッセの叫び声を聞いて目玉をグリーンと動かす。

『マトメテ死ネ』

デイルを確認したケイオスがそう言いたげに口の端を吊り上げる。

それを見たジン。あの時感じた違和感はこれだったのだ。

点と点が繋がった瞬間、彼は叫んだ。

「とつつあん！」

一瞬怪訝な顔をしたジグザールの視線がジンに往く。

「後ろおおおおおおお！」

日常的に戦いとは無縁の者であれば、名前を呼ばれて「後ろ！」だけでは、たとえ何が起こってもおかしくないような怪物と相対しているこの状況でも、すぐに反応することは難しかっただろう。一

瞬でも疑問が湧き上がってくるのが普通で、その一瞬の疑問が生死を分かつことは戦場では往々にしてよくある。まさに今こそ、そのほんの一秒二秒が致命的な遅れとなりうる状況だった。

だが、ジグザールとて若い頃は現役の冒険者として慣らした生粋のメイジだ。たとえ敵の姿が見えなくとも、危険が迫っていることを感じとった仲間の一声で窮地を脱したことも少なくない。

そういつた過去の経験則からジンの叫び声の意味を肌で感じ取った彼は、思考するよりも先に呪文を唱えていた。

声の限りに叫んだジンが後ろを振り返って見たものは、指先が互い違いに絡まりあつてジンらに向けられている巨大な手の平。

ジンが感じた違和感の正体。いつの間に魔力を蓄えていたのかと思ってしまうほどにケイオスの手から凄まじい電撃がほとばしった。それを見たのはジン一人。それほどの瞬きの間。

「光よッ！」

叫んだジグザールは電撃すら見ずに両手を広げた。

衝撃！

ぐにやり、捻れる景色。そこに見えた天が地に変わった。

直前、ジグザールの唱えた魔法によつて光の膜に覆われていたジンたち。

光に包まれた彼らが電撃の奔流に包み流された後、ケイオスの巨体が立つ背後の直下には大きく窪んだ大地が生まれていた。

そして 狂つたように笑い声を上げる黄昏の王の姿を瞳に映す者は、そこにはいなかったのである。

まるで隕石でも落ちたかのように深々と口を開けた大地。

周りにあつたはずの民家は跡形もなく消え去り、その代わりとばかりに、電撃の降り注いだ跡からしばらく離れた場所で、無残に碎け散つた元は民家を成していた木片たちの物言わぬ姿があつた。

ブツフエの街並を大きく変えるほどの規模ではなかったが、これを元の姿に戻すには相当の時間がかかるだろう。

ただ、そんな心配は必要ないのかもしれない。なぜなら、このままではこの街ごと消えてなくなってしまうからだ。

ひとしきり笑い終えた破壊者は、なおも湧き上がってきそうな笑いを噛み殺し、原形の面影すら残っていない街並みを見下ろした。

致命傷の一撃を喰らわすために飛翔の剣で飛んでくるディールの勢いを殺すため、岩石を体から大量に放出したせいで、背中は大きく空洞ができたままになっている。また、シギルの剣の炎で残った体も随分と溶かされてしまった。

それでもまだケイオスを全て溶かすには至らなかった。シギルの剣の炎はその使い手が意識を失ってしまったためか、ケイオスを全て飲み込む前に鎮火してしまったのだ。

闇の力の塊であるケイオスであれば、多少のダメージならばすぐに修復することが可能であったが、シギルの剣から受けたダメージだけはどうも容易には治らないようだった。

しかし、

「グギャツグギャツ、邪魔モノハスベテコノオレサマノマエニヒレフシタ！ コノママ世界ノスベテヲ闇ヘトカエシテヤロウ」

肝心のシギルの剣を持つ男は自分が放った最大級の電撃によって跡形もなく吹き飛んだのだ。忌々しい剣の邪魔がなければもはや自分の邪魔をする者などいない。

すぐに体を修復することが叶わないのはしゃくだが、時間が経てばどうとでもなる。

ただ、それでも若干の懸念をケイオスは感じていた。

一つは、その忌々しい剣を持つ男の死に様を確認することができなかったこと。

もちろんあれほどの電撃を受けたのだから、跡形もないほどバラバラに飛び散ったからだとしてもおかしくはない。

とはいえ、あんな禍々しい力を放つ剣を持つ男が果たして本当に

今の攻撃で何の抵抗もなく倒すことができたのだろうか。たとえ持ち主が気を失っていたとしても、特別な力を持つ武器が持ち主を守る場合だってあるのだ。

そして二つ目に、宙に浮いていた連中の一人が、ケイオスによる死角からの攻撃に気付いた素振りを見せていたことだ。

あくまで奴らは自分の狙いには気付いてはいなかったはずなのだ。仲間の窮地にやつらの目はファイターの男に釘付けになっていたはずである。

ましてやこの闇夜では、闇の化身であるケイオスであれば別だが、ただの人間ごときの目があの異変に気付けたはずもないのだ。

そこまで考えを巡らせたケイオスは、やがてそれがどうでもいい無意味な考えであることに気付いた。

もしもあの禍々しい剣が特別な力を発揮していたとしても、そして宙に浮いていた連中の一人が自分の攻撃を直前に察したとしても、結果として眼下の光景には誰一人として忌々しい冒険者たちの姿は残っていない。

つまりは全ての邪魔者たちは、自分の放った電撃の前に破れ去ったのだ。

満足げに頷いたケイオスは空を仰ぎ見た。

黒き蝶による魔法陣にも魔力が十分に満ちていくのが見て取れた。心地よい、恨みや妬み、憎悪と悪意に満ちた魔法陣の光がケイオスを恍惚へと誘った。

闇に堕ちた愚かな人間の魔道師たちだったが、それはそれで役には立った。

黒蝶の視界を使った邪魔者たちの意表をついた攻撃で、やつらを一扫することにも成功したし、置き土産の魔法陣を使ってこれからどうしてくれようか、とケイオスは一つ思案した。

街の人間どもを存分に恐れさせ、死に怯える声を堪能した後、一瞬で街ごと消し去ってやるのもいい。もしかしたら街に残っている人間はもういないかもしれないが、それでもいい。次の街へ行つて、

また殺戮に興じて楽しむばいだけのことだ。

なにせ闇の者であるケイオスにとって時間は、文字通り腐るほどあるのだ。邪魔な冒険者どもとの戦いではあったが、それも余興の一つと考えれば、なかなか楽しめたというもの。

まずはどれほどの人間が残っているのか、どれ、黒蝶の目を使って確認してやろう。

そう思ったケイオスが黒蝶の視界に意識を合わせた時。

「グ……ギギ？ ナンデダ？」

異変が生じた。

本来ならば、ブツツフェの街の全貌を見渡せるはずの黒蝶の視界が、全くケイオスに伝わる気配がない。

「オ、オカシイ」

疑問に思いながらも、それはそれでいい、と彼は考えるのをやめた。

どちらにせよ、この街ごと灰に変えてやればいいのだ。

単純明快な答えだが、誰も彼に異を唱える者はいない。

ならば魔法陣の魔力を解き放つのみ！

「アノカタモ、オヨロコビニナルダロウ」

ケイオスは己に酔った。

自分の力を持ってすれば、人間など塵に等しいのだと。

世界を無に還した時こそ、全ての願いが叶うのだと。

力を解き放つための呪文を唱える。

その場に人間がいたならば、怨念と狂気をはらんだケイオスの呪詛に、精神が崩壊してしまってもおかしくはない。

ただ、それを聞いているのが普通の人間だったならば。

彼はもつと早くに気付くべきだったのだ。

黒蝶の視界が失われたのは、ただの偶然などではない。明らかな目的を持って行われた、人為的な行為なのだ。

「グガッ?! 魔力ガヘツテイク……」

異変に気付き、ただでさえ醜いケイオスの顔がさらに醜く歪む。

街をまるごと消し飛ばしてしまえたはずの強大な魔力が、刻々とその力を減じていくではないか。

さらに解せぬのは、周囲にピリピリと張り詰めて感じる空気。

おかしい、おかしい。

異常事態に他ならないのは、彼も思い至るが、その理由がわから

ない。

邪魔な冒険者どもは確実に排除したはず。それなのに、なぜ？
ケイオスは、かつて人間だった闇の魔術師たちの記憶も受け継いでいた。

その記憶によれば、この街の近くには、彼の脅威となりうる存在などなかったはず。

それなのに、なぜ？！

予想だにせぬ事態に、身を硬直させる。
その時だった。

「地より深き獄から這い出し者は、決して光を浴びること叶わし者己の領分を守り、再び闇へと戻れ！」

途端、ケイオスは自分の身にまとわりつくものを感じた。
はたから見ているれば、紫色した巨人が鎖でぐるぐる巻きにされているように映っただろう。

白光を伴い鎖の型を成した魔力の塊が、ケイオスを締め付けていた。

「あんたみたいな下っ端にくれてやるほど、あの子たちの命は安くないんだよ！」

しわがれた声が、淀んだ空気を裂いて響き渡る。

「ナンダ貴様ハアツ？！」

「バアバの名前は、あんたみたいなバケモノになんて、教えてやらない！」

すかさず聞こえた返事に、ケイオスの視線が宙を彷徨う。

ちろちろと、小さな光が己の周りにある。

「コノ蠅ハ、ナンダア？！」

「失礼ね！ あたしは妖精よ！」

ブンブンと頬を膨らませた、非常に小さな生物が目の前にいる。
ケイオスは大きな口を開いてそれを飲み込もうとしたが、すんでのところで逃げられた。

「そのへんにしときな、リンリン。こんなやつと会話なんてしてた

ら、そりゃああたしも吐き気がしてくるからね」

しばし離れた中空に浮かぶ老婆が、なんとも憎たらしい口を叩くではないか。

巨人は怒りに目を血走らせる。

「不味ソウナ肉ヲヒキチギツテ、骨マデ嚙ミ碎イテヤロウカ！」

いきんで叫ぶ巨人を前に、老婆がつまらなさそうに手を振る。

それも仕方のないことだ。

いくら虚勢を張っても、拘束されて身動き一つ取れないケイオスにとっては、それが最大限の威嚇である。

もちろんそれを見抜いているからこそ、老婆の態度も冷やややかだ。「大口を叩くねえ。まあ、最期くらいは文句くらい聞いてやるうじやないのさ」

余裕のある態度で老婆が笑んだ。

「あははっ、人間たちの言葉で、これが負け犬の遠吠えってやつ？」
リンリンが手を叩いて喜ぶ。

老婆は、手に持つ杖を握りなおした。

眼光鋭く、老いによる衰えは感じさせない佇まい。

みなぎるような魔力は、邪悪の化身たるケイオスをも圧倒していた。

傍でひらひらと飛んでいる小さな少女は、彼女の連れになっても何年にもなる妖精。

そしてこの不敵な笑みを浮かべる老婆こそが、真紅の魔術師であった師の後継、レンゼン・ファスタその人であった。

「オノレッ……オノレッ……オノレエエエエエエ！」

巨人が咆哮を上げる。

それまでの優位はどこへやら、一転して劣勢に立たされてしまい、腹立たしいことこの上ないといった様子。

「アノ方が復活シタラ、オイボレヲ真ッ先ニ始末シテヤル！」

ケイオスが吠えた。

この言葉で老婆は恐れおののき、悲鳴を上げて逃げ出さずだろうと

考えての発言だ。

しかし、普通に考えれば、ケイオスの言う”あの方”とはどのような人物を差しているのか分かりかねるところ。そこに至らないところが、巨人の狼狽ぶりをよく表していた。

「あの方とは、誰だい？」

スツと、目を細めてゼンが聞いた。その声は冷静そのものだった。

「誰、ダトオオオ？！ アノ方ハ……」

「この世界そのもの、かい？ それとも別の存在なのかい？ さあ答えな！」

問い詰めるように彼女は声を張り上げる。

言葉に詰まったようにケイオスが沈黙する。

「どちらにせよ、あんたのようなただの尖兵が、人間様の領域を侵しちゃいけないのさ！」

一喝。

すぐに巨人は、ただでさえ大きな目玉をさらに大きく見開く。

「ムシケラガアアア！ 今スグニデモ塵ト化シテヤルワアアア

！」

「ふんっ、あたしの方にはかりかまっついて、いいのかい？」

その台詞でケイオスは我に返った。だが、時すでに遅し！

咄嗟に周囲へ意識を巡らせたケイオスの眼に、三日月の光が入る。しかし、それ以外には特に変わったこともない。

これは老婆が、自分を惑わせるためについた嘘なのか。

ケイオスの気がよそにいつている隙を狙って、仕掛けてこようという腹なのだ。

だが、それにしては老婆の吐いた言葉と表情には、真に迫るものがあった。

なにかしらの意図があるのは明白。……にしても解せぬ。

(ナニガ目的ダァッ?!)

自分を見つめる老婆は、不敵な笑みを浮かべたままで、全く動こうとする気配すらない。

このままジツとして、己の身を縛る魔法が解けるのを待つが良策か。

そこまで考えを巡らせるまでに経た時間は、ほんの二秒か三秒。

それがケイオスの命取りとなった。

微かな風を切る音。

そしてその現象は、黄昏の王が危機を感じ取る暇もなく、起こった。

浮かんでいた三日月が落下してくる。

本来、空にあつて、地平線に消えていくことはあっても、月が落ちてくることなどあるはずもない。

それもよくよく考えてみれば、暗雲立ち込める漆黒の空において、月が見えるというのもおかしい話だ。ただ、思考がそこに行きつく余裕はなかった。

「あああああああ ツー！」

三日月と共に降ってくる雄叫び。

いや、それは月などではない。ケイオスにとっては禍々しい、し

かし闇の者である彼を除いては神々しさすら感じる一筋の光。
はち切れんばかりに見開かれる巨人の双眸。その狭間に生まれる
光の柱。

シギルの剣は、闇の者に断末魔の叫びを発する事すら許さなかった。ケイオスは再び聖なる炎に覆われ、その巨軀は右と左に別れて二度と繋がる事はなかった。

「ふん、よくやったじゃないか。上出来だよ」

巨大な岩の塊が二つ生まれる。少し前まで優越に浸っていた悪意の塊だ。

始まりは街全体を震撼させ、多くの人々を恐怖の渦に陥れたというのに、終わりはなんともあつけない。得てして嵐の過ぎ去った後というのは、こういうものなのか。

家々の崩れた残骸、大小の穴がちらほら開いているのが見られる大通り。瓦礫に下敷きにされた人もいる。

恐慌はとつくの昔に収まり、人気のなくなったブッフエの街並みは閑散としていた。

「やつは……滅んだのか？」

立ち尽くす人影から、いまだ不安を拭いきれないつぶやきが洩れた。

天を見上げれば、空を覆いつくしていた黒蝶の影形すら見つけれない。邪悪な魔力を漂わせていた魔法陣も消え去っている。

「そうさね。やつは闇の彼方へと還っていったのさ」

ゼンは、剣を杖代わりにしてかろうじて立っているディールの背中に、脅威が取り除かれたことを告げた。

「ごらん、塵になっていく。あれはやつの体を造っていた魔道師たちの成れの果て、闇に組んでいた者がこの世に遺すものなど、ないのさ」

「終わり……か。長かった夜も」

岩肌がぼろぼろと崩れていく。

その様子は、ケイオスと名乗っていた魔神の周りだけが、急速に

時間の流れを早めていつているかのようだった。剥がれ落ちた岩盤が地に着く前に風化し、塵となって虚空へ消えていく。

「もともとは人間だったのに、どうしてあんな……」

俯き肩を落とすディール。

本当に彼らを闇から救う方法はなかったのだろうか、たとえ一度闇に堕ちたとしてもやり直すことはできなかったのだろうか。彼の胸中に、闇に堕ちた彼らを人間としてこの世に遺せてやれなかったことに対する、自責の念が渦巻く。

「人間は大概のことは立ち直れる、己次第で自分を変えることでできるけど。闇に取り込まれてしまった人間には、魔物として生きるか全てを失うか、選択肢はそれしか残されていないんだよ」

ゼンはディールの心中を察したように言葉をかけた。

彼らのような年端のいかない若者たちには、たとえ異形に成り果てたものだとしても、元は人間だったものが塵になつていくのを見るのは苦しいことだろう。そう思つての彼女の気遣いだった。

「たくさん人間を殺したんだ、やつは。んなやつのことを気にしても仕方ねーだろ。俺らは胸張つて生きてりゃいいんだよ」

「そうですよ。ディールさんは何も悪くありません、悪いのは闇に手を染めてしまった人たちなんですから」

ディールはハツとして面を上げた。

「ジン、クラッセ!」

引きつった笑みを浮かべて登場したジン。クラッセがその後を走り、駆け寄ってくる。

「おそらく、自分たちが得た力を見せつけたかったんだろうね。負の感情に支配された人間の考え付きそんな話さ」

「どういう意味ですか?」

クラッセが三人を代表して尋ねる。

だが、ディールはゼンの答えを待たずして、彼女の言葉の意味を理解した。彼女が言うのは、闇の魔道師たちがどうしてブユツフェの街を早めに壊滅させなかったのか、ということだろう。

それはデイルも怪訝に感じていたことだ。それだけの力をやっらは持っていたはず。

「闇に堕ちるには、それなりの理由があるって意味さ。己の欲望を満たそうとする者、願いを叶えるためにあえて闇に手を染める者、劣等感に侵されてただ力を求める者。理由は様々だけれど、どれにも共通しているのは、闇に堕ちた連中はいずれ最初の目的を忘れて、自分の力に酔いしれるようになってしまう。それは今も昔も変わらないことさね」

三人は黙って風に運ばれていく塵を見送った。

「あつ、そういえばリベルやレミは？」

ふと思い出してディールが尋ねる。

「二人とも休憩中っつーか、とつつあんの面倒みてるっつーかよ。

そろそろ来てもいいとは思うけどな」

「魔法を使いすぎてジグザールさん、立つのも辛そうだったんです」
だからジンとクラッセだけで様子を見にきたのだと彼らは言った。

「ジグザールって言ったかい？」

「あん？ バーサンの知り合いか？」

ジンがゼンに顔を向ける。彼女は無言で返した。

「あつ、三人がやってきましたよ」

「なんだなんだ、おんぶされてんのはリベルの方じゃねーか」

ジンやクラッセの声にディールも同じ方を向く。戦闘のありを
受けて崩れかけた建物の陰から疲弊したジグザールの姿が見える。

その背には瞼をつむったりリベルの姿があった。足をひきずる魔道師
から遅れて黒フードのレミも現れる。

「どっちが面倒みられてんだかよ？」

肩をすくめて笑うジンに、ディールも笑い返す。

「仕方ないですよ。リベルさんも凄い魔法を使っただんですから」

「ジグザールさん、大丈夫か？」

ようやく彼らのもとへ辿り着き、少女をそつと降ろした魔道師に
ディールが声をかけるなり「重い！」、ジグザールはどかっと地面
に座り込んで叫ぶ。

「よわっちいなーおい。女一人おんぶしただけでそのご様子なあ、
運動不足なんじゃねーのとつつあん」

ジンがにやにやしながら彼を見下ろす。

「黙れ！ どれだけ魔法を連発したのだと思っているのだ。この娘、

いきなり気絶しおつてからに……。しかし、よくやつの狙いに気付いたな」

相変わらず不機嫌さを隠そうとしないジグザールだったが、ふと軽口を叩く男を見上げた。咄嗟の防御魔法でケイオスの攻撃を防いだときのことを指しているのだと、ジンはすぐに気付く。

「ああ、ディールが突っ込んだときにな、空が一瞬だけ光ったろ？　そんなときにな、妙な違和感を感じたんだよ。あれは確かにディールの剣で攻撃する前だった……野郎の腕が消えてなくなっちゃまってんだ。そこに気付いたのは攻撃が来る直前だったけどな」

ジンの説明にジグザールは心の中で感嘆の息を洩らした。誰もがディールの攻撃に目が釘付けになっていて、まさか背後からケイオスの手が迫っているなど考えもしなかった。その状況であくまで冷静に周囲に目を向け、脅威の存在を察知するとは、なかなかどうして冷静な男ではないか。

「なるほどな。ただの口が悪いだけのシーフだと思っていたが、少しは役に立つこともあったらしい」

「素直に褒めてもいいーんだぜ？」

「ふん！」

そろそろお馴染みになってきたやり取りをディールとクラッセは顔を見合わせて笑った。リベルともそうだが、すぐに人と悪態をつきあいながらも、ここぞというときには頼りがいのあるジンという男の存在を想つての笑顔だ。

だが、天を仰いだディールのそんな笑みも自然と消えていた。闇の化身であるケイオスも滅び、いい加減に夜も明けていいはずなのに、依然として暗雲渦巻く空に一抹の不安を覚えたのだ。

「不甲斐ないねえ！」

ディールは見上げていた顔をゼンに向ける。

「どーしたんだよバーサン、急に怒り出したりして。……なに固まってるんだとつつあん？」

「顔色悪いですよ？」

クラッセは、腰に両手をあてているゼンと青ざめて硬直しているジグザールとを交互に見比べる。

「ぐおっ?! れ、レンゼン様がどうしてここに……」

「どうして、じゃないよ。あんたがついていながら、闇の者に大層おおきな顔をさせていたじゃないか、ええ? なんのために破邪の魔法を伝授したと思ってるんだい。さては大して役に立たない魔法だと思つて、修行をサボっていたね?!」

「そ、それは……」

ジグザールが言葉に詰まって肩をすぼめる。

「威張り散らしていた魔道師様もバーサンの前じゃ形無しだな」

面白そうに二人の様子を見ているのはジンだ。

「ねえ、ディール」

「レミ」

気付けば隣に立っていた少女に視線を移したディールは、すぐに彼女の言いたいことが理解できた。なぜなら彼も同じことを考えていたからだ。

「いつになったら夜が明けるんだ?」

ゼンならその答えを知っているかもしれない。そう思い老婆に声をかけようとしたとき

「動くよ」

ジグザールへの叱責を中断したゼンが空を見上げた。彼女に連れて夜空を仰いだディールとジンは眉根を寄せ、レミやクラッセは呆然と立ち尽くす。老婆に叱られていたはずの魔道師の顔には驚愕の表情が浮かんでいた。

「モン、スター……?」

一人つぶやいた少女の黒フードが後ろにずり落ちる。ふわりと柔らかそうな銀髪が腰に届くほどに垂れ下がるが、手早くすくい上げ首の後ろに押し込めると、彼女は再びフードをかぶりなおす。薔薇人形のように整った顔立ちも、闇の空を凝視する彼らの誰の目にも留まることはなかった。

「まさか、あれはデビルフライ　なのか？」

「なんだって?!　あの黒い翼のような形になっているのがそうだっていうのか、ジグザールさん！」

一面に墨をぶちまけたかのように黒色に染まっている空。星の一つや二つくらい瞬いていてもよさそうなはずなのに、他の色が全て黒に塗りつぶされているような闇夜だった。暗雲すら見えない。まるで本来あったものをそこにあるなにかが覆い隠しているようだ。

「ムググッ……こ、こら、放せ！」

「落ち着けてデイル」

ジグザールの胸倉を掴んだデイルを慌ててジンが引き離しにかかった。放っておけば、気絶するまで首を絞めてしまいそうなほどの勢いだったのだ。

「邪魔をするなジン！　デビルフライは……やつは！　俺の故郷を滅ぼしたモンスターなんだ！　父さんも母さんも、仲の良かった幼馴染だって、みんなみんなやつに殺されたんだ！　落ち着くなんてできるかっ！」

「デイルさん……ジンさん！」

さすがはファイターというべきか、いくら身のこなしや体力に自信のあったジンであっても、冷静さをなくしたデイルを取り押さえるのは容易ではない。彼の変わり様に面食らっていたのはクラッセだが、これはジンに加勢をと一歩踏み出したところで「待ちな」、ゼンの制止でピタリと止まる。

「あんたの村を襲ったデビルフライとは恐らく別物だよデイル。姿形が似ていることと、その凶暴さから同じ名前をつけられただけのモンスターさ。もちろんそっちも、並みの冒険者じゃ歯が立たないのは事実だけだね」

そうしてゼンは再び頭上に目を向ける。いよいよなって夜空において、黒よりも深く濃い、真の闇が輪郭を顕わにしていた。

「あれが……世界の終焉に現れるという……。ええいつ、いい加減に放さんか！」

「す、すまないジグザールさん」

ハッとして手を放すと、ジンもやれやれといった顔でディールの体から離れる。ようやく一息ついたところで解放された魔道師と空を見比べた彼は、

「まるで巨大な怪鳥だな。とつつあんはあれが何か知ってんのか？」
「うむ」

問われたジグザールは、腕を組むと「おとぎ話かと思っていたが」と口を閉じる。

尖端は何本もの剣先を合わせたような鋭さをもって羽ばたいた。その一振りごとに突風ではなく、背筋の凍るような気配がディールたちにまとわりつく。

それに首はなかった。翼だけが黒を背景にして幾度も上下する。上半身は去り往く闇と同化して姿を成していなかった。

「あっ……」

「眩しいっ。た、太陽?!」

「デビルフライが……去っていくのか」

闇の怪鳥が羽ばたき、西の空へ飛び去っていくと、天に切れ目が入ったように眩い光が飛び込んできた。それは実に突然の出来事だった。

「まるで黒いカーテンを引いたみたいだな」

素直な感想をジンが洩らす。

「襲ってこないのか……?」

「おいおい、いやなこと言ってくれなさんなっでディールよお。やつの気が変わって引き返してきたらどーしてくれんだっつの」

「それはまずいですよ!　いくらゼンさんが応援にきてくれたからって、あんなの倒せるものなんですか?」

うんざりした顔のジンの腕をクラッセが困り果てた表情でつかむ。
「心配ないよ、デビルフライはモンスターじゃない。現象だからね」
「現象?」

ゼンは、口を揃えた面々を順番に見渡す。

「ま、詳しい話は一休みした後にしようじゃないか。当面の危機は去ったわけだからね」

「そうですな」

とにかく皆疲労困憊だ。そう察したゼンの意図を感じ取ったジグザールが同意しかけたとき、

「あ、ああ、そうそう……ジン」

「な、なんだよ？」

振り返ったジンは、ディールの顔を一目見るなり嫌な予感がして後ずさった。

「おまえ、体力には……自信があるよな？ すまん……頼む」

「はあああっ？！ て、てめえっ！ もしかして気絶するつもりじゃないだろうーな！」

彼の目に映ったファイターはすでに瞼も半開き、いまにも深い眠りに落ちてしまいそうな表情だったからだ。

「世話をかけるな……」

「まさか背負って宿まで運べって あっ、おいコラッ！」

もたれかかるディールを避けきれなかったジンは、「ぐわっ」アヒルの鳴くような声でディールもろとも後ろに倒れる。

「リベルのやつだっっているんだぜえ？！ 二人も面倒みれるかよ！」

「あはははっ、ジンジン頑張ってえ」

それまでゼンの肩にいた妖精がジンの周りをくるくる飛んだ。それを片手でつかまえようとすると、さすがに尻餅をついたままの格好では上手くいかない。歯噛みするジンは、さらに近づいてきた姿にギョツとした。

「ぼ、僕もお願いしますジンさん……ははは……」

「おっ、おめーも？！ じよ、冗談じゃねえぞ！」

パタリと倒れたのはクラッセだ。ジンの悲鳴が辺りにこだました。

「彼らに魔法の武器を授けたのはあなただったのですね、レンゼン

様。どうりで強いわけだ」

歩みを止めたジグザールがゼンに顔を向ける。喚くシーフの姿が目に入り、苦笑する。

「魔法の武器のおかげで強くなったっていうのかい？ まったく教えたことが身になってないねえ。武器を持つから強いんじゃない、強い心を持つているから闇に立ち向かうことができるんだよ」

改めて説教が始まることを恐れたのか、ジグザールは首を縮めて愛想笑いを返す。

「……ごもつともです。ですが、その強い心を持っていても武器がなければ戦えない。そうでありましょう？」

「口だけは達者だね」

「世俗を捨てたあなたとは違って、コレがなければ世の中渡っていけないものですから」

そう言つてジグザールは体を曲げて地面にあつたものを手にする。それは彼自身がへし折つてしまった杖だった。

「彼らの武器には破邪の魔法もかけられているのですな。普段そういった力を使い慣れていなければ、張っていた気を緩めた途端に気絶するのも当然」

ジグザールが言うのは、リベルを始めとするディールやクラッセらのことだ。といつても、彼が声をかけたはずの老婆はすでに空へ目をやっていたので、聞こえていないようだったが。

「ついに動き出すね。止まっていた時間が……世界が。師匠、あなたはこうなることをずっと昔からわかつていたっていうのかい？ だとしたら、どうしてあたしには本当のことを話してくれなかったんだ。あたしは師匠のことを……あたしを置いてどこかに行っちゃったあんたたちのことを憎んで」

昇ってくる朝日が眩しくて、ゼンは目を細めた。

彼女の独り言は誰の耳にも届かなかったが、自分の師匠であつた女性だけはゼンがそう呟くことを知っていた気がしてならなかった。そしてもうひとり

「どどいうことだ……?」

掌にあるものを不思議そうに見つめるジグザールの怪訝な声も、待ち侘びた太陽を喜ぶ鳥たちの歌にかき消された。

7・呪氷の底へ

「夢……でも見てたのか？」

目覚めるとそこは、ベッドの上だった。

天井はいつもより少し高い。半身を起こすと、落ち着いた色合いの壁紙が飛び込んできた。

「そんなわけ、ないな。体がギシギシする」

痛む腕をさすりながら呟いた。目線を下げると小さなテーブルがあり、赤と黄色の花びらが花瓶から顔を覗かせている。そういえば見慣れた部屋とは雰囲気が違う、そう気付き顔を横に向ける。

「ジン」

ベッドは等間隔で三つ並べてあり、ちょうどすぐ隣にはジンが左肩を上にして背を見せるように眠っていた。そこでようやく思い出す、自分は戦い疲れて気絶してしまったのだと。

くせつ毛の黒髪をくしゃくしゃにして、規則正しい寝息を立てているシーフを見る。彼もまたディールをここへ運ぶなり、倒れるように眠ってしまったのだろう。着ている服もそのままだ。

（ここはどこだろう？）

確か自分たちはブユッフエの片隅にある安宿に寝泊りしていたはずだ。そのわりにはベッドと小さなテーブルに花瓶とランプと、どれも安宿にあるような使い古されたものではない。簡素ながらも綺麗な室内だ。第一、目覚えがない。

「そういえばクラッセは？ 先に起きてどこかに行ってしまったのか？」

ジンを挟んで反対側のベッドには金髪の少年の姿がなかった。毛布だけが無造作に置かれている。ともあれ、ここにこうしていても何がわかるわけでもない。ジンが起きるのを待つて尋ねれば答えが返ってくるのかもしれないが、ぐっすり眠ってしまったせい目も冴えてしまった。彼が目覚めるまで待つのもすることがなくて暇だ。

（ちょっと外に出てみよう）

どれくらい眠っていたのか知りたいところだし、外の様子も気にかかる。恐ろしい化け物から相当の打撃を受けたはずで、いまが一体どんな状況なのか早急に把握したい。

できるだけジンを起こさないようにゆっくり床に足をつけたディールは、部屋の片隅に立てかけてあった剣を見つけて歩み寄る。

「これが……シギルの剣、か」

わかつてはいたけれど、やはり夢ではなかったのだ。勇者と称えられた男が持っていたはずの伝説の剣が自分の掌の内にある。にわかに信じ難いことだ。

「きつとりベルとレミは隣の部屋にでもいるのかもしれないな。だけど、ゼンさんとジグザールさんはどうしたんだろうか。きつとゼンさんに聞いてみれば、この剣が本当にそうなのかもはっきりするんだろうな。それに――」

気を失う前までの記憶が、共に戦ったシギルの剣を手にして鮮やかに蘇る。

自分たちは冒険者になったばかりで、酒場の主人を通して仕事をもらって出発したのだった。ただ儀式用に使うための道具の材料を採取してくるだけの依頼だったはずだ。それなのに、いつからか得体の知らない連中から付け狙われるようになり、彼にしてみれば雲の上の存在に等しいデュランドー・シギルという勇者と関わりを持つ魔道師の老婆と出会うことになった。

老婆はゼンと名乗り、彼らに調べ物をしてほしいと頼んだ。その代わりに魔法を武器を貸し与えてくれたのだ。それがその時にはまだ普通の剣だと思っていた、このシギルの剣だ。

ディールたちが身を寄せているブツフェの街が、何者かに襲われているとわかり、彼らは街へと急いだ。レミが手にした杖は邪悪を感知する魔法の杖だった。

杖に導かれるまま邪悪を追ううちにジグザールと出会い、^{バラ}「闇に憑かれた者」と呼ばれる、闇の道へ堕ちてしまった魔道師たちの集

合体と対峙することとなった。

五人は力を合わせて戦い、闇の魔道師たちはケイオスという巨大な化け物へと変わっていった。その戦いの中で、リベルの魔法によってシギルの剣が本来の力を発揮し、クラッセとジンの協力もあって、ようやく闇の遣いたる巨人を打ち倒すことができたのだ。

「とても長い夜だったな……」

このまま夜明けが来ないのではないかと思えてしまえるほどの、苦しい戦いだった。これで全てが済んでしまえばよかったのに。心からそう願うが、どうもそういうわけにはいかないようだった。デイルの意識が空白に沈む前に見上げた空は、新たな朝を迎える直前まで、禍々しい気配を漂わせていた。それを見つめるゼンの表情は、終わりではなく始まりなのだと物語っていた。

「デビルフライ　か。よし、行こう」

これ以上考えたところで、自分にできるのは想像だけだ。それよりも今はまず現状の把握を優先するべき。かぶりを振ってドアノブに手をかけたとき、デイルは思わず笑った。

「いたのか、クラッセ。寝相が悪いなあ」

向けた顔の先には、ベッドとベッドの間で手足を広げていびきをかき始めた少年の姿があった。

そつと扉を閉める。左右に回廊が延びていた。

円形の建物の一室なのだろうか。少し離れた両隣にも、今自分が出てきたようなドアがあった。どちらからにするか迷った後に、意味がないと気付き右手に回ることにした。いなければいいで、反対側を確認すればいいだけだ。

軽くノックする　返事がない。勝手に開けるのも気が引けたが、意を決して静かにドアノブをひねって覗いてみる。しかし当てが外れた。ベッドは三つ並んであるものの、人のいた気配すらない。

それならともう一方の部屋を当たってみたが、やはりノックに反

応ずるものはなかった。

「おかしいな、リベルたちはどこにいるんだろう」

いきなり肩すかしを食わされた気分になって、念のためにドアを開けてみると「おっ?」、誰かがいたようにベッドの上で丁寧にたたまれてある毛布が一枚、隣のベッドでは起きたそのままの様子でさらに一人分あった。

「二人とも起きてどこかに行ったのかな。声でもかけてくれればよかったのに」

そう思ったが、疲れて熟睡している自分たちに遠慮したのかもしれない。自分もジンたちを起こしてしまうのも悪いと思って一人で出てきたのだと思い直し、扉をゆっくりと閉めた。

しばらく無言で回廊をひた進む。風が頬を撫でた。

「外だ!」

逸る気持ちで小走りで駆けてきたディールを迎えてくれたのは、雲ひとつない青空だ。

「ここは城の中だったんだな。二階の客室かなにかだろう」

空まで吹き抜けになっていいる広場があり、二階の手すりから見下ろすと慌しく通り過ぎていく兵士たちの姿が目に入る。そういえば自分たちもあそこを通っていったのだった……無実の罪で捕らえられた苦い思い出だが。

遠い過去のことにように思いながらも、ディールはようやく現実を引き戻された気がした。やはり街は大きな被害を受けているのだ。意識すると同時に城中の喧騒がディールにも伝わってきた。

「俺たちにはできることは少ないだろうけど、早いとこリベルたちと合流して、ゼンさんのところへ行かないと　ん?」

いても立つてもいられない気持ちになって、その場で地団太を踏みそうになったところで、ディールはやや離れた場所にポツンと一人で立っている女性に目が留まる。

手すりに両手を乗せて行き交う兵士たちを見下ろす姿は、まるで彼女の周りだけがゆっくりと時間が流れているようだった。

長い髪を腰下で束ねており、肌は雪のように白い。線の細いシルエットと憂いを秘めた眼差しはどこぞの令嬢のようだが、着ているものはいたって平凡だ。しかし、だからこそ余計に女性の美しさが際立っている。

「あの」

他を寄せ付けけない雰囲気にかけるのもためらわれたが、ディールは心を決めて女性に歩み寄る。ひょっとしたら城内の地理に明るい人物かもしれないし、今が一体どういう状況なのかも尋ねておきたいと思ったのだ。

静かに女性が振り向く。そこで彼女の腰に剣が差されていることに気付く。とすると、城の人間ではないのかもしれない。

「あつ、キミも冒険者なの」

「無駄なのに」

女性が声を洩らした。不意を食ってディールは口を開いたまま固まる。

7 - 2 (END)

「無駄なのだ……残された我らだけではもうどうしようもない。再び動き出した闇はいずれ世界を覆いつくすであろう。足りぬのだ光が。なぜ神は儚く散ってしまう希望の糸を我々の前に垂らしたのか……」

彼女はディールを見た。

「冒険者よ。帰る場所があるのなら、せめて今だけは大切な人との時間を大事になさい。その時間を与えてくれたことこそが、最後の慈悲なのだから」

そしてきびすを返す。彼女の静かな迫力に圧され、ディールは口を開くことができなかった。

部屋の前へ戻ると、ちょうどジンとクラッセがドアを開いて出てくるところだった。

「おっ？　ようやく目覚めたわりにゃ、元気そうじゃねーか」

「ようやくって……？」

ジンの口ぶりから察するに、あれからしばらく経っているようだが。

「僕とディールさん、リベルさんの三人は丸二日間も眠っていたそうですよ」

クラッセが言い、ジンは「バーサンが言うには魔力を極度に消耗したせいなんだってよ」と補足する。

「大変だったぜ、おまえらが眠ってる間、こき使われっぱなしですよ」

彼が言うには、怪我人を病院に運んだり、モンスターの襲撃に備えて外壁や門の修繕に充てられていたらしく、ディールは素直にジンへ労いの言葉をかけた。

「レミさんたちはもうジグザールさんのところへ行っているらしいですよ」

ディールが頷き、彼ら三人は足早にその場を後にした。

「リベル、レミ！」

謁見の間に通された三人は、すぐに連れの赤毛と黒フードを発見し、声を上げた。

「二人とももう大丈夫なの？」

リベルが尋ねる。

「二日も眠っていた実感がないほど体力が充実しているよ」

「リベルさんこそ大丈夫なんですか？」

返すクラッセに、リベルは黙って微笑む。

「俺のことは気遣ってくんねーのかよ」、「ジンが口を尖らせるので代わりにクラッセが彼に労いの言葉をかけてはそっぽを向かれていた。」

「全員揃ったようだな」

聞き覚えのある声がして、五人揃って声の主を見る。

「都は甚大な被害を受けていてな。いや、ここブッツフェだけではない。闇の手が各地に伸びているようだ。さっそくで悪いが貴様たちにやってもらいたいことがある」

ジグザールがいい終えるや否や、

「いきなりだな、とつつあん。で、なんだよ？ やってもらいたいことつつーのは」

「俺たちにできることなら、やらせてもらおうよ」

話が早い、とばかりに首を縦に振ると、ジグザールが告げた。

「貴様たちの手にしているシギルの剣、蒼月の杖と並ぶ、神器を手してきてもらいたい」

「蒼月の杖って……これのこと？」

手にした杖をまじまじと眺めてリベルが問う。

「そうだ。そして、それ以外に三つの神器なる特別な武器が存在するのだ。神器とは、かつて闇の侵食から世界の崩壊を食い止めた魔

道士たちが、それぞれの半生をかけて生み出した魔力の込められた武器。神器なくしては闇に立ち向かうのは困難を極めるだろう」

「でも……三つも揃えるなんて、僕たちには無理なんじゃ……」

至極もつともな意見をクラッセが述べると、

「探してきてもらうのは一つだけでいい。残りの二つはここにあるのでな」

そう言ってジグザールは自分の手にしていた槍を見せる。

「なんでとつつあんがそんなの持ってたんだよ！」

「家宝として封印されてあったのを解いてきたのだ。まさかこれが神器などと、レンゼン様に指摘されるまで気付かなかった。そしてもう一つは……そろそろやってくるころだな」

「ジグザールさんの家宝が神器っていうことは」

いまかいまかと待ち侘びるジグザールにディールが呟く。

「そう。ゴート・ジグザールは私の祖父にあたる」

ジンは変な顔になった。

「祖父にあたる……って、んな名前すらしらねーっての」

「つくづく失礼な男だな貴様は。いいか、太陽の勇者デュランドー・シギル、真紅のメイローズ、神子の再来イミレナと、我が祖父は肩を並べて十字の光と呼ばれていたのだ」

苛立ちながらジグザールは続ける。

「中心にいたのは勇者デュランドーだ。彼を補佐するように当時最高の腕を持っていた魔道士が四人、東西南北に陣取り闇の封印を試みたという」

「それで、うまくいったの？」

リベルが横から声を挟む。

神妙な顔になったジグザールは「いや」と首を振る。

「原因は明らかにされてはいないが、どうやら失敗したそうだ。そのあたりはレンゼン様が来られたら詳しく説明を聞くのがいいだろう」

全員がそこで口を閉ざすと、それまで押し黙っていたレミが「も

う、一人は？」、小首をかしげる。

「そうだが、今のとつあんの話じゃ四人しかいねーじゃねーか」
ジンがレミに同調すると「そろそろだが」、勇者の孫であるはずの彼が扉に目をやった。

ギィ

唐突に開かれた扉にディールが目をやると、見慣れた顔が覗いた。
「ゼンさん」

「なんだよ、もう一人ってバーサンのことかあ?!」

もったいつけやがって、そんな表情でジンが言う。

「ご挨拶だね、あたしじゃないよ。さ、こちらへ」

彼女のあとに続く女性に、ディールは驚いた。

「さっきの……」

部屋を出たところで出会った、不思議な雰囲気的女性だった。

「うひょー、美人じゃねーかよ！……」つてて、なにすんだよ」

鼻の下を伸ばしかけたジンが自分の腕をさする。リベルが無言でつねったのだ。

「でも本当に綺麗な方ですね」

クラッセが正直な感想を洩らし、ディールもそうだなと返事する。

「このお方が新緑の英知ササラ様だよ。くれぐれも失礼のないようにね」

「様だよってか。ずいぶんかしこまってんなバーサン」

さっそく横柄な態度をとるジンの髪をジグザールがつかんで、頭をぐわんぐわん揺らした。

（あの方はエルフなのだ、ああみえてレンゼン様より長く生きてらっしゃる！）

耳打ちで怒鳴られて、口の悪いシーフが顔を歪める。

「確かデュランドーさんとメイローズさんは行方不明になってしまったんですよね？ ううん、それよりもすごい昔の話らしいですから」

「十字の光とかいう五人の、最後の生き残り……」ってことになるわ

ね」

耳打ちするクラッセにリベルが返事をする。

「つまり、事の顛末は彼女のみぞ知るってことか」

それは闇を封じるための一戦の。

二人の近くにいたディールが神妙な顔になる。ササラは「無駄だ」と言っていた。彼女が過去に闇と対峙したのだと知った今となれば、その言葉は重要な意味を持つことになる。

「チャー坊から話は聞いたね？」

「チャー坊？」

唐突に放られた言葉に一同は首をかしげた。

「レンゼン様！ そのような呼び方は…… もう私は子供ではないのです！」

「それってとつつあんのことかよ。ぎやははっ！」

ジグザールは「うるさいっ」、ジンを一喝し、法衣の乱れをそつと直す。彼はチャゴス・ジグザールと名乗った。

「あなたたちに探してきてもらいたいのは、イミレナの神器である、零星の腕輪だよ」

ゼンは静かに語った。

かつて神の子と呼ばれた存在があつた。その者はあらゆる難病を癒し、時の流れさえもその瞳に映したのだという。その神子の再来といわれる魔道師がイミレナという名なのだった。

ゼンの師であるメイローズと共に闇の封印に赴いた彼女は、封印の失敗と時同じくして姿を消した。チャゴスの祖父であるゴート・ジグザールはほどなくして戦いの傷から床に伏し、デュランドー・シギルとメイローズの二人もあとを追うようにして行方をくらましてしまったのだ。

「イミレナは時空の狭間に吸い込まれてしまったのだ」

それまで無言を貫いていたササラがふいに声を発した。

封印の失敗がどのような理由によるものなのかは、彼女にははっきりとわからなかった。ただ、イミレナの周辺に渦巻いていた闇が

膨張した瞬間、その神子と呼ばれた少女の姿は跡形もなくなっていたのだと話した。

「持ち主を失った神器は眠りにつく。もともとがその者のためだけにつくられた存在なのだ、主なくしては力を発揮すること叶わぬゆえ」

「零星の腕輪は眠りにつくなり、自分の周囲に氷の結界を張ったのさ。そして今も主であるイミレナの帰りを待っている。その封印をあんたたちに解いてきてもらいたいんだよ」

ゼンはそこで言葉を区切る。

「どうして……俺たちに？」

全員の視線がディールに集まった。

「そ、そうですね。僕たちはゼンさんは知らないかもしれないけれど、まだ冒険者になったばかりで、その……神器なんてものを集めたりできるような強さなんてなくて……」

ここにきてクラッセの張り詰めていた緊張が一気に弾けた。一人がそうなる不安が伝染するのは早かった。

「あ、あたしだってまだ魔法もうまく扱えないわ！ そりやおばあちゃんから借りた杖のおかげでここまでなんとかなったけど、これ以上は無理よっ！」

「そうだよな。なー、バーサン。俺たちや歴戦のファイターだったり、大魔道士なんてつわものぞろいのパーティーじゃねーんだよ。俺らにや、ちつと荷が重すぎらあ」

リベルに同調したジンが、他を当たってくれと言わんばかりに片手を挙げて振る。

「だから、無駄だと言った」

ぼつり、ササラがつぶやいた。

「レンゼンよ、この者たちでは闇の侵食を食い止めることすら叶わぬ。我らですら成しえなかったこと、他の何者にも代わりは務まらない」

見込み違いだったのだ。彼女の表情はそう語っていた。

「私、は」

再び空気が静寂に包まれそうになったとき、レミが言葉を発した。
「なんだよおめー、もう満場一致で結論は出て」

「私は……記憶が、ない」

「……ああ？」

いぶかしがるジンを見上げ、彼女は一言ひとこと、ゆつくりと話し出した。

「ほんの、少し前まで。冒険者になったのは、自分の、記憶を探すため。記憶を失った状態で、立っていた、んだ。みんなと、会おうほんの、少し前、まで。」

短い間、だったけど……最初は、なにもわからなかった、けど。仲間……ができた。ブツフエで出会って、四人とも大切な仲間、だよ。もし、この世界が終わってしまうなら、せつかくみんなと出会えた世界が消えてしまうなら……」

そこでレミは口を閉ざす。

ディールは自分の持つ剣を見つめた。

（守りたいものがあるなら戦え、か。俺にそれができるのだろうか）
亡き父と交わした言葉が熱く蘇る。たとえば、このまま闇の侵攻に抗うことを放棄したとして、一体それがなになるといいうのだろうか。ただただ、自分たち以外に立ち上がる者の出現を待つのか？

「そんなんじゃない」

他人をあてにして何もしようとしなければ、これから起こるどんな困難からと同様に逃げ出してしまう。そんな自分はいやだ。

「そう……ですよね。レミさんやリベルさん、ディールさん、ジンさん、大切な人たちと出会うことができ、せつかくこれからのな……僕、いやですよ」

「おいおい、だからって俺らになにがでkindだよ　いてっ！」

「往生際が悪いわね！　もうみんなわかってんのよ。うん、決めた！」

リベルに小突かれたジンは「しゃーねーなー」と頭をぼりぼりか

く。

「やろう！ 俺たちの世界は、俺たちで守らなきゃならないんだ！」
決意を新たにした五人を見つめていたササラ。その表情の変化に
気付いたジグザールが声をかけた。

「どうかされたので？」

「彼らを見ていると……いや、いい。それより、魔力の高ぶりを感じ
る。この感覚は あの子か？」

ジグザールはその視線の先を追った。

「レミとかいう……あの少女に魔法の素養は感じられなかったはず
ですが。しかし」

彼は折れた杖を持ち出してきて、ササラにそれを見せる。

「これはレンゼン様のもとからあの少女が手にしてきたもの。魔力
の込めであるような代物ではなかったはずですが、彼女は魔法に似
た不思議な力を使ったのです」

「どこか懐かしい魔力だ」

ジグザールの言葉など耳に入っていないかのようにササラはつぶ
やいた。

「んじゃ、とつとと闇つつーやつを封印しようぜ！ バーサン、そ
の神器つつーのはどこにいきや手に入るんだ？」

「まったく変わり身の早い人ね」

そこが良いところでもある。呆れた様子のリベルの顔にはそんな
心情が多分に含まれている。

「この街から北にいったところだよ。といっても地図は必要ないさ、
あたしとササラ様とでそこまで空間転移の魔法で送ってあげるから
ね。あくまで大まかな位置までだけだね」

「いけばわかる」

そしてゼンとササラに促されるままに広間の中央へデイルたち
が集まる。二人は同時に呪文を唱えはじめた。

「よろしく頼むよ。くれぐれも無理はしないようにね」

「すでに十分、無理難題を押し付けてるってわかんねーかなあ」

「ばかジン！ 少しは黙ってなさい」

「へいへい」

「わあっ、光が……」

「体が浮く」

閃光が場内を埋め尽くす。

ディールたちの姿が瞬く間に掻き消えた。

「いつてしまいましたな」

「あの子たちなら、きっと成し遂げられるとあたしは信じているさ。なにせ、師匠が未来を託した子たちだからねえ」

眩しそうに五人の消えたあたりを眺めたままで、ゼンはつぶやいた。

「ぶえええええつくしょつ！」

氷山が目の前に鎮座していた。

「うつつ、冷えるな」

「いったいどこまで飛ばしやがったんだよ」

「さすがに雪までは降っていないけれど……あの山に登るんだとしたら、この格好じゃ厳しいわね」

身震いしてレベル。

「でも、あそこで間違い、なさそうだね」

「いったらわかるつつたつてよー」

お手上げた、ジンが言う。

「どうでしょうか」

「とにかくあの山にいきましょう？」

「げげっ、いやだぜ。凍えちまわあ」

わいのわいのやっている四人を眺めながら、ディールはふと妙な感覚がして手にしたものを見た。

「シギルの剣が……」

体が熱い。そして刀身がほのかに暖色の光を帯びている。

「わあっ！」

突然、剣が発光し、光の筋がある方向へ放たれる。

「デイルさん、それって」

「行ったらわかるって、このことかあ？」

「ここに眠ってる神器に反応しているの……？」

「そうだろう、デイルは頷いてみせた。」

「山の上じゃなく、わずかに地面の下を指していますね」

「地下への入口がどこかにあるってことか？」

見たところでは、近くに入口らしきものはない。探せということなのだろうか。

「いこう、神器が、待ってる」

レミが光線の先に歩きだす。

「ああ、いこう。だけど待ってくれみんな」

「あん？」

「どうしたの？」

立ち止まるレミと、ジン、リベル、クラッセを見渡して、デイルは口を開いた。

「きつとまたあのケイオスとかいうやつみたいな化け物と戦うこともあると思う。全員で力を合わせてようやく倒せたようなやつだ、それも今度もしここで現れたとしたら、ゼンさんの助けを借りることはできない。俺だってシギルの剣をちゃんと扱えるわけじゃないし、きつと苦しい戦いになると思うんだ」

だから、とデイルは続ける。

「俺はもしそんな化け物が出てきたとしても、勝てるかと聞かれればわからないとしか答えようがない。でも……ジンもリベルもレミもクラッセも、絶対に守ってみせる。みんな大切な仲間だから」

決意を込めたまなざしで四人を見つめる。ともすれば不安に押しつぶされそうになる心を言葉にすることで奮い立たせているのだ。

「んな」

ジンが頭をかきながら口を開いた。

「んな、あつたりめーのこと言うなつてんだ。おめーはファイターなんだからよ。そんなの当然だろがよ。俺だつてできることがあるやあ、やるっつーの」

ふん、と言い捨てるジンにリベルが「素直じゃないわね」と言う。
「言霊、みたいなもの、だね」

「なんですかそれ？」

レミの言う耳慣れない言葉にクラッセが首を傾げる。

「言ったことが現実になるってあれね。いいわ、それならあたしも約束する。あたしはまだ自分の意思で自由に魔法を使えたりしないけど、でも、みんなを危険な目に遭わそうとするモンスターがいたら、絶対に倒すわ！　そしてみんなを守るの！」

「じゃあ僕も言いますよ。って、できることなんてあまりないですけど……」

「クラッセには勇気がある。街を出て初めに遭ったモンスターがいただろ。あれに誰よりも早く向かっていったじゃないか」

「結果は無残なもんだつたけどな　うぐっ」

茶化すジンに、女性二人からの肘鉄が入る。

「みんながくじけそうになったとき、クラッセの勇気がきつと支えになる」

「……あはは、じゃあそれにします！　四人のために僕ができることならなんでもしますよ！」

「ふん、俺の番かよ？」

視線が自分に集中していることに気付き、

「俺がシーフだってこと、おめーら忘れてんじゃねーだらな？　シーフのやることつつたら危険感知に限るだろ。どんな罠だろうが敵だろうが、真っ先に見つけてやるよ」

そう言つて胸を張る。

「レミの知識は今までも助けられてきたよな」

「そうですねえ、レミさん抜きじゃブッフェでのモンスター退治はきつかったと思いますよ」

ディールとクラッセが口を揃えると、
「ううん。それだけじゃないと思うの」

意外な発言に、一同はリベルに注目する。

「レミって、本当に魔法は使えないの？ お城の中にいるときから不思議な感覚がするのよ。それは城を出てからも付きまといっているわ」

「魔法なんて、使ったこと、ないよ」

「そりゃー、さすがにないんじゃないの」

否定する二人に「そんなことない」と真っ向から反論する。

「いつかレミにあたしたちは助けられると思う。そんな予感がするわ」

「なんだなんだっ？」

「まさか予知能力でもついたんですか？」

言い合いをはじめそうな彼らを見ながら、ディールはなぜかリベルの言葉に妙な説得力を感じていた。

（これは……神器を手に行っている俺とリベルだけが感じていることなのか？ 確かに俺もそんな気がしていた。彼女にはなにか隠されている力があるような……）

だが、シギルの剣はなにも語ってはくれない。あくまで気のせいとでもいうのだろうか。

「ま、レミにゃあ、いざっつーときにその不思議な力を発揮してもらうとすっかい」

「過剰な期待、ちょっと困る、ね」

と言いつつ、口元に笑みが。

「俺たちは一人ひとりが四人のために、持てる力の限りを尽くして戦う。きっと、そうすればどんなに闇の力がすごかろうと乗り越えることができるさ！」

一人は四人のために。

「絶対に生きて帰ってこよう！」

高らかに宣言する。最後まで希望を失わないと。

彼らの戦いはまだ始まったばかりだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4327d/>

One For Four Traveler

2010年10月8日13時23分発行